

---

# 流星のロックマン青きヒーローのその後

ストリーム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流星のロックマン青きヒーローのその後

### 【Nコード】

N4501G

### 【作者名】

ストリーム

### 【あらすじ】

メテオGの事件から2カ月。スバルは六年生になり平和に過ごしていた…しかし、宇宙からの新たな敵がその日常を変える…そして新たな試練が地球に降りかかる…。新たな仲間とスバル達に地球の運命は委ねられた。

## プロローグ(前書き)

はじめまして。ストリームと言います。

流星のロックマン歴は短い上初投稿ですがよろしくお願いいたします。

## プロローグ

「バトルガード ブレイクサーベル！」

コダマタウンの電波で電波ウイルスが次々デリートされていく。

「今日はこんなもんだな。もう少し暴れたかったけどな！」

「やだよ。またメテオGの時みたいになるのは。」

「ヒーローが甘ったれんじゃねーよ」

「やめてよ。ヒーローって呼ぶの！」

「まあ今日は帰るか」

「そうだね。」

コダマタウンの片隅に現れた赤い服を着た少年が現れた。この少年こそが三度の地球危機を救ったシューティングスターロックマンと星河スバルである。

メテオG以来普通の生活をしていた。ロックマンにはたまに移動とたまにしかでない電波ウイルスと戦う時にしかならなくなった。

「明日からは6年生だし今日は早く寝ておこつ。」

「へっ、展望台行かなくて済んでラッキーだぜ。」

ウォーロックはウィーザードをオンにして出てきた

「じゃ ついて来なくても…」

「…家も暇なんだよ！」

ウォーロックはハンターに戻った。

「さて寝るか」

スバルは眠りについた。明日からこの普通の生活が終わる事も知らずに…

## プロローグ（後書き）

どうでしたか？つまらないと思いますが頑張っ  
て行きますんでよろしくお願  
いします。アドレスもよろしくお願  
いします。

第1部 2人の転校生（前書き）

もはやほほ王道の展開…

## 第1部 2人の転校生

「おい！スバル起きろ！何時だと思ってやがる！」

「ふえ？今何時？」

「8時だ！」

「え〜！遅刻する！さすがに初日から遅刻はやだよ。そっだ、ウオ  
ーロツク、電波変換だ。」

「はあ？俺に迷惑かけといて電波変換だと？調子のんなよ！…！増  
して電波変換はそんなためには使わねーよ。」

「もういいよ！ダツシュだ！」

ダツダダツダ：

「よし後はエレベーターを待つだけ…」

>一階ですく

スバルはエレベーターに乗った。

「なあスバル、学校内に結構強力な電波をかんじる。」

「ゴン太のオツクスじゃない？」

「イヤ、それ以外だ：気をつけようZe！！！」

「何でちよつと嬉しそうにしてんの！？」

「暴られるかもしれないから。」

スバルは何とか間に合った。

「星河君、6年生の初日から遅刻寸前とは、なってないわね。」

「お前もしかして牛丼食べてて遅れたのか？」

「ゴン太君、スバルはゴン太君とは違いますよ。」

委員長軍団のルナ、ゴン太、キザマロが言った。

「そっいえばジャックは？」

「クインティアさんと母国お復活させるため帰ったわよ。」

「そっか…寂しくなるね。」

「けど二人の転校生が来るみたいですよ。」

「どんな子かな？」

「席に着け。」

育田道徳が入って来た。

「今日は転校生が二人もいるぞ。仲良くしてやってやれよ。入っていいぞ。」

ガラガラ…

…」

みんな啞然、入って来たのはエメラルドグリーンの瞳をしたかわいい少女と緑の髪をした男には見えない少年。

「響ミソラです。」

「双葉ツカサです。」

そう1人は国民的アイドルともう1人は元クラスメートだ。

「2人の席はそうだな…」

「先生ここにミソラちゃんを」

「イヤ、ここですよね。」

男子達はミソラを近くに誘ってる間にスバルは、

「ツカサ君ここおいだよ。」

「うん」

と前の席に誘った。

「先生！私はスバル君の横がいいです。」

「そうか、わかった。」

ゾクッ

それと同時に男子の殺気を浴びた。

この日を境に平凡な日常が終わりを告げる

そんな事をスバルはしるはずもなかった。波乱の6年生活が今幕を開けた

## 第1部 2人の転校生（後書き）

今流星2にハマってます。フルコンプしてるがザコです。W i - F  
i環境がなく難しいですがザコの僕とブラザーに誰かになって下さい。  
長くなってスイマセン。感想やアドバイスお待ちしてます。

## ツカサの頼み

キーンコーン

ミソラの争奪戦が終わり今は休み時間。

みなミソラに質問攻めだ。

しかしスバルはツカサとしゃべっていた…

「ツカサ君は今までどこに？」

「ヒカル封印の旅さ。」

「という事はヒカルは封印できたの」

「それが…」

「へっこんなヤローに俺を封印出来るはずねーだろ」

「ヒカル！！」

「へ？」

「ヒカルはジェニミの影響でウィザードに…」

「そのおかげでジェニミスパークに電波変換出来るぜ！」

「そう言う事…」

「なるほど…という事はウォーロックがさっき感じた電波はツカサ君か。けどまた会えて嬉しいよツカサ君。」

「僕もだよ。だけど…僕は君を裏切った。その罪は重いんだ。だから君とはブラザーになれない…」

「もういいよ。あれはジェニミとヒカルのせいだし…」

「良くないんだ。ヒカルもあの頃は僕だったから…よしスバル君、僕と放課後戦ってくれない？」

「えっ？何故？」

「僕が負けたら君が僕とブラザーになってもいいよ。姿は同じでもあの頃とは違う。僕は純粹な双葉ツカサだから前とは違う。」

「そんな…君とは戦いたくない…」

「お願いだからスバル君。僕は二重人格の双葉ツカサにけじめをつけたいんだ本気で戦ってくれないかな？ 放課後屋上で待ってるか

ら……」

「……わかった。」

「ありがとうスバル君。」

ツカサは微笑んだ。

「へっ、また暴れれんじゃねーか。」

ウォーロックとヒカルも笑った。

そしてスバルもツカサもミソラ達話しに入った。

ツカサの頼み（後書き）

短い…頑張ってたかかないと。  
次回はミソラと話します

スバルのピンチ ミソラの頑張り(前書き)

前話で脱字がありました。スイマセンでした。

## スバルのピンチ ミソラの頑張り

「あっスバル君。」

ミソラはスバルに話かけた。しかしその時、男子陣が

「オイ、スバル、テメ なんでそんなにミソラちゃんと仲良いんだ？」「それはブラザーだから……」

「なんでブラザーなんだ？テメ ミソラちゃんと接点ないだろ！？」

「それは……」

「私達の邪魔しないで。」

少し苛立った声でミソラが男子陣を黙らした。

「スバル君、屋上行こ〜？」

「えっ……いいけど……」

ミソラはスバルの手を引つ張り教室を出た。

男子陣も殺気を出してたが、ルナの殺気は比べ物にはならなかった。

「はあ 静かだね。」

「そうだね。」

「こんな平和なのはスバル君のおかげだよね。」

「そんな事ないよ。みんなの絆の力のおかげだよ。」

「スバル君らしいね。」

少しの沈黙……

破ったのはミソラだった。

「あのねスバル君」ミソラが顔を赤らめ言った。

「何ミソラちゃん？」

「私がここに来たのはね……その……スツ、スバル君に会いたくて。」

「えっ…」

「私ねスバル君が好きなの…付き合あって下さい／＼。」  
「ミソラは真っ赤だ。」

「僕で良ければ…／＼」

「アリガト スバル君」

「ミソラはスバルを抱きしめた。」

「みっ、ミソラちゃん！」

「付き合ってるんだからいいでしょ」

「…いいよ…」

「ヒーローなのにミソラにも勝てないスバル」

「ウォーロックが空気をぶち壊した。」

「アンタこっち来なさい！」

「ハーブがウォーロックを連れ去って行った。」

「は？オイ、ちょっとスバル真っ赤になっで助ける…!!」

「しかしスバルはミソラに抱きしめられてるためなんも出来ない。」

抱きしめられて数分…

ウーン

そこには委員長率いるスバルのクラスが立っていた…

## ルナの尋問（前書き）

評価 感想ありがとうございます。

## ルナの尋問

コツコツと委員長が近づいて来る…

(ああ、終わったな…)

ルナとミソラ以外のその場にいるみんなは思った。「スバル君！」

！！」

「はっはい…何ですか委員長…」

スバルは顔を真っ青にしてガチガチ震えている。

「ぼ、僕は決して何も悪い事はしてないです…」

「じゃあさっき抱き合ってたのは何？委員長として見逃せないわ！」

委員長の殺気は尋常じゃない。

(どうしよう…：そうだ電波変換だ！ロックは…いない？どこ？)

何とハンターの中にウォーロックはいなかった。

「何コソコソやってるの！？薄情しなさい！」

「…実はその…」

「私達付き合ってるんだ」

「はあ！？」

さっきまで黙ってたミソラが爆発発言。

「ねー？スバル君？」

「ハイ…ソウデス。」

スバル君は倒れた。

「納得いかないわ！スバル君説明しなさい！」

しかし返事がない。

「スバル君気絶してるんじゃない？」

ツカサが言った。

「本当だ。ルナちゃん、私スバル君を保健室に連れて行ってあげる

ね。」

「ちょっと待ちなさい！」

「トランス・コード！ハープ・ノート！」  
その瞬間、スバルとハープ・ノートは高速で去った。  
「スバル君、覚えてらっしゃい！」  
ルナにはその後、誰も話かけられなかった…

「ここは…？」

スバル君は目を覚ました。

「あっ気がついた？」

「ここ保健室だよね？」

「スバル君、ルナちゃんに気絶させられたのよ。」

「それはミソラちゃんの発言も…」

「だって本当でしょ？」

「うっ…そうだね。」

スバルは少し赤い。

「そう言えば、今何時間目？」

「今学校終わったよ」

「ヤバイ！ツカサ君との約束が…！」

スバルは立ち上がった。

「ごめん、ミソラちゃん、今日大事な約束があるからバイバイ。」

「えっ…うんまたねー」

スバルはダッシュで屋上へ向かった…

「待ってたよ。スバル君。もう大丈夫？」

「うん。」

「じゃあ、始めようか……」

「トランス・コード！ジェニミスパーク！」

「トランス・コード！シューティングスターロックマン！」

黄色の眩しい光から白と黒の2人の影、青き閃光からロックマンが現れた。

## ルナの尋問（後書き）

今回も面白くない…

次回やっつとバトル。バトルシーンは下手だと思いましたが頑張ってます。

## 激戦！！スバルVSツカサ（前書き）

やっとく流星3BJ購入。

それでは初めてのバトルシーンです。楽しんで下さったら嬉しいです。

## 激戦！！スバルVSツカサ

「手加減しないよ。」とジェニミスパークW

「こつちもだよ。」とロックマンが返す。

「ウエーブバトル・ライド・オン！！」

「ロックバスター！」

しかしジェニミスパーク左右にジャンプしは苦もなくかわした。

「ロケットナックル！」

ジェニミスパークBの拳が飛んで来てロックマンに当たった。

「へっザコが！！」

「甘いぞ！！！！バトルカード、ヘンゲノジュツ！」

「何っ！？」

ジェニミBは不意をつかれた。

「くらえ！」

ロックマンがワイドソードで切りかかる。

「甘いのはそっちだよ。スバル君。エレキソード！！」

背後からジェニミWが切りかかっていた。

「しまっ……」

ズバッ！！

2人いることを忘れたスバルはもろにくらった。

「痺れる……」

「いくぜ！！ツカサ！」

「うん！」

「『ジェニミサンダー！！！！』」

ジェニミスパークの腕から電撃が放たれた。

「グア　　！」

ロックマンは大ダメージだ」

「スバル、ノイズチェンジだ！」

スバルは体にノイズを集中させた。

「ノイズチェンジ、ウルフノイズ!!」

「変身しても意味ないぜ! ロケットナックル!」

ジェニミBが拳を放とうとした。

「おーとロックオン! バトルカードタイボクザン!」

いきなりジェニミBの前に現れてロックマンがタイボクザンで切り裂いた。

「しまっ…」

カウンターをとられたジェニミBは痺れた。

「エレキソード!」

ジェニミWがジェニミBを助けようと切りかかった。

「これでキメる! NFB!! エレメンタルサイクロン!!」 ロックマンが木の葉をまとい巨大な竜巻になりジェニミスパークを巻き込んだ。

「うわ　!」

弱点をつかれ大ダメージを受けたジェニミスパークは倒れそして電波変換が解けた。

「イタタ…強くなったねスバル君。やっぱり君はすごいよ。」

「ありがとうツカサ君。それでさ、僕とブラザー結んでくれる…?」

「…いいよ。ありがとうスバル君…」

なんとツカサは泣いていた。

「ツ、ツカサ君?」

「一度裏切った僕とブラザーになってくれて、ありがとう…やっと僕にもブラザーができた…」

「ツカサ君…これからもよろしくね。」

「うん…こちらこそ。」

「じゃあ、帰ろうか?」

「そうだね。」

スバルとツカサは学校からでた…

激戦！！スバルVSツカサ（後書き）

後から読んだらやっぱりイマイチ…  
誰かアドバイスお願いします。

## スバル争奪戦1（前書き）

少し更新遅れました。

しかも前話誤字がありました。誠に申し訳ありません。

## スバル争奪戦1

ツカサと戦った後の帰り道…

〽

「スバル、委員長からだ。」

「もしもし?」

「アンタどこ行ってなの? まあいいわ。ミソラちゃん達と遊んでるから私の家にツカサ君と来なさいよ。」

「…命令かよ委員長… まあ行くけれど。」

「委員長変わってないね。じゃあ行くっか。」

## ルナの家

みんなトランプしたりして遊んでいた。

「全く放課後すぐどこ行ってたの?」

「えっ…その…」

「スバル君は僕が屋上に呼んだんだよ。」

ルナは少し怒ったような顔をしたが

「…あなたの事だし何かあったんでしょうね。まあいいわ。」(ツカサ君と戦ってたなんて言いたくないしね。)

スバルは少しほっとしてたが…

「スバル君?」

いきなり殺気を出したルナが話かけてきた。

「…何でしょう?…委員長?」

「アナタ何か忘れてナイかしら?」

「へ？何の事？」

「そうでしたね。スバル君」

「俺も思い出したぜ！」

「そうだね。スバル君…僕も気になってたんだよ。」

キザマロ、ゴン太も少し殺気を出して、ツカサ君は微笑んでいた。

「何かあったの？」

ミソラもわかってナイ。

「とぼけてんじゃないわよ！！あなた達2人の事よ！！」

「へ？」

(ツカサ君と戦ってたなんて言いたくないしね。)

スバルは少しほっとしてたが…

「スバル君？」

いきなり殺気を出したルナが話かけてきた。

「…何でしょう？…委員長？」

「アナタ何か忘れてナイかしら？」

「へ？何の事？」

「そうでしたね。スバル君」

「俺も思い出したぜ！」

「そうだね。スバル君…僕も気になってたんだよ。」

キザマロ、ゴン太も少し殺気を出して、ツカサ君は微笑んでいた。

「何かあったの？」

ミソラもわかってナイ。

「とぼけてんじゃないわよ！！あなた達2人の事よ！！」

(そう言えば…ルナちゃんやたら怒ってたような…)

「あなた達2人が付き合うのは納得いかないわ！！」

「なんで？ルナちゃん？」

(ミソラちゃんは挑戦者だな…)

「なんでって…ねーみんな納得いかないわよね？」

「はい…」

流石にゴン太とキザマロは逆らえない。ツカサは微笑んでいるが…

「じゃあルナちゃんはスバル君が好きなの？」

「っ！！私はロックマン様が好きなの！スバル君がアナタと付き合い  
たらロックマン様もアナタと付き合う事になるじゃない！！」  
ルナは必死だ

「私はスバル君が好きなの！だからロックマンは関係ないしスバル  
君も譲らない。」

「何ですって〜！？」

「何よ？」

男子陣は流石に静かにしてる。

(モテるのはツライねスバル君。)

(ツカサ君?!止めてよ!)

(フフ。ごめん)

ツカサは実はKYだった…

「スバル君!帰ろう?」

「えっ…うん」

ツカサと喋ってる間に何とか収まったようだ。

「じゃあ行こ」

ミソラがスバルの手を握り引つ張って行った。

ミソラとスバルが帰った後みんな解散したが…

「キ〜!!納得いかないわよ。何とかしたい…」

ルナは一人怒り狂っていた…

コダマタウンのウェーブロード

「オヤオヤ、これは面白い脚本が書けそうだよ。ロックマンに復讐  
する素晴らしい脚本ね。ンフフフフ…」

怪しい笑い声が夕暮れのコダマタウンに響いた。

## スバル争奪戦1（後書き）

次回またバトルが始まるかも…

皆さん流星3で何ノイズですか？僕はヴァルゴです。ついでに今シナリオ6話です。もう少ししたらブラザー募集しますが今でもOKです。

話逸れましたが感想やアドバイスお願いします。

## スバル争奪戦2 ルナの変貌(前書き)

今日更新二回目です

これからも頑張ります！

## スバル争奪戦2 ルナの変貌

「そう言えばミソラちゃんの家はどこなの？」

「スバル君の家だよ。」

「えっ……え……っ……？！」

「そんなにビックリしなくても……」

「なんで？なんで僕の家なの？」

スバルはパニックだ。

「この辺で今度ドラマの撮影があつて、マネージャーが知り合いの家に住んだらつて話になつてスバル君のママさんに聞いたらOKつて。」

「なんで母さん……」

「嫌なの？」

ミソラが涙目で言つてきたためスバルは何も言えなかつた。

「キヤ〜助けて〜」

「？何だろ？」

「とりあえず行こつ！」

「うん！」

「電波変換！！！」

2人は走つて声がる方へ行つた。

少し前の委員長の家

「どうやってあの2人を別れさせようかしら。」

ルナは1人で怒り狂つて悩んでいた。

「ソフソフ、随分悩んでるようだね。お嬢さん。」

「……！アタはファントム・ブラック！！何しに来たの？帰つて！」

「オット、勘違いしないでくれ。私は君に手を貸してあげに来たんだ。」

「えっ…?」

「あの響ミソラをロックマンから別れさせたいんだろう?君に別れさせる力を貸してあげるよう。」(別れさせる力…)その言葉にルナは惹かれた。

「本当?」

「しかし響ミソラを傷つけてしまうかもしれない。」

「構わないわ。ロックマン様を取り戻すためには誰が傷つこうと関係ないわ!」

「ソフフフ、わかった。ハア!」

ファントム・ブラックが叫ぶとルナから光が放たれそこには蛇のような姿になったルナがいた。

「これはオヒユカス・クイーン…」

「いいか?私が騒ぎを起せばロックマンとハーブ・ノートが現れる。それで私はロックマンを引きつけておくから君はハーブ・ノートを倒す。そこで君が

「ハーブ・ノートいやミソラちゃんをこれ以上傷つけて欲しければ私と付き合いなさい。」と言えばロックマンは君と付き合う。どうだい?」

「素晴らしいわ」

もはやルナは自分を見失っている。

「よし!始めようこの脚本を…ソフフフ」

「わかったわ」

オヒユカス・クイーンは外にでた。

「本当に単純だ。最終的にロックマンが死ぬと言うのに。ソフフフ」

「あれはファントム・ブラック!」

「久しぶりだね。ハーブ・ノート&ロックマン。今日も素晴らしい

脚本を用意したよ。それにゲストも」

「？ゲスト？」

「まあいい。始めよう。」

「来るよハーブ・ノート!!!」

「うん！」

「ウエーブバトル ライド・オン!!!」

「ファントム・クロー!」

2人はジャンプしてかわした。

「バトルカード! プラズマガン!!!」

「グハ!」

ファントム・ブラックは痺れた。

「今だハーブ・ノート!!!」

「うん! マシンガンストリ!!!」

「ゴルゴンアイ!!!」

どこからかビームが飛んで来てハーブ・ノートにヒットした。

「この技…まさか…」

## スバル争奪戦2 ルナの変貌（後書き）

今度のバトルはハイドの脚本どつり行くのか？！  
感想やアドバイスお願いします。

スバル争奪戦3 脚本の幕開け（前書き）

今回はやたら短い…  
頑張らないと

### スバル争奪戦3 脚本の幕開け

「オヒュカス・クイーン…って事は委員長？残留電波のせいか…ハイド、またお前のせいか!？」

「ソフフフ勘違いしないでくれ。僕は彼女の願いを叶えただけだよ。」

「願ひ？」

「そう、彼女は力が欲しいと言ったのだよ。そう、君のせいだね。」  
「僕のせい？なんで？委員長？」

「アナタがミソラちゃんと付き合うからよ。」

オヒュカス・クイーンは少し怖い声で言った。

「？委員長、よくわからないけれど、君とは戦いたくない。」

「大丈夫よ。ロックマン様。私の相手はハーブ・ノートよ!！」

「えっ…?」

ハーブ・ノートはビックリしている。

「アナタを倒せば、私の願いは叶う!行くわよ!！」

「私も戦いたくないよ!ルナちゃん!」

「アンタの都合なんか知らない!もとはと言えばアナタのせいよ!」

「ミソラ、この子自分を見失ってるわ!戦うしかないは!」

「やるしかナイね…」

「ウエーブバトル ライド・オン!」「」「」

「シヨックノート!！」

「クイックサーペント!」

1人の男を巡る女の戦いが始まった!

「僕もハーブ・ノートを助けよう。」

「ロックマンは手を出さないで！」

「えっ…でも…」

「これは君を巡る戦いだから…」

「えっ…？」

「なんでもナイよ…」

「！ロックマン！後ろ！」

「ステッキソード！」

「ぐっ…」

「ソフフ君の相手は私だ。」

「やるしかねーな。いくぜスバル！」

「うん！ウエーブバトルライド・オン！！」

ハイドの脚本の幕が今開いた。

### スバル争奪戦3 脚本の幕開け（後書き）

次回からやっとなバトルです。2バトルあるから多分長くなりそうです。

スバル争奪戦4 女の戦い 大事な物（前書き）

バトルシーン下手だ…

## スバル争奪戦4 女の戦い 大事な物

ハーブ・ノートVSオヒュカス・クイーン側

「ミソラ、手加減したらやられるわよ。気をつけて！」

「うん！ルナちゃんは私にロックマンを取られたくないみたいだしマジで来るからね。」

ミソラはルナの願いを理解していたがスバルを譲る気持ちは少しもないようだ。

「クイツクサーペント！！！」

オヒュカス・クイーンが突出して来るがハーブ・ノートは軽やかな身のこなしでかわした。

「シヨツクノート！！」ギターから音符が放たれた。

「ゴルゴンアイ！！！」

ゴルゴンアイに音符はかき消され、ハーブ・ノートに直撃した。

「し、痺れて動けない…！」

「くらえ！スネークレギオン！！！」

オヒュカス・クイーンが放った蛇がハーブ・ノートに全てヒットした。

「キヤッ！！！」

ハーブ・ノートは大ダメージを受けた。

「ロックマン様にアナタのような弱い女は合わないわ。私のように強くないと。」

オヒュカス・クイーンは勝ち誇った表情だ。

（確かに弱いのにロックマンのそばにいても足手まといだ…でも…）  
「どうしたの？まさか降参？」

「ルナちゃんは間違ってるよ。大事なのは気持ち。相手を思う気持ち、そして相手を信じる気持ち、絆以上に大事な物はナイよ！それ

はルナちゃんもスバル君から教わったハズだよ？」

「そうよ…でも、強くなかったからスバル君を私はあなたに奪われたわ。だから戦う！勝ってスバルを取り戻す！もう行くわよ！クイツクサーペントー！！」

「目を覚まして、ルナちゃん！パルスソング！」

突進して来ていたオヒュカス・クイーンはよけきれずもろにくらった。

「しまった。グラビティ性能…動けない…」

「！マシンガンストリング！！！」

「痺れる…」

終わりよ！シヨックノート・フォルテツシモ！！！！」

「グワァー！！！」

ルナは倒れ気を失い、電波変換が解けた…

スバル争奪戦4 女の戦い 大事な物（後書き）

今回はロックマンVSファントム・ブラックです。このバトルは頑張って上手く書きたいです。

## スバル争奪戦5 いつもどおり(前書き)

前話、オヒユカスの技名を間違えてしまいました。誠に申し訳ございませんでした。

## スバル争奪戦5 いつもどおり

ロックマンVSファントム・ブラック側

「行くぞ！ステッキソード！」

「バトルカード！ソード！」

キン！

ステッキソードとソードがぶつかり合う。

するとファントム・ブラックはいきなり消えた。

「どこだ？」

「！スバル！後ろだ！」

「フハハハ、ファントムクロー！」

「グフ！」

スバルはよけきれず、くらいひるんだ。

「くらえ！ファントムスラッシュュ！！！」

「回転には回転！バトルカード！タイフーンダンス！」ガギギギギン！

2人は激しくぶつかり合った。

「少しはやるようだが、スバル油断大敵だぜ！」

「うん！」

「いつまで余裕がましてられかな？ロックマン…ファントム・クロー！」

スバルはジャンプしてかわした。

「バトルカード！エリアイーター！」

ファントム・ブラックとロックマンの距離がいきなり縮まった。

「なんだ？」

「くらえ！バトルカード ソード、ワイドソード、ロングソード！

！ギヤラクシーアドバンス ビッグアックス！！！！！」

「しまっ…グハッ…！」

消えようとしたファントム・ブラックだが距離が近く、アクセスの方が消えるより早かった。

「ググッ…まだ私には奥の手が…」

「奥の手だつて？」

「オヒユカス・クイーン！こっちへ来い！」

…何もおこらない

「どうした？何もおこらないけど…」

「どういうことだ？」

「オヒユカスなら私が倒したよ」

「ハープ・ノート！」

「そんな…私の脚本では貴様がまけるようになっていたのだ！そんなハズはナイ！！」

「こいつまた脚本どつりに行かなかったな！ハハッ」  
ウォーロックは笑った。

「まただと？私の脚本は常に完璧なのだよ。いつも…いつも貴様等がいらぬアドリブをするから失敗する！そうだ貴様等がいつも悪い！貴様等のせいだ！ンフフ…殺してやる！」

「またおかしくなった…ハープ・ノートは危ないから委員長を連れて逃げて！」

「わかった！」

ハープ・ノートは寝かせていたルナと一緒に家の影に隠れた。

「死ね…！」

ステッキソードをブンブン振り回しファントム・ブラックはロックマンに近づいて来る。

「バトルカード！！シラハドリ！！」

ズバッ！

ロックマンはステッキソードを受け止め切り返した。

「グハ！貴様…覚えておけ！」

ファントム・ブラックは消えた…

「アイツまた現れるつもりだな…」

「うん、油断できないね…」

スバルは電波変換を解いた。

「スバル君！こっちに来て」

ミソラが呼んだ。

「ルナちゃんが起きないの…」

「とりあえず起きるのを待とう。」

数分後…

ルナが目を覚ました。

スバル争奪戦5 いつもどおり(後書き)

次回ルナに異変があるかもしれません。

**スバル争奪戦終了・新たな家族誕生？（前書き）**

やっと流星RJシナリオクリアしましたよ。ついでにキグナスノイズです。なんかラスボスが案外へボかった…

## スバル争奪戦終了・新たな家族誕生？

「はっ！私は？ここわ？」

「公園だよ。ルナちゃん。電波変換してなんか変だったよ。」

「まあハイドのせいもあるから……」

スバルがフォローした。

「力を手に入れたって言ったのは私だから……ごめんなさい！本当に……欲望に溺れちゃってアナタ達を傷つけちゃって……」

「まあ女同士だから分からなくはナイけど絆を捨てそうになったのは許せないよ……」

「本当にごめんなさい……」

「まあ委員長も反省してるし怒らないであげようよ。」

「……そうだね。二度とあんな事言わないでね。」

ミソラは少し不満そうな顔をしたがすぐに笑って言った。

「うん！」

「そう言えば委員長の願いつて何だったの？」

「それは……」

「ルナちゃんはねー実は……」

「やめて！ミソラちゃん！自分で言うから」

「仕方ないな……」

ミソラは少しつまらない顔をしたが納得した。

「スバル君……実は私ね……アナタの事が好きだったのよ……」

ルナは顔を少し赤くして言った。

「ええっ……？」

いきなりの告白にスバルは戸惑った。するとルナは笑って言った。

「大丈夫よ……今日の事もあるし今はアナタ達2人の事を認めるわよ。」

「うん、わかったよ。」

「アリガトールナちゃん！」

ミソラはすごく喜んだ。

「もう7時だし帰らない？」

スバルが言った。

「そうね…また明日、スバル君。」

「うんバイバイ。」

「バイバイルナちゃん！」

ルナは帰って行った。

（ミソラちゃん…今は認めるけど、スバル君を傷つけたりしたら承知しないわよ…その時までスバル君を諦めないわよ！）  
ルナがそんな事を思っていたとは2人は知る訳がない…

スバルとミソラはスバルの家に歩いていた。

「そう言えばミソラちゃん、もう7時だけど帰らなくていいの？」

「へ？スバル君何言ってるの？今日からコダマタウンにいる間はス

バル君の家でお世話になるんだよ。」

「へ…そうなん…てっ…ええ…！??ねえミソラちゃん！マジマジ

マジ？マジなの？！」今日からコダマタウンにいる間はスバル君の

家でお世話になるんだよ。」

「へ…そうなん…てっ…ええ…！??ねえミソラちゃん！マジマジ

マジ？マジなの？！」ただいまです。今日からお世話になりま

す。」

いつの間にかスバルの家に着いていた。

「どえ…！??！??！??」

「こちらこそ。ゆっくりしてってね、ミソラちゃん。」

驚くスバルをあかねは軽くスルーした。

「ねえ母さん、ミソラちゃんマジで僕の家に住むの?!」

「うん、そうよ。」

「母さん正気?」

「もちろんよ。それにスバルもこんな可愛い子といれて良いじゃない。ねえミソラちゃん?」

「えっ…?…そうよスバル君。私といるの嫌なの…?」

「そうじゃないけど…」

ミソラに上目使いで言われスバルは何も言えず、結局ミソラはスバルの家に住む事になった。

「うふふ、楽しくなりそうね。」

あかねは何故か機嫌が良かった。

今日からまた一段と日常が変化するのはスバルは知るはずもなかった。

**スバル争奪戦終了・新たな家族誕生？（後書き）**

流星3で一応ブラザー募集します。しかしザコでしかも裏シナリオクリアしてないです。Wi-Fi環境も自宅になし。それでもってという方お待ちしてます。最後に感想お待ちしてます。

## ミソラの寂しさ・試練(?)の始まり

とりあえずスバルとミソラはスバルの部屋に入った。

「うわ〜宇宙の本ばっかだねー。」

ミソラは感心している。

「まあ父さんの影響だね。」

「ミソラちゃん、スバル〜ご飯よ〜」

「今行くよ。」

リビング

「「いただきます」」

「おいしい〜」

ミソラはあかねの料理に感心している。

「そう?お口に合って良かったわ。おかわりあるからね。」

「ありがとうございます。」

「ミソラちゃん、確かコダマタウンに来たのはドラマ撮影でよね?」

あかねが訪ねた。

「はい」

「撮影の間はずっといてくれるのよね?」

「はい」

(えっ…そうなんだ…)

スバルだけ少し困っていた。

「じゃこの家にいる間は私の事をお母さんて呼んでちょうだい。」

「ええ?でも…」

「同じ家に住んでたら家族同然よ。」

「…はいお母さん。」

「私もミソラって呼ぶわよ?」

「うん」

こうして夕ご飯は終わった。

## スバルの部屋

「ミソラちゃん、僕先お風呂入って来るよ。」

「わかったよ」

（お母さん…か…なんか懐かしいな…）

1人になってミソラは母の事を思い出していた。

（今私が歌手なのはママのおかげ…ママのために歌手になった…今は歌手で幸せだけど、やっぱりママに聞いて欲しいよ、私の歌…）  
ミソラは悲しくなりおもわず泣いてしまった。

「ふー気持ち良かった…?!ミソラちゃんどうしたの?」

「ごめん、ママの事思い出して…おもわず…」

「やっぱり寂しいよね…でも…僕らがその寂しさを出来るだけ埋めてあげるよ。甘えたかったら甘えてもいいと思うよ。」

「うん…ありがとうスバル君。じゃ〜甘えていい?」

「ええ?どうやって?」

「じゃ〜抱きしめて」

「えーでも…」

「もしかしてさっきのは嘘…?」

ミソラは泣きそうだ…「わかったよ…君が喜んでくれるなら…」  
「ギョッ」

スバルはミソラを優しく抱きしめた。

10分後…

「ありがとうスバル君。」

「うん…」

「顔真っ赤だけどどうさたの？」

「恥ずかしかったから…」

「慣れてよ〜これくらい。じゃないとこれから大変だぞ〜？」

「うん…（慣れるなんて無理だよ…心臓バクバクだし…）」

「じゃ〜私着替えて来るね」

ミソラは部屋を出た。

「スバルも大変だな。」

「ロック！どこ行ってたの？」

「ハーブに連行された…」

「また？」

「ああ…空気を壊すとか言って展望台に連れてかれた」

「ロックも大変だね」

スバルは苦笑している。

「スバル君お待たせ。」

「ねえミソラちゃん…もしかして僕の部屋で寝るの？」

「うん。お母さんがそうしろって。」

「（母さん正気？）（じゃ〜ミソラちゃんはベッドで寝てよ。僕は下

で布団で寝るから…）」

「えー同じベッドで寝ようっ？」

「それは流石に…」

「甘えちゃダメ？」

「…わかったよ…」

「やった〜」

ミソラはすごく喜んだ。

しかしスバルは新たな試練（？）が立ちはだかることはまだ知らない…

ミニシアターの寂しさ・試練(?)の始まり(後書き)

感想、評価お願いします。

## スバルの悲劇（前書き）

スバルのキャラが壊れてます。  
更に書いてて恥ずかしかったです。

## スバルの悲劇

「じゃあ寝ようか？」

「うん！」

スバルとミソラはベットに入った

「ねえ、ミソラちゃん……」

「なーに？」

あのさ、僕に抱きつくのやめてくれない？」

そう、スバルはミソラに抱きつかれていた。「なんで？」

「いや、寝にくいし、恥ずかしいし……」

「いやだ」

「えっ？」

「じゃあ寝るね」

「ちょっと待って！(この状態で寝られたら色々ヤバイよ)(泣)(泣)」

「……………」

(寝てる~~~~~!!)(泣)

スバルのすぐ隣にはミソラの顔を見た。

(ドキッ)

スバルの隣にはミソラの顔がすぐみえる。そんな訳でスバルもドキドキしてしまった。

(かつ、可愛い…それにいい匂い…)

不覚にもそうスバルは思ってしまった。

(…ハッ！僕はなんて事考えてんだ！？てゆうかこの状態を何とかしないと…)

ミソラの腕を離そうとしたが離れない。逆に強くなった気がした。

(まさか起きてる！？いやそんなハズは…てゆうかこの寝顔ずっと一人締めしたい…ハッ！またか)

スバルは徐々に理性が保てなくなってきた。

(ヤバイ…僕おかしくなってきた(泣)けど、僕もミソラちゃんを抱きしめていいかな？…っていい訳ないけど…一回ぐらい…:…:神様、そしてミソラちゃん、ごめんなさい…)

ギョッ

スバルもついに誘惑に負けた。

スバルはミソラを抱きしめたまま寝てしまった。

「ねえハーブ？スバルって意外と大胆だね」

ミソラは起きていた。

「そうね。あなたには負けるけれどもね。」

「エへへ。明日の朝が楽しみだね」

「何が楽しみなんだ？」

いきなりウォーロックが聞いた。

「あんたは黙ってなさ…ねえロック、明日スバル君を起こさないでくれない？」  
「ああもちろんダゼ！スバル起こすの面倒だからな！」

「(単純だわ…本当に)じゃあミソラ、起こしてあげたら？」

「本当に？ヤツタネ じゃあ早く起きるためにもうねるね！」

今度はミソラは本当に寝た。スバルを抱いて…

「なあハーブ？なんでミソラ起きていたんだ？」

「…あんたには一生分らないわ。」

「なんだと？」

「本当の事を言っただまですよ」

「テメ バトルしやがれ！」

「また今度ね。」

2人の電波体は朝まで口げんかしていた。

朝：

「スバル君、起きて〜」

「うーん後五分…」

「起きないとオシオキだぞ〜?」

スバルの起きる気配は0だ。

するとミソラはスバルに自分の唇をくつつけた。キスした訳だ。

「んッ!…ワア!!!!!!」

起きた途端にキスされていてスバルはパニックだ。

「ちっ、ちよつとミソラちゃん!そんなお越しかたやめてよ!」

「オシオキだよ〜 起きないスバル君が悪いぞ〜?」

「…そんな(泣)」

「顔赤いよ〜?」

「ッ…」

しかも私が起きたら抱きついてたしね〜 スバル君って案外大胆だね  
ね」

「…ご飯食べに行こう…(なんで僕抱きついたんだ?)」

「待ってよ〜」

ミソラはスバルを追いかけた。

「あのふたり羨ましいわ〜。」

「ケッ、女の考える事は分からないぜ。」

また新たな1日が始まる。

## スバルの悲劇（後書き）

更新遅れて申し訳ありません。

ブラザー申請ザコイのに沢山いただきました。ありがとうございました。  
した。

今日Wi-Fiしてたらボコボコにやられました（泣）やはり僕も  
まだまだですね

2、3日は塾のテストやら補習やらで更新まだできません（泣）  
申し訳ありません。

## あかねの質問（前書き）

学校早く終わり、部活もないから更新できました。短いけど…

## あかねの質問

「ねえスバル、顔赤いけど大丈夫？」

朝ご飯を食べてる最中にあかねが聞いてきた。

「！ゲホゲホ」

スバルは朝にミソラにやられた事を思い出して咳き込んでしまった。

「だっ大丈夫だよ！！」

「ふーん。なんかミソラちゃんも顔赤いけど？」

「！！！！」

2人は面白いぐらい顔が赤くなっている。

「スバル君のお母さんってDSね〜（笑）」

「ああ。」

珍しくハープにウオーロックが同意した。

「まさか何かあったな〜？」

「も、もう僕行くね！！ご馳走様！」

「わっ、私も今日はドラマの撮影があるんで…」

「行つてきまーす！」

「ふーん。なんかミソラちゃんも顔赤いけど？」

「！！！！」

2人は面白いぐらい顔が赤くなっている。

「スバル君のお母さんってDSね〜（笑）」

「ああ。」

珍しくハープにウオーロックが同意した。

「まさか何かあったな〜？」

「も、もう僕行くね！！ご馳走様！」

「わっ、私も今日はドラマの撮影があるんで…」

「行つてきまーす！」

「ふーん。なんかミソラちゃんも顔赤いけど？」

「！！！！」

2人は面白いぐらい顔が赤くなっている。

「スバル君のお母さんってドSね〜（笑）」

「ああ。」

珍しくハーブにウォーロックが同意した。

「まさか何かあったな〜？」

「も、もう僕行くね！〜！ご馳走様！」

「わっ、私も今日はドラマの撮影があるんで…」

「行つてきまーす！」

（（あつ、逃げたな））

あかねと2人の電波体は思った。

「あんな事があつたなんて言ったらどうなるか…」

「私も流石に…」

2人は同意した。

「どんな事があつたのかしら？」

スバルは見なくてもわかった。背中に感じる殺気で…

「い、委員長…それにみんな…」

そこには委員長軍団とツカサがいた。

## あかねの質問（後書き）

攻略本買ったちゃいました。これでWi-Fiバトルが強くなる！  
（  
といいな〜）

話逸れましたが感想待ってま〜す

学校見学の始まり（前書き）

やっとシリウス倒しましたよ…一回死んだけど…（泣）  
今回はどうでもいいですがどうぞぞ！

## 学校見学の始まり

「オイ、スバル！俺らのミソラちゃんがお前の家から出てくるって  
どういうことだ？」

ゴン太が少し怒り気味で聞いて来た。

「そうですね！」

キザマロも同意した。

「二人とも、ミソラちゃんはドラマの撮影がコダマタウンであるから僕の家でお世話になるだけだよ。」

至ってスバルは冷静だ。

しかし、

「別に俺らの家でもいいよな？スバル！？」

二人とも食い下がらない。

しかしまさかの委員長が助け舟を出した。

「あなた達、ミソラちゃんとスバル君は付き合ってるんだから別にいいじゃない!？」

「うっ…確かに…」

キザマロもゴン太もルナには逆らえない

「さっ遅刻するから早く行きましょう。」

スバル達は学校へ向かった

ミソラは公園へ

学校

「スバル君、委員長となんかあったでしょう？」

「！ツカサ君は何でも解るんだね…。」

スバルは感心するしかなかった。

「だって委員長がスバル君絡みのミソラちゃんをフォローするなん

「てね」

「実は……………」

スバルはルナがハイドに操られた昨日の事を話した。

「スバル君も大変だね。」

「うん」

「モテモテで（笑）」

「ちよつとツカサ君！」

「冗談冗談」

ツカサは笑っている。

「そういえば今日公園でバトルウィザード大会があるらしいよ。」

「マジかツカサ?!」

ヒカルとウオーロックはやたら喜んでる。

「また君は……」

ツカサは溜め息をついた。

「今日の放課後からちよつと始まるらしいよ。」

「スバル、もちろん参加するよな？」

「…わかったよ」

「ツカサ、俺らも参加だよな!？」

「ハイハイ」

「やったZE」

ウィザード2人は喜んでる。

「俺らも参加ダゼ!!」

ゴン太とオックスも参加するようだ

「おし!今から特訓だ!」

「いくぜ!!」

ウィザード三体は屋上に向かって行った。

「嬉しそうだね…みんな」

「スバル、もちろん参加するよな?」

「…わかったよ」  
「おし！！俺のオックスに勝ったら牛井おごってやるぜ！！」  
「いらぬよ…」  
ゴン太はやる気満々だがスバルはやる気0だ。キーンコーンカーン  
コーン  
「席につけ」  
「育田が入ってきた。」  
「今日は中学の見学に行ける事になった。部活も見学できるようだ。  
来年は中学生だからな、しっかり勉強してこいよ。」  
「中学見学か  
〜ツカサ君何部見る？」  
「向こうで決めるよ。」  
「じゃ僕もそうしよう。」

中学

「やっぱり雰囲気違うね〜」  
「そうだね」  
「スバル君は何部見るのかしら？」  
「まだ決めてないんだ。委員長は？」  
「私はもちろん生徒会の活動を見に行くわ！！」  
「君らしいね…」  
「ということ失礼するわ。ゴン太、キザマロ行くわよ！！」  
えっ？俺らもかよ？おれは料理部みたかったのに…」  
「僕はパソコン部を…」  
「つべこべ言わない！！」  
「ハイっ！！」  
委員長軍団はさって行った…

数分後：

「ねえスバル君、コレ何部だと思う？」  
ツカサはポスターを見て言った。

「えっ？何コレ？」

スバル達の目に留まったのは…？

## 学校見学の始まり（後書き）

次回はたかひろ様のアドバイスでこのサイトでメンバー募集中のあの交流会が出てきますよ！  
ついでに僕も出演予定です。

**激戦！スバル&ツカサVS交流会（前書き）**

長いです。ウダウダだけど（泣）

リクエストでオリキャラも初登場

あの人達もリクエストで登場！

ではどうぞ

## 激戦！スバル&ツカサVS交流会

スバルが見たポスターには

「シユーンティングスター交流会メンバー募集中」と書いてあった。

「なんか名前カッコよくない？」

「確かに。」

スバル達は興味を持った。

「ねえ、行ってみない？」

ツカサが提案した。

「そうだね！せっかくだし！」

「場所は：第2パソコン室だって。」

「よし！行こう。」

スバル達は走って第2パソコン室へ向かった。

「たかひろ様、勇輝様あの二人がそちらに向かいました。」

「わかった。」

赤いウィザードとその持ち主が言った

「へっ、暴れんの久しぶりだぜ！」

「そうだな。」

今度はまた違った2人組だ

「そろそろ準備したらどうですか？」

今度は人間だけだ。

「よし」

3人と2体の電波体が不審な動きを見した。

## 第2パソコン室

「なんか緊張するね。」

「うん」

ツカサとスバルはドアの前で少し入るのを躊躇している。

「スーッハー」

スバルが深呼吸した。

「ツカサ君、入ろ!!」

「うん！」

スバルがドアを開けた。

中は真つ暗だった。

「あれ？電気がついてない。」

パツ

「あれ？電気がついた!？」

「よく来てくれたね、ロックマン&ジェニミ」

「誰だ？テメ？」

「僕はストリーム、この小説の作者てまシューティングスター交流会のメンバーだよ。今日は君達のためにゲストをお呼びしたよ。」

「ちよつと待って、普通僕達がゲストだよね!？」

スバルが聞いた

「君達がここに来るのは僕は知っていたよ。」

「なぜ？」

「ん？当たり前じゃん！作者だし！」

「……………」

「どうしたの？」

「僕達がこんな作者に動かされてたなんて…ショックで…」  
スバルは少しガツカリしている。

「いや、僕の方がショックでかいからね（泣）」

「それでゲストって？」

「フフフ、勝ったら教えてあげるよ。」

「勝ったら？まさかバトルか？……！スバル！ツカサ！電波変換だ！」

ウォーロックが叫んだ

「「え？」」

「何か来る！結構強力な電波だぜ！」

ウォーロックは焦り半分楽しみ半分だ。

「仕方ないね、ツカサ君」

「うん」

2人はハンターを構え叫んだ、

「「トランスコード！」」

「シューティングスターロック！」

「ジェニミ・スパーク！」

すると青き光からロックマン、稲妻の中からジェニミ・スパークが現れた。

「「いやーやっぱりロックマンは最高だね。」」

「誰？」

「俺の名前はブルース・ソルジャー」

赤いボディで黒いバイザ、そして長い髪をしている。

「俺はサイバー・ペルセウス」

銀色のボディで大きな翼を持っている。

「俺達交流会は君達の大ファンだ。」

「テメーらの目的はなんだ？！」

ウォーロックが言った。

「さつきからうるさいウィザードだな！」

銀色で大きな翼をしているウィザードが出てきた。

「あ？なんだテメー？」

「オレサマの名前はペルセウス！バトル大好きでザコには用なしだ

ぜ！」

「そんな事はどうでもいいんだ！テメーらの目的を聞いてんだ！」

「は？オレサマを無視とはいいい度胸じゃねーか？」

「ペルセウスやめる。失礼だ。もし帰ったらどうする？」

「いや、帰ろうとしてるぜ」

「「え？」」

ブルース・ソルジャーとサイバー・ペルセウスがハモった。

「ちよつと待った〜！」

「黙れ作者！こんな所連れてきやがって！帰ろうぜお前ら」

「いや、今からバトルだけど？」

「スバル！バトルだぜ！帰らないよな？」

「君単純過ぎるよ！」

「えー今からやつとバトルですよ。」

「まあこんな遅くなったのは作者のせいだな。」

ヒカルが言った。

「「「「「「確かに」」」」」」」

みんなが言った。

「スイマセン…（泣）」

「て言うかテメーらの正体あらわしやがれ！」

「いいよ。バトルに勝ったら」

「て言うかまさかロックマン達と戦えるなんて…夢にも思わなかった…」

ブルース・ソルジャーとサイバー・ペルセウスが言った。

「じゃ始めますよ！」  
ストリームが言った。

「……ウエーブバトルライド・オン……」  
「ロックバスター！」

「ロケットナックル！」  
ロックマンはブルース・ソルジャーにロックバスターを放ちジェニミはサイバー・ペルセウスにロケットナックルを放った。  
ブルース・ソルジャーとサイバー・ペルセウスは苦もなくかわす。

「バトルカード ソード！」  
ブルース・ソルジャーの左腕がソードに変わった。  
「エレキソード！」

ジェニミ・スパークがエレキソードを構えブルース・ソルジャーに切りかかった。

「くらいな……」  
ジェニミBが切りかかる。

「甘い！」  
ギン

ブルースはソードで受け止めた。  
「へっどつちが甘いんだよ？」

ズシャ

ジェニミWがブルース・ソルジャーを切った。  
「へっザコイな……」

ジェニミBが言ったがジェニミWが倒れていた。  
「ツカサ?!…グッ」

ジェニミBも倒れた。

「残念だな。ジェニミWが切ったのは俺の残像だ。ジェニミ・スパークもまだまだだな。さてあっちを援護するか」

「メテオリックシャワー！」

無数のメテオが高速で降って来る。

「バトルカード バリア！」

ピキペキ

「ヤバイ……」

バイリン

バリアが壊れメテオがロックマンに当たる。

「やったぜ！」

ペルセウスは喜んだ。

「いやまだだぜ！」

「バトルカード ヘンゲノジュツ！」

サイバーペルセウスの前にはロックマンがワイドソードを持って切りかかって来ていた。

「くらえー！」

「バトルカード ペルセウスウイング！」

ペルセウスがロックマンを後ろから翼で切った。

「グフツ！」

ロックマンは怯んだ。

「くらえ！ペルセウスファイナルスラッシュ！！！」

「グワ……！！！」

「スバル！大丈夫か？」

「うん、なんとかね……」

「流石ロックマン。簡単には倒せないね。」

サイバー・ペルセウスが言った。

「流石俺達のヒーローだな」

「あれ、ブルース・ソルジャー。ジェニミ・スパークは？」  
「かたずけた」

「ツカサ君が負けるなんて…」

「コイツ二人を相手するのか…スバル！ノイズチェンジだ！」

「うん！ノイズチェンジ…キグナス！」

「うわ！ノイズチェンジ生で初めて見た。なんか感動！」

「確かに」

「しゃべってんじゃね〜よ！行くぜ！」ペルセウスがせかす

「メテオリックシャワー！」

サイバー・ペルセウスがまたメテオを降らす。

「ハリケーンダンス！」

風の影響でメテオが逸れた。

「何！？」

しかし、ブルース・ソルジャーが向かって来る。

「バトルカード フミコミザン！」

「バトルカード マッドバルカン！」

「しまっ！」

ブルース・ソルジャーはカウンターをとられた。

「NFB！メテオライトバレッジ！」

「グワ…！！」

二人はモロにくらった。

「まだまだー！」

ウォーロックが叫ぶ

「マジノイズ…ジェニミ！バトルカード ソードファイター！」

「グフツ…」

「ブレイクサーベル！」

「へっこれでやったか？」

しかしまだ2人は起き上がった。

「仕方ない…ブルース・ソルジャー、切り札いきましょう！」

「やるしかないな！ソードファイター×3GA！デルタレイエツジ！！！」

「デルタレイエツジ？確かにしえの伝説の技！」

ウォーロックが叫ぶ。

「いくぞ！」

ブルース・ソルジャーが構える。

「そうわせせない！マミーバンド×3 GAジェニミサンダー！！！」

しかしブルース・ソルジャーは消えた。

「どこだ？」

「スバル！後ろだ！」

しかし気づいた時は遅かった。

ブルース・ソルジャーが高速でロックマンをデルタの形を作るように切り裂いた。

「グワ…！！何て威力だ…立てない…」

「サイバー・ペルセウス今だ！」

「了解！アポロン・フレイルム、ムーン・ディザスター、プラチナメテオ GA！サンアンドムーン！！！」

「やべえ！スバル！」

ロックマンにサンアンドムーンの攻撃が向かって行った。

「あの攻撃2つ当たればもう無理だな。」

「やった 俺達のロックマンに勝ったぜ！夢のようだな。」

「勝ったのは夢だぜ！」

ウォーロックの声が出た。しかしロックマンの姿はない

「何！？あの攻撃をかわした？どこだ？」

「ここだぜ！」

「ブラックエンドギャラクシー!!」

「「グワ-!!」」

「グッ…まさかその技と姿は!？」

「ファイナライズ!ブラックエース!!」

「かつこいい」

ブルース・ソルジャーは感動している。

「攻撃をくろう寸前にファイナライズしたのさ!」

「流石ロックマン。やっぱり強い」

「僕らのまけだ…」

「じゃあなた達の姿を見して下さい。」

「「わかったよ」」

2人はウエーブアウトした。

「あつあなた達は!？勇輝先生、たかひろ様!」

「実はストリームさんにリクエストして電波変換さしてもらったんだ。」

「あんな作者が良くリクエストに応えれたな!」  
ウォーロックは笑った。

「本当にひどい作者だ!ウォーロックに負けちまったし最悪!!」  
ペルセウスが言った。

「なんか言った?」

「あつストリームさん。」

「あつクソ作者!」

「ペルセウス、もう出番なしな!」

「すまん。」

「そう言えばたかひろ様のウィザードは?」

「コイツだよ。」

皆さんおなじみのブルースが現れた。

「コイツの名前はブルース。200年前からいる。」

「200年前?!」

「そうだ。昔のロックマン程ではないが現代のロックマンもなかなかだな。」

ブルースが言った。

「200年前にもロックマンが?」

「ああ。」

「そろそろ僕ら行くね。また会うけど…」

勇輝先生が言った。

「え?また会えるの?」

「ストリームさんから聞いた。交流会の俺達の事もよろしく!」  
たかひろ様が言った。

「最後に一つ。君達にまた新たな敵が現れる。」

ストリームが言った

「え?また?」

「しかし絆を信じれば大丈夫だ…」

「じゃまた会う時まで」

勇輝先生が言った

「うん!」

「ペルセウス、今度決着つけてやる!」

「へっ負ける訳ね〜けどな!」

「「「じゃあまた頑張ってるな!俺達のロックマン!」」」

三人は去って行った。

「新たな敵…か」

「なーに絆信じれば大丈夫って作者言ったじゃね〜か」

「そうだね…戦う時はよろしく!ウォーロック。」

「当たり前だ!」

スバルとウォーロックは笑いあった。

## 激戦！スバル＆ツカサVS交流会（後書き）

リクエストでたかひろ様と勇輝先生が電波変換！

作者は目立ちませんでした（泣）

楽しんで下されば嬉しいです

次回から第2部的な感じですよ。

ではさいなら

第2部【第1章・戦いの幕開け】

謎の人物（前書き）

W i - F i で 今日 3 勝 1 0 敗（泣）

## 第2部【第1章・戦いの幕開け】 謎の人物

「そう言えばスバル、今日バトルウィザード大会があるてたよな？」  
「え？まだバトルするの？どんだけ好きなの？」  
スバルは呆れている。

「バカやろう！バトルに数制限なんかねー！」

「わかったよ…じゃ行こう」

「スバル君僕の事忘れてないかな…？」

「ツカサ君…ごめん忘れてた…」

「スバル君の秘密ばらすね…」

「ごめん…てゆうか秘密って何!？」

「気にしないで。じゃ行こうよ、バトルウィザード大会…僕は行きたくないけど…」

「「暴れてやるぜー!!」」

公園

「おっやってるやってる!」

「あっスバル君も参加する感じ？」

「南国さん!」

スバル達に話掛けて来たのはBIGWAVE店長の南国ケンだ。

「この大会僕がプロデューズしてる感じなんだ!」

「そうなんだ」

「参加するなら受付してね」

受付を済ませたスバルとツカサはウォーロックとヒカルを大会に参加させた。

「ウォーロック、助けてくれ〜！」

走って向かって来たのはゴン太とオックスだ。

「ゴン太？どうしたの？」

「向こうにやたら強いウィザードがいたんだ。そいつにオックスが秒殺された！」

「マジか！？よしそいつとやるぜー！」

いやその前に他のやつ倒さなきゃ！これトーナメントだし…」  
スバルが突っ込んだ。

準決勝第1試合

「おい！ジェニミ！お前の相手、あいつが俺を秒殺したヤローだ…」

「よし！倒してやるぜー！」

「スバル様」

軍隊のようなアーマーを着て片目には高性能そうなバイザーをつけ、

片手にはスナイパーが装備してあるウィザードが言った。

「どうした？」

バルジと呼ばれた少年はサテラポリスの服を着ていて薄い緑の髪をしている。

「今のところは大したウィザードはいません。しかしオックスというウィザードは電波変換できるようです。データはこんな感じですよ」とバルジはハンターに凄まじい量のオックス・ファイアのデータが表示された。

「…一応基本的能力はあるな…」

「それと、後2体強力な電波の内、一体はロックマンになれるようです」

「！ロックマン…やっとか…あっお前は昔会ったよな…」

「はい…遠い昔ですが…」

「じゃあ2体の強力な電波のデータを取ってくれ」「はい、戦ってまいります。しかし、オペレートして貰いたいです」

「いいだろう。俺も直接データを取りたいからな…」

「ありがとうございます」

「テメーがオックスを秒殺シタヤローか…」  
ヒカルが言った

「秒殺？データを取ったまでだ…」

「データ？」

「喋り過ぎだ！」

「スイマセン、バルジ様」

「では始めるよ〜」

南国が言った。

「なるほど、少しはやるようだ…」

「クソッ！テメーやるじゃねーか」

ヒカルは負けた。二分で。

「なるほど、貴様は電波変換して、ジェニミ・スパークになれるのか…バルジ様、これがデータです。」

「ご苦労」

「テメーら何もんだ？何故俺達の事が分かる？」

「僕もしりたいな」

ツカサが言った。

「……………またいずれ教えてやる」

「スバル君、ウォーロック、あのウィザードは危険だ」

「何故？」  
「俺達と戦っただけで俺達の戦闘能力やらを調べやがった」  
「ウォーロック、気をつけなよ？」  
「スバルが少し心配そうに言った。」  
「任せろっつてんだ！」

## 決勝戦

「ハアハアテメーやるじゃねーか」  
「そっちもなかなかだな…流石ロックマンになれるだけあるな…」  
「！やはりお前ら俺らの事を調べてやがる！正々堂々やりやがれ！」  
「バルジ様、こう言ってますが…？」  
「いいだろう…お前も現代のロックマンの實力をしりたいだろう？」  
「はい」  
「よし、電波変換だ」  
「電波変換？貴様らできるのか！？」  
「ああ…そちらはロックマンだろう？」  
「バレてるなら隠さなくていいな！！スバル、やるぜ！」  
「こればっかりは仕方ないね！」  
「トランスコード シューティングスターロックマン！」  
「青きヒーローが現れた。」  
「ではこちらも電波変換する」  
「バルジはハンターを構えた…」

第2部【第1章・戦いの幕開け】 謎の人物（後書き）

バルジのウィザードなんでしょ？

多分皆さん分かりますよね？エグゼキャラだし…

## 新たな敵の謎（前書き）

そうそう、オリキャラはほとんど星などにちなんだ名前になると思  
います。

## 新たな敵の謎

「トランスコード！バルジ・サーチ！」

光の中からバルジのウィザードに似た電波人間が現れた。

「俺の名はバルジ・サーチ。ウィザードのサーチマンと電波変換で  
きる……」

「へっんな事はどうでもいい！始めるぜ！」

「ウエーブバトルライドオン！！」

「バトルカード ブレイクサーベル！」

しかしバルジ・サーチは下がってよけた。

「そんなのあたらん！スコープガン！」

バルジ・サーチの右腕がスナイパーに変わった。

至近距離だったためロックマンにヒットした。

「グッ……まだまだ、バトルカード ビーストスイング！」

「任せろ！オラーっ！」

ウォーロックのスイングがバルジ・サーチを切り裂いた。

「よし！バトルカード インジビブル！」

ロックマンは姿を消した。

（よし！これでキメる！バトルカード……）

「……そこだ！スナイパーショット！」

（当たる訳ない……）

スバルはそう思った。しかし……

「！グワーー！」

ロックマンにヒットし、ロックマンは姿を現した。

「くらえ……ガトリング×3！GA ムゲンバルカン！」

「グワーーー！」

無数の銃弾がロックマンに全てヒットした。

何だ?!このGAは?!えげつねえ!」

「これは200年前の技…これで最後だ…インパクトキャノン!」

「まだだ…バトルカード カウントボム…」

ロックマンは前にカウントボムを置いた。

「無駄な事を…インパクトキャノンが全てを吹き飛ばす!」

ドガーン!

カウントボムの爆発と同時にキャノンがヒットした。

「…現代のロックマン…こんなものか…」

「残念かサーチマン?」

「…!バルジ様後ろ…」

「ソードファイター!」

何とロックマンがバルジ・サーチの背後に回っていた。

「何!?しまっ…グハッ!」

ソードファイターは全てヒットした。

「ハハハ…爆煙を利用して君の背後に回ったのさ…」

「流石ロックマン…データでは計り知れないな…」

サーチマンは言った

バルジはウェーブアウトした。スバルもウェーブアウトした。

まさか生でウェーブバトルが見られるなんてねー。危なかった感じ  
だけどねー」

南国ケンが言った

「…スイマセン…」

スバルとバルジは謝っていた。

「いいよいいよ。楽しめたし、大会も終わった感じだし」

「スイマセン…ありがとうございます」

「それじゃ俺はサテラポリスに帰らないとな…」

「！君もサテラポリスなの！？」

スバルとツカサは驚いた

「ああ元々シャードののだがな…ある事情で本部のある日本に来たんだ…」

「ある事情？まさかストリームさん達が言っていた新たな敵に関係あるんじゃない？」

ツカサは尋ねた。

「ストリームとは誰か知らないが…新たな敵は宇宙から地球に近づいているようだ…しかしまだよく分からない…」

「宇宙？またメテオGか？」

ウォーロックが聞いた？

「いやサテラポリスのデータによるともつと危険な電波を感じるようだ…怪しい惑星がある訳じゃないようだ…」

サーチマンが答えた。

「そっか…」

「また何かあったら連絡してやる。お前らもサテラポリスの遊撃隊らしいからな…」

「わかったよ」

「頼むぞロックマン…」

バルジはウェーブライナーで帰った。

????の惑星

「様もう少しで地球に『試練』を与られます。」

「わかった…また地球に新たな試練を与える…」

宇宙で強力な電波が話していた…

## 新たな敵の謎（後書き）

やっぱりバトルシーン苦手です（泣）アドバイスお願いします！

次回はあんまりスバルの出番ないです多分…  
では！

## 各々の出会い（前書き）

スバル登場なしです。

今回登場するオリキャラのウィザード、皆さん分かりますかね？

（笑）

ではごっごぞー！

## 各々の出会い

ジャック&クインティア側

俺と姉ちゃんは今ウエーブロードを進んでいる。

そう、俺達の国を元通りにするため、そして最近感じる宇宙の強力な電波の正体を探るためだ。

俺は何処へ行くかわからねーが姉ちゃんの友達女王がいる国へ向かってるらしい…その国もかつてテクノロジーが発展していたが小さいため滅びかけた…

「着いたわよ、ジャック。彼女なら何とかできるはず…」

俺達は城の前でウエーブアウトした。そして警備員に許可をもらって城の中に入った。

女王様、会いたいというお方が…」

「名前は？」

「クインティアと名乗っております。」

「！すぐに通しなさい。」

「久しぶりね我が友クインティア、そしてジャック。」  
「ご機嫌よう。プリンセス・プライド5世。」  
プリンセスプライド5世は優しそうで白いドレスを着ている。  
「それで今日は？」  
「滅びた私達の国を復活させるのに手を貸して欲しいの。」  
「いいわよ。喜んで手伝うわ！」  
「ありがとう。それから最近の宇宙の電波気づいてる？」  
「ええ…私の国でも色々調べてるわ…でも謎ばかりよ…」  
「そう…今日はありがとう…けどお礼は…」  
「いいわよ。そんなの。」  
「けど…」  
「そう言えば、あなた達ウィザード持つてる？」  
「ええ…」  
「ああ…」  
2人はウィザードをオンにした。すると再構築したコーヴァスとヴァルゴが現れた。  
「ふーん、電波変換できるみたいねー」  
「！なぜ分かるの？」  
「だって私も電波変換できるからね…」  
その時ハンターにノイズが走り、何者かの声が聞こえてきた…

僕がウエーブロードを見ると月のように輝くウィザードをみつけた。  
そして話かけた。

「君はウィザードかい？」

「そうだYO！」

「君からはレジェンドなソウルを感じる！僕のウィザードにならない？」

「いいYO！」

その時ハンターにノイズが走り、何者かの声が聞こえてきた…

シドウ側

「よくぞ来て下さいました。大佐。」

大佐と呼ばれた男は少し髪が長く、髭をはやしている。

ここはサテラポリス日本本部

「日本か…久しぶりだな…何年振りだろうか…あの時以来だな…」

「あの時とは？」

「ふっ、大分昔の事だ…」

「まあいいですよ。では今回の宇宙の電波の事です…」

その時ハンターにノイズが走り、何者かの声が聞こえてきた。

ミソラ側

「今日は疲れたねーハープ。」

「そうね…でも今日も良かったわよ。」

「ミソラちゃん。」

後ろから名前を呼ばれた。その方向を見るとミソラと同じ年ぐらいの女の子がいた

「エリーちゃん！」

「今日はお疲れ様ネ」

エリーはミソラと同期のチヨイナ出身のアイドルだ。

「ねえミソラちゃん、あなた電波変換できるはずネ？」

「！何故それを…？」

「私見ちゃったネ、今日ミソラちゃんがウエーブアウトをするどころ」

「え…？今日私トイレでウエーブアウトしたはず…まさかエリーちゃんあなた…」

するとエリーはニヤリと笑った。

「そのまさかネ」

しかし、その時ハンターにノイズが走り、何者かの声が聞こえてきた。

ソロ側  
ノイズウエーブ

「流石にここまで来ればまだましなウイルスがいるな…」

「ア……………マ……………」

ソロはラプラスと修行していた。ロックマンを倒すため。

「誰だ…我が…眠りを…」

どこからか声がある。

「ん…？なんだこの声は？」

ブライは声の方に向かった。

「なんだこれは…？」

「ナ……………イ」

凄いノイズの量だ…

ブライはそれをラプラスソードで切った。すると中からウィザードが現れた。

「誰だ…？我が封印を解くものは？」

「誰だ…？キサマ？」

「俺の名は…」

その時ハンターにノイズが走り、何者かの声がした…

各々の出会い（後書き）

どうでしたか？

感想待っております。

## 地球滅亡の宣告（前書き）

最近どうでもいい内容が多い…もつすぐ話發展しますが…

## 地球滅亡の宣告

全世界のハンターにノイズが走り、何者かの声がした…

「地球の皆さん、聞こえてますか？ 私の名はカイザー・エッジワース、ある御方の意志を伝えていきます。ある御方は火星、水星、木星を支配しその3つの星から強力な電波体を部下にしました。そしてこの間のメテオGの件も含め地球を危険な惑星と判断なさいました。」

よって明日から地球に試練を与えます。

それ試練を乗り越えられなかったら地球を破壊します。しかし、もし試練を乗り越えられたら地球への攻撃はやめます。

地球への試練は支配に置いた部下に行ってもらいます。

では健闘を祈りますよ…フフフフ…」  
そこで通信は途切れた。

「オイ、スバル今のは敵だよな?!」

「みただね…どうしようか…攻撃は明日からだよね…」

スバルのハンターがなった

「ミソラちゃん、今のは敵ダヨネ？」

エリーは心配そうに聞いた

「みたいね…どうしよう…」

「攻撃は明日からネ…」

〵  
〵

その時2人のハンターがなった

「今のは敵みたいね…」

プリンセス・プライド5世は言った

「敵なんてぶっ飛ばしてヤローゼ!!」

ジャックが言ったが

「馬鹿…あんた死ぬわよ…」

珍しくクインティアが脅した。

「ごめん…姉ちゃん。」

ジャックも珍しく素直に謝った。

「さて、どうしましょう…」

〵  
〵

その時3人のハンターがなった。

皆のハンターには

「メールが届いた者はすぐにWAXAに来てくれ」と言うメールがシドウから届いた。

「始まったようだな…あの時の悲劇が…地球滅亡へのカウントダウンが…」

シドウの隣にいた大佐が呟いた。

「俺達はメール届いてないが…どうするんだ…？」

ブルース・ソルジャーが言った。

「いいじゃね〜か。サテラポリス日本本部に行けば…」

サイバー・ペルセウス

が言った。

「よし！行こう！」

ストリームの声だが…姿は違う。トマホークマンのようなボディだ  
三人はWAXAに向かった。

メールが届いた者達はすぐWAXAに向かった。

チーム結成（前書き）

なかなか進みません（泣）

## チーム結成

「シドウさん、何だろ？」

「今日の敵の事だろ？」

「だよね……」

スバルは大体わかってたがやはり気になっていた……

WAXA日本本部

「あっスバル君！」

着いた途端ミソラに抱きつかれた。

「ちよっ……ミソラちゃん……」

いきなり抱きつかれたスバルは焦った。

「怖かったから……」

「えっ……？」

「さっきの敵の宣告、怖かったの…」

ミソラは少し泣きそうだ。

「大丈夫だよ…ミソラちゃん…君は絶対守るから…！」

「スバル君…ありがとう…」

ミソラは泣き止んだが…

「周りの人達が…」

スバルは周りの人達の事を忘れていた。

「相変わらず熱いなスバル。」

シドウが言った…

「けっ…あんたも人の事言えねーだろ！」

ジャックが言った途端シドウとクインティアが赤くなった。

「まあクインティアにも彼氏が…負けてられませぬね」

「私も彼氏欲しいネ！」

「シドウめ…羨ましい…って言ってる場合じゃないな！」

「すいません大佐！」

プライド、エリー、大佐、シドウが言った。

「あの…すいません、あなた達は？」

「いい機会だ皆初めての奴もいるし自己紹介しよう。」

シドウが言った

「では私から…私はプリンセス・プライド五世です。クリームランドの女王です。よろしくお願いします」

ペコリ

「私はエリー。ミソラとは同期のアイドルネ。チヨイナ出身ネ！よろしくネ！」そしてバルジ、スバル、ミソラ、クインティア、ジャック、シドウ、そして遅れてきたツカサも挨拶をすました。

「私が最後だな…私の名はフォボス。アメロツパのサテラポリスの大佐をしている。」

「よし！全員挨拶済ましたな…」  
その時

「ちよつ待つてＹ〇！」

「全くだノットレジエンド！」

「レジエンドマスターシン？と、ムーン・ディザスター？何故ここに？」

「実は僕サテラポリスの秘密兵器なんだ！」

「そして僕はシンのウイザードになったＹ〇！」

「シドウさん…そうだったの？」

「まあな…実は指揮を執るのが上手いんだ…では本題に入る！」  
皆の顔に緊張が現れた。

「ここに読んだのは他でもない今日の通信の事だ！」

「そして、ここに読んだのは地球を守るためだ！」

シドウとフォボスが言った。

「シドウ、一つ聞きますが…もしやここにいる全員電波変換出来るのですか？」

プライドが聞いた。「ああ、世界で電波変換出来る人間の中でも、みんなトップクラスだ！」

「そういう事だ。では本題だ！先ほどの敵の通信によると明日から攻撃だ！それでその攻撃に対応するためチームを組む！」

フォボスが言った。

「チーム？けつ俺達だけで充分だったのに…！」

ウォーロックが言った。

「ウォーロック、チームに入れないぞ！」

フォボスが迫力のある声で言ったためさすがにウォーロックも黙った。

「ではチームを発表する！まずはクインティア、ジャック、プライドの『キングダム・ナイツ』、エリー、響ミソラ、星河スバル、双葉ツカサの『スター・ヒーローズ』、俺、シン、シドウ、バルジのサテラポリス中心の『エースリーダーズ』これで明日からの攻撃を対処する！」

「…ちよつと待った」

どこからか声が聞こえた。

「そのチーム、俺達も入れさせていただけこうか？」

「まさか…その声…」

ズバルとツカサは気付いた。

「そのまさかだ！」

目の前に三人の電波人間が現れた。

「ブルース・ソルジャー！サイバー・ペルセウス！って事は勇輝さん、たかひろさん！」

「後一人は…？」

ツカサは尋ねた。

「僕だよ…」

三人ウエーブアウトした。

「ストリームさん！電波変換出来るようになったんですか？」

「ああ、ついでにワイザードのトマホークマンだ。」

「よろしくだぜ！」

「オイ、貴様ら敵か！？」

フォボスが用心深く聞いた。

「ちよつと待て、貴様のワイザードは俺を知ってるハズだがな…」

「ブルース！」

フォボスのワイザードが言った。

「久しぶりだな…」

「まあ見方って事はわかった。それでチームに入ってくれるのか？」  
シドウが聞いた。

「もちろんだ！」

ペルセウスが言った。

「けっ…俺達だけで充分だのにな！」  
ウォーロックが言った。

「んだとテメー？」

「あ？やるのか？」

「ちよつと、やめなさいよ！見方は多い方がいいわよ！」

ハーブが言つてその場はおさまつた。

「シドウ、チームは俺達三人、『交流会』だ」

たかひろが言つた

「わかつた！ではみんな期待しているぞ！明日からチームに指令を出すから頑張つてくれ！では今日は解散だ！」

「「「「はいつ！」「」「」」」

「ね〜スバル君、…明日実はライブなんだ…見にこない？」

「そつだね〜…行くよ！指令が来たらそつちにいくけど…ツカサ君、来ない？」

「いくよ」

「うん、ありがとう！」

3人はウエーブライナーで帰つた。

「地球滅亡か…フン、くだらん」

「貴様…名前は？俺封印をとくとは…なかなかだな…」

「俺はブライ…」

「ブライか…フフ気に入つた、俺はフォルテ。かつて電腦の破壊神と呼ばれた…俺の力欲しくないか…？」

「何?!」

「貴様…絆が嫌いだろ?」

「何故わかる?」

「周波数が似ているからな…俺も絆が嫌いだ…かつてある人間に裏切られた…どうだ、俺と手を組まないか…?」

「…いいだろう…」

「明日からの攻撃はどうされますか…?」

「ガイザー・エッジワースが尋ねた」

「まずはあの2人組からだ…」

「分かりました…」

「ガイザー・エッジワースは消えた。」

「さて、まずは地球の実力を見て貰うぞ…ロックマン…」  
不気味な声が響いた。

## チーム結成（後書き）

次回あたりからやっと話發展します！  
では！

戦いの予感？（前書き）

シリウスV3倒せないです（泣）  
更新遅れました。すいません…  
まだバトルしません…  
ではどうぞ

## 戦いの予感？

ミソラはライブの打ち合わせのためオクダマスタジオで降り、スバルとツカサでコダマタウンに帰ってきた。

「ねえスバル君、明日ライブに一緒に行かない？」  
ツカサが聞いた。

「もちろんだよ！」

「じゃ明日8時にここの駅前で！」

「うん！バイバーイ」

スバルは家に帰って明日に備え早く寝るのであった。

翌朝

「ふあ〜」

スバルは7時に起きた。

「お前にしては早く起きたな！！」

「一言余計だよ…ウオーロック」

そして8時前に駅前に向かった

「おはようツカサ君。」

「おはよう。じゃ行こうか？」  
スバルとツカサはウェーブライナーに乗りライブ会場に向かった。

オクダマスタジオのウェーブロード

「ここやけに騒がしいな…プレアデス」

「ああ、だが俺達が壊滅させてやるぜ！」

「ああ…」

2体の電波体が話していた

オクダマスタジオ

「うわ！凄いなだね」

「流石ミソラちゃんだね！早くしないと席取られちゃうよ」

2人はライブ会場に向かった。

ライブ会場

「あれ？スバル君、ツカサ君！」

「あつ、交流会の皆さん！何故ここに？」

「僕らはミソラちゃんファンでもあるんだ！」

ストリームが言った。

「そうなんですか……」

「『ミソラちゃんは譲らないですよ』って思ったでしょスバル君？」

「！！！？ツカサ君！」

「あつ 凶星だね〜」

スバルは顔が真っ赤だ。

「流石俺達のヒーロー、言う事が違うな」

たかひろが言った。

「まあ今日は楽しもう！」

勇輝が言った。

「ケツ、俺はライブなんてどうでもいいぜ！」

ペルセウスが言った。

「んじや俺とバトルするか？決着つけてやるぜ！」

ウォーロックが言った。

「やってやるぜ！」

2体の電波体はライブを去って行った。

「なあトマホークマン、俺達もバトルするか？」

ヒカルが聞いた

「わり〜俺もミソラちゃんファンだから」

「…そうか……」

少し寂しそうなヒカルだった

しばらくして

「あれ？スバルにツカサ？」

「あつ、みんな」

そこには委員長軍団がいた。

「なんでお前らが？」

ゴン太が尋ねた。

「それはライブ見に来たからに決まってるじゃないか」

「始まるみたいね」

ルナが言った。ミソラが出てきた。

「みんなー今日はライブ来てくれてありがとうー！今日は楽しんでね

」

周りの盛り上がりが凄い。やはり人気だ。委員長軍団も盛り上がりつつあるようだ。

ライブが始まった。

「みんなー今日はありがとうー！また来てねー！」  
ライブが終わった。

「楽しかったね」

スバルとツカサは満足そうにしていた

その時スバルとツカサのハンターに通信が入った。

「勇輝さん！」

「2人とも、この会場付近に2体の敵の電波体がいるようだ。それでシドウさんから指令があった。俺達で敵を倒せと。」

「何？？」

「あれ？ウォーロック。いたの？」

「バトルの匂いを嗅ぎ付けて今帰ったぜ！」

「……………」

「スバル君？」

「あつ、すいません！」

「それでエリーとミソラちゃんは連絡いれてあるから合流したら僕らに連絡をくれ！！」

「了解です！」

そこで通信が終わった。

「ねえ、スバル君、ツカサ君？今のはどういう事かしら？」

「委員長…今のは……」

スバルは困った

「また敵？」

ルナが聞いた

「うん…ねえみんな今日は帰って欲しい」

スバルは言い方が悪いと思ったが言った。

「どういう事だ！？俺も戦うぜ！」

「そうよ！納得いかないわ！」

「みんな……」

スバルは困った。しかし、

「僕は君を守りたいだけなんだ。委員長…だから今は帰って欲しい！守るためだから……」

スバルに真剣に言われ少しルナはドキドキした。

「わっ、わかったわよ！帰るわよ！でも…ちゃんと話さないよ？敵の事。それから無茶しないでよ……？」

「ありがとう委員長…じゃ行こう！ツカサ君！」

「うん！トランスコード ジェニミ・スパーク！」

「トランスコード シューティングスターロックマン！」

2人は電波変換して去った。それを見届けて委員長軍団は帰った。

戦いの予感？（後書き）

次回やつとウエーブバトルです。

ここまで無駄に長かった

次回楽しみに

感想お願いします

ではまた！！！！

## オーロラ兄弟（前書き）

今日Wi-Fiで体力99999の奴いました  
秒殺でした…（泣）

## オーロラ兄弟

ウエーブロードを進んで行くとな下にミソラとエリーがいた。2人はウエーブアウトして2人に駆け寄った。

「ミソラちゃん、エリーちゃん！」

「スバル君！連絡聞いた？」

「うん！まさかこんな早く指令が入るとはね〜」

「じゃ私連絡するネ」

エリーは勇輝さんに電話をかけた。

「勇輝さん、合流できたネ」

「了解！じゃ建物の屋上に来てくれ。大量のウイルスがいてな。」

「了解したネ」

電話が切れた。

「じゃ屋上にいくネ」

「。。。おー！。。。」

「。。。トランスコード。。。」

「シューティングスターロックマン！」

「ハープ・ノート！」

「ジェニミ・スパーク！」

「メデイ・エリー！」

4人はウエーブロードに上がった。

「エリーちゃん、その姿は？」

ツカサがきいた。

エリーは今薄い黄色で脚は紺色、ピンクのバイザーをしている。

「私はウィザードのメデイと電波変換できるネ！ついでに回復が得意ネ！」

「頼もしいよ。よし！行こう！」

4人は屋上に向かった。

屋上

「これじゃキリがない……」

サイバー・ペルセウスが言った。

「皆さん！」

「おっ『スター・ヒーローズ』！」

「てゆうか凄いウイルスだね……」

「ああ……キリがない……」

ブルース・ソルジャーが言った。

「……多分ウイルスを操ってる電波体がこの奥にいるはず。そいつをたおせば……」

たかひろさんのウィザードのブルースが出てきた。

「けど、この数じゃ進めない……」

ツカサが言った

「……よし！ロックマン！ハープ・ノート！」

「なんですか？ストリームさん？」

「俺達みんなが道を作る！必殺技で！一瞬道ができるはずだからな……」

「わかりました！行くよハープ・ノート」

「うん！」

「よし！GA！デルタレイエッジ……」

「ジェニミサンダー……」

「GA！サン&ムーン……」

「カプセルボム……」

「トマホークスイングー!!」

一瞬だが道が開けた。

「バトルカード! ダッシュアタック!!」

2人はその道をダッシュアタックで駆け抜けた。

「ハハ! これでは何もできまい! もう地球抹殺しちまうかプレアデス?」

プレアデスはウイルスを利用し操っていた

「…来るぞクリスタル!」

「?」

「シヨックノート!」

「ロックバスター」

「はっ!」 プレアデスとクリスタルはジャンプしてよけた。

「そこまでだお前達!」

「ウイルスを止めなさい!」

「いいよ! 俺らを倒せたら。俺らの名は水星団オーロラ・プレアデスとオーロラ・クリスタル。ふたごだ。」

「水星団?」

「そう…地球抹殺の試練のため3つの部隊に分けられている! 水星団はその内の一つ! 更に俺らは電波変換をしなくても電波人間と同じ戦闘能力を誇る」

「水星団の中で無敵の僕らのタッグ倒せるかな?」

「倒してあげるわ! 私達二人で!」 「いくよ! ウェーブバトルライ

ド・オン!!!」

「ロックバスター!」

「当たらねーよ！アイスブレード！」

プレアデスは氷の剣を握った。

「バトルカード！リュウエンザン！」

「後ろから空き…ネオシャーベット！」

巨大な氷がロックマンに向かって放たれた。

「ヤバイ！」

「任して！マシンガンストリング！」

バキバキ…

マシンガンストリングが氷を砕いた。

「何？！」

「そのまま行っちゃえー！」

マシンガンストリングがクリスタルにヒットした。

「ぐふっ！！貴様…！」

ギンギン！

「ハア！」

ロックマンがプレアデスを切る。

「ぐふっ！貴様ら調子乗るのもここまでだ！やるぜクリスタル！」

「わかった！」

「ゼツタイレイトウ！！！」

二人の腕から青い光線が放たれた。

「バトルカード バリア！」

ロックマンとハープ・ノートはバリアを張ったがバリアごと凍ってきた。

「くっ、バトルカード タバフレイム！」

しかし溶けない。逆に凍っていくスピードは速くなっている。ついにロックマン達の足が凍った

「トドメだ！」

クリスタルが言った。

「バトルカード！インビジブル！」

ロツクマンは消えてかわしたがハープ・ノートが氷ずけになった。

「！ミソラちゃん…！」

「あっその氷はとけないよ。いつまでもね…でももし僕らを倒したら溶けるかも…けどもう10分したら死ぬんだけど…」

ブレアデスが無表情で言った。

「そんな…ミソラちゃん…：僕は君達を10分以内にたおす！そしてミソラちゃんを助ける！」

「やれるもんならやってみな！」

クリスタルが言った

「僕はお前達を許さない！」

スバルは怒りで周りが見えていない

そしてその時ノイズがロツクマンを包んだ。そして…

「ファイナライズ レッドジョーカー…！」

赤のボディをしたロツクマンが現れた

## オーロラ兄弟（後書き）

次回スバルはミソラを救えるのか〜!?

評価、感想お願いしますね〜  
では

## キレたスバル（前書き）

スバル前半、性格違う…

けど、こういうのもあり…？

短いです

ではごっごぞー！

## キレたスバル

「もう一発！ゼツタイレイトウ！！」

「レッドガイアイレイザー！！」

レッドガイアイレイザーがゼツタイレイトウをかき消した

「何?!」

「それが必殺技？笑わさないでよ…」

「スバル？お前大丈夫か!？」

「……………」

スバルはもう目が尋常でなかった。

「貴様！ネオシャーベツト！」

クリスタルが氷を放つ。

「アイスブレード！」

プレアデスが氷の剣を持ちロックマンに切りかかる。

「ファイナライズ ブラックエース!!」

ロックマンは素早い動きで2人の攻撃をかわした。

「ブラックエンド・ギャラクシー!!」

「グワーー!!まさか俺らが負けるなんて」

「どうだ…一分も経ってないぞ…?」

「貴様！覚えておけ！我々の仲間がまた地球に試練を与えに来るぞ！」

そう言ってクリスタルとプレアデスは消えた。

「あれ？僕は何を…?」

スバルは我に返った

「お前、ミソラを凍らされてキレて暴走してたぜ!」「そう言えば

ミソラちゃんは…!？」

「大丈夫みたいだぜ…」

ウォーロックが言った後、氷が割れだし、ミソラが出てきた。

「ミソラちゃん…！」

スバルが駆け寄った。

「スバル君…助けてくれてありがとう…」

そこまで言ってミソラは倒れた。

「ミソラちゃん!？」

「氣い失ってるだけだぜ…大丈夫だ」

「僕が頼りないばかりに…」

「氣にすんなよ! ミッションはクリアしただろう?」

「!みんな!」

そこにはツカサ達がいた。

「流石ロックマン! 楽勝だな!」

たかひろさんが言った。

「いえ、みんなの協力があったから…」

スバルは恥ずかしかった。

「スバル君らしいね…」

ツカサが言った。

「ところでサテラポリスに戻らない?」

勇輝さんが言った。

「そうだな!」

ペルセウスが同意して皆はウェーブライナーでサテラポリスに戻った。

その車内でエリーは思った。

(スバル君カッコいいネ。ミソラに隙あればいただくネ)

もちろん誰もエリーがそんな事考えていたとは知るはずもなかった。

穏やかな時間・新たな敵

WAXA

交流会とスター・ヒーローズのメンバーがWAXAに戻ってきた。

「……………ミッション遂行しました！」「……………」

フォボスに皆が言った。

「ご苦労だった」

フォボスは満足そうだ。

「ナイスレジエンド！！」

シンが言った。

「ところでスバル、なんでミソラをお姫様抱っこしてるんだ？」

シドウがニヤリとして聞いた。

「えっ…それは、…」

スバルはミソラが凍らされた事を話した。

「なるほど…やはり侮れないな…」

フォボスが真剣に言った。

「確かに…まだ調べなければなりませんね…」  
「バルジが言った。」

「ハハハ、どんなヤローでもぶっ倒してやるぜ!」  
ウォーロックが言った。

「心強いな…でもさスバル、別に氣い失ってるからってお姫様抱っこじゃなくてもいいよな?」

またシドウがニヤリとして聞いた。

「えっ…まあそれは…(一回やってみたかったなんて言えない…)」

「皆さん、データによると、スバルは一回やってみたかったらしいですよ」

サーチマンが言った。

「なっなんでわかったの?」

スバルは焦った。

「スバル、今の嘘だが…?」

サーチマンは笑った。

「……………」

スバルは凍りついた。

「やるねースバル。お前も年頃だな!」

「…流石俺らのヒーロー! 憧れるぜ!」

交流会のメンバーが声を揃えた。

「ミソラちゃん羨ましいわ!」

プライドも言った。

ツカサ達も笑っている。

その中で一人違う事を言った。

「私もシドウにして欲しいわ…」

そう、クインティアだ。

皆は2人の方を見たが、シドウとクインティアは目をあわせて顔を赤らめてしまった。

(姉ちゃん…大胆だぜ…)

ジャックは思った。しかし、

「あれ今ミソラちゃん…目開けなかった?」

ツカサが言った。

「えっ…？まさかね」

スバルは気にしなかった。

「気のせいかな…」

ツカサももう気にしなかった。

（危ないよツカサ君…せっかくなんだしもうチョット甘えてもいいよね…）

「じゃあ皆、今日のご苦労、明日はスター・ヒーローズは休みにしてやろう」

フォボスが言った。

「えっ…でも…」

スバルは言ったが

「ジャック達も俺らもいるし大丈夫だ。もしもの時は連絡する！」  
シドウが言った。

「はい。わかりました。ありがとうございます。」

「では今日はスター・ヒーローズは解散だ。」

スター・ヒーローズのメンバーは自宅に帰った。

「さて、キングダム・ナイツ、それからそれから俺らは明日、今日強力な電波が観測されたドリームアイランドに向かう。おそらく、敵がいるはずだから…」

シドウが言った。

「俺達はどうするんだ？」

交流会のメンバーが聞いた。

「一応ここで待機だ。」

「了解！」

ストリームが答えた。

「明日はロックマン達がいなくてもこのメンバーなら大丈夫だ…それにいつもロックマンに頼る訳にはいかなからな…！では明日8時にここに集合！いいな？！」

「…了解！」

一方スバルとミソラは家に帰っていた。

「ミソラちゃん大丈夫なの？」

「ミソラは意識を取り戻した。（正確にはさっきから戻っていたが…）」

「うん！大丈夫だよ！」

「ミソラは元気だ。」

「ごめん…僕が頼りないばかりに…」

「いいよ気にしなくて！」

「でもさ…」

「…んじゃさ明日デートしよっ…」

「えっ…？」

スバルはデートと言う単語に反応した。

「いや…?」

ミソラは上目づかいをした。

「(断れねー) いいよお詫びに…」

「やった〜! じゃあ8時からヤシブタウン行こうよ!」

「いいよ」

「寝坊厳禁だぞ〜?」

「わかってるよ」

「何なら私が起こそうか?」

スバルはやな予感を感じた。

「いいよ」

(チエ…残念…)

そう思った。

「2人ともご飯よ〜」

あかねが呼んだ。

「「ハイ」」

2人は下に向かった。

「おい、マーキュリー、貴様の部下がしくじったようだな?」  
ガイザー・エッジワースが言った。

「申し訳ありません！しかし今度は…！」  
「今回はマーズ、貴様らに任そう。」  
「ありがとうございます。」  
マーズと呼ばれた電波体は深々と頭を下げた。  
「よいか！？地球抹殺の試練だ！あの御方のため失敗は許されんぞ  
！」  
「はい！」

## ノイズウエーブ

「ブライよ。」  
ブライはノイズウエーブを歩いていた。  
「なんだ、フォルテ？」  
「貴様の宿敵はどんな奴だ？」  
「絆を大事にする奴だ。」  
「昔もそんな奴らがいたな…名前は？」  
「ロックマン。」  
その瞬間フォルテの目が変わった。  
「ロックマン?! フハハ！面白い！」  
「どうした…フォルテ？」  
「フン…気にするな…まあお前と似たようなもんだ。どうだ？明日

にでもロツクマンを…」

「フン…いいだろう」

そう言うのとブライはウェーブアウトした。

「いいよ」

「寝坊厳禁だぞ〜？」

「わかってるよ」

「何なら私が起こそうか？」

スバルはやな予感を感じた。

「いいよ」

(チエ…残念…)

そう思った。

「2人ともご飯よ〜」

あかねが呼んだ。

「「ハイ」」

2人は下に向かった。

「おい、マーキュリー、貴様の部下がしくじったようだな？」

ガイザー・エッジワースが言った。

「申し訳ありません！しかし今度は…！」

「今回はマーズ、貴様らに任そう。」

「ありがとうございます。」

マーズと呼ばれた電波体は深々と頭を下げた。

「よいか！？地球抹殺の試練だ！あの御方のため失敗は許されんぞ！」

「はい！」

ノイズウェーブ

「ブライよ。」

ブライはノイズウェーブを歩いていた。

「なんだ、フォルテ？」

「貴様の宿敵はどんな奴だ？」

「絆を大事にする奴だ。」

「昔もそんな奴らがいたな…名前は？」

「ロックマン。」

その瞬間フォルテの目が変わった。

「ロックマン?!フハハ!面白い！」

「どうした…フォルテ？」

「フン…気にするな…まあお前と似たようなもんだ。どうだ？明日にでもロックマンを…」

「フン…いいだろう」

そう言うとブライはウェーブアウトした。

**穏やかな時間・新たな敵（後書き）**

今度のデートで何かして欲しいかリクエストします

ドシドシリクエストして下さい。

また行間などのアドバイスもお願いします

評価、感想もお願いします

## デート（前書き）

更新遅れすいません

ー恋デートです

こつこつ場面初めてなんでイマイチです（泣）

ではおひげ

## デート

「なんで…?」

外は快晴だが、スバルの心はブルーだ。なぜならミソラがスバルに抱きついていて。昨日は別の布団で寝たはずだ。

「ミソラちゃん!!」

スバルは思いつきり叫んだ。

「ふえ?オハヨースバル君!」

「今日デートじゃないの?」

「そうだね!!忘れてた。」

ミソラはまだ少し寝ぼけてた。

「じゃあ着替えるね!!」

「うん」

「スバル君と一緒に!」

「ちよつとミソラちゃん?!」

「エへへ、冗談だよ!」

ミソラは意地悪そうな笑みを浮かべた。

「じゃあ行こ?」

「うん」

「あらあら、デートかしら？」  
あかねが意地悪そうに聞いてきた。  
「違うよ！遊びに行くだけ！」  
スバルは反抗した。  
「それをデートって言うんじゃない？」  
「行って来るね……」  
（スバルもまだまだ子どもね）  
あかねは笑った。

「ん、着いた〜！」  
ミソラがウェーブライナーから降り伸びをした。  
「どこ行く？」  
「映画みたいなの」  
「じゃあ映画館行こうか？」  
「うん！」

「スバル君、これ見ない？」

ミソラはあるポスターを指差した。

「えっ…ゴースト・クライシス パート2…？」

内容はゴースト・クライシスを更に怖くした物らしい。

それを見た時スバルは真っ青になった。

「どうしたの？スバル君？顔色悪いよ？」

「うっん大丈夫だよ。」

スバルは見たくないのを悟らないように振る舞った。

（ミソラちゃんが見たいって言うてるからね…所詮映画だ。昨日のクリスタル達と比べたら、お化けなんて…第一、お化けなんていいしね…）

そんな事考えながら2人はチケットを買い、館内に入った。

周りにはリアルなお化けが映っていた…

「きゃ〜！スバル君！怖いけど、面白いね！」

ミソラははしゃいでいる。

「……………」

「スバル君？」

「……………お化けなんていない…お化けなんて…」

「まさか怖いんだな〜スバル君」

ニヤニヤしながらミソラが聞いた。

「！そつ、そんな事ナイよ…」

スバルの動揺はバレバレだ。

「ウフフ。スバル君可愛いね」

「ありがとう…でもさ…」

スバルは何か言いかけたが止めた。

「何？」

「…いや、何でもナイよ。それよりさ終わったし、早くここ出ない？」

「やっぱり怖いんだね。」

「……………」

2人は映画館を出た。

「スバル君！あの店行こうよ！」  
ミソラの指差した先にはケーキなどが売ってる店があった。  
「いいよ」

スバルは腹が減っていたのでOKした。

「やった〜!」  
そういうとミソラはスバルを引つ張り走って行った。

「うわー美味しそ〜」

メニューを見るミソラの目はキラキラしている。

「じゃあ僕はショートケーキで。」

スバルはあっさり決めたがミソラは違う。

「私はコレとコレとコレ。けど…やっぱりコレも! あっ…これも美味しそ〜だしコレもお願いします」

「……………」

ミソラの注目の多さに唖然とするスバル。

そして数分後、商品が運ばれてきた。

そして机の上は9割がミソラの注目だ。

「じゃあ食べよ?」

ミソラはそう言って食べ始めた。スバルはミソラの食べる速さにまたも唖然していた。

「ご馳走さま」

スバルは一品だけだからすぐ食べ終わった。

「スバル君速いよ〜」

「品数少ないからね。」

「沢山食べないと大きくなれないよ？それに強くなれないよ？」

「何っ？オイ、スバル食べ！！」

ウォーロックが出て来て言ったが、

「あんだこっち来なさい！」

ハーブがウォーロックを引って行った。

「…そう言うならもう一品頼むよ」

スバルは注文しようとしたが、

「スバル君！注文いらさないよ！」

「えっ…？でも食べるって…」

「私が食べさせてあげる」

「はい？」

「はい、アーン」

ミソラがスバルの口にケーキ一切れを持っていった。

「ちよっと…?!ミソラちゃん？」

「何？」

「コレはちよつと恥ずかしいよ…」

スバルの顔は赤い。

「いいじゃん！付き合ってるんだし」

「…そう言う問題じゃ…」

「スバル君…もしかして私の事嫌い…？」

「嫌じゃナイけど…」

「じゃあはい！」

「…わかったよ…」

しづしづスバル了承した。

「はい！アーン」

パク

スバルの顔は真っ赤だ

「お味は？」

「美味しかった…」

(うわ…めっちゃめっちゃ恥ずかしいよ…しかもアーンって…)しかしミソラはスバルがさっき食べたスプーンで食べていた。

「?!ミソラちゃん!？」

スバルはビックリした。

「どうしたの？スバル君？」

「そ、そ、それさっき僕に食べさせてくれたスプーンだよね？」

「それがどうかした？」

ミソラはなんともない顔をしている。

「それ間接キス…」スバルはまた赤くなった。

「あっ本当だね」

ミソラは少し顔が赤くなったぐらいだ。「なっなんで平気なの？」

「私たち付き合ってるんだしこれぐらい普通じゃナイ？」

「そうなのかな…」

「いいじゃん！本当のキスしたし」

「！あれはミソラちゃんが…」

「フフ、スバル君もまだまだ子どもだね」

「うっ…」

何も言えないスバルだった。

それから2人は買い物などを楽しみ、夕方になったため帰る事にした。

そして2人はウェーブライナーで帰る事にした。

そして今ウェーブライナーを待っていた。

「ねえ、スバル君」

ミソラが話掛けた

「何？」

「映画終わった時何か言いかけてたよね？」

「！覚えてたの？あれは…なんでもナイよ…」

「嘘だね！！スバル君…隠し事はなしだよ」

ミソラは少し怒っていた。

それをスバルは悟った。

「わかったよ…あの時ミソラちゃん、僕の事可愛いって言うてくれたよね？」

「うん。」

「けど、僕は君の方が何倍も可愛いよって思ったんだ。」「えっ…？」

「君には誰も勝てないよ…」

「もう…スバル君…ありがとう！」

ミソラは顔を赤くしスバルに抱きついた。

「ちよつと恥ずかしいよ」

スバルはまんざらではない顔をした。

そしてウェーブライナーが来たから2人は乗って帰った。

デート（後書き）

どうでしたか？

感想、評価待ってます

新たな敵、火星団（前書き）

本日二回目！

## 新たな敵、火星団

ミソラとスバルがデートしていた同時刻  
ドリームアイランド

チーム、キングダム・ナイツとエース・リーダーズは敵の襲撃を予想し備えていた。

「シン、敵の反応は？」

フォボスが通信でシンに聞いた。

「この付近に三体の電波体がいる！一番奥だ！」

シンはサテラポリスで指揮を執っている。

「わかった。」

フォボスは通信を切った。

「ではみんな、いくぞ！」

「……………はい！」……………」

「……………トランスコード！」……………」

「フォボス大佐？その姿は？」

クインティアが聞いた。

「我が名はカーネル・ブレイド。」

黒っぽい重厚感あるボディーの姿だ。

「そしてウィザードのカーネルだ。」

「カーネル！」

バルジのウィザードのサーチマンが言った。

「久しいな…サーチマン、そしてナイトマン。」

「ああ。」

こちらにも重厚感あるボディーでデカイナイトのようなウィザードがいた。

「コイツは誰のウィザードだ？」

ジャックが聞いた。

「私ですわ。」

「プライド？あなたその姿は？」

クインティアは驚いた。そこにはナイトマンを細くしたような電波人間がいた。

「私はナイト・キングダム。そしてウィザースドのナイトマンですわ！」

「私とカーネルとサーチマン、そしてたかひろさんのブルース、ストリームのトマホークマンは共に200年前からいるウィザードだ。」

「ナイトマンが言った。」

「期待してるぞ！みんな！」

アシッド・エースが言った。

「ケケ、人間つてのはよえーな！アーク？」

全体的に赤くハリネズミのような電波体があった。

「そうだな、アルタイル。やりがないいな…」

赤いトラのような電波体が同意した。

「もう地球抹殺しちまうか！？ヘル？」

サソリのような電波体があった。3

体のウィザードがしゃべりながらあちこちを燃やしている。

あちこち火事状態だ。

「オイ、なんかくんどアーク。」

「エアロダイブ！！」

黒い電波体が飛び込んで来た。

「あつぶな！なんだテメー？」

「テメーらの間違いじゃねえか？」

「んだと？」

「ゴツトレイン！」

「ストーンレイン！」

水と岩の雨が降り注ぐ。

しかし、三体は苦もなくかわした。

「何者だ？」

アークが聞いた。

「我らチーム、キング・ダムナイツ！！貴様らの地球抹殺を止めるために来た！」

「三人だけで俺達とやる気か！？」

ヘルが言った。

「いや、6人だぜ！」

「なんだと？」

その時、

「スクリーンディバイド！」

「スコープガン！」

「ロックオンソード！」

「……ぐっ……」

三体は少し攻撃をくらった。

「俺達はエースリーダーズだぜ！」

アシッド・エースが言った。

「ふん、人数が倍いても宇宙最強の我ら火星団の相手ではないな……」

アークが言った。

「貴様ら水星団じゃないのか……」

カーネル・ブレイドが言った。

「へっ、アンナ奴らと一緒にすんなよ！俺達は水星団ともまだ攻撃してない木星団とも違う！エッジワース様とあの御方から地球抹殺チームでは最強だと言われたからな！」

アークが言った。

「ほう、その力見して貰おう。そして地球抹殺を止める！」

カーネル・ブレイドが言った。

「いくぞ！」

「……ウエーブバトル ライド・オン！！」「……」

新たな敵、火星団（後書き）

次回バトルです！

## V S 火星団

「へっ、俺の相手は誰だ？」

アルタイル・バーニングが言った。

「俺達だ！」

カーネル・ブレイドとアシッド・エースだ。

「へっ殺してやるぜ！フレイムメテオ！」

空から炎のメテオが降り注ぐ。

「カーネルキャノン！」

アシッドブラスター ワイドウエーブ！」

メテオを2人は無難に全て撃ち落とした

「何？全て…撃ち落としただと！？」

「トドメだ……」

「スクリーンディバイド！」ズバツ

カーネル・ブレイドがサーベルで切り裂く。

「グハツ……！」

「オメガレーザー！」

「グワァー！！貴様らよくも…こうなれば俺達の必殺技だ！」

「さて…僕の相手は？」

アーク・フレイムが言った。

「私達よ!!」

「女だからって手加減しないよ…」

「余裕かましてられるのも今のうちよ!!」

プライドが言った。

「今言った事後悔しても知らないよ…」アーク・フレイムは無表情だ。

「行くわよ…ストーンレイン!」

「ゴツトレイン!」

岩と水の雨が同時に降り注ぐ。同時だったためアーク・フレイムは避けられなかった。

「グハツ…やるね…それじゃあこちらも行くとよ!ブラストハリケーン!」

アーク・フレイムが炎の竜巻を身に纏った。

「甘いハイドロドラゴン!」  
ジュツ

「何?」

ハイドロドラゴンが炎を消した。そのためアーク・フレイムは無防備な状態だ

「今よ!!キングダムクラッシュャー!!」

ナイト・キングダム腕から巨大な鉄球が放たれた。  
「グワー!!!」

見事にクリーンヒットした。

「トドメよ…ライトオブセイント!」

クイーン・ヴァルゴの周りにビームを纏いそのビームを自分の周りで回転させた。そして全てヒットした。

「やったかしら?」

「まだみたいね…」

アーク・フレイムはフラフラだ

「クッ!こうなれば俺達の必殺技だ…」

「俺様の相手はドイツだ？」

ヘル・ヒートが不気味な声で言った。

「俺達が相手だ！！」

バルジ・サーチとジャック・コーヴァスだ。

「へっ殺してやるぜ！」

ヘル・ヒートが不気味に笑った。

「やられるのはそっちだ！スコープガン！  
バン！」

「痛くもかゆくもないぜ！」

ヒットしたがあまりダメージがない。

「何？」

「俺に任せろ、フェザーシックル！」

ジャック・コーヴァスが羽で切り裂く。が、ヘル・ヒートは素早い動きでかわし、かすった程度だ。

「へっ弱いな！」

ヘル・ヒートは余裕の表情だ。

「お前、甘いぜ！」

ジャック・コーヴァスが笑った。

「は？かすった程度で何を…グッ…なんだ？急にダメージが…」

「フェザーシックルはヒットした相手の体力を徐々に減らす技さ！」

「クソ！油断した！」

「お前、油断しすぎだな…それでも最強のチームの一員か？」

バルジ・サーチがヘル・ヒートの後頭部に銃口を当てながら言った。

「何？いつの間に？」

「貴様がジャックと喋ってる間にだ…残念だったな…G A ムゲン  
バルカン！」

ズドド

至近距離で全弾ヒットした。

「グワァー！！！」

ヘル・ヒートは相当なダメージだ。

「やったぜ！」

2人は喜んだ。

「こうなれば俺達の必殺技だ！」

三体は同じ場所に集まりこう叫んだ。

「フルシンクロ！！トライデント・ブラスト！！！」

そして光の中から一体の電波体が現れた。

## VS火星団（後書き）

次回もバトルです！

そしてあの方々や懐かしい技が登場予定です！

感想、評価お願いします。

## 救世主（前書き）

あの方々再び登場です！

それではどござー！

## 救世主

「フルシンクロ？シン、どんな現象だ？」

カーネル・ブレイドがシンに通信を入れた。

「えっと…！現象は分からないけど、凄い電波反応だ！」

「わかった。」

カーネル・ブレイドは通信を切った。

「危険なようだな…」

アシッド・エースが言った。

「皆さん！わかった。検索によると、フルシンクロは同じ周波数の電波体や電波人間が融合することです！そして、凄まじい力を手に入れることができます！」

バルジ・サーチが言った。

「そのとおりだ！」

光の中から現れた一体の電波体が言った。

「俺達は融合しトライデント・ブラストになった！これがあの御方から最強と言われた姿だ！」

周りには炎のオーラを張り、体はあちこちから炎が出ている。そして、背中には翼、体はなかなかデカい。そして、炎の紋章があり、腰には剣が一本さやに差してある。

「へっ、ザコが集まっても意味ないぜ！グレイブクロー！」

ジャック・コーヴァスから放たれた紫色の炎がトライデント・ブラストに向かっていった。

「フン！きかぬわ！！」

トライデント・ブラストは炎を吸収した。

「何？俺の炎が…」

「本当の炎を見てやる！バレッティーゼフレア！！」

ジャック・コーヴァスにロックオンサークルのようなものが重なっ

た。

「何？動けねー…」

「くらえ…」

その時にジャック・コーヴアスの体に重なったロックオンサークルが爆発した。そして、ジャック・コーヴアスも爆発をくらった。

「グワァー！！」

「ジャック！！」

ジャック・コーヴアスは倒れた。

「ちくしょう！動けねー…」

「よくもジャックを…」

クインティアは無表情だが怒っているのがわかる。

「みんな！全員でやるぞ！」

アシッド・エースが言った。

「黙れ！皆殺しだ！」

トライデント・ブラストは言った。そして剣を取り出した。

「我が剣、炎天下の力見してやる！炎天下奥義：爆撃乱舞！！」

トライデント・ブラストが剣を振っただけで爆発が起こった。それを利用してトライデント・ブラストは剣を振り回し爆発を起こしまくった。

「ヤバい！避ける！」

カーネル・ブレイドとバルジ・サーチが叫んだ。

しかし、ジャック・コーヴアス、クイン・ヴァルゴ、ナイト・キングダムは逃げ遅れた。

「クインティアー！！ジャック！プライド！」

アシッド・エースは叫んだ。

もうトライデント・ブラストはもう目の前だ。

誰もがもう無理だと思った。

「デルタレイエッジ！！」

「トマホークスイング！！」

「ペルセウスファイナルスラッシュユー!!」

すべての技がトライデント・ブラストにヒットした。

「グワ!何者だ?」

「ブルース・ソルジャー!見参!」

「トマホーク・パワード!見参!」

「サイバー・ペルセウス!見参!」

「「我らチーム、シューティングスター交流会!!!」」

「クイーン・ヴァルゴ、大丈夫か?」

「ブルース・ソルジャー…助かったわ…」

「アシッド・エース…彼女は体を張って守るべきじゃねーのか?」

ブルース・ソルジャーが言った。

「…すまない…」

アシッド・エースは本当に反省しているようだ。

「ナイト・キングダム、けがは?」

サイバー・ペルセウスが聞いた。

「おかげさまで大丈夫ですわ…ありがとうございます…」

プライドが言った。

「どういたしまして。」

「おい、ジャック!大丈夫かよ!?!」

トマホーク・パワードがジャック・コーヴァスを叩いた。

「いてーな!怪我人には優しくしやがれ!」

「助けてやったんだから感謝しやがれ!」

「…ありがとうな…」

「素直でよろしい!」

「謝るんじゃないかったぜ…」

「貴様らよくもー!!」

トライデント・ブラストが立ち上がった。

「あれ？まだ生きてたの？」

トマホーク・パワーが言った。

「！貴様ら調子に乗るな！くらえ爆撃乱舞!!」

トライデント・ブラストは激怒して暴走した。

「仕方ない…俺達の合体技だ！出来るな？」

ブルースがトマホーク、カーネル、アシッド、サーチマン、ペルセウス（ウィザード軍団）に尋ねた。

「……俺達は良いぜ!」

「まで」。俺達人間は知らないけど？」

アシッド・エースが尋ねた。

「大丈夫だ！ウィザード達が体を勝手に動かしてくれる!」  
ペルセウスが言った。

「わかった!」

「よし！行くぞ！ブルース・ソルジャー!」

カーネル・ブレイドが言った。

「わかってるぜ!」

そして、2人は剣を構えた。

「リーダーズブレイド!!」

2人は反対側から目には見えない速さで切りつけた。

「グワッ!!」

トライデント・ブラストは怯んだ。

「んじゃ俺達も!」サイバー・ペルセウスが言った。

「やるぜ!アシッド・エース!」

「わかった!」

そして2人は翼を広げた。

「Wウイングブレード!!」

そして2人は翼でクロスにトライデント・ブラストを切り裂いた。

「トドメだ!」

バルジ・サーチとアシッド・エースが言った。

「サテライトレーザー!」

バルジ・サーチのサテライトレイとアシッド・エースのオメガレーザーのWアタックだ。

ズド

レーザーがトライデント・ブラストを貫いた。そして倒れた。

「まさか…この姿で負けるとは…まあいい…俺とオーロラ達のバトルでテメーらの底が見えたぜ…! ガイザー様と…デュ…あの御方が更なる地球抹殺の試練を…グワー…!」

そこまで言つてトライデント・ブラストは消滅した。

「…消滅したか…」

アシッド・エースが呟いた。

「あいつとオーロラ達は小手調べ程度だったのか…」  
バルジ・サーチが言った。

「まあどちらにせよ試練を乗り越えていけば地球は救えるじゃないか!」

ペルセウスが言った。

「確かにそうだな!」

トマホークマンが言った。

「そうだな…とりあえず今日は皆、ご苦労だった。そして、これからもよろしくな…」

「…もちろん!」

皆は声を揃えた。そして、皆はWAXAに帰った。

コダマタウン上空のウェーブロード

「…ここに奴がいるのか…」

フォルテが言った。

「ああ…」

ソロは答えた。

「俺が奴をおびき出していいか？少し戦いたい…」

フォルテが聞いた。

「大丈夫だろうな？ここには電波変換出来る奴らもいるぞ…？」

「俺を並のウイザードと違う。俺は電腦の破壊神だ」

「そうだったな…任したぞ。」

ソロが言った後、フォルテは消えた…

**救世主（後書き）**

次回はバトルはナイです

感想、評価待ってます。お願いします。

## 【第2章・戦う定め】ブラザー

ミソラとスバルはコダマタウンに帰った。そして、家に帰ろうとしたが、スバルの家の前には委員長達がいた。

「相変わらず仲がいいことね!」

ルナは少し怒ったような声で言った。

「まあねー」

ミソラは上機嫌だ。

「どうしたの?家の前で待ち伏せなんて。」

スバルが聞いた。

「テメー忘れてないか?」

ゴン太が言った。

「君達の新たな敵についてですよ!」

キザマロも怒ったような声で言った。

「実はね…今地球には試練を与えられているの…」

ミソラは静かに言った。

「…えっ!?!」

委員長軍団は声を揃えた。

「そう、地球抹殺という名の試練なんだ…」

スバルは落ち着いて言った。

「それで私達はシドウさん達を中心とした試練をクリアするチームのメンバーなのよ…」

「おい、スバル。俺は遊撃隊だったのになんでメンバーじゃねーんだ?」

ゴン太が聞いた。

「えっと…それは分からないよ…」

スバルは答えたが…

「スバル、嘘をつくなよ。テメーもコイツがメンバーじゃねー理由

「ぐらいわかるだろ？」

「ウォーロックが言った。」

「ウォーロック！だけど……」

「スバルはわかっていた。メンバーにゴン太が入ってない理由を。」

「スバル、わかっているなら言ってくれ。」

「ゴン太が頼んだ。」

「わかったよ……シドウさんは『メンバーは世界中でトップクラスの實力を持っている電波変換できる奴らばかりだ。』と言った。だからメンバーに入っていないゴン太は……その……戦力にならないとシドウさん達が判断したんだと思う……」

「スバルは言いたくなかった。ゴン太が傷付くからと思ったからだ。」

「やっぱりそうだったんだ。」

「えっ……？」

「ゴン太の言った事にスバルはびっくりした。」

「俺が弱いなんて百も承知だぜ。けどなスバル、俺達ブラザーなんだからもつと俺達の事頼ってくれよな！」

「そうよ！！あなた達だけ抜け駆けして……」 「ゴン太君の言うとうりです！」

「委員長軍団が言った。確かにそのとうりだ。」

「みんな……ごめん。」

「分かればいいのよ！けど、頼むわよ！！地球の事、それから私達の事！」

「うん。君達は僕達を守るよ。」

「スバルは力強く答えた。」

その瞬間、スバルのハンターに電話がかかってきた。

「！ツカサ君、どうしたの！？」

「ツカサは傷だらけだった。」

「展望台に早く来て……ウィザードが暴れて……グフツ」  
電話は切れた。

「どうしたの？スバル君？」

「ウィザードが暴れてるらしい！ツカサ君が応戦してたけどボロボロだったよ…」

「ジェニミを倒すぐらいのウィザードなんているのか…へっ、暴れてやるぜ！」

ウォーロックがニヤリと笑って言った。

「また敵？」

ルナが心配そうに聞いた。

「うん。けど、ウィザードだから」

スバルは大して心配してない。

「なら良いけど…頑張ってるね…」

「うん！ミソラちゃん、行くよ？」

「オツケイ！」

「トランス・コードシューティングスターロックマン！」

「トランス・コードハーブ・ノート！」

2人は青とピンクの姿となり展望台の方向に向かった。

「くっ…ロケットナックル！」

ジェニミ・スパークBがロケットナックルをフォルテに放つ。しかし、フォルテは容易く避ける。

「エレキソード！」

ジエニミ・スパークWが切りかかる。

「弱い…ダークソード！」

フォルテが紫色のソードで切り返した。

スバツ と切り裂く音がした。

「グワツ！」

「ツカサ、あれしかない！」

「わかったよ！」

そしてジエニミ・スパークは左右の腕を構えた。

「『ジエニミサンダー！』」

電撃がフォルテに襲いかかった。

「きかん…ダークネスオーバーロード！」

## 展望台

展望台ではジエニミ・スパークとフォルテの闘いが繰り広げられていた。

「くっ…ロケットナックル！」

ジエニミ・スパークBがロケットナックルをフォルテに放つ。しか

し、フォルテは容易く避ける。

「エレキソード！」

ジェニミ・スパークWが切りかかる。

「弱い…ダークソード！」

フォルテが紫色のソードで切り返した。

スパツ と切り裂く音がした。

「グワツ！」

「ツカサ、あれしかない！」

「わかったよ！」

そしてジェニミ・スパークは左右の腕を構えた。

「ジェニミサンダー！！！」

電撃がフォルテに襲いかかった。

「きかん…ダークネスオーバード！」

巨大なレーザーがジェニミ・スパークに向かって行く。

そしてジェニミサンダーはかき消された。

「何?!」

避ける事は厳しい距離だ。

(もう無理だ…)

ジェニミ・スパークはそう思って目をつぶった。

しかしジェニミ・スパークの前に青とピンクの閃光が現れた。

「バトルカード オーラ！」

2つの閃光は二重のオーラを張り、ジェニミ・スパークを守った。そして、ジェニミ・スパークは目を開いた。

「ロックマン、ハープ・ノート!」

そこにはロックマンとハープ・ノートが立っていた。

「ツカサ君、遅れてごめん。」

「いいよ。ヒーローは遅れて来るものだよ。」

ツカサは笑いながら言った。

「やっと来たか…ロックマン!」

マントを付け、黒が基調で所々黄色が入って紫の縦ラインが入ったウィザードが言った。

「お前は?」

ロックマンが言った。

「俺の名は…フォルテ!」

【第2章・戦つ定め】フニザー（後書き）

感想、評価待ってます  
お願いします

## ロックマンVS破壊神(前書き)

「何故フォルテが？」

つていうメッセージが来たんですが、フォルテは『チーム結成』と『ブラザー』にブライと登場してます…少しだけですが…

わかりにくかったみたいですね…  
すみません(泣)

やはりまだまだですねー(泣)

そんな作者の小説ですが、これからも宜しく願います！

## ロックマンVS破壊神

「フォルテ？」

「そう：俺は200年前から存在していた。そして、電腦の破壊神と呼ばれていた。」

フォルテが淡々と話す。

「何故ツカサ君に…」

スバルは少し怒りを込めて聞いた。

「それは貴様、現代のロックマンと戦うためだ！」

「現代…？」

「そう：200年前にもロックマンがいた。俺は奴の絆の力に負けた：しかし、俺は絆や人間が憎い：そして今、新たなロックマンの力を見してもらったためだ！」

フォルテはロックマンに向かって言う

「何故絆や人間が憎いの？」

ハープ・ノートが聞いた。

「俺は作った人間に見捨てられたのさ：そう：俺は主人に裏切られたのさ。それ以来、俺は1人で生きてきた…」

「そんな過去が…」

ハープ・ノートが呟いた。

「可哀想だね：君。」

スバルは同情した。

「貴様に何が分かると言うんだ！」

「分かるさ。僕も孤独だったよ：けど絆のおかげで今の僕がいるんだ！絆の力にきずいた！だから君も…」

スバルは説得するように言った。

「そんな事はいい、今から現代のロックマンの力見してもらおう。」  
フォルテは構えた。

（！コイツ：ただ者じゃなさそうだな：ただのウィザードじゃない

…)

スバルはフォルテの威圧感をビリビリ感じた。

「ミソラちゃん、フォルテとは僕だけでやるよ…」

「えっ…でも…」ミソラは心配そうにした。

「大丈夫だよ」

スバルは力強く答えた。

「…わかったよ…それじゃルナちゃん達といとくね…」

そっとうとミソラはさった。

「さあ…いくぞ！」

フォルテが向かって来る。

「ロックバスター！」

ロックマンはフォルテに打つがフォルテは残存を残し消えた。

「どこだ？」

「スバル、上だ！」

ウォーロックが叫んだがフォルテはもうバスターを構えていた。

「遅い！シューティングバスター！」

ドドド　フォルテがバスターを放つ

「グワッ！」

無数のバスターがロックマンにヒットした。

「スバル、しっかりしろ！」

ウォーロックが言う。

「うん…大丈夫だよ。」

スバルは少しフラフラしてたがダメージはさほどデカくないようだ。

「どうした？現代のロックマンはこんなもんか！？」

フォルテは余裕だ。

「クソッ！舐めやがって！スバル、いくぞ！」

「うん！バトルカード、ソードファイター！」

ロックマンがフォルテに切りかかる。

スバツ            なかなかのスピードだったためフォルテは数回斬られた。

「チイツ！ヘルズローリング！」

2つの輪っかのような物がロックマンに向かって来る。バトルカード、ヘンゲノジュツ！」

ロックマンがヌツキーに変わり、そしてフォルテに切りかかる。「しまった！」

スバツ    フォルテはワイドソードで斬られ怯んだ。

「お返しだよ！バトルカード、マッドバルカン！」

ドドド            バルカンの銃弾がフォルテに全てヒットした。

「グワーツ！」

フォルテは倒れた。

「どうだ！これが絆の力だ！」

「まだやるか？」

スバルとウォーロックは言った。しかし、すぐにフォルテは立ち上がった。

「ククク…ハハハ！やはりロックマン、侮れんな…だが、俺は破壊神だ！」

フォルテはまだ笑っている。

「だからどうした！？」

ウォーロックは聞いた。

「分からないのか…？俺はまだまだ本気じゃないんだ！」

「何っ？」

スバルは驚いた。今のでさえきつかったのに。

「さあ…続きを始めるぞ！ダークソード！」

フォルテが紫色のソードを構えて向かって来る。

「速い！バトルカード、ブレイクサーベル！」

ギンギン ソードがぶつかり合い鈍い音が響く。

「ほう…この速さについてくるとはな…仕方ない、俺の力見してやるう！」

そういうとフォルテは両手のバスターを構えた。

「またあのバスターか？二度目はきかないぜ！」

ウォーロックが言った。

「…くられ！ジエニミサンダー！」

フォルテのバスターから強力な電撃が放たれた。

「何っ?!」「ジエニミサンダー？ツカサ君の技なのに！バトルカードも使ってナイのに…！」

驚きのせいでロックマンは避ける事を忘れていた。

「グワツ！何故ツカサ君の技を…?」

「教えてやる。これはゲットアビリティプログラム。戦った敵の力を手に入れる事が出来る最強の力だ！」フォルテは勝ち誇ったように言った。

「最強の力？それは違う！最強の力は絆だよ！」

スバルはありったけの声で言った。

「まだ言うか…まあいい…これでロックマンにはリベンジできた…」

もう死ね！ダークネスオーバーロード！」

巨大なレーザーがロックマンに向かって行く。

(普通なら避ける訳ない…仕方ナイ！賭けだ！)

ロックマンは体中にノイズを集中させた。「ハハハ！もう諦めたか！？塵となれ！」

ダークネスオーバーロードはロックマンに直撃した。とフォルテは思った。

しかし、違った。

「バトルカード、ハリケーンダンス！」

ビュオオ                   ハリケーンのような風がフォルテを襲った。

「何っ！貴様、避けたと言うのか…？どうやって？しかも、その姿は！？」

「ノイズチェンジ、キグナスノイズだ！」

ロックマンには翼がはえ、頭部のパーツも変化していた。

「さあ、トドメだぜ！」

ウォーロックがニヤリと笑った。

「メテオライトバレッジ！！」

ロックマンは空に舞い上がり、バスターからメテオをフォルテに打った。

バアン

しかし、メテオライトバレッジからフォルテを壁のような物が守った。

「このバリア…まさか！」

フォルテの方を見ると、1人の電波人間がいた。

「久しぶりだな…ロックマン！今日は貴様との決着をつけに来た…」

「ブライ！」

そこには孤高の戦士ブライがいた。

## ロックマンVS破壊神(後書き)

次回、VSフォルテ&amp;mp;ブライです！  
ロックマンに勝機はあるのか？！

では、次回お楽しみに！

絆無き者との戦い 1 (前書き)

短いです…

## 絆無き者との戦い 1

「フォルテもいるのにブライも戦わないといけないのか…」  
ロックマンが一步引く。

「けど…コイツらなんも関係ないんじゃないのか？」

ウォーロックが言った。確かにそうだ。

「それは違うな!!」

フォルテとブライが声を揃えた。

「俺達は貴様、コイツは200年前のロックマンを倒すという目的がある。」

ブライが言った。

「そしてこの間、俺は俺を復活させたコイツのウィザードになった！ロックマンを倒すため！！それは貴様でも構わん！」フォルテが言った。

「全ては貴様、ロックマンを倒すため！！だから手を組んだ！これは絆ではない。」

2人は決して仲間とは思ってないようだ。

「ケツ！けどフォルテとか言うヤローはもう体力半分はないからブライだけやればいいだけだ！」ウォーロックは少し余裕を見せた。

「ハハハ！貴様は何も知らんようだな！俺達は周波数が同じだ！」  
フォルテが不敵に笑いながら言った。

「それがどうした!？」

ウォーロックが聞いた。

「見してやろう！フルシンクロ!!」

紫の閃光の中から1人の電波人間が現れた。

ブライのようだが違う。バイザーがフォルテの頭部パーツに変わり、腕に所々が黄色が入っていた。

「フルシンクロ!？」

ロックマンは驚いていた。

「フルシンク口は周波数が同じウィザードや電波体が融合し、強力な力を手に入れる事が出来る！」

「なんだって?!」

ロックマンは驚きを隠せないようだ。

「そして俺の名はフォルテクロスブライ！」 「スバル、コイツはヤバいぜ…ブライとフォルテの融合なんて…」

流石にウォーロックもびびっている。

「けど…やるしかないよ…」

「行くぞ…ロックマン!!」

絆と孤高の戦いの火蓋がきって落とされた。

## 絆無き者との戦い1（後書き）

感想、評価お願いします。

酷評も構いませんが、どこらへんが駄目か具体的お願いします。

では次回もお楽しみに！

## 絆無き者との戦い2

「くらえ！ロックバスター！」  
ロックマンがバスターを放った。

ヴィイン　電波障壁がフォルテクロスブライを守る。

「そんなものきかん…！ヘルズブライナックル！」

無数の拳が超スピードで放たれた。

「グワッー！！！」

かなりの数がロックマンにヒットした。

「ダークラプラスブレード！」

ブーメランのようにラプラスブレードが飛んで来る。

「バトルカード、バリア！」

ロックマンをバリアが覆った。

「無駄だ！」

バリン　バリアは粉々に粉碎された。そして、ロックマンは無防備になった。

「くらえ！グラウンドブレイクソード！！！」

ドガア　ロックマンに剣と衝撃波が直撃した。

「グハッ！！！」

「オイ！スバル！しっかりしやがれ！」

「う、うん！バトルカード、カウントボム！」

ロックマンはカウントボムを設置した。

「こんな物！」

フォルテクロスブライは剣でカウントボムを破壊した。

「バトルカード、ブレイクサーベル！」

ロックマンはフォルテクロスブライがカウントボムを囷にして距離を詰めていた。

「くらえー！！」

ロックマンはフォルテクロスブライに切りかかった。

ガッ

「何！？」

ウォーロックは驚いた。

「甘かったな…ロックマン。こんな物俺達には効かない！」

フォルテクロスブライはブレイクサーベルを素手で受け止めていた。そしてブレイクサーベルを折った。

「そんな…馬鹿な…」

スバルは驚きを隠せない。

「どうした？諦めたか？絆はそんなものか？」

フォルテクロスブライは勝ち誇ったように笑っている。

「まだ…まだまだ！勝って君達に絆の力を教える！」

ロックマンは立ち直った。

「やれるものならやってみろ！」

ジジジ

ロックマンの周りにノイズが集まる。

「ファイナライズ、レッドジョーカー！！」

赤きロックマンが現れた。

「変身など無駄だ！ブライバースト！」

フォルテクロスブライから衝撃波が放たれた。

「バトルカード、ダッシュアタック！」

ロックマンは凄いスピードで衝撃波を突き抜けた。

「何！？」

ダッシュアタック中は無敵な事をフォルテクロスブライは忘れていた。

そのため少しロックマンの攻撃に当たってしまった。

「チィ、ダークネスオーバーロード！」

フォルテクロスブライから巨大なレーザーが放たれた。

「レッドガイアイレイザー！！！」

赤きレーザーがロックマンから放たれた。

2つのレーザーは激しくぶつかり合う。

「グアー！！！」

「グハッ！！！」

お互い互角なため2つのレーザーは爆発し2人共ダメージを受けた。

「ハアハア…やるな…」

「負ける訳にはいかないからね…」

2人ともダメージの影響で息切れしている。

「それはお互い様だ…そろそろ決着をつけてやる！」

そしてフォルテクロスブライは両手を構えた。すると、腕が獣のような顔に変わった。

「行くぞ…バニシングワールド！！！」

獣の口が開き黒い光線をうってきた。

「まだこんな技を…バトルカード、オーラ！」

しかしオーラは耐えきれずに壊され、追撃を受けた。

「グワッー！！！」

スバルはバニシングワールドをくらい倒れた。

「どうだ、フルシンクロの力は？！俺達の力の前には絆など無力に等しい！」

確かにそうかもしれない…

スバルは不意にそう思ってしまった。

強すぎる…勝てない…

スバルは弱気になっていった。そしてファイナライズが解けた。

「…しまった！ヤバいぜスバル！」

ウォーロックが叫ぶがスバルは立ち上がらない。

「フハハ！変身も解け無様な姿だな！ロックマン！」

フォルテクロスブライは笑った。

本当無様だよ…絆の力も敗れたし、変身も解けた…もう、打つ手はないよ…

スバルはもう諦めかけた…そしてスバルの意識はなくなった…

「ここは…？」

周りは真っ白い空間。スバルはそこで目を覚ました。

「目が覚めた？」

青い人が立っていた。

「君は…？」

スバルは聞いた。

「僕？僕はロックマンエグゼ。」

かつての書きローラーだった。

絆無き者との戦い2 (後書き)

バニシングワールドは漫画でフォルテが使ったたた技です。

感想、評価お願いします！

### 絆無き者との戦い3 (前書き)

キャラについて分からなかったらデータファイルを見て下さい！  
度々更新するんで…

ではございどー！

### 絆無き者との戦い3

「ロックマンエグゼ…？もしかして200年前のロックマン…？」  
スバルは驚いて聞いた。

「うん！」

エグゼは頷いた。

「君も絆を大切にしているの？」

スバルは尋ねる。

「もちろんさ！僕の強さは絆の強ささ！」

エグゼは力強く答えた。

「…けど…僕にはもうその強さがもうないよ…」

スバルの顔が曇る。

「信じ切るんだよ！絆を…みんなを…絆はどんな困難を乗り越えれるんだよ？」

ロックマンが説得する。

「でも、強すぎる…怖い…あなたは怖くなくなつたんですか？」

スバルが泣きそうな顔で聞くとエグゼは笑って答えた。

「みんなはそばにいらなくても、心はそばにいたんだ。絆はどんなに離れていても繋がっている。みんなで闘ってるんだよ！」

すると、スバルの顔が元に戻った。

「心はそばに…そうだね！ありがとう、エグゼ！まだ戦える！絆の力で戦うよ！」

スバルの瞳に輝きが戻った。

「その言葉、待っていたよ…おっと、もう余り時間がみたいだね…」  
ロックマンは微笑み言った。

「えっ？もう？」

「僕のオペレーターが僕を君の脳内にアクセスさせて通信してるだけだからね…脳内には長時間いられない…」

「そうなんだ：短い時間だけど、勇気もらったよ。」  
スバルは残念そうに言った。するとエグゼが言った。

「ねえ、フルシンクロしない？」

「えっ…？どうやって？」スバルは戸惑った。

「僕にはオペレーターがいる。オペレーターに頼んで君の元へ今から僕が行くよ！僕達なら周波数も合うはずさ！だから僕が行くまで時間を稼いで！」

エグゼは少し焦りながら言った。多分、時間がないから、そしてフォルテの強さを分かっているからだ。とスバルは思った。

「…わかった。君とフルシンクロすればブライに勝てるハズだしね。」

「待つてやるぜ。」

スバルとウォーロックはフルシンクロをオーケーした。

「じゃあ待つてて。」

そしてエグゼは消えた。

そこでスバルの意識は戻った。

「ねえ、星斗君…」

エグゼが青いバンドナをつけたオペレーターに話し掛けた。

「わかってるさ…ロックマンを助けに行くんだろ？」

星斗と呼ばれた少年はエグゼの言うことを分かっていたかのように言った。まさに以心伝心だ。

「いいかな？」

エグゼが聞く。

すると星斗は無言で頷いた。

「じゃあ、オペレートよろしく！」

「ああ！」

そして星斗はローラースケートでスバルの元に向かった。

「オイ、ブライ……」

フォルテが言った。

「どうしたフォルテ？」

「こいつから凄まじい力を感じる。」

「なんだと?!」

ブライは驚く。なぜなら、倒れてもう体力もないはずだからだ。

「早いこと終わらすぞ……」

そしてフォルテクロスブライは構えた。

その時、ロックマンが立ち上がった。

「何……? ふん……まだやるつもりか? その体で……」

フォルテクロスブライが尋ねる。

「僕はまだ戦える! 絆を信じ切る!」

スバルは力強く言った。

「黙れ！フルシンクロ無しで最強の俺達に勝つつもりか？笑えるな

……」

フォルテクロスブライは少し笑った。しかし、スバルは言った。

「僕もやるさ！フルシンクロを！」

「何だと！？…ふん、面白い。フルシンクロの相手が来るまでに貴様をかたずけてやる！」

「へっ、第2ラウンドの開始だ！」

ウォーロックが言った。

絆無き者との戦い③(後書き)

評価感想お願いします

では！

絆無き者との戦い4（前書き）

このバトル長いですね…

まだ続きますよ！

ではございどー！

## 絆無き者との戦い4

「星斗君、急いで！」

エグゼが急かす。

「分かってるって！」

そう言っつて星斗はローラースケートをとばして走る。スバルの元に向かって。

「くられえ！ブライバースト！」

紫の衝撃波がロックマンに向かってくる。

しかし、ロックマンはジャンプしてかわす。

「何?!」

「さっきの俺達とは違うぜ！」

ウォーロックが自慢げに言う。

「チツ、調子に乗りやがって…!!」

「調子に乗っていたのは君達だよ！バトルカード、ライメイザン！」「ロックマンの左腕が黄色いソードに変わる。

「ダークソード！」

フォルテクロスブライの左腕も紫のソードに変わる。

ガキン、ガキン　　激しく剣がぶつかり合う。

「ググッ」

フォルテクロスブライが押されている。

「ハアッ！」

ロックマンがダークソードをなぎ払い、フォルテクロスブライの体を切った。

「グワッ！なんだ！？この力は！？」

「まだ分からないの？絆だよ！」

「…そんな力、俺達は認めん！」

フォルテクロスブライの威圧感が増した。

「チィ、頑固なヤローだ！」

ウォーロックは呆れている。

「死ぬ、ロックマン！Wバニシングワールド！！」

フォルテクロスブライの両腕から再び獣の顔が出て来た。

「ヤバい！避ける！スバル！」

（無理だ…）

スバルは思った。さっきソードで斬り合っていたため、至近距離で避けるのには近すぎる。

「（せめて威力を弱めれば…）バトルカード、スーパーバリア！」

「無理だな…そんな物は破壊してくれる！」

すぐそこまで巨大なレーザーは来ていた。

万事休す

そう思つてロックマンは目をつぶった。その時だった。

「バトルカード、ドリームオーラ、ホーリーパネル、ダブルプレデーション！」

誰かの声がして、スバルの目の前に青い電波体が現れて、誰かにプレゼンテーションされたオーラを張った。

「テメーは…！」

ウォーロックは目を見開いた。

「お待たせ、ロックマン！」

「ロックマンエグゼ!と…?」

ロックマンの目の先には青いバンダナをしたスバルと同じぐらいの年齢をした少年がいた。

「俺は光星斗、ロックマンエグゼのオペレーターさ!」

「よろしく!」

そして、ロックマンと星斗は握手した。

「貴様…ロックマン!それに、光…?貴様ら、あの時の屈辱、今返してやる!」

フォルテが怯えそうになる声で言った。

「フォルテ…君はまだ…スバル君…フルシンクロだ!」

「うん!」

そしてエグゼとロックマンは叫ぶ。

「フルシンクロ!」

2人の青いヒーローは一つの光になった。

## 絆無き者との戦い4（後書き）

次回やっこのバトルが終わります！（多分…）

感想、評価待ってます

ではでは！

**絆無き者との戦い5 (前書き)**

やっとこの戦い終わります。

じほびんげん…

## 絆無き者との戦い5

「フルシンクロだと!？」

フォルテクロスブライが目を見開きながら聞いた。

「同じロックマンだから周波数はバツチリに決まってるだろ！」

星斗が少し離れた所から言う。そして、青い光から一人の電波人間が出て来た。

「フルシンクロ、スタークロスロックマンエグゼ！」

エグゼのボディを基調に、ナビマークが流星マークに、薄い青のバイザーになっている。

「凄い…力が漲って来る…!これなら勝てる！」

スバルはフルシンクロの凄さを実感した。

「グツ…いいだろう!ロックマンをどっちも始末してやる！」

フォルテクロスブライが剣を構えた。

「ダークソード！」

フォルテクロスブライが切りかかる。しかし、スタークロスロックマンエグゼは後ろに下がり避ける。

「エグゼブラスター！」

バスターから超高速で弾が放たれる。

「そんな攻撃、電波障壁が無効にする！」

ヴィイン　電波障壁が展開された。

しかし、バスターが超高速なため電波障壁の再展開が追いつかない。

「くらえー！」

「しまった…グワッー！」

フォルテクロスブライは無数のバスターをくらい怯む。

「今だ!MAXチャージショット！」

フルシンクロにより、チャージショットは格段に強力になっていた。

「グハツ！貴様ら、よくも…」

「フォルテ、ブライ、コレが絆の力だ！」

「黙れ！俺達は絆などに頼らん！ダークネスオーバーロード！」

怒りのせいか、威力とスピードが増している。スピードが上がっているため、スタークロスロックマンエグゼは反応が遅れた。

「スバル、ヤバイ！」

ウォーロックが叫ぶ。

フルシンクロでも流石に無理だ…

スバルは思った。しかし、エグゼは違った。

「星斗君！」

エグゼは呼び掛ける。

「オウ、任せる！バトルカード、ヘンゲノジュツ、ムラマサブレード、アンデットリバーズ、トリプルプレデーション！」

星斗のバトルカードのプレデーションのスピードは手見えないほど早かった。

「そんな物は無駄だ…！」

ドカアアア　ダークネスオーバーロードはスタークロスロックマンエグゼに直撃した。

「ふん、絆は消えたか…所詮こんな…グワツ！なんだと…?!」

フォルテクロスブライの背中にスタークロスロックマンエグゼが上空から投げた手裏剣が刺さっていた。

「GA、ボディガードさ…ふーっ。200年前のPAだったし、出

来るか出来ないかは賭けだったけどな！」

星斗は安堵の溜め息を漏らし、笑った。

「グツ…俺は絆の力など…認め…」

バタツ

そこまで言っただけでフォルテクロスブライは倒れ、フルシンクロも電波変換も解けていた。

「ブライ、フォルテ…もう、やめよう…絆を認めなよ…」

スバル達もフルシンクロと電波変換を解いてソロ達に説得するように言った。

「…絆が貴様らの…力の源なのか…？」

ソロは尋ねた。その声にはいつもの威圧感を感じられず、穏やかな声であった。

「そうだよ。」

スバルが答える。

「絆はみんなの力が伝わってくるし、離れていても助けてくれる。

僕らは1人じゃないんだ。」

エグゼも穏やかな口調だ。

「俺もスバル達と出会って、絆の力の凄さに気付かされたぜ。」

ウォーロツクも言った。

「では、俺達が負けていたのは絆の差なのか…」

フォルテが少し悲しそうな声を出しながら言った。

「…俺達も『絆の力』を認めざるをえないようだな…」

フォルテとソロは声を揃えた。

「本当に!？」

スバルとエグゼも声を揃える。

「ただし、人間の絆の『馴れ合い』、上辺だけの絆は認めん…悪魔で『絆の力』だけを認めてやる！」

フォルテの口調に激しさが戻る。

「そして、ロックマン。貴様の体内のムーメタルを取り返すまでは貴様とは手を組まん！」

ソロの口調からは威圧感がまた感じれる。そして続ける。

「もし、貴様の心に少しでも孤独感があればムーメタルはそれに反応する…」

ゾツとするほど恐ろしい声でソロは言った。

「どんな反応なの？」

スバルは尋ねたが、ソロは無視した。

「貴様ら…俺達と再び戦うまで死ぬな…」

「死ぬ訳ないよ!」

「死ぬ訳ねーよ!」エグゼとスバル、星斗とウォーロックの声  
が八モった。

「ふん、どうだかな…」

2人が低い声を揃えた。まるでこれからの起きる事がわかってるかのように。

「…では俺達は行く。更なる力を求めて。絆に負けない力を手に入れるために!」

フォルテが言った。

「次は負けない。首を洗って待つてろ！」  
ソロは力を込めた声で言った。そして、ソロとフォルテはスバル達に背を向けた。

フォルテが言った。

「次は負けない。首を洗って待つてろ！」  
ソロは力を込めた声で言った。そして、ソロとフォルテはスバル達に背を向け、何処かへ歩いて行った。それをスバル達は黙って見えずなくなるまで見ていた。

「けっ、やっぱり最後まで頑固だったな！」  
ウォーロックが沈黙を破った。

「けど、ソロ達はソロ達なりに素直になったんだと思うよ…？」  
スバルは静かに答える。

「そうだな、あのフォルテも絆を認めただしな」  
星斗も同意した。

「ソロ達、何処行くんだろ…？」  
エグゼが呟く。

「さあな…けど、いつかまた会えるさ！敵が見方かは分からないけど。」

星斗が言ったがスバルが違う事を言った。

「違うよ…きっと今度は味方さ」  
スバルが言った。

「…えっ？」

スバル以外が声を揃えた。

「そんな気がするんだ。」

スバルは前向きな事を言った。

(スバル…考え方変わったな…)

ウォーロックはスバルと出会って間もない頃の事を思い出していた。

## 絆無き者との戦い5（後書き）

出ました！勝手にGAシリーズ（笑）

組み合わせはエグゼシリーズのPA参考です（笑）

フルシンクロ時の名前が長いのはスルーで（笑）

後、どうでもいい話ですが、音楽の授業中にリコーダーで『勝利のうた』のサビが何故かできるようになりました（笑）

話が逸れましたが、評価、感想お願いします。

## 自業自得

「さて、僕らも帰ろうか？」

星斗がスバルに言った。

「あつ！そう言えばみんなの事忘れてた！速く行かないと！」

そう言うとスバルはさっきルナ達と別れた所に向かい走り出した。

「おーい！待てよー！」

「僕達も行こう！」

エグゼに言われ星斗はスバルの後を追いかけた。

くスバルの家の前く

「スバル君、大丈夫かな…？僕がやられてから1時間は経ってるよ

…」

ツカサは心配そうに言った。怯えるようにも見える。

「スバル君ならきつと大丈夫だよ！」

ミソラが励ます。

「そうよ！ロツクマン様なら大丈夫だわ！」  
ルナも同意した。

「あれ、スバル君ではないですか？後、誰か後ろにいるような……」  
キザマロの眼鏡がキラリと光った。

「みんな、勝ったよ！」

スバルが走りながら向かって来た。

しかし、スバルは途中で倒れてしまった。

「……？！スバル君！？」

まさか重傷なんじゃ……？

そこにいた全員がそう思った。

「ハハハ！オイ、ロツクマン！何転けてんだよ！」

ローラースケートを履いて、青いバンダナをした少年がスバルの事を笑っている。

「だからスバルだってば！星河スバルだよ！」

スバルが教えている。

「イヤーロツクマンの方が馴染みがあるからな！」

バンダナの少年が言った。

「スバル君をロツクマンって呼んだら僕とややこしいよ！」

バンダナの少年のハンターから青いウィザードが出て来て言った。

そんなやりとりをルナ達は呆然としながら見ていた。

その状態をKYのゴン太が打ち破った。

「オイ、スバル！お前大丈夫なのか？」

「えっ？大丈夫だよ？」

スバルは普通に答えた。

「じゃ、さっき転けたのは……？」

ゴン太が引き続き質問する。

「ああ、あれは星斗君が僕の家まで競走って言って、それで競走し

てたら焦って…てゆーか星斗君、ローラースケートはズルいよ！」  
スバルはゴン太をほったらかしにして星斗に反抗した。

「ハハハ！わりーわりー。あれが俺の走りだ。」

「…エグゼ、そうなの？」

スバルが引きつった顔でエグゼに聞いた。

「…スバル君。気持ちは分かるけど、あれが光家の伝統なんだ！」

「どんな伝統なんだよ！」

エグゼにスバルが思いつ切りツッコんだ。「ねえ…スバル君…？」

ルナが楽しそうな空気をぶち壊した。

「何、委員…ヒッ！」

スバルの顔は怯えていた。何故ならルナからはえげつない程の殺気が出ていたからだ。

「アナタ…」

「スバル君のバカ！！」

ルナは何か言いかけたがミソラによって遮られた。

「どんだけ…どんだけ私達が心配したのか分かってるの…？」

ミソラは泣きながら言った。今まで貯めていた物を全て出すかのよう…

「みんな、凄いい心配してたんだよ？それなのに…楽しそうに帰って来るなんて…」

みんな黙っていた。流石のルナまでも黙っていた。ツカサでさえ笑みを浮かべていない。

「…みんな…ごめん……バトルに勝って浮かれていて…本当にごめん…」

スバルの顔は一気に暗くなってしまった。

「許さないよ！」

ミソラは本気のようにだ。

しかし、ツカサがフオローにまわった。

「ミソラちゃん、バトルで勝って浮かれるのは君も分かるでしょ？」

強い敵なら尚更だよな？許してあげなよ。」

流石はツカサ。いい例えを使ってミソラを許すように仕向けている。

「……………」

ミソラは黙っている。

「スバルは悪くないんだ、競走しようって言ったのも俺だし…。」  
星斗もできる限りフオーした。するとミソラが口が開いた。

「そうだね…分かったよ…許してあげるよ！」

ミソラは笑ってスバルを許した。

「本当に!？」

スバルの顔がパツと明るくなった。まるで春が来たかのような。

「だけど、ただって訳にはいかないよ！」

「えっ?何っ…」

そうスバルが言った瞬間スバルの唇にミソラの唇が触れた。

「……………」

ツカサとミソラを除いたその場にいた者はみんな啞然としている。  
ツカサはいつものように微笑み、ミソラは顔を少し赤くしながら、  
イタズラっぽい笑みを浮かべていた。

「エへへ、オ・シ・オ・キ。自業自得だよスバル君！」

そして、今起こった出来事を振り返りスバルは倒れ、ルナは引きつ  
た笑みを浮かれている。そして星斗は爆笑してエグゼに呆れられて  
いたのだ。

## 自業自得（後書き）

中間テストが近づいて来たため、更新出来るか分かりません。

しかし、できる限り更新したいと思っています

迷惑をおかけしてすいませんm（|（|（m

では次回もよろしく願います！

## 自己紹介(前書き)

どうもこんにちは...

## 自己紹介

スバルが倒れた後、スバルの母、あかねに許可を貰い、スバルを皆でスバルの部屋まで運んでベッドに寝かした。

「スバルの部屋」

「失礼だけど…さつきから気になってたんだけど君は？」

ツカサが星斗に少し遠慮しながら聞いた。

「ん？あつごめん！自己紹介まだだったな。俺は光星斗、そこでいつがウィザードのロックマンエグゼさ。」

星斗は自分の自己紹介をしてかれエグゼをハンターから出した。

「……ロックマン?!」「……」

皆がビックリした。

「そう、コイツは200年前の俺の先祖、光熱斗の元ネットナビさ！」

星斗が自慢気に言った。「確か光熱斗とロックマンエグゼってあの200年前のヒーローですよね!？」

キザマロが星斗に聞いた。

「うん！僕と熱斗君で何度も地球を救ったよ！」

エグゼが少し照れながら答えた。

「へ〜あなた達がそんなに凄いとはね…。」  
ルナが感嘆している。

「……これからもよろしく!」「……」

エグゼと星斗の声がバツチリ揃った。

「そう言えば僕らの自己紹介がまだだったね。僕は双葉ツカサ。こっちがワイザードのヒカルよろしく。」

ツカサが星斗に手を差し出し、握手をした。ヒカルはエグゼと少し嫌そうに握手をしている。

「俺は牛島ゴン太！コイツはワイザードのオックス！」

「よろしくな！」

「僕は最小院キザマロ、ワイザードのペディアです。」

「私は白金ルナ、ワイザードはモード。よろしくね！」

「私は響ミソラ、ワイザードはハープ。よろしくね！」

まあこんな感じで自己紹介が終わった。

「なんか質問あるかしら？」

ルナが星斗に聞いた。

「そうだな…みんな、電波変換できるの？」

「……え？」「……」

皆は声が揃った。

「イヤー、俺は一応出来るからな！」

星斗は当然のように言った。

「…そうだ、星斗君！電波変換出来るなら僕らのチームに入らない？」

ツカサが勧誘した。

「それいいね！」

ミソラも同意した。

「チーム？何の？」

星斗は何の事が分からないようだ。

「地球抹殺を逃れるためのチームさ…」

「…何だって！？」「…」

エグゼと星斗がハモる。

「詳しい事は分からないけど、今地球は何者かに試練を与えられて

るんだ！」

ツカサが説明した。

「…分かった！俺の加入で地球が救えるなら入るよ！」

星斗はオーケーした。

「けど、シドウさん達に許可貰わないと…」

ミソラが言った。

「確かに…」

ツカサが珍しくミスを犯した。

「明日コダマタウンのウェーブライナー駅前に8時集合は？」

エグゼがフオーした。

「いいんじゃない？じゃ、星斗君、ツカサ君そう言う事でいいかな？」

ミソラが聞いた。

「分かった！」

「いいよ。」

星斗とツカサは答えた。そして今日は解散となり、ミソラ以外は自宅に帰って行った。

コダマタウンには住んでない星斗は電波変換して自宅に帰って来た。

「はあ〜疲れた〜。けど、明日楽しみだな、ロックマン！」

「えっ…ああ…うん…」

「どうした？浮かない顔して？」

星斗が心配した。

「いや、今日久しぶりにバトルしたから…それより早起きなんだから寝ないと寝坊するよ！」

「チエ、分かったよ！お休み、ロックマン。」

「うん…」

そして、星斗はベッドに入り寝た。しかし、エグゼは寝れなかった。  
(嫌な予感がする…前にもこんな事あったような…どうだった？熱斗君…？こんな事あった…？)

今は亡き主人に尋ねていたから…。

「地球への試練は上手く出来てないようだな…マーズ、マーキュリー！御陰で『あの御方』がお怒りだ！」

ガイザー・エッジワースが少し怒りながら言った。

「誠にも申し訳ありません！」

マーズとマーキュリーはガイザー・エッジワースに頭を下げた。

「貴様らは今回は必要ない！今回はジュピター！貴様ら木星団に任

せる！」

「有難うございます。期待に応えましょう……」

そして、ジュピターは消えた。

「フッフ、地球人共め…次は上手く乗り切れるかな…？」  
ガイザー・エッジワースが不気味に笑った。

## 自己紹介（後書き）

実は今日からテスト期間なんでテスト期間は更新出来ません…すいませんm( \_ \_ )m  
なんせ受験生なんで…（泣）  
理科が難し過ぎ（泣）

では感想、評価お願いします！

### 【第3章・戦いの激化】再開

「…うん。」

「あっスバル君、起きた？」

キスされ、倒れていたスバルが朝になりようやく目を覚ました。

「おはよう…ミソラちゃん。今何時？」

「えーと、今は朝の7時だよ！」

「今日日曜日だよね…？」

「うん。それが？」

「お休み…」

「寝ちゃダメー！」

ミソラは星河家の一階まで響く声で叫んだ。

「耳元で叫ばないでよ！それに、日曜日だしいいんじゃないか！」

「ダメ！今日は8時からWAXAに行くんだよ！」

「へっ？どうして？」

「まあ後で分かるよ！」

「眠い…」

スバルはまたウトウトし始めた。

「またオシオキしちゃうぞ？」

ミソラがイタズラしたそうに笑った。

ガバッ

スバルは顔を赤くし、凄まじいスピードで布団を出て、一階に降りて行った。

スバルとミソラは朝食を食べ終わり、バス停に向かった。バス停に着くと、ツカサと星斗が待っていた。

「おはよう、スバル君、ミソラちゃん！」

「オッス、スバルにミソラちゃん！」

ツカサ、星斗の順に言った。

「星斗君？ツカサ君、今日は何があるの？」

スバルはイマイチ状況が理解出来ない。

「実は、星斗君を僕らのチームに入れようと思ったんだよ！」

「本当に！？けど、許可してくれるかな？」

「だから今日は許可を貰いに行くんだよ。」  
なるほど。

スバルは思った。それにシドウの性格上、案外普通に許可してくれると思う、大して心配しなかった。

「オッ、ウェーブライナーが来たぜ！」

星斗の見た方向からウェーブライナーは来た。そして、4人はWA  
XA行きのウェーブライナーに乗った。

「着いた〜！」

ウェーブライナーから降り、ミソラは伸びをした。

「ここがWAXA…。」

「凄いね星斗君。」

星斗は初めてここに来たらしく、規模の大きさに少し驚いていた。

「あれ、スバル達じゃねーか。」

「シドウさん！」

スバル達の前にうまい棒を食べながらシドウが現れた。

「今日は集合かけてねーけどどうした？」

「実は…この少年を僕らのチームに入れたいと思ひまして…」

「誰だ？」

「コイツだぜ！」

ウォーロックが星斗の方を向いて言った。

「君は？」

シドウは星斗の方を見て尋ねた。

「俺、光星斗と言います。こっちはウイザードのロックマンエグゼ。

今回の地球抹殺対策チームに是非協力したいんです！」

星斗は結構礼儀正しく言った。

（光…それにロックマンエグゼ…？どっかで聞いたような…）

シドウは考えていた。そして尋ねた。

「電波変換は出来るか？」

「はい！」

2人の返事からは決して揺るがない決意が感じられる。そして、瞳は自信と覚悟が秘められている。

「（試してみるか…コイツらからはデータからは分からない何かを感じれる！）よし！みんなを集合させるから、みんな中で待つとけ！」

シドウは少し期待したような顔をしながらハンターで電話をし始めた。

そして、4人は指令室でみんなを待った。

〈指令室〉

「みんなまだかな？ 疲れた〜。」

ミソラがスバルにもたれかかって来た。

スバルは顔を赤くして何も言わなかった。まんざらではないようだ。「けど、良かったね、星斗君。シドウさんは何か前向きな感じだったし。」

「ああ！」

星斗はもう入る気満だ。

ガチャ

「みんな、みんな集まったぜ。」

シドウを先頭にチームのメンバーが全員指令室に入ってきた。

「シドウ、今日は何があるんですか？」

プライドがシドウに聞く。

「今日は姫は用事があつたのですが……」

ナイトマンが出てきて言った。その時エグゼが大きな声をあげた。

「！ナイトマン！久しぶりだね！」

「おお！ロックマン。久しぶいな……」

ナイトマンも驚いていた。

「ロックマン！」

エグゼは誰かに手を握られた。

「メデイ！久しぶり！」

「フフ、会いたかったよ。」

メデイはどことなくデレデレしている。

「……相変わらずだな……ロックマン！」「……」

4人の声がする。

「サーチマン、ブルース、カーネル、トマホークマン！みんな久しぶり！」

エグゼは200年前からの仲間との再開を喜んでいた。

あっ！ロックマンエグゼって200年前のヒーローだったな！」

シドウがエグゼの事を思い出したようだ。

「……コホン！皆、落ち着け！」

フォボスが大きな声で皆を静めた。

「今日集まったのはこの2人を我がチームに加入するかどうかだ！  
しかし、俺とシドウだけで決める訳にもいかん。だから皆の意見も  
聞きたい！」

フォボスは説明した。

「という訳で星斗、自己紹介してくれ。」

シドウが星斗の方を見て言った。

星斗は緊張しているのか深呼吸をして皆の方を見て喋り始めた。

「初めまして、光星斗と言います。僕の偉大な先祖、光熱斗のよう  
に僕もこの地球を救いたいです！どうかよろしくお願いします！」

(光熱斗にソックリだな…)

ブルースはそう感じた。熱斗の事を知っているウィザードならみんな、  
こう思っているだろう。

「ではまず、光星斗を我がチームに加入するか賛成か反対か述べよう  
！」

フォボスが皆に言った。

「しかし、大佐。この二人の戦闘力などを見ないとどっちか言いにく  
いですよ。」

バルジが意見した。

「そうかもしれん…ジャック！お前がこの二人の相手になれ。」

フォボスがジャックに命令した。

「えっ…分かった！」

ジャックがオーケーした。

「どちらかが攻撃を三回ヒットさしたら終わりだ！皆、外に出る。」  
そして皆はフォボスの言うとうりに外に出た。

皆はWAXAの玄関前に並んだ。

「よし、二人とも、電波変換して始める。」

「「分かりました。」」

そしてジャックは叫ぶ。

「トランスコード、ジャック・コーヴァス！」

黒い体と翼のジャック・コーヴァスが現れた。

「こつちもいくぜ、ロククマン！」

「うん！」

そして、星斗はハンターを構えた。

【第3章・戦いの激化】再開（後書き）

お久しぶりです！ストリームです！

テストが明日で終わりで超嬉しいです！出来は…気にしない！

オイ（笑）

ではごっぞー！

## テストバトル

「トランスコード、スター・エグゼ！」

そう叫ぶと星斗は青い光に包まれ、その光の中からエグゼのボディが基調で頭部のラインが水色に、マークの一部が緑色に変わった電波人間が姿を表した。

「俺達は一応本気でいくぜ。200年前のヒーローの力、見してくれよな！」

ジャック・コーヴァスが言う。

「俺達も負けないぜ！」

スター・エグゼが返した。

「よし、始める！」

フォボスの声でテストバトルが始まった。

「グレイブクロー！」

ジャック・コーヴァスが紫色の炎を放つ。

「ロックバスター！」

スター・エグゼがバスターでグレイブクローを防いだ。

「ペインヘルフレーム！」

ジャック・コーヴァスは空に飛び手から無数の炎を放つ。

「ジャック、いきなり潰しに来たわね…。あれは普通、避けられないわ…。」

クインティアがジャックを見て言う。

「いや、光熱斗の子孫とロックマンなら避けれるな。」

たかひろさんのハンターから、ブルースが出てきて言った。

「本当に？」

「あれを見る。」

ブルースとクインティアが見た先にはペインヘルフレ임을凄いです  
ピードでかわすスター・エグゼの姿があった。

「何！？全部避け……」

ジャック・コーヴァスは全て避けたスター・エグゼに対し驚きが隠  
せなかった。

「次はこっちの番だぜ！バトルカード、マッドバルカン！」  
スター・エグゼの右腕がマッドバルカンに変化した。

ドドド　銃弾が放たれる。

銃弾が二発ヒットした。

「流石だな。ジャックは後一発で終わりだ。」

サーチマンが呟く。

「いや、簡単には終わらないよ。」

ツカサには聞こえていたようで、サーチマンに反論した。

「ジャックの実力は高いよ、サーチマン？」

「俺達のデータではジャック・コーヴァスは次の攻撃で返り討ち  
だな……」

サーチマンのオペレーター、バルジが同時にわかっているかのように  
言った。

ジャック・コーヴァスは銃弾が二発ヒットしたが、そのまま勢いに

乗って上空に高く舞い上がった。

「くらいな、エアロダイブ！」

ジャック・コーヴァスはそう言うのとスター・エグゼに向かい凄いですピードで向かった。しかしスター・エグゼは避目を瞑ってける気配を見せなかった。

「星斗君、避けないつもりかな？」

スバルが心配そうに言った。

「馬鹿か、エアロダイブをまともにくらったら追撃くらって負けだぜ！？」ウォーロックが言った。

「いや、ジャックのヤローの負けだ。」

トマホークマンが隣で呟やいた。

「そう、ロックマンがいれば負けるハズないわ！」

メデイは何故かやたらハシヤいである。

「黙って見てろ。」

カーネルがスター・エグゼ達の方を見ながら言った。

ジャック・コーヴァスとスター・エグゼの距離が縮まっていく。

スター・エグゼは目を瞑ってままだ。

ジャック・コーヴァスが後ろメートルまで近づいた。その時、スター・エグゼは目を開いた。

「バトルカード、アイフォーム！」

次の瞬間、がとジャック・コーヴァスはスター・エグゼの前に冷や汗をかき立っていた。スター・エグゼがジャック・コーヴァスの体

スレスレで剣を寸止めしていた。

「流石…二百年前のヒーローだな…後一步で俺まともにくらつたぜ！」（凄い…剣がまるで見えない…）

スバルは目を見開いていた。

（最後にトドメをささず、あえて寸止めか…相変わらず甘いな…）  
ブルースはそんな思った。

「もういいだろう…其処まで…！」

フォボスの声が響いた。

そして二人は電波変換を解いた。

## テストバトル（後書き）

なんで僕のバトルってこんなグダグダなんですかね？  
しかも上手いならまだしも下手だし…

アドバイスお願いします！感想、評価も待ってます！

## フルシンクロの力(前書き)

長い道...ではあつた...

## フルシンクロの力

「ジャック相手に無傷とは…やるようだな。」

フォボスは星斗とエグゼに感心していたようだ。

「ありがとうございます。」

しかし、2人は謙虚にお礼を言っただけである。

（余裕ナノかな…？）

スバルは2人の爽やかな表情を見て、そう感じた。「さて、では皆に聞く。この2人をチームに入れるのに賛成か？」

フォボスはエグゼと星斗の方を見て言った。フォボスは無表情だが星斗とエグゼは緊張しているのか、唾を飲み込んだ。

皆は声を揃えた。賛成と。

「ヤッター！！」

その瞬間、エグゼと星斗の喜びの音がWAXA中に響いた。

（指令室）

「皆さん、有難うございます！」

星斗はメンバー全員にお礼を言つて回っている。

「テメーのオペレーター、マジで嬉しそうだな。」

ウォーロックがエグゼに話掛けた。

「うん、正義感が強いんだよ！」

「スバルと似てるな。」

「まあスバル君とは違ってムチャよくするし、いい加減な所もあるけどね。」

エグゼはクスクスと笑った。

その時だった。

指令室のモニターにレジェンドマスター・シンが映った。

「みんなWAXAの玄関前に大量のウイルスが発生してる！誰か出動を！」

シンは焦っているためか、やたら早口だった。

「わかった！よし、光星斗！出勤を命じる！」

フォボスが星斗を指差した。星斗は待つてましたと言わんばかりの表情だ。

「スバルも連れて行つていいですか？」

「えっ!？」

星斗はスバルの方を見て言った。

「貴様、1人では不安なのか？それとも命令に背く気か？」

フォボスが不思議そうに聞く。不満そうにも見える。

「いいえ、そんな気はありません。」

星斗は真顔だ。

「では何故だ？」

「それじゃ、10秒で終わらせませす。それ以上時間がかかったら、チームを辞めます。」

「ちよつと、星斗君！」

スバルは星斗を止めた。大量のウイルスを十秒で全てデリートなんていくら何でも無理だ。しかし、星斗の瞳はは自信に満ち溢れてい

る。

「…わかった。貴様等が外に出てから10秒以上かかったら辞めてもらうぞ。では行け！モニターで見ておく。」

フォボスの声と同時に星斗をスバルの手を握り、走り出した。

「星斗君、無茶だよ。」

スバルは心配そうに言った。

「何言ってるんだよ。俺達にはフルシンクロがあるだろ！？」

星斗は相変わらず自信満々だ。

「スバル君、大丈夫だよ。」

エグゼも笑って言った。

「エグゼまで…わかったよ。信じよう。」

「そうでなくちゃな！」

スバルと星斗の心の中は正反対の心情であった。

（WAXA 玄関前）

「よし、始めるぜ！」

星斗はハンターを構えた。同じようにスバルもハンターを構えた。

「トランス・コード！」

スター・エグゼとシューティングスターロックマンが現れた。

「よし、スバル、行くぜ！」

「うん！」

「フルシンクロ!!」

指令室では皆驚きを隠せなかった。フォボスやバルジまでもが目を見開いている。

「フルシンクロって何なんですか?」

ミソラ、ツカサ、エリーは前回、火星団の連中とのバトルに参加していなかったため、フルシンクロを見るのは初めてである。

「見ればわかるさ。」

シドウはそう言うともモニターを見つめた。

「バトルカード、ソードファイター!」

スタークロスロックマンエグゼの左腕が細いソードに変わり、それでウイルス達を凄まじいスピードでデリートしている。

「後7秒だ…無理だな…」

フォボスが呟いた。

「我がデータによればあと70体ウイルスがいます。バルジがフォボスに言う。」

「皆様、俺のデータによればアイツらは大丈夫ですよ。サーチマンが皆に言う。」

しかし、元ネットナビ集団以外、誰も全てのウイルスを十秒以内でデリートできると思ってなかった。

「後五秒位か…スバル！一気にキメるぜ！」

「うん！」

心の中で会話するとスタークロスロックマンエグゼはバスターを構えた。

「エグゼバスター！」

超連射がウイルス達を見る見るデリートしていく。そして後3秒で30体程にウイルスが減った。

「これで終わりだ！ハアア！MAXチャージショット！」

そしてチャージショットが発射されると、モニターは白い光で画面が一杯になり何も見えなかった。

そしてチャージショットが発射されると、モニターは白い光で画面が一杯になり何も見えなくなった。

光がおさまり、皆が再びモニターを見ると、ウイルス達は姿が見えず、スバルと星斗が立っていた。それを見て、ほとんどの者は安堵のため息をもらし、元ネットナビ集団はメディ以外当然だろうと言わんばかりの顔をしていて、メディとミソラとエリーは案の定案の定  
「ロックマン格好いい！」と騒いでいた。

## フルシンクロの力（後書き）

色々連載始めました！（この小説さえ更新遅いのに…）  
良ければそっちもお願いします！

では（＾―＾）  
∨

天才学者（前書き）

サブタイトルが適当です…いいのが浮かばなくて（泣）

## 天才学者

スバルと星斗はウイルス達をデリートした後、司令室に戻って来た。

「皆さんただいま〜！」

星斗が陽気な口調で言う。

「星斗君、敬語使いなよ！」

エグゼが叱る。もう、オペレーターを叱るのには慣れてきているようだ。

「チエ…皆さん…スイマセン。」

「2人共、あんまりそんな事気にしなくて良いぞ。」

シドウがフォローする。

「ほら！やっぱり良いじゃん！」

星斗が反抗する。

「…わかったよ…」

エグゼは少し不満そうだがもう何も言わなかった。

「良いもの見してもらったわ。」

「ヨイリー博士…」

クインティアが足音がする方を見て言った。クインティアの目線の先には天才学者、ヨイリー博士がいた。『チリチリ委員長』などの件を初め、前回の事件の時はお世話になった人物だ。

「さっきのが例のフルシンクロナのかしら？スバルちゃんと…」

「光星斗です。こっちはウィザードのロックマンエグゼ。」

ヨイリーとは初対面のため、星斗が軽く自己紹介する。

「アラ？光つてもしかしてあの光博士の子孫かしら？」

ヨイリー博士は星斗に聞いた。

「オイ、ロックマン。熱斗おじさんって博士だったの？」  
星斗はビックリしながらエグゼに聞いた。

なんだ…そんな事も知らなかったの？

エグゼはそう言いたげな表情をしたが、グツとこらえ、口を開いた。  
「ヨイリー博士、星斗君は200年前の光ただし博士、祐一郎博士、そして熱斗博士の子孫です。」

「あの人は私達学者の巨匠よ…どつりで顔が似てると思った…だから…話を本題に戻すわね、2人共。さっきのバトルを見ながら色々調べさしてもらったわ。」

「オイ、婆さん！何を調べたんだ？」

ウォーロックがヨイリーに聞いた。

「もちろんフルシンクロについてよ。」

ヨイリーがみんなに向かって言った。そしてモニターの画面をつけた。

く WAXA 上空のウェーブロードく

「オイ、あんたの作戦失敗じゃねえか！」

ツバメのような電波体が怒っている。

「ソッフ、さっきのはちよっとしたアイツ等のアドリブさ！これ位してもらはないと盛り上がらない！」

一人、帽子とマントをした電波人間が何か本のような物を書いている。

「てゆうか、あんたなんで俺らに手を貸すんだ？」

カブトムシのような電波体が言った。

「ソッフ、勘違いしないでくれ。私はただロックマンに復讐したいだけだ。」

「へっ！それなら僕等も好都合だ…君を信用するよ…」

薔薇のような電波体が不気味な声で笑った。

「さあ、脚本第2章の始まりさ！ソッフソッフ…」

WAXA 上空に不気味な笑い声が響き渡った。

天才学者（後書き）

これからたまに、僕の日常の事を書こうと思いまーす！

〈ストリームの日常〉

この前、『ルーキーズ 卒業』を見に行きました！

本当いい映画でしたよ！笑いあり、涙ありで…僕は泣いてないです  
けど（笑）

皆さん、良かったどうぞ！本当最高ですよ）（

## ヨイリー講座（前書き）

サブタイトルがまたまた適当です…

## ヨイリー講座

WAXA

「フルシンクロって言う物はどんな物か知ってるわよね？みんな。」  
ヨイリーが言った。それに答えるため、大半が頷いた。

「大体はわかってるみたいね…フルシンクロは周波数が殆ど同じ、電波体や電波人間の融合の事だけど、ただ融合して力が二倍になる訳じゃないわ。」

「それはどういう事ですか？ヨイリー博士。」  
シドウがヨイリーに尋ねた。するとヨイリーは笑った。

「あなた達には有利なデータだね…『お互いを信じ合う力』が強い程、力は無限大になるわ。」  
皆はビツクリして声を上げた。

「フルシンクロって人数制限があるのですかヨイリー博士？」  
今度はミソラが尋ねた。

「良いこと聞くわね、ミソラちゃん…フルシンクロには人数制限は無いわ。しかも、シンクロする人数が多い程強くなるわ。」

「って事は此処にいる全員がシンクロしたら敵なんて瞬殺なんじゃないのか婆さん？」  
ウォーロックが不敵に笑い尋ねた。

「確かにそうかもしれないけど、体への負担はえげつなく成ってしまいわ…だからそれは無理よロックちゃん…けど今日はみんながシンクロし易いようにしてあげるわ！」

「どうやってですか！？」  
シドウが大きな声を上げ、立ち上がった。

「みんなハンターを貸して。」  
ヨイリーはそう言うと皆からハンターを受け取り、モニターの前にあったカードをハンターにプレーションした。「これで、皆のハ

ンターに『シンクロ率』が表示されるわ。シンクロ率が高い程、フルシンクロがし易くなるわ。」

おおー とチームの全員が声を上げた。そしてみんなが、  
(誰とシンクロ出来るかな…?)  
とそんな事を考えいた時だった。

ウーウー

WAXA全体に非常ベルが響き渡った。

## ヨイリー講座（後書き）

次回バトルです！

てゆーか最近、ミソラの出番が少ない…最近なんかバトルばかり…  
けどもう少ししたら日常が一応再開するんで…日常が好きな人には  
申し訳ないですm（　　）m

〜ストリームの日常〜

今日、僕が笑ったら友達が、

「お前の笑い方、笑いになってないな」

と意味不明な事を言って来ました。

それで、

「どんな笑い方？」

と聞くと、

「高い声で『キャハハハ！』みたいな感じ。」

との事です。

ヴァルゴかって心の中でツッコみましたよ（笑）

てゆーかあの笑い方は笑いになってないんですかね？

## 突破せよ、ウイルスロード1

「敵か?!」

フォボスはモニターのボタンを操作して、監視カメラに切り替えた。

「また大量のウイルスか…」

フォボスが安堵のため息を漏らし、安心したのも束の間だった。

WARNING-WARNING

「これは…まさかアイツ等か!？」

勇輝さんがモニターを見て確認した。すると、音声だけが入った。

「皆さん…ご機嫌よう。我々は地球抹殺チームの木星団です…。」

穏やかだが、やたら耳に残る鬱陶しい声だった。

「水星、火星と来て次は木星か!ハハ!」

ウォーロックが1人爆笑していた。

「今までの奴らとは違いますよ…」

声は相変わらず穏やかである。

「へっ!変わっても俺達がデリートだぜ!」

ウォーロックは余裕綽々だ。

「そうですね…お手並み拝見したい所でしたが…あなた達に全力で恐怖を味あわしてあげましょう!」

そう言った瞬間、司令室内部にいきなりウイルスが現れた。

「いきなり!?そんな!」

ツカサが驚き尻餅を着いた。

「驚いてる場合じゃ無いぜ!みんな!バトル開始だ!」

シドウがハンターを構えた。それをきっかけに全員がハンターを構えた。

「トランスコード!!!」

「来ましたね…地球人。」

またあの声が出た。司令室の出口の前にその声の主と思われる薔薇のような電波体が立っている。電波体はこちらをチラッと見てから外に出た。

「待ちやがれ！」

ジャック・コーヴァスが後を追いかけてしようとしたが、大量のウイルスにより道を阻まれた。

「…よし、こうなれば強行突破だ！ウイルスに突っ込んで通り抜けた者だけでさっきの奴らと戦う。後の者は、後から連絡を入れるから各自指示に従ってくれ。」

フォボスが指示を出す。それに全員が頷きウイルスの方を見て身構えた。

「行くぞ！」

シドウが叫ぶ。そして、その声を聞くと同時に全員がウイルスに突っ込んで行った。

僕は<sup>スバル</sup>ジェニミ・スパークとエリー・メディと一緒にウイルスに突っ込んだ。

「結構な数だね…」

ジェニミ・スパークWがロケットナックルを放ちながら話してくる。

「そうだね。」

僕はバスターを打ちながら答える。

「キヤア！」

声のした方向を見ると、エリー・メディがウイルスに集団攻撃されそうになっていた。

僕はとつさにエリー・メデイの方に行き、バトルカードのタイフーンダンスを使い、エリー・メデイの近くのウイルスを全て蹴散らした。

「ありがとう！スバル君！格好良かったネ！」

笑顔のエリー・メデイにそう言われ僕は少し可愛いと思ったが何処からか殺気を感じたため、ありがとう、と笑って返し、またウイルスをデリートする。

「コレじゃ切りが無いぜ……」

ジェニミ・スパークBは苛々している。

「スバル君、君だけ行ってくれないかな？」

ジェニミ・スパークWの発言に僕は驚いた。

ツカサ君の事が理解出来ない。

初めてツカサ君に対してその様な感情を抱いたがツカサ君はすぐに理由を話してくれた。

「今までの戦い上、木星団は木属性だしね。僕等は相性が悪い。それに、君は僕等より頼もしいし。」

ツカサ君は笑って言った。

「……わかったよ！」

ある程度納得出来る。しかし、ツカサ君も充分頼もしいのに。

僕はそう思ったがツカサの優しい顔を見てツカサの言うとうりにした。

「私も行きたいネ！」

スバルの後ろからウイルスをデリートしながらエリー・メデイが言った。

「テメーは足手まといになるだけだ！」

ジェニミ・スパークBの冷たい一言がエリー・メデイを怒らした。

「そんな言い方ないネ!」

エリー・メデイが反論する。

「ごめんね。今は君の恋に構ってる場合じゃ無いの分かってくれな  
いかな?」

ツカサが少しイタズラっぽい笑いを浮かべて言った。僕は何の事が  
分からなかったが、エリー・メデイはバイザー越しに見ても顔が赤  
いのが分かる。そして恥ずかしそうにこっちをチラッと見て、言っ  
た。

「…スバル君、頑張つてネ…無茶したら駄目だよ…」

「…うん!」

僕が返事するとジェニミ・スパークWが言う。

「僕が道を作るから一瞬で通つてね。」

そう言つてジェニミ・スパークW&Bが左右の手を構える。

「…ジェニミサンダー!!」

黄色に輝く電撃がウイルスをデリートし、真っ直ぐの道を作った。

「さあ、行きな。」

「サンキューなジェニミ!」

ジェニミ・スパークBに背中を押され僕は道を走り抜けた。そして  
ウォーロックは軽くお礼を言い、僕のハンターに戻った。

「行つちやつたネ…」

「僕等は指令があるまでウイルススバッキングだね。」

ジェニミ・スパークWが穏やかな口調で言った。

「てゆーかいつから気付いていたのネ？」

エリー・メデイがチラツとジエニミ・スパークWを見て言った。

「君の恋心の事かい？ 出会った時に気付いてたよ。」

「…ツカサ君…何でネ…」

エリー・メデイはジエニミスパークWに聞くと、

「君に…かな…それで…」

少し顔を赤くしジエニミ・スパークWは小さい声で、何か言った。

しかし、何もエリー・メデイには聞こえなかったようだ。（ツカサの奴…マジかよ…）

ツカサの呟きをヒカルは聞き逃さなかった。そして少しイタズラっぽい笑みを浮かべた。

**突破せよ、ウイルスロード1（後書き）**

ツカサの台詞は、また後程分かりますよ（笑）

〈ストリームの日常〉

テストの点数でクラスメートの奴と賭けをしたんですが1勝1分3  
敗…最高得点の国語90点がまさかの相討ち…（泣）

御陰様で60円の損失でした…

突破せよ！ウイルスロード2（前書き）

話進むの遅いですね…

## 突破せよ！ウイルスロード2

私はウイルスの大群に星斗君とバルジ君と一緒に突っ込んだ。私以外の2人はとても強く、頼りであった。そして3人でウイルスをデリートをしていくと出口が近づいてきた。

「オシ！一気に突破するぜ！バトルカード、キャノン×3！GA、インパクトキャノン！」

スター・エグゼの右腕がキャノンに変わり、キャノンがウイルスにヒットする。更に攻撃が誘爆したため、その周辺のウイルスもデリートされた。

流石

私がそんな事を考えていたら、背後からバルジ・サーチの声が聞こえた。

「俺も、バトルカード、マッドバルカン×3！GA、ムゲンバルカン！！！」

バルジ・サーチのスナイパーのような武器がバルカンに変わった。そして無数の銃弾が放たれ、次々とウイルスをデリートしていく。2人の御陰で道が開けた。その時、私の目に少し顔を赤くしたエリーちゃんと、嬉しそうなスバル君がいた。しかし、その光景はウイルス達に遮られた。

その光景を見て私は苛々してしまった。

ヤキモチだよね…これ…

そう思ったが、苛々は更に増し私はウイルスバツティングと言う名の八つ当たりを始めた。

「なあバルジ？」

星斗はバイザー越しにバルジを見て話し掛けた。

「どうした？」

「ハープ・ノートってこんなに強いのか？」

「…俺のデータによれば、女独特の苛々が彼女をパワーアップさせている。」

「何だよそれ!？」

星斗は訳が分からなかったようだ。

「お前のオペレーター、相変わらずだな…」

サーチマンはクククと苦笑した。

「何が？」

エグゼはポカンとしている。

「お前もか…つくづく200年前のあの二人組が可哀相だな…」

サーチマンは呆れてしまったようだ。

「どういう事？」

エグゼは尋ねた。

(コイツ等には女心が理解出来ないのか?)

サーチマンはそう思ったが状況を思い出し、バルジのハンターに戻った。

「サーチマン!…何だったんだろう」

エグゼは一人でそう呟くと星斗のハンターに戻った。

「オシ！道が開いた！」

ミソラ達は周辺のウイルスをかなりデリートし、道を作った。そして、3人が進もうとした時、スター・エグゼがいきなり倒れた。

「星斗君！？大丈夫！？」

ミソラが駆け寄った。

「わりー、疲れてるみたいだ…2人だけで先に行つて」

星斗はミソラを見上げ言った。

「でも…」

「スバルが待つてるぜ？」

星斗はミソラを説得した。

「…わかったよ。バルジ君と行くよ」

「後はよろしくな！わりーけど電波体とは戦えないからウイルスバツティングしとく。頑張れよ」

「うん！」

ミソラはそう言うと、バルジと共に出口に向かって走り出した。

「凄い数だな…」

トマホーク・パワードが呟く。しかしカーネル・ブレイドがトマホーク・パワードの肩を叩いた。

「いて！大佐、痛いですよ……」

「お前ら交流会と俺ならこんなの朝飯前だろう？」

そう言うとカーネル・ブレイドはサーベルを構えた。

「確かに……」

サイバー・ペルセウスも翼を広げる。

「10秒あれば充分だな」

ブルース・ソルジャーもソードを構える。

「よし、やるか！」

サイバー・ペルセウスがそう言うのを合図に4人がウイルス軍団に突っ込んだ。

「十秒も要らなかったか……」

カーネル・ブレイドが呟いた。

「暴れ足りねー！！」

ペルセウスが出てきて叫んだ。

「まだ真打ちがいるだろ！！引つ込め」

サイバー・ペルセウスが注意した。

「まあいい。先を急ごう」

カーネル・ブレイドがそう言うと4人は出口に向かった。

## 突破せよ！ウイルスロード2（後書き）

相変わらず文章力が無い…（泣）少し勉強したのに…

くストリームの日常く

毎日毎日勉強ばっかりツス（泣）今週も塾のテストが…受験生はなんて疲れるんだ…頭パンクしそう

今週は塾のテストの影響で更新遅れます。スイマセンm（ ）m  
評価、感想、アドバイスお願いします。

突破せよ！ウイルスロード3（前書き）

今回はちょっとシド×ティアです（笑）

### 突破せよ！ウイルスロード3

「凄い数ね……」

クイーン・ヴァルゴが呟く。

「これは簡単には通して貰えそうにないわ……」

ナイト・キングダムが不安そうに言う。

「けどやるしかないぜ？」

アシッド・エースが皆に呼びかけた。

「なあ、姉ちゃん、シドウ」

ジャック・コーヴァスが2人に話し掛けた。

「何？ジャック？」

「2人で先に行つてくれないか？」

その場に衝撃が走った。

「ジャック？アナタ本気？何考えてるの？この数、4人でもキツそうよ！？」

クイーン・ヴァルゴがジャック・コーヴァスに問い詰める。

「姉ちゃん、俺にはちゃんと理由がある」

「何よ？」

「シドウは相変わらず長時間の電波変換が無理だ。シドウを欠いたら敵を倒すのは難しいと思うんだ。」

クイーン・ヴァルゴは驚いて目を見開いた。

「ジャックも成長したなあ。クインティア」

アシッド・エースはクククと笑った。

「本当ね。けど私はジャックの意見、間違つてないと思うわ」  
ナイト・キングダムも同意した。

「……………」

クイーン・ヴァルゴは黙っている。

「どうするよ、クインティア？」

アシッド・エースが聞く。すると、クイーン・ヴァルゴは笑った。

「アナタ、そんな事言えるようになったのね…いいわ！シドウ、行きましょ」

そして、クイーン・ヴァルゴがアシッド・エースの手を引いた。

「そこなくっちゃ！じゃナイト・キングダム、ジャック・コーヴァス！頼んだぜ！」

「任しな！道は作ってやる！ペインヘルフレイム！！」

ジャック・コーヴァスは返事をする高く舞い上がり、炎を下に放つ。

「では私も！キングダムクラッシュャー！！」

ナイト・キングダムが右腕の鉄球を放つ。ウイルスはことごとくデリートされ、道が出来た。

「ありがとな！よし、クインティアしっかり掴まっておけよ」

アシッド・エースがそう言うと、クイーン・ヴァルゴはアシッド・エースに抱きついた。すると、アシッド・エースはエへへと少しやらしそうな笑い声を出した。

「クインティア大胆だな」

アシッド・エースがそう言うとクイーン・ヴァルゴは頭をシバいた。「素直じゃないな」。さあ行くぜ！ウイングブレード！！」

アシッド・エースは羽を広げ、猛スピードで出口に向かった。

突破せよ！ウイルスロード3（後書き）

くストリームの日常く

最近、トランプの『スピード』にハマってます（笑）  
いまだに負け無いです

いざ出陣！

僕は今出口の前に立っている。他のメンバーを待ってるのだ。しかし結構待ってるのにだれも来ない。

まさかみんなやられた！？

僕の心の中にそんな思いがよぎったが、すぐにピンクの閃光が此方に向かって来た。

ハープ・ノートだ！

少し僕は嬉しかったがハープ・ノートの顔は少し怒っているようだ。

「なんで怒ってるの？」

気になったからそう聞くと、ムツとした口調で

「スバル君がエリーちゃんとイチャイチャしてるからよ！！！」と怒って来た。

僕はイチャついたつもりなど微塵もなかった。

「もしかして…妬いてる？」

そう聞くと、ハープ・ノートは顔を赤くし、バカ！と怒鳴りつけてきた。

今度は八つ当たりですか…

そう言おうとしたが

「ハープ・ノート、凶星のようだな。」

と冷静な声が入って来た。声の主はバルジ・サーチであった。

「ロックマン…お前だけか？」

バルジ・サーチが尋ねてきたが、僕の前に赤、銀、緑、黒の閃光が

現れてその中から4人の電波人間が現れた。

「『交流会見参!』」

「カーネル・ブレイド推参!」

これは頼もしい面々だ。

「これだけか?」

カーネル・ブレイドが僕に聞いて来たが背後から声がした。

「俺達を忘れてるぜ?」

そこにはウイングブレードで此方に向かって来るアシッド・エースとアシッド・エースに掴まってるクイーン・ヴァルゴの姿がいた。

「ヒーロー&ヒロイン、遅れて参上!」

アシッド・エースがおどけて言う。

「誰がヒロインよ...」

そう言いながらもまんざらではなさそうに突っ込むクイーン・ヴァルゴ。まさに夫婦。

「よし、コレだけいたら大丈夫だな...後のメンバーにはウイルスをデリートしておくように言うておく!では準備はいいな!」

カーネル・ブレイドが呼びかけた。それにみんなは、ハイ!と返事をした。

「いざ出陣!」

アシッド・エースのその言葉を合図に、出口を出てWAXAの外に出た。

外に出た瞬間、上空から鋭い棘のような物が無数に降って来た。幸い全員よけて、ダメージはなかった。

「ほう、あれを全てよけたか…」薔薇のような電波体が上空のウエーブロードから見下げながら言った。

「随分と手荒なお出迎えだなあ」

ブルース・ソルジャーが口だけ笑った。顔は笑ってない。

「ふん、そんな事言っられるのも今だけです」

そう言うと薔薇のような電波体の周りに三体の電波体が姿を現した。一体は燕のような、一体はカブトムシのような、最後は…

「お前は…！」

ロックマンは目を見開いた。

「ンッフ、久しぶりだな、ロックマン！」

其処にはファンム・ブラックがいた。

「またやられに来やがったな！」

ウォーロックが挑発する。

「ンッフ、今回は一味違う…さあ脚本の幕開けだ！」

そう言うと敵4人は此方に向かって来た。

いざ出陣！（後書き）

大分遅いけど熱斗と彩斗兄さんハッピーバースデー（ ）遅  
すぎ

最近、流星の小説がメツチャ増えてますね…しかも皆さん上手い！

僕も負けないように頑張りたいです！

では感想、評価お願いします！

後、僕その他小説もよろしくお願いします！

剣技を極めし者(前書き)

今回はブルース・ソルジャー&カーネル・ブレイドのバトルです！

長いですがどうぞー！

## 剣技を極めし者

ブルース・ソルジャーとカーネル・ブレイドに燕のような電波体が飛んで来た。2人はそれを横に跳んで避けた。

「貴様は何者だ!?!」

ブルース・ソルジャーが尋ねた。

「俺の名はリーフ・スワロー。木星1のスピードが自慢さ!」  
リーフ・スワローは旋回しながら言った。

「フン、俺もスピードが売りだがな」

ブルース・ソルジャーが言い返す。

「言っときな!格の差を見せ付けてやる!」

そう言うところリーフ・スワローは凄まじいスピードで低空飛行して砂塵を上げ向かって来る。

「スクリーンディバイド!」

カーネル・ブレイドの剣から衝撃波が放たれた。しかしリーフ・スワローは少し高く飛び避けた。そしていきなりカーネル・ブレイドの目の前に迫って来た。

「何!?!」

「くらいな!クイツクフェザー!」

リーフ・スワローが自分の羽で攻撃して来た。

「ブルースシールド!」

間一髪の所でブルース・ソルジャーがカーネル・ブレイドの前に回り込み、羽の攻撃を防いだ。

「今度は俺の番だ!フミコミザン!」

ブルース・ソルジャーが一瞬にしてリーフ・スワローを切り裂いたように見えたが、リーフ・スワローはいつの間にか空にいた。

「何だと!?!」

ブルース・ソルジャーも流石に驚きを隠せない。

「もう終わりにしようかな!?!サウザンドフェザー!」

自分の羽を投げると羽がリーフ・スワローに変わった。

「分身か!？」

いつの間にかカーネル・ブレイド達は分身に囲まれていた。

「さ…死にな！」

そう言うつと分身を含めたリーフ・スワローが2人に向かって来る。

「チツ、デルタレイエツジ!!」

ブルース・ソルジャーはデルタの形に周りの敵を斬った。しかし、他の分身に追撃をくらう。

「ブルース・ソルジャー、合体技だ！」

カーネル・ブレイドの声で体制を立て直し、ブルース・ソルジャーはソードを構えた。

「リーダーズブレイド!!!」

2人は一気にリーフ・スワローを切り裂く。しかし、一体だけ残っていた。

「しまった!本物か！」

2人は回避体制をとったが時すでに遅し、リーフ・スワローが2人に猛スピードで体当たりした。ダメージは大きく、2人は倒れた。

「ハハハ、遅い!弱い!所詮はこの程度か!!」

リーフ・スワローは嘲笑った。

## 2人の意識内

(!カーネル・ブレイド…)

白い空間に2人は向かい合っていた。

（ブルース・ソルジャーか…）

（俺達は負けてしまったのか？）

ブルース・ソルジャーは不安そうに尋ねた。

（お前は どう思う？）

カーネル・ブレイドは逆に聞いた。

ブルース・ソルジャーは暫く下を向いて黙っていたが、やがて口を開いた。

（まだ、まだだ！まだ終わっていない！地球を試練から守らねばならない！）

すると、カーネル・ブレイドはフツと笑った。

（だろうな…俺も同感だ…）

そこで意識は途切れた

「さて…2人共楽にしてやるよ！」  
リーフ・スワローは空高く舞い上がり、猛スピードで急降下して来た。

その時、カーネル・ブレイドとブルース・ソルジャーのハンターが光った。そして僅かに音声が聞こえる。

『シンク口率…80%!!…90%…100%!!』

その音声と同時に2人が光り出した。

「何だ…この光は？」

余りの眩しさにリーフ・スワローも急降下を止めた。そして2つの光が一つになった…

「ソードマスター見参!!」

真紅のボディで所々は黒、黒のバイザー、白く長い髪、黄色いサベルを装備していた。

「これが…フルシンクロ…」

ソードマスター自身も驚いていた。

「姿変わっただけじゃ意味ネーよ!!サウザンドフェザー!」

再び羽を投げ、リーフ・スワローは自分の分身を作った。

しかし、分身は一瞬にして全て消えた。

「何!?何故だ!?!」

「俺が全て斬ったからさ」

リーフ・スワローの背後から声がした。声の主は勿論ソードマスターだ。

「いつの間に!?!」

リーフ・スワローは驚きを隠せない。

「貴様の分身を斬った時には此処にいたが？」

ソードマスターはクールな口調で話した。

「黙れ!死ね!」

そう言うところリーフ・スワローは再び舞い上がり、急降下した。

「くらいな!シルフィーウイング!」

そして一瞬にしてソードマスターに体当たりした。

「ザマあみる!」

「どつちがだ?」

声のした方向には既にソードマスターがソードを構えていた。

「散れ！ブラッディークロス！！！」

その言葉と同時にリーフ・スワローは十字に切り裂かれた。

「そんな…俺より速い奴がいたとは…」

そして、リーフ・スワローは消滅した。

「コレがフルシンクロの威力…」ソードマスターが自分の手を見て  
呟いた。

## 剣技を極めし者（後書き）

どうでしたか？感想、評価お願いします！

〜ストリームの日常〜

最近、友達に借りたロックマンX5にハマってます。初めは簡単だったんですが終盤がヤバ難しいです（泣）  
マリオ系は得意なのにロックマンX系はへばいです…

データファイルの方を少し設定等を書き直したんで見てください！

ではでは

愛のフルシンクロ〜大人ver〜（前書き）

長い…

もしかしたら今までで一番の出来かも…

## 愛のフルシンクロく大人ver

アシッド・エース、クイーン・ヴァルゴ、バルジ・サーチの前には薔薇のような電波体が降り立った。

「私の名はローズ・プラント。3人掛かりで私を倒すつもりですか？」

体に薔薇の棘を持ち、腕は薔薇の花びらのようだ。そして声は相手の心を見透かしたようで、冷静沈着で無表情である。

「3人もいれば十分だわ…あなた、余裕と思ってるでしょう？」

クイーン・ヴァルゴも冷静沈着、相手の心を見透かしている様子だ。  
「ええ勿論…水星や火星の方々とは訳が違いますわ…さて、御託はもうお終い、行きますよ！」

そう言うと、ローズ・プラントは走り、3人の方に向かって来た。

「ローズニードル！」

地面から巨大な薔薇の棘が出てくる。

「ぐはっ！」

「！シドゥー！」

アシッド・エースがモロに棘に刺さってしまい、クイーン・ヴァルゴはアシッド・エースに駆け寄った。それを見るなり、ローズ・プラントは腕を棘を装備した鞭に変えた。

「ローズウィップ！！」

アシッド・エースと近寄っていたクイーン・ヴァルゴごと鞭で縛り上げた。

「貴様、2人を放せ！スコープ…」

バルジ・サーチは2人を助けようとスコープガンを撃とうとしたが、ローズ・プラントが縛り上げた2人を此方に向けた。

「おっと…私を撃てばこのザコ2人で攻撃を防ぎますが…？」

ローズ・プラントがニヤリと笑った。

なんて奴だ…

バルジ・サーチは相手の性格に恐ろしさを覚えると共に、この状況に困惑した。

どうすれば…？

攻撃すれば仲間がダメージ、しかし何もしなければ2人は縛られたままダメージを受け続ける…

情けないな…

アシッド・キース  
俺は思った。

3人掛かりでも歯が立たない、ダメージを喰らいつぱなし、挙げ句の果てに愛しの人さえも助けられない…

このまま…クインティアと力尽きてしまうのか…みんな…それからクインティア…ごめん…みんな後は任した…

意識が徐々に遠退いて行く。

「…きらめ…で…」  
意識が遠退いて行く途中、俺は微かに聞こえた。クインティアの声だ…

「諦めないで…」

俺はその声で意識が少し戻り、クイーン・ヴァルゴ、クインティアの声を聞いた。

「アナタ、何諦めちゃってるのよ…?」

クイーン・ヴァルゴが話しかけてくる。

ハハハ…死ぬ前に好きな奴にこんな姿見られるなんて最悪だな…

「まだ、まだよ…」

「……………」

「貴方より小さく、未熟な子達が必死になって戦ってるのに貴方は此処で終わるの!？」

クイーン・ヴァルゴが声を枯らしながら言った。

そうだ…そうだよな…スバル達はどんな困難にも諦めなかったし今も戦ってる。まだ中学生にもならないガキが。それなのに…大人の俺が諦めてどうするよ!？ありがとう、クインティア…

『シンク口率…80%…90%…』

ハンターから音声が聞こえる…どうやら俺達はコレに賭けるしか無いみたいだな…

「クインティア!最後の賭け、フルシンク口だ!」

俺は有りつ丈の声で言った。

「でも…」

「大丈夫だ!」

「分かったわ!」

クイーン・ヴァルゴは頷いた。

『シンク口率…100%!!』

「フルシンク口!!」

俺達2人は同時に叫んだ。

「クソ、どうしたら…?」

バルジ・サーチは未だに打つ手を思いつかなかった。

「さあ、どうする?」

ローズ・プラントにそう言われ、余計に焦る。その時だった。

鞭に縛られていた2人が輝き、眩しさの余りローズ・プラントは2人を放した。そして2人は1つの光にまとまった。

「ハート・オブ・エース、推参!!」

片手にクイーン・ヴァルゴの杖を、アシッド・エースのボディの胸に青く輝く石が、そして翼がクイーン・ヴァルゴの赤っぽい色に変化した。

「コレがフルシンク口…」

「姿変わっただけじゃ意味ないですよ…」

ローズ・プラントは動揺する気配を見せない。

「ローズニードル！」

再び地面から薔薇の棘が出てくる。

「オメガヴェール！」

しかしハート・オブ・エースは青いバリアを張った。

「チィ、ローズウィップ！」

再び鞭が襲いかかる。

「アクアソード！」

ハート・オブ・エースが疾風のようなスピードで鞭を切り裂いた。

「そんな馬鹿な……」

「貴様の底は見えた……トドメだ……」

ハート・オブ・エースはそう言っていると、杖を真っ直ぐ構えた。

「……ロイヤルストリートフラッシュュ……！」そう言った時、真っ直ぐの閃光が杖から放たれた。

バタッ

ローズ・プラントは倒れた。一瞬で分からなかったがロイヤルストリートフラッシュュがローズ・プラントの胸を貫いたようだ。それでローズ・プラントの胸には穴があった。

……勝った……

ハート・オブ・エースはフルシンクロを解いた。そしてクイーン・ヴァルゴとアシッド・エースは見つめあった。

「クインティア……有難うな……」

「何がよ？」

「お前のお陰で勝てた……」

しかし、クイーン・ヴァルゴはそっぽを向いた。

「…馬鹿…」

内心嬉しいようだが発した言葉は素っ気ない。

「オイ、素直に感謝してるのにそりゃ無いぜ〜！」

「…五月蠅いわね…馬鹿だから良いじゃない…」

「可愛く無いぜ〜そんなんじゃ結婚出来ないぜ〜？」

アシッド・エースが茶化す。しかし、クイーン・ヴァルゴは顔を赤くして言った。

「大丈夫。貴方と結婚するし…」

皆が必死に戦ってるのも忘れ2人はイチヤイチャしていた。

「この空気、俺の出番無しだな…てゆーか皆、俺の事忘れてるんじや…」

バルジ・サーチが2人を少し離れた所から見て悲しげに呟いた。

愛のフルシンクロ〜大人ver〜（後書き）

どうでしたか？感想、評価お願いします！

〜ストリームの日常〜

この前の練習試合で僕のチームのAって奴を大きな声で呼んだら、  
敵チームにも偶然Aって奴がいて、

「おう！俺Aやで！」

と僕に手をふり返してきました…

ノリ良すぎと思いと同時にちよつと引きました（笑）

愛のフルシンクロー子供ver (前書き)

今回はスバルとミソラです

## 愛のフルシンクロ〜子供ver〜

「お前等の相手は勿論私だ!!」

「ファントム・ブラック…やっぱり貴方ね…」

「ハープ・ノートは呟いた。そして身構える。」

「ソッフ、今回はいつもと違うぞ!」

「とか言いながらいつもワンパターンだよな?」

ウォーロックが突っ込む。

「五月蠅い!今日こそ復讐だ!」

「来るよ、ミソラちゃん!」

「うん!」

そのやり取りのすぐ後にファントム・ブラックがステッキソードで攻撃してきた。

「バトルカード、ブレイクサーベル!」

ガキン

スバルは左腕をサーベルに変え、ファントム・ブラックのステッキソードをとめる。

「ググッ」

「やあ!」

スバルはぶつけ合っていたステッキソードをサーベルでなぎ払った。

「ミソラちゃん!」

「任して!マジンガンストリング!」

「ハープ・ノートのギターから放たれた絃がファントム・ブラックに刺さり、音符もファントム・ブラックにヒットする。」

「やっぱり弱いな!」

ウォーロックが余裕をかました。すると、ファントム・ブラックは

笑い、体に刺さった絃を掴んだ。

「ンフフ！こんな想定内さ…こっからが本番だ！」

そう言うとファントム・ブラックは掴んだ絃を自分の方へ引っ張った。勿論、ギターごとハープ・ノートも引き寄せられる。

「キヤア！」

「！ミソラちゃん！」

「ンフフ！死ぬ〜！」

そしてファントム・ブラックはステッキソードを構えた。絃を持っているためハープ・ノートは回避不可能だ。

ズシャ

その嫌な音と同時にハープ・ノートは残酷に切り裂かれた。

そしてファントム・ブラックは絃を体から抜き、絃を放した。しかし、ハープ・ノートはピクリとも動かない。

「そんな…ミソラちゃん…」

ロックマンは絶望感に溢れた顔でハープ・ノートに駆け寄った。

良かった…息は僅かにある。

ロックマンは一瞬だけ安堵の溜め息を漏らした。

「大丈夫さ、殺してはいない…さあ続きを始めよう。ザコはほっておいて…ンフフ！」

この言葉でスバルの心に火が付いた。

「…ミソラちゃんがザコ…？ふざけるな！今までミソラちゃんのお陰でどれだけ僕が助かったか！この子の存在が僕にどれだけ大きかったか！」

ロックマンは少し逆上している。がしかしファントム・ブラックは相変わらず笑っている。

「テメー…」ウォーロックまで怒っているようだ。

「其方が来ないなら此方から行くぞ」

そしてファントム・ブラックはファントムクローを繰り出す。

「シヨックノート…！」

どこからともなくアンプから音符が出てきてファントム・ブラックにヒットした。

「…この攻撃は…」

攻撃が発された方を見ると、フラフラで息切れしながらハープ・ノートが立っていた。

「おのれ！貴様…まだ立てるのか…」

「ハアハア…私はいつもスバル君に助けられてばかり…今だってそう…足手まといは嫌だ！」

ハープ・ノートが力強く言う。しかし、限界なのかへたりと座り込んでしまった。その隙を見てファントム・ブラックがステッキソードで切りかかって来る。

「貴様…今度は殺してくれる！」

「バトルカード、ヘンゲノジュツ！」

ロックマンがファントム・ブラックの前に回り込み、ワザと攻撃を喰らい、切りかかった。「これ以上、ミソラちゃんに指一本触れさ

せない！」

そうロックマンはファントム・ブラックに言うと今度はハープ・ノートの方を見て言った。

「ミソラちゃん…君は足手まといなんかじゃないよ…君のお陰で今の僕がいるんだから」

「そんなのお互い様だよ！」

ハープ・ノートは苦しそうに笑った。

「だから2人でファントム・ブラックを倒そう？」

「うん！絆の力で！」

ハープ・ノートがそう答えると2人のハンターが光出した。

「これは…？」

ハープ・ノートは少し不安な顔をしたがロックマンは笑った。

「ミソラちゃん、意識集中して！」

ロックマンがそう言うとハープ・ノートは頷き、目を瞑った。

「行くよ…ミソラちゃん…フルシンクロ！！」

青とピンクの光が混ざり、一つになると一体の電波人間がいた。

「ソングモード・ロックマン！！」

体はピンクで髪は金髪、青いマフラー、青と黄色のギターを両手に持っていた。

「貴様…何者だ…」

ファントム・ブラックが一步後ろへ下がる。

「ロックマンとハープ・ノートが融合した姿さ！」

ソングモード・ロックマンはギターを構える。

「ミソラちゃんの仕返しだ！シューティングストリング！」

ソングモード・ロックマンがそう言うと、ギターから百本以上の絃が刺さり、星形の音符がファントム・ブラックに追撃を仕掛けた。

「ガハッ！なんだこの力は…」  
「トドメだ！アルティメットバレード！！」  
ソングモード・ロックマンから放たれた美声の星形の音波がファン  
トム・ブラックにヒットし倒れた。そしてファントム・ブラックは  
悔しそうにマントを羽織り、どこかへ消えた。

ソングモード・ロックマンはフルシンクロを解いた。「スバル君…  
有難う」

ハープ・ノートが口を開いた。

「何が？」

「『ミソラちゃんには指一本触れさせない！』って言うてくれて…  
それに足手まといじゃないよって…」

「本当の事言っただけだよ」

ロックマンは普通に返した。しかし、ロックマンの視界がいきなり  
エメラルドグリーンで一杯になった。そして唇に何かが触れる。

「お礼だよ！」

ハープ・ノートのキスでロックマンは放心状態になった。

みんなが必死に戦っているのに…

愛のフルシンクロ〜子供ver〜（後書き）

毎度長い！スイマセンm（| |）m

最近スバミソが少なかったんですが久しぶりに少し出せました（笑）

オリジナル小説のダイヤモンドも更新したんで良かったら読んで下さいね！

ではでは

作者組VS関西弁野郎(前書き)

タイトル適当です

いいの思いつかんかったで…

## 作者組VS関西弁野郎

サイバー・ペルセウスとトマホーク・パワードの前にカブトムシのような電波体が降りて来た。

「お前は誰だ？」

トマホーク・パワードはトマホークを構え尋ねた。

「ワイの名前はミラ・ヘラクレス。地球に試練を与えるため此処に来たんや！」

何故か関西弁混じりで、黒のアーマー、頭には三本の角がある。そしてその角を禍々しく光らせ2人を指差した。

「アンタらには恨みは有らへんけど、此処で消えて貰うで」

「黙れ、俺達そんな弱く無いぜ！」

ペルセウスが出てきて大きな声で言い返した。

「そう、それに僕等は地球を守らねばならない…悪いけど、君には負けて貰う！」

サイバー・ペルセウスの目は闘志に満ち溢れていた。そして銀色の羽を広げ、臨戦態勢に入った。

「コレはちよつとは楽しめそうやわ…ほな行くで！」

「ウエーブバトル、ライド・オン！！！！」

「トマホークブーメラン！！」

トマホーク・パワードがトマホークを投げ攻撃した。

「そんなん効かへんで！！」

ミラ・ヘラクレスは角でトマホークを跳ね返した。そして、跳ね返ったトマホークはトマホーク・パワードに直撃した。

「グフツ！」

「今度はワイヤ！インセクトブレード！」

ミラ・ヘラクレスは3本の角の内、2本を外し、手で持った。そして切りかかって来る。

「ペルセウススイング！」

サイバー・ペルセウスのハンターからペルセウスが出て来て切り裂く。

「オラア！」

「ウリヤ！」

ガキン

剣と爪がぶつかり合う。しかし、剣の方が強い。

「セイヤ！」

ミラ・ヘラクレスはペルセウスをなぎ払い、ペルセウスはハンターに戻ってしまった。お陰でサイバー・ペルセウスは無防備だ。

「隙有り！」

ミラ・ヘラクレスが切りかかって来たがトマホーク・パワーがギリギリの所で受け止めた。

「力勝負なら負けないぜ！」

「やるやないか。けど、ワイも負けんで！」

ギリギリ

トマホークと剣がぶつかり合う。ほぼ互角だ。

「援護するぜ、メテオリックシャワー！」

サイバー・ペルセウスが空から無数のメテオを降らし、援護する。

「グワ！」

メテオは見事にミラ・ヘラクレスにヒットした。

「チツ、やるやないか！」

「「そつちもね！」」

両者は睨み合いつつも笑っている。バトルを楽しんでるようだ。

「こんなに楽しいバトルは久しぶりやわ。って訳で本気で行かして  
もらうで！」

「「望むところだ！」」

サイバー・ペルセウスとトマホーク・パワードがそう答える。すると、2人のハンターが輝いた。

「…これは…？」

トマホーク・パワードが目をパチクリさした。

「遂に僕等もフルシンクロ出来るみたいだよ！」

サイバー・ペルセウスが笑った。

「マジか!？」

トマホーク・パワードが言ったが、サイバー・ペルセウスが無視し  
叫ぶ。

「フルシンクロ!!！」

すると、2人は光に包まれやがて一つになった。

「見参! パワード・ペルセウス!!！」

トマホーク・パワードのボディに銀色の翼とボディ、鋭い爪が加わ  
った。

「ほう、フルシンクロかいな。こりゃあ燃えて来たで〜」

ミラ・ヘラクレスは舌なめずりをした。そして、角を3本に戻した。

「トライギロチン!!」

ミラ・ヘラクレスはそう言つと、3本の角でパウード・ペルセウスを挟もうとした。しかし、パウード・ペルセウスは舞い上がり上空から思い切りトマホークをミラ・ヘラクレスに向かって叩き付けた。「そんなん当たらんぞ!」

ミラ・ヘラクレスは余裕を見せたがパウード・ペルセウスも同じように余裕を見せた。

「どうかな?」

それと同時にトマホークが叩き付けられた場所から衝撃波が出て来た。

「パウードウエーブ!!」

「しまった!油断したで!」

しかし時すでに遅し、衝撃波がミラ・ヘラクレスにクリーンヒットした。

「グワァー!!」

そして、ミラ・ヘラクレスは倒れ、動かなかった。

作者組VS関西弁野郎（後書き）

関西弁があつて関西以外の人は読みにくいですね…スイマセンm）  
——）m

ミラ・ヘラクレスがデリートされて無いのは、コイツがちょっと重要キャラだからです（笑）ほんの少しですが…

## 【第4章・真実】優しい奴

「ワイの負けや…」

ミラ・ヘラクレスは俯いたまま言った。

「トドメをさしてくれ…最後にいいバトルやれたからな…悔いはあらへん」

空を見たまま続ける。

「嫌だね」

パワード・ペルセウスは同じように空を見た。

「何でやねん！ワイは地球侵略者やで？」

「戦ってる最中に君は地球侵略に反対していると気付いた」

「なんやて！」

「ふっ 凶星か…」

ミラ・ヘラクレスは自分の口を押さえた。しかし、すぐに口を開く。「ワイは…楽しくバトルしたいだけなんや…実際、木星で生活してる時はそやった。けど…アイツ等に木星が支配下にされてからは…敵を殺さなアカンって言われたんや。それからはバトルすることが苦痛になっ たんや…」

話終えたミラ・ヘラクレスの瞳は酷く悲しかった。

なんて辛い事実なんだ…

パワード・ペルセウスはそう思った。それと同時に、地球に試練を与えようとしている奴らに対し、怒りを覚えた。「なあ、奴らの事教えてくれないか!？」パワード・ペルセウスは詰め寄った。

ミラ・ヘラクレスは少し困惑した表情をしたが、わかった。みんなを集めてくれと言ってくれた。そして、パワード・ペルセウスはフルシンク口を解き、皆に連絡をした。

〈WAXAの玄関前〉

チームメイトがシンを除き、全て揃った。

「オイ、トマホーク・パワード、こんな侵略者の事信用していいのか？」

カーネル・ブレイドが尋ねた。すると、サイバー・ペルセウスは少しムツとした顔をして答えた。

「コイツは本当は優しいやつさ。ほぼ強制的に戦わさせられてるんだ」

「…取り敢えず貴様らのボスの情報を聞かして貰おうか。しかし、嘘をつくなよ。ついたら殺す！」

カーネル・ブレイドはサイバー・ペルセウスの言葉を無視し言った。「構わんで」

ミラ・ヘラクレスはそう言つと話始めた。

【第4章・真実】優しい奴（後書き）

次回、敵の秘密が明かされます！  
評価、感想お願いします！

ロックマンエグゼの方も更新したんで読んで下さいね！

〜ストリームの日曜〜

いところから漫画ルーキーズ全巻借りました！読破しますよ〜！！  
…テスト一週間前にこんな事してたらダメだろ…

## 敵の目的

「まあ、アンタら、電波変換解きいや」

ミラ・ヘラクレスに促され、皆は電波変換を解いた。

「ほな、アイツ等の目的は知つとるか？」

ミラ・ヘラクレスがみんなに尋ねた。

「えっ、地球抹殺だろ？」

ジャックが尋ね返した。

「まあ、大体正解や。アイツ等は誤った電波技術が発達していると思つた惑星を潰して支配してるんや…そして、宇宙の大改革をするみたいや」

ミラ・ヘラクレスの声が低くなる。

「地球の電波技術が誤ってるだつて！？しかも、宇宙大改革！？」  
星斗がデカい声を上げた。

「まあ理由は前のメテオGやな」

ミラ・ヘラクレスは正反対で冷静である。

「続けるで。アイツ等地球に試練を与えてるけど…こんなのまだ序の口なんや」

「オイ、スバル。序の口つてどういう意味だ？」

ウォーロックが出て来てスバルに尋ねた。

「序の口つてのは…」

「まだ準備運動程度つて事ですよ」

アシッドが出て来て答えた。

「テメーに聞いてねーよ！…けど…こっから面白そうだな！」  
「全くだぜ！」

ウォーロックとペルセウスは舌なめずりをした。

「ハア〜」

それを見てオペレーター2人は溜め息をついた。

「閑話休題！！お前等、要らん質問はするな！」

フォボスが皆を正した。

「ホンマヤ…でや、アンタら、ガイザー・エッジワースを知っとるか？」

ミラ・ヘラクレスがまた確認した。

「声だけしか分からねーな…」

シドウが言った。確かに、この戦いの始まりの時にハンターに音声を入れて来た以外、関わりが有る者はいない。

「そうか…ワイもあんま知らん…けど奴は5人いる内の幹部の一人や…」

ミラ・ヘラクレスの表情が更に曇った。

「それで…奴もヤバいけどや、他の4人の内の2人は地球に来たことが有るらしいで…」

「地球に!？」

珍しくバルジが大声を出した。

「ああ、しかも1人はアンタらみたい人間で電波変換出来る…」

空気が一気に凍り付く。地球人も敵に回ってると言う事実には驚いて何も言えないのだ。

「「「へっ、どんな奴らだろうと俺達が潰してやるぜ!」「」」

ジェニミとウォーロック、ペルセウスが見事にハモった。確かに、

その通りだ。

「そうですね…地球が私達を守るのです!」  
「プライドが自分達の使命を再確認した。」

「そうだネ!」エリーも続く。

「俺達に任せろってんだ!」

星斗が自信満々に言う。

「アンタら頼もしいな!この戦い、止めてくれや!アンタら信じてるで!」

ミラ・ヘラクレスがパツパツをかけた。

「けど…宇宙の大改革って何だろう?」

ツカサがふと呟く。

「悪いが…それはわからんのか…ワイ等幹部の言いなりやし…」  
「すまん、と頭を下げた。」

ピーピー

フォボスのハンターに通信が入った。相手はシンだ。

「どうした?」

フォボスが聞くとシンは少し焦った口調であった。

「上空から凄くノットレジェンドで危険な電波体が!」

「何だと!?!」

フォボスは上を見た。

すると何かが向かって来る。電波体であった。

「裏切り者、我等の裁き受けるが良い!」

敵の目的（後書き）

あんまり敵の秘密分かりませんでしたね…スイマセンm（　）m  
けど…次回で敵のボスや幹部が明らかになります！

けど…テスト週間なんで多分、更新出来ません。

スイマセンm（　）m

ガイザー・エッジワース(前書き)

題名が…

## ガイザー・エッジワース

「何、あの電波体？」

ミソラが呟く。それと同時にミラ・ヘラクレスの顔が恐怖一色に染まった。

「みんな、電波変換や！」

ミラ・ヘラクレスにいきなりそう言われ、取り敢えずそこにいた全員が電波変換した。

皆が電波変換を終えた瞬間、謎の電波体からレーザーのような物が放たれ、ミラ・ヘラクレスに直撃した。

「グハッ！お前は……」

「裏切るからだ……死ぬ！ザコが！」そう言った瞬間、ミラ・ヘラクレスは消えた。

「貴様……何者だ！？」

カーネル・ブレイドがサーベルを構える。

「落ち着け……お前等とやり合っつもりは無い」

言葉こそ普通だが、謎の電波体が放つ威圧感尋常ではなかった。

「貴様……よくもミラ・ヘラクレスを！」

敵であつたに関わらず、自分達に親切にしてくれたミラ・ヘラクレスを殺されたため、トマホーク・パワードが攻撃を仕掛けた。

「喰らえ、トマホークスイング！」

トマホーク・パワードがトマホークを振りかざした。

ピタッ

謎の電波体は人差し指一本でトマホークを受け止めた。

その瞬間、その場にいた全員が目を見開いた。

「何！？俺の攻撃が…」

「全く…やり合うつもりは無いつつてるのだがな…！」

謎の電波体はデコピンでトマホーク・パスワードをふっ飛ばした。そして、話し出した。

「スイマセンね、取り乱して…遅れたが、私の名前はガイザー・エツジワース。お目にかかるのは初めてですね」

「お前がガイザー・エツジワース…」

スター・エグゼが言った。

「はい…まあ、裏切り者から色々聞いたようですが、私がキチンとお教えて差し上げましょう…ククク」

ガイザー・エツジワースは不気味に笑った。

「まあ、今私達の活動拠点の惑星が日本のコスモウエーブの近くにありますが招待しましょう…着いて来て下さいね…大丈夫。危害は加えませんよ」

ガイザー・エツジワースはウェーブロードに飛び上がる。

「…大佐…どうします…？アイツは信用出来ませんよ…？」

アシッド・エースがカーネル・ブレイドにおずおずと尋ねた。流石のアシッド・エースもこの時ばかりは慎重だ。

「行きましょう！」

アシッド・エースとカーネル・ブレイドが考えてる途中、その声が聞こえた。声の主はスバル、ロックマンであった。

「スバル…」

「デリートされたミラ・ヘラクレスのためにも、それから地球を救うためにも、真実を知る必要があると思います」

ロックマンの目に迷いはなかった。

カーネル・ブレイドは少し考え、口を開いた。

「よし、良いだろう……ついて行くぞ！真実を知ろう」

そう言っただけでカーネル・ブレイドはウェーブロードに飛び上がった。

それに続いて、メンバー全員がウェーブロードに飛び上がり、ガイザー・エッジワースに続いた。  
コスモウェーブへのワープホールの前でガイザー・エッジワースは立ち止まった。

「心の準備はよろしいですね…？」  
誰も何も言わない。

それを見て、ガイザー・エッジワースは無言でワープホールに入った。メンバー全員がそれに続いた…

## ガイザー・エッジワース（後書き）

スイマセンm（| |）mテスト勉強で更新遅れました…

展開遅いですね…けど…次回敵の素性がマジでわかります！

ロックマンエグゼと野球の小説も更新したんで読んで下さい！

評価、感想待ってます！

敵の全て（前書き）

敵の素性が明らかになります！  
でも長いです…スイマセンm（  
）  
）  
m

## 敵の全て

「日本のコスモウエーブ」

ワープホールから出ると、いつものように美しい星が見える。しかし、1つだけ見覚えのない七色の惑星があった。

「あの惑星が私達の活動拠点です。美しいでしょう?」

確かに美しい。だが、何処か恐ろしい…

スバルは感じた。何か分からないが、あの惑星の力を。

「さ…本題に入りましょうか。まず、私達の組織名は『ジャッジ・プラネット』と言います」

ガイザー・エッジワースは話始めた。ここからは一語一句たりとも聞き逃せない。

「宇宙をジャッジする…!まさかそれでお前等、地球や火星とかを攻撃してるのか?」

カーネル・ブレイドが驚いて尋ねた。

「はい…まあ誤った電波技術が発展した惑星を支配してるだけです。地球の場合はまだ抹殺するか、あの御方が検討中ですが…」

クククと笑ったがすぐ真顔に戻った。

「では、私達の組織の位について話しましょう…まず、今までにあなた方が戦って来た敵、あれは我が組織の最低ランクの強さですね…」

「あれが最低ランク!?」

ハープ・ノートが思わず裏がえった大声を出した。

声を出したのはハープ・ノートだが、みんな同じ事を思ってるだろう。

「はい、それで次に3星神がいます。コイツ等はかつて木星、火星、水星を治めていたヤツらですね…」  
何人かの顔が段々沈んで行く。

「そして、私達、幹部五人衆！」

そう言った瞬間、打ち合わせをしていたかのように、ガイザー・エツジワースの周りに3人の電波体と1人の電波人間が現れた。

スバルと200年前のウィザードの目の前にはその中には見覚えのある電波体がいた。

「シ、シリウス…！」

「お久しぶりですね…ロックマン」

デリートしたはずのブラックホールサーバーの管理人、シリウスがいた。そして…

「……………スラー…！」

コイツを知るウィザードは全員口を揃えた。

「覚えていてくれましたか…光栄ですね！」

デューオの代弁者で地球に試練を与え、フォルテにデリートされたはずのスラーがいた。

「君はフォルテにデリートされたはず…」

エグゼが驚きを隠せないまま聞いた。

「確かに私は200年前、フォルテと戦いデリートされたはずだった…しかし、辛うじて生きていました。そこでこの組織に出会い、体を修復してもらい、仲間になりました」

スラーはかつての残酷な笑みを浮かべ、続ける。

「オペレーターが違えど、またアナタ達とやり合うとはね…！」

「シリウス… テメーまだ生きていやがったか!!」  
ウォーロックがスバルのハンターから出てビーストスイングを仕掛けた。しかし、シリウスのファイアウォールに防がれる。  
「ガイザー・エッジワースの言うように、今は戦いませんよ…」  
相変わらず顔は常に不気味な笑みを浮かべている。

「どうやら何人かは敵と面識あるみたいだけど、君達2人はみんな初対面みたいだね」

サイバー・ペルセウスが目の中の電波人間と電波体に話し掛けた。

「そのようじゃな…」

老人人型の電波体が答えた。

人間なら軽く100歳を超えてそうな電波体だ。何故こんな奴が幹部なのかサイバー・ペルセウスは気になった。が、そこには触れず、隣のスラッとしたピエロのような外見で、色は白、ロックマンに似たバイザーを電波人間を見た。

「アナタは？」

「私はピエロ・マジシャンよ」

幹部五人衆とは信じれないぐらい優しい目だ。

「アナタは…電波人間ですよネ？何故地球の敵を…」

エリー・メデイはおかしいと思ったのか尋ねた。すると、ピエロ・マジシャンはキリツとした鋭い目になった。

「いずれ分かる！今は敵よ！其処はわきまえておきなさい！」

其処まで怒る必要があるのか？それに、どことなく戦うのが嫌みだ  
いだ…

サイバー・ペルセウスの近くにいたジェニミ・スパークWはそう思  
った。

「おい、ガイザー・エッジワース」

いきなり低い声がコスモウエーブに響き渡った。

「ハイ。何ですか？」

「其処には我の知る者達がいるようだな…」

この威圧感のある声…どこかで…

エグゼは感じた。脳に神経を集中させ記憶を探る。

「まさか…この声…」

カーネル・ブレイドのハンターからカーネルが出て来る。

「ロックマン、どうやらアイツみたいだな…」

エグゼはわかった。敵の正体を。

「でも、アイツは君とバレルさんが…」

「どうせ、ガイザー・エッジワースにでも再構築されたんだろう」

カーネルは表情こそ無表情だが、唇を噛み締めている。

「では、我の事を少し話しておけ…」

「…ハイ」

そして低い声は消えた。

「今のは私達の更にも上の御方…」

「言わなくていいよ！」

ガイザー・エッジワースが話しかけたがその声はエグゼによりかき消された。

「おい、ロックマン、なんだよ？いきなり」

スター・エグゼがエグゼに尋ねた。エグゼは黙っている。

「そうですね…アナタ達は話さなくても分かりますよね」

スラーがフツと笑う。そして、エグゼはゆっくり口を開いた。

「君達のボスは…デューオ…」

「当たり前です」

ガイザー・エッジワースが短く答えた。すると、エグゼの言った名前を知るウィザードはあの時の記憶がフラッシュバックした。

敵の全て（後書き）

「なんか辻褄が合わない!!」

と思わないでスルーして下さいスイマセンm（| |）m

この話数には色々な伏線があります！

後、ピエロ・マジシャンはリクエスト出演です！正体は…考えて下さい（笑）

後、老人のウィザードの名前は後々分かりますんで…

評価、感想待ってます！

番外編〜目立たない君達へ1〜（前書き）

メツチャ中途半端な所ですがまあ間合い（なんの？）を取るためにやりました（爆）

ではつまらない企画ですがどうぞ！

## 番外編〜目立たない君達へ1〜

こんにちは！ストリームです

「何この題名！」

と思われたかも知れませんが、このコーナーでは正直、本編で目立って無い人達を解説したり、僕と対談したりするコーナーです！

このコーナー、結構多くなると思います。

では、記念すべき第1回、いってみよう！

「第1回のゲストは…小説内での僕のウィザード、トマホークマンです！」

「何故に俺!？」

イヤー、僕の御陰でお前の出番も少ないし

「死ぬテメー!!!エグゼ時代は結構目立ってたのによ!」

黙れ!ゲームでは二回、しかもエグゼ5ではチームオブカーネルのイケメン役で出たからって調子に乗るな!

「アニメも俺後半活躍しただろ!？」

過去は振り返るな…

「死ぬテメー!!!このクソオペレーターが」

あつ、出番減らすな。

「ストリームサイコー（棒読み）」

では、一段落したし、本題へGO!さて、僕、ストリームの初登場は第1部の最終話であります。しかし、その時は電波変換が出来ずに戦いを見ているだけでした。

「お似合いだな!」

とか言っているトマホークマンも初登場は第2部『救世主』と言うかなり遅めの登場!か・な・り!しかも、出番少ないし、いきなり僕が電波変換して登場したから、コイツの初登場はもう少し遅いのです!

「もう、デリートされたい……」  
「じゃあお望みどうり……」

「ちよっ!ジョーク!出番、まだ数える程しかないのに!せめて……  
もう少し!」

仕方ないな

トマホーク・パワードで初登場した際はピンチのジャックを助けると言うナイスな登場で、目立った。

しかし、最近の『ガイザー・エッジワース』では、ガイザー・エッジワースにデコピンで跳ね返されると言うダサさ!デ・コ・ピ・ンで!自慢のパワーも通用せず、いかにガイザー・エッジワースが強

いのか（トマホーク・パスワードが弱いのか）を示してしまった。  
しかし、『作者組VS関西弁野郎』では見事、サイバー・ペルセウスこと勇輝さんとのフルシンクロ！感動だ！

「てゆうか作者のフルシンクロ時のネーミングセンスの無さをどうにかして欲しいな！」

確かにそうだが…死ぬ、バトルカード、オックス…

「わかった！わかったから！もうシナイから！」

よろしい

「謝らない方が良かった…」  
なんか言った？

「ん？何も？」

では、そろそろ終わりの時間がやって来たようですね…

「やっとか…」

と言うわけで次回以降、本編ではトマホークマンのピンでの登場を  
少なくする事になりました。

「今なんて…」

では、皆様、今度はいつになるか分かりませんが、また次回で会い  
ましょう。次回はサーチマンとバルジのコンビです！  
ではサヨウナラ！

「出番〜！出番くれ〜！！」

番外編〜目立たない君達へ1〜（後書き）

コレ、またやります！つまらないのに…

では次回は本編です！敵の素性を知ったスバル達はどうなる！？

では感想、評価お願いします！

これから…（前書き）

更新遅れ、スイマセンでした…

事情により、これからこんなペースになってしまいます…

これから…

「デューオ…お前なら出来るだろ？」

「バレル様、私も行きます」

ブルース  
俺は脳に神経を集中させあの時の記憶を探っていた。そして、臆気だが思い出した。デューオの危機はバレルとカーネルがクロスヒュージョンして、地球から救った。だが、その後は知らない…だから、勝手にデューオはデリートされたと思っていた。だから…デューオにまた会うとは思ってもなかった。

「まあ、そんなにビビらないで下さいよ…私達はこれから1ヶ月、ウイルスでしか攻撃しませんから…」  
シリウスが冗談か本当か分からない事を言った。この場にいる全員は誰も信じていない。

「信じてないようじゃなあ…若者よ」

老人型ウィザードは此方の心を見透かして来た。

「…何故わかった!？」

バルジ・サーチが聞いた。誰も表には感情を出していなかったからだろう。

「フオフオ…ワシの能力の一つじゃ…」

「こら、喋り過ぎだ!」

ガイザー・エッジワースが老人型ウィザードを質した。老人型ウィザードはすまぬ、すまぬと謝った。

「さ…ソロソロデューオ様の元に戻ります…先程言ったのは本当です…デューオ様があなた達の絆がどれほどか見たいそうで…」

ガイザー・エッジワースは怪訝そうな顔をしながら言った。おそろくサツサとスバル達を倒したいのだろう。

「まあ、それ以外にも色々訳があるんで…1ヶ月後…地球は終焉を迎えるでしょう。では、また会いましょう」

シリウスが補足した。コイツ等の事情…きっと恐ろしいことだろう。それでは、と言って幹部五人衆は消えた。

誰もが真実を知り、黙っている。しかし、その沈黙を破ったのは、シドウだった。

「どうした〜皆さん！？そんな暗い顔しなくても、ちゃんと準備したら大丈夫だろ。1ヶ月あるし」

シドウは常に前向きだ。悲観的になることはメツタに無い。

「とりあえず、1ヶ月は休み。しかし、会議をするときは連絡する。ウイルスが出現したときも連絡する」

フォボスがこれからの事を連絡した。

「でわ、今日は解散！あつ、エリーと星斗、ジャック残ってくれ」  
そこでスバル達は長い1日を終えた。

「何で俺達は残されたんだ？」

ジャックがシドウに聞いた。

「お前ら3人、最近ろくに学校行けてないよな？」

シドウは分かりきった顔で3人に聞いてきた。

「当ったり前ネ！」

エリーが得答えた。それもその筈、エリーはチヨイナ出身のアイドル。最近日本の芸能界に入ったばかりだ。（何故こんなに日本語が上手いかは不明）

だから日本に来てから学校には行った事がない。

ジャックに関しても星斗にしても色々忙しい。

「だから明日からある学校にお前らを通わせる！」

「「「はあ!?!?!」」」

シドウの言った事に3人が見事に反応した。

「あんだ俺達の親か?!」

「星斗君、そんなに言わなくても・・・」

エグゼがシドウの顔色を伺いながらフォローした。

しかしシドウはそんな事を気にするそぶりさえ見せなかった。

「第一、学校なんて行きたくねーよ」

「その通りネ!」

ジャックとエリーも反発する。

しかし、次のシドウの発言で、3人はすごく喜んでいた…。

( (スツゴイ単純…) )

メディとエグゼの考えがシンクロした。

くスバル宅く

ビクンッ

「どうしたの、ミソラちゃん?いきなり飛び跳ねて…?」

「なっ、何でもナイよく(なんかヤな予感が…)」

「そう?」

スバルはミソラの感じた事には気づかなかった。

しかし、ミノラのヤな予感 は明日当たってしまつ。ミノラも本当に  
当たるなど知る筈なかつた。

これから…（後書き）

次回からは少し日常に戻ります。けど、長くなるかはわかりません！

評価、感想お願いします

【第5章・終焉までの時間】 1ヶ月だけの日常（前書き）

久しぶりの日常。ミソラ視点です

【第5章・終焉までの時間】 1ヶ月だけの日常

私は目覚まし時計で目が覚めた。横にはスバル君が気持ちよさそうに寝ている…あれから1日。

1ヶ月後…地球は終焉を迎える…

アイツ等は理由は分からないが、1ヶ月後からしか本格的に攻撃して来ないみたい…しかし時が経つのは早く、1ヶ月なんてすぐ過ぎてしまう。

だから…甘えても良いよね、スバル君！

そう思い、私は寝てるスバル君に抱き付いた。慣れたとは言え、やはりまだドキドキしてしまう。

このドキドキ感を誰にも取られたくない…譲らない。

そう思い、思わずスバル君にキスする。すると少しスバル君は唸った。

私は少しヤバいかな？と思い、一足先にリビングに降りた。スバル君以外はみんな起きていて、私はオハヨーとお父さんとお母さんに声を掛けた。そしてテレビをつける。すると、血液型占いをやっていた。

『A型のアナタ！今日の運勢は最悪。特に恋愛運、アナタの好きな人に新たなライバルが現れる事でしょう！バットカラーはピンクです』

ウゲ…私バツチリじゃん…そう言えば昨日も何かヤな予感がしたよ  
うな…ライバルって誰だろ…？…ううん、占いなんて当てにならないよね？

私は、少し占いの結果を気にしつつも開き直った。  
そして、スバル君も起きて来て、登校の時間になった。

ピンポン

いつものようにルナちゃん達が迎えに来てくれた。

「お早う、2人とも」

「お早う、委員長」

スバル君がルナちゃんに挨拶を返す。もしかして、ライバルってルナちゃん？でも…前一回諦めたし、前からライバルだし…

私が色々模索しているとキザマロ君が口を開いた。

「今日また転校生が来るらしいですよ！」

「こないだ僕等が来たばかりなのにね」

ツカサ君が私の方を見て来た。何やら、私の心の中を探ってるような表情だ。

「オイ、遅刻するぜ」

ゴン太君が皆を促した。ルナちゃんが、分かっているわよとも言い  
たそんな表情で、そうねと言って歩き出した。それに私達も続いた。

「ミソラちゃん」

ツカサ君が小声で私に話し掛けて来た。

「何？」

「今朝の占いを気にしてるでしょう？」

「うっ…」

思わず声が出た。なんでツカサ君はこんなに人の事分かるんだろ…  
「僕は嬉しいよ…友達が増えるし…けど君は色々考えてるみたいだね…  
占い、全部当てはまったし」

君の方が占い師に向いてるよ。と言いたかったがうん、と返した。

「まあ、大丈夫じゃないかな？スバル君が君を手放さないよ」

ツカサ君が優しく微笑んで言った。それで、私は真っ赤になっていただろう。

でも…きつと大丈夫！スバル君、私も手放さないよ！

そう思い、校門をくぐった。

久しぶりの短い平穏な日々が始まった。りの短い平穏な日々が始まった。

【第5章・終焉までの時間】 1ヶ月だけの日常（後書き）

近々、番外編も更新します。評価、感想待ってます。

ダイヤモンドも更新しました！よろしくお願いします

番外編〜目立たない君達へ〜

ストリームです！

さてさて、今回もこのコーナーがやって参りましたよ！早速、張り切って行きましょう！

今回のゲストは、サーチマンとバルジのコンビです！どうぞよろしく！

「…ブツブツ…」

あり？何かバルジがブツブツ言ってますが…？

「俺達がこのコーナーに呼ばれる必要…0%と言ったところか…」

イヤイヤ、逆に君達はこのコーナー位でしか出番が…

「それ以上言ったら撃つ」

はい、サーチマンが銃口を此方に向けていたらおっかないんでサッサと解説しますか。

「作者ウザイ率…100%！」

さあ、次回からこの2人の出番はあるのか！？ご期待…

「スイマセンでした…」

案外素直じゃん。では解説を…

この2人は第2部の1話で初登場！第2部から登場したキャラの中では一番早く登場！

「当たり前だ」

バルジはこんな事言ってますが…この2人、多分一番可哀想な奴らです（笑）何故ならば…

ポイント1

初登場でいきなりスバル達に敵扱いされる。

ポイント2

サーチマンに関してはエグゼ時代はかなりの人気を誇っていた！しかし、この小説では殆ど出番無し！同じネットセイバーのエグゼ、ブルースは活躍中なのに…フルシンクロまでしたのに…コイツ等はまだ！

ポイント3

『愛のフルシンクロ〜大人Ver〜』では出番があつたが、シドウとクインティアが敵に捕らわれ、なすすべ無し！しかも、最終的にシドウ達がフルシンクロしてしまい、見事2人に忘れ去られた。

ざっとこんな感じですね〜。

「何故だ？何故こんなに目立たないのに悲しい立場ナノだ？サーチ

マン、何故だ!？」

「…」

うーん、君には面白みがないかな。

「はあ?」

君はデータ重視の人間だ。だが、データばかりにこだわっていれば、読者が求める面白みに欠けてしまうんだ。

「だから…貴様ー!俺の先祖はもつと格好良かったのに!」

イヤイヤ、いくら血が繋がってるからって人気は違うよ…例えば先祖は両思いの女性が…

「ああ、確かそうだったな。あの頃のライカ様は凄く奥手だったな」

「サーチマンまで…そうか…俺はどうでもいいのか…」

それは違う!君のデータは本編では描かれていないが、僕等のチームに欠かせない物だ!

「そつ、そうなのか!？」

ああ!

「やはり、俺達はデータ重視だ!」

ああ!これからも君のデータには期待している!

「任せる。なあ、サーチマン」

「私はアナタに従います。バルジ様」

目立たないけど、君はチームには不可欠なのだよ。

「一言ムカつくが、俺達はこれからもめげずに頑張るぜ」

あっ、ソロソロ時間なので、今日は此処まで！

「皆、俺とサーチマンの活躍、期待していてくれ」

登場予定無いけどね

「えっ！？ちよっ…」

今日のゲストはサーチマンとバルジでした。次回は、メディとエリーの女の子コンビです！ではでは！

「やはり、出番無いか…」

「（バルジ様、早速めげてる…）」

番外編〜目立たない君達へ〜（後書き）

次回は本編です。

ジャック達の転校先は！？

そして、敵に新たに不審な動きが…

評価、感想待ってます。

二一八才！3人の転校生（前書き）

更新遅れスイマセン

## 二一八才！3人の転校生

教室に入るとちょうどチャイムが鳴り響いた。そして、育田が教室に入ってきた。

「席につけー。今日は転校生が3人いるぞ」  
教室内がざわめく。

そんな中ミソラがツカサに喋り掛けた。

「ねえ、ツカサ君。今思ってたけど、友達が増える…なんで転校生が来るみたいって知ってたの？」

「だって朝の占い、僕も見たいもの」

「あれは『ライバル』が現れるって…」

「実は昨日、学校に提出物を出しに行ったら、転校生の事をちょっと聞いたんだ」

ミソラなるほど、と納得したような表情をした。

そんな中、3人の転校生が教室に入ってきた。

「久しぶりだな。あつ、スバル達は昨日以来か」

青いバンダナをした少年が笑いながら言った。

「…えっ…!?」

「二一八才！スバル君！」

そう言うと、二一八才と挨拶した女の子はスバルに抱き付いた。

「えっ!? 君達なんで…」

スバルがそう言うと、女の子は答えた。

「暁さんに学校行った方が良かったのネ」

そうなのか、とスバルは納得したが、教室内ほぼ全域から殺気をビリビリ感じた。スバルが強張った顔で周りを見渡すと、ツカサ、星斗、ジャック、育田以外がスバルを睨んでいた。特に委員長とミソラは、もはや戦ったらガイザー・エッジワースにも勝てると思わせる程の殺気であった。

「スバルくん？」

ミソラがスバルを呼んだ。少しおどけた口調だが顔は笑っていない。

「エリーちゃんとはどういう関係？」

「えっ…君達が知ってる通りチームメイト…」

「チームメイトはみんな抱き付くのかな？それにスバル君は私が入前で抱きついたら嫌がるのに…エリーちゃんは良いのかな？」  
そう言つてミソラがスバルに抱き付いた。

「ちよっ…！」

「良いでしょ？」

上目遣い…スバルはそれだけで怯んでしまった。

「ちよっと！ あんた達、今学校よ！」

ルナが委員長らしくビシツと叱る。それが、委員長としての威厳なのかそれとも、嫉妬なのかは別にして。

「白金の言う通りだ。みんな、一旦席に着け」

育田がみんなを注意しその場を治めた。

「取り敢えずおまえ達、自己紹介してくれ」

「じゃ俺から、光星斗です。よろしく！」

やはり星斗は緊張したりしないようだ。

「次は俺、みんな久しぶり、ジャックだ」

「最後はアタシネ！エリーです！よろしくネ」

ザワ

やはりエリーが挨拶すると騒がしくなる。今やミソラとは人気を争うトップアイドルだ。この前はドラマで共演していた。人気故、休み時間には早速みんなの質問攻めにあっていた。そんな中、スバル

達は星斗とジャックと話していた。

「まさか転校して来るなんてね」

ツカサは笑って言った。

「俺達自身ビツクリだぜ」星斗も苦笑した。

「多分、暁さんが一緒にみんな居たほうが連絡しやすいだからだよ」  
エグゼが推測を述べた。確かにそうかも、とスバルは納得した。

「流石ロックマン！」

メデイがエリーのハンターから出てエグゼに抱きついた。どうやらエグゼはモテルようだ。それを見てジェニミはけつと舌打ちした。  
気に食わないようだ。

「スバル君」

ミソラが少し怒った様子でスバルに話掛けた。さっきの事だ、とスバルは悟った。しかし、ミソラはスバルに抱き付いた。

「スバル君は絶対に誰にも譲らないからね！」

スバルはミソラに真剣な顔でそんな事を言われて顔が真っ赤になった。それを見て、星斗はジャックは口笛をならしたりして冷やかした。そしてツカサはやはり微笑んでいた。

しかし、その光景をエリーはしっかりと見ていた。

「プラネット・ジャッジの惑星」

惑星の中にプラネット・ジャッジの本拠地が存在する。そしてその本拠地の一室に1人の女性とピエロのようなウィザードがいた

「ねえ主」

ピエロのようなウィザードがオペレーターに話し掛ける。オペレーターの女性は黙ってウィザードを見た。

「攻撃命令だよ。地球の日本、全国全部の空港を壊滅させるだつて」。超楽しみだね」

ピエロのようなウィザードは笑いながら言った。しかし、オペレーターの女性は浮かかない顔でわかつたわ、と答えただけであった。その瞳は暗く、悲しい。

「ねえ、早く行こう、主」

ウィザードに急かされ、オペレーターは渋々立ち上がった。

「電波変換：ピエロ・マジシャン オン・エア」

そう叫ぶと電波変換し、惑星を出て地球の日本に向かった。

## 二一八才！3人の転校生（後書き）

今回はサテラポリスの日常から。暫くはスバル達の日常から離れま  
す。新たな仲間も近々登場予定です！

チーム別キャラクター紹介、スター・ヒーローズ編（前書き）

これはデータファイルを修正したものです。

## チーム別キャラクター紹介、スター・ヒーローズ編

星河スバル

電波変換して

「ロックマン」になる。

地球を3度救ったヒーロー。

優しい性格で絆を大切にしている。

お化けが嫌い。色々変身でき、その力はまだまだ未知数。

ウォーロック

星河スバルのウィザードで元FM星育ちのAM星人。

バトル好きだがさつな性格。

ジェニミとは気が合うが、アシッド、ハープやペルセウスとは気が合わない。

ペルセウスとはライバルでハープにはミソラ絡みでよく怒られる。

響ミソラ

電波変換して

「ハープ・ノート」になる。

スバルの初ブラザーで今は付き合っている。

変装しないとすぐミソラ本人だとばれファンに絡まれるほどの人気アイドル。しかし、本人はあまり自覚がない。

ハーブ

響ミソラのウィザードで元FM星人。

かつてはケフェウスの配下で地球侵略に来ていたが今は味方。  
ウォーロックをしょっちゅう注意している。

双葉ツカサ

電波変換して

「ジェニミ・スパーク」になる。

優しい性格だが、もう一つ

「ヒカル」という残酷な人格を持っていた。しかし今はヒカルをジ  
エニミとしてウィザードにして封印した。コダマ小に戻って来た。

ジェニミ（ヒカル）

双葉ツカサのウィザードで元はFM星人。

ツカサの裏の人格だったが今はジェニミとして封印された。  
ウォーロックとは気が合う。

ツカサの異常にはすぐ気づく。

エリー

電波変換して

「エリー・メディ」になれる。ミソラと同期のチヨイナ出身のアイドル。

スバルに思いを寄せ、ミソラとの仲を隙あらばと狙っている。

口癖は

「〜ネ」

青く長い髪とポニーテールが特徴。

2000年前のジャスミンの子孫。

メディ

エリーのウィザードで元は2000年前のジャスミンのネットナビ。

回復技が得意

エグゼに思いを寄せる。

## チーム別キャラクター紹介、エース・リーダーズ編

暁シドウ

電波変換して

「アシッド・エース」になるが長時間は体に負担がかかる。ジョーカーの自爆に巻き込まれたが生きていた。クインティアとは付き合ってる。うまい棒が大好き。

今回の地球抹殺の対策チームのリーダー的存在。

アシッド

暁シドウのウィザード。人の手によって作られた。スピード、データ処理などに秀でている。ウォーロックには嫌われている。たまに暴走してシドウを苦しめてしまう。

フォボス

電波変換して

「カーネル・ブレイド」になる。アメリッパのサテラポリスの大佐で冷静なタイプ。200年前のバレルとは血の繋がりがあある。シドウと同じく、今回の地球抹殺の対策チームのリーダー的存在。

少し長い髪と少しはやした髭が特徴。

カーネル

フォボスのウィザードで、2000年前のバレルの元ネットナビ。

フォボスと同じく冷静なタイプ。

サーベル攻撃は強力。かつて、感情のプログラムを抜き取られたが、今はちゃんと感情がある。

バルジ

電波変換して

「バルジ・サーチ」になる。

シャーロのサテラポリスから来た。

冷静なタイプ。

2000年前のライカの子孫。

サーチマンにはよく命令する。

ライカと同じ緑色の髪が特徴。

サーチマン

バルジのウィザードで、2000年前のライカの元ネットナビ。

冷静なタイプで主人の命令にはほとんど従う。狙った敵には必ず攻撃を当てるのは今でも健在。

検索力も優れていて、キザマロのウィザードのペティアもしのぐほど。

レジェンドマスター・シン

電波変換して

「ムーン・レジェンド」になれるがあまりしない。  
バトル時もサテラポリスから指令を出す。

口癖は

「イツツレジェンド」

ムーン・ディザスター

シンのウィザードで元は月の電波体。  
派手な性格。

## チーム別キャラクター紹介、キングダム・ナイツ、交流会編

クインティア

電波変換して

「クイン・ヴァルゴ」になる。

あまり喋らないがたまに大胆な発言もする。

シドウとは付き合ってる。

元ディーラのメンバーだか改心し『願い』も捨てた。

ヴァルゴ

クインティアのウィザードで元はFM星人。（しかし、ブライにデ  
リートされたため、再構築されたもの。）

笑い方が特徴的。

コーヴァスとは幾つもの星を滅ぼした。

ジャック

電波変換して

「ジャック・コーヴァス」になる。

感情的になると周りが見えなくなる。

以前は、姉のクインティアと共に『ディーラ』のメンバーだったが、  
今はスバル達とも仲良くしている。

コーヴァス

ジャックのウィザードで元はFM星人。（プライにデリートされたため、再構築されたもの。）

ヴァルゴとは宇宙では名の通った犯罪者だった。

ジャック達のかつての『願い』に興味を持ち、ウィザードになった。

プリンセス・プライド5世

電波変換して

「ナイト・キングダム」になる。

クリームランドの女王で200年前のプリンセス・プライドの子孫。上品だが女王とは思えない行動をとることもある。

クインティアとは女王繋がりで友達。

チャームポイントはクリーム色のサラサラの長髪と白いドレス。

ナイトマン

プライド5世のウィザードで200年前のプリンセス・プライドの元ネットナビ。

ずっとプライド家の女王に仕えてきた。何事にも動じない性格。

堅い体をいかした防御と鉄球を使った豪快な攻撃が持ち味。

主人の言うことには必ず従う。

たかひろさん（現・一つの希望さん）

電波変換して

「ブルース・ソルジャー」になる。

リクエスト出演。

シューティングスター交流会のリーダーで、僕とブラザーになって下さった優しい人です。

ブルース

たかひろさんのウィザードで元は伊集院炎山の元ネットナビ。どう  
いう経路でたかひろさんに渡ったかは不明。

200年前から黒いバイザーで顔を隠し、姿を知る者はいない。

自分のオペレーターには

「様」をつける。

ソード攻撃とスピードは今もトップクラス。

勇輝さん

電波変換して

「サイバー・ペルセウス」になる。

リクエスト出演。

シューティングスター交流会のメンバーで僕とブラザーになって下さった優しい人。

小説を書くにあたっての大先輩です。

ペルセウス

勇輝さんのウィザードで元FM星人と思われる。

ウォーロックとはライバルで、性格が似ている。しかし、仲は悪い。

ストリーム

この小説の作者で、電波変換して

「トマホーク・パスワード」になる。

たかひろさんと勇輝さんが出演した勢いで出演してしまいました。

まだまだ未熟でウォーロックやペルセウスにはクソ作者扱いされる。

シューティングスター交流会のメンバー。

これからも頑張るので、よろしく願います！

トマホークマン

ストリームのウィザードで200年前のディンゴの元ネットナビ。

どというルートでストリームに渡ったかは不明。

活発だが案外冷静で一応常識もある。

ミソラのファンでもある。

トマホークを使った威力満点の攻撃が持ち味。

## チーム別キャラクター紹介、プラネット・ジャッジ、その他の敵編

ソロ

電波変換して

「ブライ」になる。ムーの末裔で絆を否定していた。しかし、あるバトルで『絆の力』を認める。

ウィザードのフォルテとフルシンクロ出来る。

スバルとは『ムーメタル』を取り返すまでは手を組まないと言っている。

ラプラス

ソロのウィザード。

上手く喋れないがソロとは意思疎通がとれている。

バトル時はラプラスソードになる。

フォルテ

ソロのウィザードで200年前の完全自立型ネットナビ。ノイズウエーブの奥深くに封印されていたがソロに封印を解いてもらいウィザードになる。

ソロ同様、悲しい過去を持ち絆を否定していたり、ロックマンエグゼと激闘を繰り広げたりとソロと似たところが多い。そのため、周波数が同じである。

戦った敵の能力を手に入れる事が出来る『ゲット・アビリティプロ  
グラム』は健在。  
ソロとフルシンクロしなくても実力は最強クラスで、ツカサを圧倒、  
スバルとも張り合う力を持つ。

ハイド

電波変換して

「ファントム・ブラック」になる。  
毎回ロックマンに脚本を作り、復讐をしようとしている。  
木星団と手を組んだがフルシンクロしたロックマンとハーブ・ノー  
トにまたも倒される。

くプラネット・ジャッジく

ガイザー・エッジワース

地球外ワイザードで、プラネット・ジャッジの幹部五人衆の1人で  
幹部五人衆のリーダー的存在。実力はトマホーク・パワードの攻撃  
をデコピンで跳ね返す程。デューオには必ず従う。

スラー

プラネット・ジャツジ、幹部五人衆の1人。2000年前はデューオの代弁者。かつて地球に恐怖を与えた。エグゼ、サーチマン、ブルース3人掛かりでも歯がたたなかった。フォルテにデリートされたが生きていて、『プラネット・ジャツジ』に出会い体を修復してもらった。

シリウス

プラネット・ジャツジ、幹部五人衆の1人。元ブラックホールサーバーの管理者。スバルがデリートしたはずだったが生きていた。

ピエロ・マジシャン

プラネット・ジャツジ、幹部五人衆の1人。幹部五人衆でたった1人の電波人間。人間時の名前は不明。

物静かでどこか寂しげ。あまり好戦的では無い。

ウィザードは『ピエロ』。楽しい事が大好きな女の子。オペレーターを主と呼ぶ。

老人型ウィザード（名前不明）

プラネット・ジャツジ、幹部五人衆の1人。本当に幹部なのかと思

える程のおじいさん。  
ある能力が有るらしいが…？

デューオ（あの御方）

ガイザー・エッジワースしかちゃんと姿を見た者はいないが、エグゼ達はかつてコイツの試練に打ち勝ち地球を救った。

圧倒的な力を持っていて、その力がかつてのように火星、水星、木星を支配下に置いた。前回のメテオGの事件で地球が誤った電波技術の発展を遂げたとして抹殺しようとした試練を与える。もし、試練をクリアできなければ、200年前と同じく地球を抹殺するようだからって、バレルとカーネルとクロスフュージョンしたが、クロスフュージョンを解いた。しかし、記憶は鮮明に残っている。

プラネット・ジャッジ、メンバー

火星、木星、水星の強力な電波体達が主体でできた集団。ガイザー・エッジワースやデューオの命令により、地球に攻撃を仕掛ける。フルシンクロしてきたりと中々手ごわい。

三星神

火星団、水星団、木星団のリーダー。まだ素性は謎。

ミラ・ヘラクレス

木星団の一員。サイバー・ペルセウスとトマホーク・パワードとWAXAで戦いを繰り広げ敗れた。

何故か関西弁で、好戦的。しかし、デューオに支配されてからは戦う事を嫌いになる。

スバル達にプラネット・ジャッジの事を明かしたが故にガイザー・エッジワースに容赦なくデリートされる。

## キャラクター紹介、光コンビ編・小説設定

光星斗

電波変換して

「スター・エグゼ」になる。

200年前の光熱斗の子孫。

性格、容姿など熱斗にソックリ。

エグゼのオペレートは抜群でバトルカードのプレゼーションは目にも留まらぬ速さ。そのため並のウィザードとは電波変換無しに戦える。

地球抹殺対策チームには途中加入。

光星斗のウィザードで元々200年前の光熱斗のネットナビ。優しい性格で世話焼き、鈍感。  
熱斗とは200年前のヒーローだった。  
星斗のオペレーターの御陰もあり、電波変換しなくても実力はトップクラス。

今更ですがこの小説の設定あれこれ

・スバルはまだノイズチェンジが出来る。

・シドウはちゃんと生きている。

・ジャックとクインティアは釈放され改心している。

・ミソラはスバルの家にドラマ撮影がコダマタウンであるため、住んでいる。

・2000年前のネットナビ達は元々のオペレーターの子孫に受け継がれた。(ブルース、トマホークマンは例外)

一応ゲーム路線ですがバトルはアニメ寄り。

・一応ゲーム路線ですがバトルはアニメ寄り。

エグゼキャラ、設定はアニメ

エグゼキャラの子孫は先祖達と容姿が殆ど同じく。

設定は一応まあこんな感じですね。

続いてはこの小説のオリジナル変身、フルシンクロについてです！

フルシンクロとは…

周波数がほとんど同じ、又は同じ電波体、電波人間、ウィザードが

融合する変身。

更に、互いを信じ合う気持ちが強け程強くなる。

ただし、1 + 1 = 2のように力が二倍になるのではなく、1 + 1 = 3や4のように無限大の強さを手に入れる事が出来る。(ブライとフォルテのフルシンクロはお互いが強いために、ただの1 + 1 = 2が強力になった。)

フルシンクロには人数制限は無いが、シンクロする人数が多い程、それぞれの体に掛かる負担は大きくなる。

ヨイリーの御陰でシンクロ率はハンターに表示されるようになりません。

サテラポリスの日常、マジシャンの策略(前書き)

更新遅れてスイマセンm( )m

## サテラポリスの日常、マジシャンの策略

〈サテラポリス・指令室〉

「では、今からプラネット・ジャッジの対策会議を始める！」  
フォボスが指令室のモニターの前に立って言ったが…

サクサク

この音が絶える気配がしない。勿論、音の正体は…シドウのうまい棒だ。ただひたすらに、しかし嬉しそうに食べている。もうすぐ10本目に到達する。それを見て指令室にいた面々は呆れて溜め息を漏らした。

「シドウったら口の周りにうまい棒の粕ついてるわよ」

クインティアがそう言ってティッシュでシドウの口の周りを拭いた。そんな風景を見てプライドは呟いた。

「まるで新婚みたいね。クスクス」

プライドは上品に笑う。

「しかし、少しは場をわきまえて欲しいものだ」

フォボスが少し怒りながら言った。

「あらフォボスさん…もしかして羨ましいのですか？」

プライドが笑顔で聞いた。するとフォボスの口調がいきなり変わった。

「べっ、別に私はただまだ結婚していないから少し良いな〜と思っただけだ！」

「それを羨ましがってるんですよ…大佐…」

バルジが、らしくないな、と呟き苦笑いをした。

「そう言えば、女王は自国に帰らなくて大丈夫なのですか？」

バルジが尋ねた。プライドはクリームランドの女王だ。国に戻らな

くて大丈夫なのかとバルジは心配したのだろう。

「ええ、国王に少し旅行に行くと言ってあります」

プライドは微笑みながら言った。

「（そうか）旅行か）それじゃ大丈夫：）大丈夫じゃ無いですよ！」  
バルジはプライドの思考が大丈夫なのか心配した。しかしプライドはバルジの心配をよそに、こんなものしょっちゅうですよと普通に答えた。

（クリームランドってどんな国なんだろうか…）

バルジはクリームランドに対し疑問を抱いた。

「閑話休題！会議を始めるぞ！！第一、お前達には今地球がピンチと言っ自覚が有るのか！？」

フォボスは痺れを切らしたのか皆に怒鳴りつけた。

「フォボスさん、いくらシドウとクインティアが羨ましいからって八つ当たりは駄目ですわよ」

プライドがフォボスの心を読み注意了。

「うっ、だがな事実ではないか」

（凶星だ…）

バルジはフォボスを見てそう感じた。

いつもは威厳を持っているフォボスだが、こんな弱点もあると思うと笑えてきた。しかし、バルジはそこを我慢した。

「では、これからについてだが…」

フォボスはそう言いかけたが、その時レジエンドマスター・シンが慌てた様子で指令室に駆け込んできた。

「ハアハア…」

「オイ、どうしたんだよ、シン？」

シドウはうまい棒を食べるのをようやく止め、シンに尋ねた。嫌な



く少し前、アメリッパ国際空港

『日本、北九州国際空港行きは後20分で出発いたします』

アナンスがそう告げた。それを聞くと、1人の青年は北九州国際空港行きの飛行機に向かい歩き出した。

「とうとう、アメリッパとも暫くバイバイだな…」

青年はそう呟く。寂しげなようで少し期待しているような表情だ。

「なあ、今から行く日本ってそんな良いところなのか？」

青年のハンターからウィザードが出て来る。普通の市販のウィザードだ。

「うん、とっても良いところだよ。何たって僕の故郷だし」

「ふーん」

ウィザードは興味なさそうに返事した。

「本当良いところだって！見ればわかるよ」

青年が少し必死になり説明した。

「じゃ、楽しみにしておく」

ウィザードがそう言ったのに青年は微笑み、飛行機に乗り込んだ。

「その頃、北九州国際空港」

「此処が最後の空港：此処以外は全てウイルスを放った……」ピエロ・マジシャンが上空から北九州国際空港を見下げ言った。そして頭のシルクハットを取り、其処から大量のウイルスを放った。

「行け：ウイルス達」

ウイルス達は空港内部に向かって行った。

サテラポリスの日常、マジシャンの策略（後書き）

スイマセンm（ | | ） mもしかしたら今月事情により更新できな  
いかもしれません…

ではまた次回！

前兆（前書き）

大会準優勝！イエー（\*^o^\*）

## 前兆

くノイズウェーブの最奥部く

此処はノイズウェーブの最奥部：其処には不思議な光を伴うカーテンのような扉がある。ノイズウェーブの中でこの場所だけは周りに水が敷いてあり、綺麗で優しい雰囲気がしていた…。其処はある電波体が一体だけいた…。

「…胸騒ぎがしますね…。外で何かが起きている…イヤ、起きる前兆でしょうか…」

優しいそうでミスティアスな雰囲気を持っている電波体が呟いた。

「……………私も表に出る時が来ましたか……………」

そう言くと、電波体は不思議な光を身に纏い何処かに消えた…。

く本州上空のウェーブロードく

「シン、急げよ！他のメンバーはもう空港に着いてるよー！」

ムーン・ディザスターが実体化し、レジェンドマスターシンが電波変換した姿、『ムーン・レジェンド』を急かす。

姿はムーン・ディザスターに白いシンのビジライザーと白いマントが付いていると言った感じだ。

「けどさノットレジェンド！なんだよ…北九州国際空港に近づけば近づく程、強力な電波を感じるんだ！御陰で怖くて進めない…！」

「お前はヘタレかよー！」

ムーン・レジエンドは不安で強張った顔をしているが、ムーン・デイズターはそんな様子を気にしないようだ。

「あれ、あれは…電波体？」

暫く進むみ北九州国際空港が近づいて来た。其処で、ムーン・レジエンドの前方には黒い電波体が2人見えた。

「今はあんなのほつといて、北九州国際空港に早く着くのが先決だよー！」

そう言われ、ムーン・レジエンドは2体の黒い電波体を素通りしようとした。

「待て」

ムーン・レジエンドを黒い電波体が呼び止めた。一体はよく見ると電波人間のようだ。どちらも威圧感がビリビリ伝わる。

「なっ、何だい？」

ムーン・レジエンドはぎこちなく少し振り向いた。言うまでもなく目が泳いでいる。

「貴様等、北九州国際空港に行くのдар？」

黒い電波体がムーン・レジエンドに聞いた。

「そうだけど、お前等には関係無いよー！」

ムーン・デイズターが無神経なのか普通にラップ口調で答えた。

ヤバい…殺される

ムーン・レジエンドはそう思ったが、黒い2人組は　そうか…と呟いただけであった。それを見てムーン・レジエンドは安堵の溜め息を漏らしたが、それも束の間。電波体がバスターの銃口をムーン・レジエンドに向けた。

「悪いが、貴様等と目的は同じようだ…だが…俺達には他の目的がある…だから貴様等は邪魔だ！此処で眠っていてもらおう」

黒い電波人間が拳を構えた。

臨戦態勢…しかし、ムーン・レジェンド、デイザスターはあまりの恐怖に奇声をあげ、気絶した。

「情け無い奴らだな…フォルテ」

「そうだな…ブライ」

2人は目の前に倒れている電波人間を見下げた。白目をむいている。

「やはりこんなザコに任さなくて正解だな…コイツ等ではウイルスで手一杯だ」

ブライが呟く。確かに、とフォルテが返し続ける。

「さて、コイツ等には悪いが、まずはアイツを始末する…急ぐか」  
そう言ってフォルテはブライのハンターに戻り、ブライは北九州国際空港に体を向けた。

前兆（後書き）

この話の序盤に出てきた電波体、分かりますか？多分、分かりますね（笑）

次回あたりは謎の電波体、ブライ& amp ; フォルテ、ピエロ・マジシャンが鍵を握ります。

ではでは

舞い降りた天使（前書き）

今回はバトル無し…

青年のストーリーが主体です

## 舞い降りた天使

く北九州国際空港付近の上空く

『間もなく、北九州国際空港に到着致します。シートベルトをキチンと着用して下さい』

機内アナンスがそうつげた。

青年は律儀にシートベルトを着用し、ウィザードに話し掛けた。

「もう着くから起きな」

するとウィザードは面倒くさそうに目を開き、わかったよと言った。そして、飛行機が着陸した。

く北九州国際空港く

青年は荷物を受け取り、出口に向かい歩き出した。すると空港内から悲鳴があがった。

「なんだろ」

「早く行こうぜ。俺は日本とやらを見て歩きたいんだ」

ウィザードが青年を急かす。青年はウィザードが日本に興味を持ってくれたのが嬉しいのか、うん！と言って出口に向かい歩き出した。

しかし、すぐに足を止めてしまった。驚きの光景がそこにあったのだ。

「これは…電波ウイルス!?」青年は驚き、尻餅をついた。実体化した電波ウイルスが空港で好き放題に暴れていたのだ。

ウィザードは後ろを振り向く。やはり空港内でもウイルスが実体化

して暴れていた。

「どうしよう…」

青年が情け無い声を上げたが、ウィザードは青年の頭を叩いた。

「イタツ」

「馬鹿！お前バトルカードあるだろが！」

「で？」

「俺にプレデーションしろ！」

「そうか！えーと…バトルカード、キャノン！」

ウィザードの腕がキャノンに変わり、ウィルスを攻撃した。しかし、ウィルスはデリート出来ていなかった。

「えっ?!」

「馬鹿ヤロー！もつと強いバトルカードを…グハ！」

青年が驚いてる内に、ウィザードはウィルスに背後から攻撃された。バトルウィザードでない為、HPが低い。だから一撃でデリート寸前であった。

「お前!!!」

「ハアハア…お前のオペレートが下手くそな御陰で俺は…日本の事を何一つ知る事が出来なかった…けどよ…お前と過ごした時間は…楽しかったぜ…」

ウィザードはそう言うつと粉々になり消えた…。

青年はウィザードがいた場所に立ちすくみ、涙を流した。

「ッ…僕のせいで…あいつが…ッ」

青年の涙は頬を伝い、コンクリートの地面に落ちた。

「ッ！」

青年が後ろを見ると、ウィルスが攻撃しようとしていた。青年はウィザードを失ったショックで背後のウィルスの存在に気付くのが遅れた。

もういい…アイツがデリートされた要因はマイペースな僕のせい…ならば僕も殺されよう…

青年はそう思い、まだ回避できたが回避する素振りさえ見せずに笑った。しかし、目には涙が光っていた。

ダメですよ…死んでわなりません。デリートされたウィザードの気持ちを考えて見なさい…

囁きが聞こえる。優しい声。

(僕のウィザードの気持ち…)

青年は考えた。しかし、答えは見いだせない。

「！」

考えていた間に、ウイルスの攻撃が間近に迫っていた。

「やはり、答えは見いだせないようですね」

今度は囁きでなく、キチンと聞こえた。その声と同時に、眩しい光が青年の前に降り立ち、ウイルスが攻撃してきた。

しかし、ウイルスの攻撃は光に跳ね返された。そしてその周辺のウイルスはデリートされた。

「アナタは悲しんでいる…自分の無力さと、ウィザードのデリートに…その悲しみ、私が和らげてあげます」  
光の中から声がする。

そして、光が消え失せて中から電波体が姿を覗かせた。

優しい目、優しい声。それを青年は天使のように感じた。

舞い降りた天使（後書き）

実はこの青年、このサイト内の誰かです！

番外編2〜裏シナリオ1〜（前書き）

この番外編は作者が面白いと思った動画をこの小説のキャラのセリフだけで作るコーナーです。

今回の場合、キャラが全体的に崩れております（スイマセンm）  
（m）  
更にセリフだけ故、面白さに欠けます。

それでもよろしければどうぞ！

番外編2〜裏シナリオ1〜

登場人物

ミソラ（以下ミ）≡マリオ役  
エリー（以下エ）≡クッパ役  
スバル（以下ス）≡ピーチ役  
ルナ（以下ル）≡ルイージ役  
では行ってみよう！  
〜スーパーマリオワールドのテーマにのせて〜

〜  
〜  
前奏中

『「流星のロックマン青きヒーローのその後」 DE ウェスタン  
シヨール』

〜  
〜

≡  
「！エリーちゃんアナタしつこすぎるよ！スバル君の事はもう諦め  
てよ」

エ  
「お生僧様、そうはいかないっのネ、スバル君は私のディスティニ  
ー」

ス

「2人共顔怖い…鏡をよーく見て見なよ！」

三・エ

「それは言わないって話しだ〜ヨ（ネ）だって女はハートで勝負  
！」

エ

「あっミンヲちゃん」

三

「エリーちゃん」

エ

「最近調子はどう？」

三

「絶好調だよ〜。CDとかDVDもうB A K A U R Eで！」

エ

「いいネ〜乾く間無しって感じだネ」

三

「ちょっとやめてよ〜。あっ二番始まっちゃっよ」

エ

「オット、危なかったネ」

工  
「My sweet cherry bay 愛しているのネ！分  
かないなら拉致、監禁！」

三  
「命掛けて君を助けるけど君のハートは奪えないの？」

ス  
「2人共いい加減にして！誰に口をきいてるの！？（世界を三度救  
った男だよ！）」

三・エ  
「「ツンデレなのも魅力的ネ！だって女はハートで勝負！」」  
ス  
（イヤ、別にそう言うつもりは…）

間奏中

ル  
「ちょっと待った！御一人お忘れじゃないかしら？委員長参事！O  
M A T A S E」  
三  
「何々？シヨック・ノート！」

工

「カプセルボム！あっ、ごめんごめん」

ル

「キャアアア……！」

（光景はご想像にお任せしますが大変悲しいです）

エ

「KY！KY！空気読め！カプセルボム！」

ミ

「ちよっずいてるとマジデリートするよ！？？ショック・ノート！」

ス

「高飛車ヤローは不必要。ツンデレの癖に生意気だ」

ル

（スバル君キャラ違う！）

ミ・エ

「「ルックスならば最高ランク！だけど」」

ミ

「女はハートで勝負！」

エ

「女はハートで勝負！」

ス  
「女の子は顔で勝負…かな」

ミ・エ  
「「えっ？」」

ス  
「イヤ、だって顔怖いと流石に嫌だよ…」

ミ・エ  
「「(ニツコリ)ス・バル君」」

ス  
「言っんじゃないかった」

ミ・エ  
「「で、どっちを選ぶの(ネ)？」」

ス  
「そりゃ、ミン…」

エ  
「そっか…スバル君は…私じゃないんだ…」

ス  
「そっ言う訳じゃ…」

ミ  
「じゃ私じゃ無いの…??付き合ってるの?…」

ス

「僕は…みんなと仲良くしたいな」

ミ・エ

「「じゃもう一回やる」」

ス

「もうヤダー！…！」

番外編2〜裏シナリオ1〜（後書き）

多分、面白くなかったと思います。スイマセンm(´`´)m

ですが、この動画を見た時メチャ面白かったので…つい…

こんなコーナーに付き合っていたいただき、有難うございました。

評価、感想、酷評どしどしお願いします

正体（前書き）

お待たせです！更新遅れすいません

タイトルそのままです

## 正体

「アナタは？」

青年は光から出て来た電波体に尋ねた。しかし電波体は周りを見渡して言った。

「今はそれどころではありません。取り敢えず、ウイルス発生源を倒さねばなりません。私だけでは時間がかかります。！ちよつと良いですか…？」

電波体はそう言うつと青年の許可無く青年の額と自分の額を合わせた。

「ッ！？何を！？」

いきなり見知らぬ電波体にこんな事され青年はテンパった。しかし、電波体は額を離しやはり、と呟いた。

「あなたと私は周波数が全く同じです」

「周波数？」

青年は何のことかさっぱりのようにだ。

しかし、電波体はそんな事を気にせず青年のハンターに入った。

「詳しい事はこのウイルスをデリートしたら話します。だから私と戦って下さい」

電波体は真剣だったが、やはり青年は何も分かっていない。

「ちよ、よくわからナイんだけど」

「仕方ないですね。一瞬あなたの身体、借りますよ」

その刹那、ハンターから放たれた光に青年は包まれた…

「ん？」

「どうした、フォルテ」

フォルテの呟きにブライが反応した。

「お前は感じないのか？この強力な電波を」

「言われてみたらロックマンとは比べられない電波だな」

ブライは空港の方を見た。しかし余り興味は無い様だ。だがフォルテはツツと声を漏らした。

「どうした？そんな声お前らしくも無い」

するといきなり笑い出す。

「・・・フハハハ！遂に裏の王が目覚めたようだな。面白い。ヤツが目覚めたと言う事は何か起きる前兆だ」

「何を言っている？」

「まあ分かる」

そういつてフォルテはハンター内にもつどつた。ブライは裏の王の事が気になるようだが取り敢えず先を急いだ。

- - 倒さねばならないヤツが居る。ほおって置けば地球の運命は後、1ヶ月で終わる - -

「主。なんか超強力な電波反応がこの付近にあるんだけど？」  
ピエロがピエロ・マジシャンに言った。  
「デリートしておきましょう」  
ピエロ・マジシャンは短くそう告げた。  
「ヤッター！超楽しみ」  
そういつてピエロ・マジシャンはウェーブ・ロードから空港内に身体を向けた――

光は消え、一人の電波人間が姿を現した。電波人間はゆっくりと目を開けた。そして自分の身体を見る。

「！これは？」

「電波変換です。電波体と人間の融合とでも言っておきましょう」

「これでどうしろって言うの？」

「来ましたよ」

「え？」

青年は前を見た。すると5体程のウイルスがこちらを見ていた。

「戦いなさい」

電波体が平然と言うのだから青年は驚いた。当然だが――

「いや、無理だよ」

青年は一步退いた。

「大丈夫です。身体が自然に動きます」

「そうじゃなくて――」

「避けなさい」

「え?!ウワ!」

いつの間にかメットールの攻撃が目の前に迫っていた。

青年は死ぬのを覚悟し目を閉じた。

・・・何も起こらない。死んだのかと思いい青年は目を開けた。しかし、

目に映るのは消えていくウイルスであった。

「なんで?」

青年がそう呟くと電波体はクスツと笑った。

「どうしたの?」

「目を閉じながら攻撃」

「え?」

「あなたが今したことです。フッフ」

電波体が言った事が信じられず青年は自分の手を見た。攻撃した感覚など微塵も無かった。

「フッフ。アナタ名前は?」

電波体が聞いてきたので青年は自分の名を述べた。

「僕の名は・・・亜蘭」

「亜蘭ですか。私はセレナード。よろしく、セレナード・エンジェ  
ル」

「え?」

「電波変換した時のアナタの名前です」

姿はセレナードの身体に純白の天使のような羽が付き、腕には天使の輪のようなリングが付いているからセレナードはこう命名したのだらう。

「うん!よろしくセレナード」

セレナード・エンジェルはセレナードの手を握った。

「ま、見つけたよ」

上空から賑やかな声がした。

「あなた達ね、この辺のウイルスデリートしたの」

「そうだけど？」

青年がおずおずと答えた。

「私はピエロ・マジシャン。地球に試練を与える者。何も知らないのによくも計画の邪魔を」

ピエロ・マジシャンの放つ雰囲気はセレナード・エンジェルは飲まれそうになったがセレナードが身を乗り出した。

「アナタですね？ 亜蘭のウィザードがデリートされた原因を作ったのは」

セレナードもかなりの殺気である。そんな殺気など気にせずピエロ・マジシャンはいかにも、と口を開いた。

「誰のウィザードとか関係無く全部デリートしちゃったしね」  
そう聞いた瞬間、セレナード・エンジェルは叫んだ。

「許さない！ 僕のウィザードをよくも！ 君は僕が倒す！」

「フ、やれるものならおやりなさい。計画を邪魔した罪は重いわ。デリートされても知らないわよ」

魔術師と天使の戦いが幕を開けた。

## 正体（後書き）

青年は亜蘭さんでした！

セレナードってマイナーなんですかね？アニメにも出てないし。

今回はバトルです！評価、感想待ってます！

## 賭け

「プラネット・ジャッジの惑星」

「おいエッジワース。ピエロの奴が勝手に戦っているが？」

スラーが尋ねた。侵略再開は1ヶ月後の筈だからだ。流石にフェアではないと思っただのか。

「構わん。相手は俺達と関係無い奴だ。それにピエロはもし負けても死なん」

カイザー・エッジワースは椅子に座りながらニヤリと笑った。

「お前も知っているだろう？ 奴は戦いになると性格が変わるのを」  
スラーは1歩身を引いた。

「しかし」

「しつこいぞ！ デューオ様にはねなければいいのだ。第一、ピエロにはアノ計画の準備を任している」

「その通りじゃ」

スラーの背後から年寄りの声が出た。

「老い耄れか。お前もあの計画のメンバーだったな」

カイザー・エッジワースは老人型ウィザードの方を見て言った。すると老人型ウィザードは声を荒げた。

「ソウじゃが、その呼び方、やめんか！」

「ああ、すまない」

カイザー・エッジワースは適当に謝った。すると老人型ウィザードはスラーの肩を持った。

「全く、最近の男は。ワシのようなタイプの方がいいじゃろ？ スラーちゃん？」

「セクハラオヤジさん？ それ以上私に触ったら死にますよ？」

スラーは笑って細い剣を持っていた。それを気にせず老人型ウィザ

ードはスラーに触りっぱなしだ。

「そんなこと言わんと?」

「ではサイナラ」

そう言つてスラーは剣を振り下げた。

ギイイン

剣は老人型ウィザードに届く前に弾かれた。そして長い髭に触れた。

「さて、カイザー。ワシも地球に行つていいかの?」

「好きにしろ」

ソレを聞くと老人型ウィザードは部屋を出た。

ソレを見てスラーが舌打ちした。

〈北九州国際空港〉

セレナード・エンジェルとピエロ・マジシャンは微動だせず睨み合つていた。両者暫くそのままだったがピエロ・マジシャンがツマンナ〜イと声をあげた。

「ねえねえ。どっちも動かないんじゃツマンナイしさ、ここで賭けしよ?」

ソレをみてセレナード・エンジェルは呆気にとられた。

「どんな賭け?」

「ん〜とね、賭けで負けた方が勝つた方の攻撃を一発食らうの!」

ピエロ・マジシャンは笑う。それを見てセレナード・エンジェルは不審に思った。

(さっきまでと雰囲気変わってる…それに賭けて)

「亜蘭」

セレナードがセレナード・エンジェルを呼んだ。そして小声で言う。

「慎重に」

「わかってるけど、あの人が怪しく無い？」

「そんな事見れば分かります。あれは…畏かもしれませんし、あの人の性質かもしれません」

セレナードが小声で話すのを見てピエロ・マジシャンは話し掛けて来た。

「賭けはね…此処に三枚のトランプがあります」

ピエロ・マジシャンがトランプ三枚を表向きにし、セレナード達の方に見せる。一枚がジョーカーで残りはダイヤのエースとスペードの2。怪しい仕掛けも無さそうだ。

「コレでジョーカーを引いたらアナタの負け！ダイヤのエースか2のスペードだったら君の勝ち！」

ジョーカー以外の確率は3分の2。普通に考えるとピエロ・マジシャンが不利だ。

しかし、セレナード・エンジェルは念のため、セレナードに小声で尋ねた。

「どう？」

「…やってみましょう。此方が有利ですし」

セレナードがそう答えたので、セレナード・エンジェルは賭けを了承した。

「いいよ」

すると、ピエロ・マジシャンはニヤリと笑った。

「やった〜！じゃあ、そのウィザード君〜。私のシャッフル後に、

もう一回シャッフルお願いね!」

そう言うと、ピエロ・マジシャンはシャッフルし始めた。

「(フフ…この賭けのトリックに全く気づいて無いみたいね…まあ確率的には向こうが有利だけど…このバトル、モーらった!) はい! シャッフル完了! ウィザード君、シャッフルお願い! あっ、君見ちゃ駄目だよ」

そう言うとピエロ・マジシャンはセレナードに三枚のトランプを渡した。

そしてセレナードはシャッフルした。

「シャッフル完了しましたよ」

「アリガト。それじゃ私がトランプ持つから引いてね!」

そして、ピエロ・マジシャンはウィンクしてカードを持った。

(さあ、私のバトルマジックショー開始!)

ピエロ・マジシャンの不適な笑みにはウィザードのピエロでさえ気付かなかった。

賭け（後書き）

スラーって女だよね：？心配。

あの計画は後程わかります。

では感想、評価待ってます（＾w＾）

## 先制攻撃（前書き）

引き当てたのは…何だ!？

それではどうぞ！

## 先制攻撃

「ハイ、じゃあピエロよろしく」

ピエロ・マジシャンはピエロにトランプを渡した。そして何か囁いた。ピエロがトランプを取る。

「ハイ、じゃあどれ取る？」

ピエロがセレナード・エンジェルにトランプを差し出した。  
「ん〜」

セレナード・エンジェルは悩んだ。先制攻撃は当たり前だが戦いの流れを一気に此方に引き寄せれるからだ。

（真ん中？イヤ右…ヤッパリ左）

今のセレナード・エンジェルの顔はまさに百面相だ。

（落ち着いて、亜蘭！）

セレナードも願う。

「！良し！コレ」

そう言ってセレナード・エンジェルは真ん中を引いた。そしてトランプを恐る恐る表に向ける。

引いたのは…

「！そんな！おかしい！」

セレナードはカードを見て叫んだ。おかしい。引いたのはさっきは無かったスペードの5であった。

「残念無念、ダイヤのエースとスペードの2以外だから君の負け！先制はいただきだね！」

そう言ってピエロ・マジシャンは飛び上がり、トランプを持った。

「カードスラッシュ！」

カードが上空からブーメランのようにセレナード・エンジェルのよ  
うに向かつて来た。

「グワッ！」

セレナード・エンジェルはカードに切られた。が思いの外、ダメー  
ジは少ないようだ。

「イタタ」

「亜蘭、大丈夫？」

「うん」

「今更だけど、初めての対電波人間だけど大丈夫。体が無意識に動  
くはずだから」

セレナードの気遣いにセレナード・エンジェルは笑顔で返した。

「へー。あれを喰らってもダメージあんまし無さそう。防御力はな  
かなかね…」

ピエロ・マジシャンはセレナード・エンジェルを見て眩いた。

「接近戦ならどう？ステッキブレード！」

左にステッキ型の剣を持ち、ピエロ・マジシャンはセレナード・エ  
ンジェルに近付いた。

「剣には剣！聖剣・ライトレイヴァー！」

セレナード・エンジェルの右手に眩しく輝く剣が現れた。

「眩しッ！」

いきなりの眩しさにピエロ・マジシャンの目は眩んだ。

「亜蘭、今！」

「わかってるよ！ハアッ！」

そう言っつてセレナード・エンジェルはピエロ・マジシャンを切った。

「キヤア！ イッタ〜！」

どうやらピエロ・マジシャンの視力は回復したようだ。そして再び  
剣を構えた。

「エイッ！」

「クッ！」

ガキン ギイン

剣と剣が激しくぶつかり合い音を立てる。

「やるわね〜… サプライズボックス！」

ピエロ・マジシャンは空いた右腕から箱を出した。そして開く。

「サプライズパンチ！」

その声と同時に箱からびっくり箱でよくある様なパンチが繰り出された。

「…ッ！しまった！」

剣でのやり合いに集中していた為、セレナード・エンジェルはパンチをモロにくらった。そして倒れる。

「喰らえ〜！」

ピエロ・マジシャンが剣で追撃しようとした。

「ライトニング・リフレクト！」

セレナード・エンジェルがそう叫ぶと剣は弾き返され、ピエロ・マジシャンにヒットした。

「イッタ〜！」

「今！ライトニング・カルテット！」

「キヤア〜！」

セレナード・エンジェルが高速で四回、剣で切った。

ダメージはかなり有るはずだ。

「イッタ〜！やるわね〜君。けどヤツパリ計画を邪魔した罪は重いよ！（けど…大体動き、掴んだ）」

ピエロ・マジシャンはニヤリと笑った。その笑みには余裕さえ感じれる。

「君もね。けど僕のウィザードを殺した恨みはキチンと晴らさしてもらおうよ（まだこっちには必殺技が残ってる）」  
セレナード・エンジェルも笑顔で返す。此方には闘志が見える。

天使と魔術師。お互いに負けられぬ訳が有る戦い。まだ始まったばかり。

**先制攻撃（後書き）**

感想をお願いします！

## 番外編〜目立たない君達へ〜

さて、このコーナーもやっとこさ三回目を迎えました〜パチパチさて今回のゲストは…エリーちゃんとメディちゃんのコンビです。

「最近、注目度増して来た（つもり）なのにこのコーナーに呼ばれる筋合いがないネ！」

そのとおり！この2人は最近、作者の気遣いによりコダマ小転校して来たのだ！なんて優しい作者…。

「まあ気遣いはよか、ちゃんと出番ふえるの？」

冷たッ！流石メディ。そんなの当然！次の戦いまでの期間ではなかなかの出番を用意してるよ〜！

さてこの2人は第2部序盤から登場。初侵略の水星団の奴らの所までスバルのために道を切り開いた。

それからスバルの恋に落ちる。しかしメディは未だにエグゼにベツタリ。まさに乙女な2人！

「スバル君は私の夫よ〜！」

はい、なんか自分の世界に入ってるようです。

さて彼女達、チヨイナ出身のアイドルでミソラと人気を争っているんですよ。

そのたもミソラとは常にライバルであります。スバルに関しても。

「けどエリーは優しいから」

メディ。フォローには少し厳しいよ。

エリーは番外編2にも登場し、ミソラとのスバルに対しての対抗心、そして腹黒さを見せつけた（笑）。

本編でも近々書く予定です。

「イヤ、優しいから！うん！」

無理しなくても…逆に可哀想だよ…

「あーもうスバル君サイコー！スバル君オンリー！」

ヤバい！エリーが暴走して来たので…今日はこの辺で…

最後にこれからは少しネタバレになるんで、嫌な人はスイマセンm

(一一)mこの辺で。

実は……………

実は気付いてる人いるかもしれません…  
コダマ小のメンバー内で四角関係が出来そうナンです！  
スバル、エリー、ミソラ、○○○！なんです！

「え？誰？誰？」

えっ！？それは…また後程！お楽しみに！

では次回のゲストは…えっ！？イヤ、こんな人知らん！みんな  
「いたの！？」って思う人です！

本編は…遂に天使VS魔術師、終盤に！

ではお楽しみに！

## ルール（前書き）

以外にあっさり決着が着いちゃいます。すみません

## ルール

（北九州国際空港付近のウエーブロード）

ムーン・レジエンドは未だに気を失っていた。

「オイ、シン！ 聞こえるか！？」

ハンターに電話が入って来た。

「ん〜。ハツ！ 僕は！？」

電話でムーン・レジエンドは目を覚ました。

「シン！ どうしたんだ！？」

フォボスが電話の画面越しに話しかけてくる。どうやらシン以外は空港のウィルス処理が終わったようだ。

「ノットレジエンド！ 実は何かコウモリ頭と黒い体の白髪野郎達に出会って…！ そつから…！ 覚えてなＹ。けど…！ ソイツ等も空港に向かうって言ってたＹ。！」

無論、コウモリ頭はフォルテで体が黒い白髪野郎はブライである。

それを聞いてフォボスは顔をしかめたが、すぐに言った。

「俺達も北九州国際空港に向かうからお前は速く行け！」

「OK！ イッツレジエンド！」

そう言うとムーン・レジエンドは電話を切り、北九州国際空港の方に向き直った。

〈空港内〉

「今笑っちゃったけどさ…僕、今にも泣きそうなんだ…」

セレナード・エンジェルは言った。確かに目が少し潤んでいる。ピエロ・マジシャンは黙っている。

「アイツの為に僕は君に勝たなくてはならない。だからもう、本気で行く！」

そう言うとセレナード・エンジェルは聖剣を持ち、ピエロ・マジシヤンに向かい走り出した。

「！速いッ！」

ピエロ・マジシヤンは辛うじて避けた。そして頭のシルクハットを取った。

「ダークスモーク！」

そう叫ぶと、シルクハットから黒い煙が出てきて辺りを包んだ。

「ゲフツ！周りが見えない…コレじゃ攻撃が…」

「亜蘭、落ち着いて。目を閉じて…」

少し混乱したセレナード・エンジェルをセレナードが落ち着かせた。そして目を閉じて神経を集中させる。

(……………そこだ！)

ピエロ・マジシヤンの気配を察知し、セレナード・エンジェルは剣を突いた。手ごたえはあった。だが、

「残念無念、外れだよ！」

声は剣と反対の方向からした。

煙が晴れる。なんとピエロ・マジシヤンはセレナード・エンジェルの背後に回り込んでいた。

剣はなんと、ピエロの様な人形に刺さっていた。

「しまった！」

不意を突かれたセレナード・エンジェル。だが、時すでに遅し。次

の瞬間、セレナード・エンジェルにカードスラッシュが襲い掛かった。

殆どのカードがヒットしセレナード・エンジェルは倒れた。

「あゝあ。主やりすぎ」

ピエロがキャハと笑う。しかしピエロ・マジシャンが前を見るとすくなく立ち上がった。

「え!？」

さすがのピエロコンビも笑顔ではいられない。

「ギリギリセーフ。死ぬかと思った」

セレナード・エンジェルは溜め息を吐いた。そしてピエロ・マジシヤンの方を見た。

「不思議そうだね。実は僕は攻撃中以外ならばいつでも自分の意思でオーラを張って攻撃をオーラに吸収できるんだ」

「なら何故私の先制攻撃は・・・？」

ピエロ・マジシヤンは驚きを隠せないでいるようだ。

「ルールだったよね? 避けないっての」

セレナード・エンジェルは平然と答えた。

(これじゃあカード摩り替えた私達がバカみたいじゃん)

実はピエロ・マジシヤン、ピエロにカードを渡す際にマジックでカードを替えたのだ。

しかしソレを今言う訳にもいかず、強がった。

「その判断、命取りになるよ! ステッキブレード!」

ピエロ・マジシヤンは切りかかった。しかしセレナード・エンジェルはオーラを張り攻撃を難なくしのいだ。しかしオーラは消えてしまった。

「なーんだ。スキだらけ!」

そう言つてピエロ・マジシヤンはもう一回切りかかろうとしたがセレナード・エンジェルも剣で受け止めた。

「チエ! シツパ〜イ」

「その判断、命取りになるよ」

ピエロ・マジシャンが舌打ちした後、セレナード・エンジェルは先程のピエロ・マジシャンの言葉を口にした。

「え？人の真似とか止めてよね〜」

ピエロ・マジシャンはおどけたがセレナード・エンジェルの顔は真剣だった。

「事実だったりして？」

そう言うとセレナード・エンジェルの剣を持ってない右手がオーラに包まれていった。

「オーラは攻撃を吸収するって僕言ったけどさ…吸収出来る…外に放出も可能…」

「えーっ！まさか…」

ピエロ・マジシャンはセレナード・エンジェルの考えている事がわかった。

「そう。君から受ける筈だった吸収したダメージを君に…しかもそのままじゃないよ…二倍さ」

それを聞いてピエロ・マジシャンはセレナード・エンジェルから離れて距離を取ったが少し遅かったようだ。

「僕のウィザードの分と僕の怒りを喰らえ！…シャイニング・ペイン！！」

セレナード・エンジェルはそう叫ぶと、右腕から眩しいレーザーが放たれた。そしてピエロ・マジシャンに直撃した筈であった。

「いない！？」

どうやってかは分からないが避けて逃げたようだ。セレナード・エンジェルはピエロ・マジシャンがいた筈の場所を見たが、何も無かった。ただ地面に亀裂が入ってるだけだ。どうやら今の攻撃でできたようだ。

「あちゃー…」  
セレナード・エンジェルは電波変換を解き、頭を抑えた。  
「コントロールしきれませんがね亜蘭…まだまだですね」  
セレナードも苦笑した。その時だった。

「ヘルズローリング！」  
何処からか紫色のリングが2つ、セレナードに襲い掛かった。  
「ムッ!？」

セレナードはオーラを張り、何とか凌いだ。

「ちよっ…またアイツ!？」

亜蘭さんはイヤだ〜と叫んだがセレナードはいいえ、と否定した。

「じゃ誰さ？」

亜蘭さんはセレナードに詰め寄ったがセレナードは違う方向を険しい顔で見ている。

「裏の破壊神…」

「えっ?なんて?」

亜蘭さんはセレナードの眩きが聞き返したがセレナードは無視した。そして口を開いた。

「久しぶりですね…フォルテ」

「ハハハ!攻撃だけで見抜くとは…流石裏の王と言った所か」

上空のウェーブロードからフォルテとブライが見下ろしていた。そしてセレナード達の方へ飛び降りてきた…。

## ルール（後書き）

ドウでしたか？この戦いが終り、また一步最終回に近づきました・  
・。一応、次回作の構成は出来てます。多分本編は、後25位にな  
る予定です。

次回は本編が分かりません。  
では感想等お待ちしてます。

後、「ダイヤモンド」もよろしくお願いします

番外編4〜目立たない君たちへ〜(前書き)

ゲスト変えました

後、最後の方にお知らせがあります

## 番外編4〜目立たない君たちへ〜

こんにちは〜ストリームです〜す！本編が一段落した所で今日も張り切って行きましょう〜！

今回のゲストは変更して…プリンセス・プライド五世とナイトマンのクリームランドコンビとなりました！よろしくお願いします！

「此方こそ、お招きいただき、少しだけ嬉しいですわ」  
「姫と同じだ」

うーん…なんか素直に喜べないで…  
「ノットレジェンド！」

え？誰か今なんか言いましたか？

「いいえ」  
「姫に危険が…！」

ナイトマン焦り過ぎ…

「じゃーん！イツツレジェンド！レジェンドマスター・シン飛び入り参加！」

「同じくムーン・ディザスター飛び入り参加！」

「電波変換！ムーン・ディザスター降臨！！！」

プリンセス、お知り合いですか？

「いえ、知りませんわね！きつとなんかの間違いですよ」

「不審者として、デリート！キングダム・クラッシュャー！！」

「ギャ~~~~！！」

オーツト！不審な電波人間にナイトマンの必殺技がクリーンヒット！！ナイトマン恐るべし…

「姫を守るためだ」

カッケー！まさにナイト！しかしこんな強さを持ちながらも出番少ないし、登場も遅かった。しかも電波変換してる回数がかなり少ない1人…プリンセス、スイマセン…

「フフ…構いませんわよ」

…目が笑ってないよ…プリンセス。しかしプリンセス・プライド五世はこの小説では寛大な性格なんです！

ジャック達の国の復興に国を挙げて手伝ったり、クインティアの友達だったり、何よりクリームランドの女王様！しかも今回は旅行と偽って日本に來ている。更にはサテラポリスのマドンナ的存在。ツッコミもまともだが的確。

先祖はエグゼでお馴染み、プリンセス・プライド！性格もプライド五世はプライドとあまんし変わらんって設定です。しかし、年齢は二十歳つつう設定です。

「ウム、あの頃が懐かしい…」

ナイトマンが感慨深くなってますが…アニメもゲームも大活躍だったもんなあ〜プライドとナイトマン。

「ウム、今とは比べられん！」

ごめんね…作者のせいで…しかし、大活躍だったがナイトマンは一つ、汚点を残した！

「ナイトマン。フフ、その様な事は聞かされてませわね…？」

「姫！あれはかつての技術が足りなかったと言いますか…！」

ああ、なんかマズい事言ったようだね…

実はナイトマン、アニメ無印では一回暴走している！暴・走！クリムランドの電腦を破壊した。

ゲームの2はプライドに文句ありそう（ナイトマンが正しかったのだが）にしていたり、5でもナンがあったような？

「申し訳ありません…姫」

「…今後そのような事は無いように！」

「ハッ」

やはりナイトは姫の下につくのか。これからも姫を守れ、そして共に戦え、ナイトマン。

さーで、物語はそろそろ終盤に入ってきます。そしてこのコーナー、なんと最終回！！なんて短い…。たった四回…。まだ紹介したい奴いるんですが…。

だってこの小説、スバルさえ最近出番無いですもん！

今はまだ出番少ないキャラもコツカから活躍する予定！  
更に次回作でも今作登場したキャラ達が登場します！

脇役でも関係ない！目立たせたい！そんな感じで始まったこのコーナー。しょうもないって思った方もいらしたかと思いますが4回、見ていただいております！  
このコーナーは終了ですが、本編はまだ終わりません。最後までどうかよろしく願います。

「ちょっと待てーイ！」

君誰？僕がせつかくいい感じで締めくくったのに！

「なんでいつち番出番ないこのレジェンドマスターシンを紹介しない?」

アツ、誰かと思えばシンか!ごめん!出番無さ過ぎで忘れていたよ。

「最近ましたよ!」

最近・・・登場したと思ったらブライとフォルテにビビって倒れなかった?

「ノットレジェンド!それは・・・・・・・・とにかく紹介を」

ごめん。出番が無さ過ぎで何処を紹介したらと・・・・・・・・(汗)

「・・・・・・・・ノットレジェンド!」

設定は地球チームの司令塔なんだけど、実際シドウとフォボスだから。

「もつやだ・・・・・・・・」

じゃあ最終回まで出さないね。

「頼む、今回はともかく次回作に俺を!!!」

ちょうどいい!次回作の紹介を! そんなに紹介しませんが、見たくない方はすいませんがここでサイナラです。申し訳ありません。では次回作は・・・・・・・・?!

「流星のロックマン〜New World〜」(仮名)って題名で  
っす！

キーワードは「光と闇」、「キング財団」！  
オリキャラも！

まあ今はまだこんなくらいだけにしと来ます。

では今回は、

亜蘭さんとセレナードの前にブライ&フォルテ登場！その目的は？

「!ピエロ・マジシャンの行方は?カイザー・エッジワースの言う」  
あの計画」とは?

それでは次回もお楽しみに!サイナラ

「おれは次回作でれんのかい?!」

んーと多分ナイ!

「ノットレジエンド!?!」

心構え（前書き）

更新遅れすいません

## 心構え

スタッ　　とフォルテとブライは亜蘭さんとセレナードの前に降りた。暫くの沈黙があったがセレナードが初めに口を開いた。

「どういった用件ですか？　戦いならパスですよ」

するとフォルテは両手にダークアームブレードを構えた。

臨戦態勢?!

亜蘭さんは少し後ずさりしながら思った。今戦えば確実にやられる。

「自己紹介がまだだったな、裏の王。俺はブライ。コイツのオペレーターだ」

ブライは何もする気はないのか穏やかな口調だ。

「今日はアル目的があつてここに来た」

「何です？」

セレナードは尋ねるとフォルテは剣先をセレナードの方に向けた。

「地球侵略をしている奴らの幹部のピエロとか言う奴を始末しに来た」

「僕達が追つ払ったけど、地球侵略つて？　裏の王つて？」

亜蘭さんが言うのとブライが呆れたように言った。

「裏の王よ、何故こんな奴を選んだ？」

「亜蘭には大切なものを守りたいという強い心があります。私はそこに惹かれました」

「ふん、貴様らしい甘ったれた考えだな。200年前と一緒だな」  
フォルテが言った後にブライも同意した。

「貴様らのその考えでピエロを逃がした。ソレは地球の終焉を早めたと言つていい」

「えっ!?!」

「！ ブライとやら…それは違います！」

ブライの言葉と亜蘭さんのシヨックにセレナードは珍しく口調が強くなった。

「ふん…現実逃避か…しかしまあそれは結果だ…貴様等2人にそのミスを帳消しにする機会をやる」

「えっ!？」

亜蘭さんが声をあげたがブライは無視し続ける。

「まず貴様等。今地球がどの様な状況下に置かれているか理解できてるのか？」

ブライは2人に聞く。それにセレナードは危険としか分からない、亜蘭さんは全く。と答えた。

「だろうな…では簡単に教えてやる」

辺りが暗くなった。太陽が雲に隠れたんだろう。

そして、ブライはわかりきっていたかのように呟いた。そして話し出す。

「地球は今『プラネット・ジャッジ』とかいう目障りな集団に侵略されている。部下達はロックマン達が全てデリートしたがまだ幹部格が8人残っている」

「そして奴らは今攻撃はしないと云ったが・・・」

ブライ、フォルテの順に話していたがフォルテがらしくなく少し詰まった。

それを見てセレナードがブライに問うた。

「そこに罠があるか？」

「ああ。奴らは攻撃をしないと云った。それは本当のようだが、しかしロックマン達が仲間同士で潰し合うなら別の話だ。奴らは現代のロックマン、星河スバルの弱点を突き徹底的に潰す。運がよければそのまま日本から地球を支配する計画だろう。ロックマンを初め、アイツら仲間は絆が切れると立ち直れんからな」

ブライは淡々と話す。聞けば聞くほど恐ろしい計画だ。

「でその計画を阻止し、ロックマン達を救うのがせめてもの罪滅ぼ

しと」

「さすが裏の王、話が早い」

ブライはフツツと口元を緩める。しかしセレナードはふとフォルテの変化に気づいた。

「フォルテ、200年前とアナタ変わりましたね」

「黙れ。俺達はただ二人のロックマンと再戦するために奴らを倒すだけだ。・・・まあ絆の力だけは認めるが」

「フフ、それだけでも良かった。しかし、二人・・・アナタのライバルもいるのですか？」

「それ以外に誰がいる？」

「おっと失礼でしたね・・・再開が楽しみです。しかしゆっくりはしていられませんね」

セレナードはうれしそうに柔らかい笑みを浮かべた。がすぐに顔を引き締める。

「その通りだな。オイ貴様、名前は？！」

ブライが同意して亜蘭さんの方を見ていった。

「僕？亜蘭！よろしく」

亜蘭さんはブライに笑いかけた。がブライはセレナードにまた尋ねた。

「裏の王、コイツで大丈夫か？」

「勿論！ 私が保証します」

ソレを聞くなりブライとフォルテは怪訝そうな顔をしたがセレナードを信用するしかなかった。

「イタヨ！ イッツレジェンド！ コウモリ頭に白髪、後は知らない！」

ムーン・レジェンドが50メートル程叫んだ。後ろにはカーネル・ブレイド、ナイト・キングダム、バルジ・サーチにアシッド・エース、クイーン・ヴァルゴまでいる。

「……！ フォルテ？！」

数名のウィザードがフォルテを見て驚きの声を上げた。そしてフォルテは舌打ちした。

「おや？ 懐かしい」

セレナードは数人を見て呟いた。

「オイお前等、行くぞ」

ブライはその面々を見るなり亜蘭さんとセレナードに言った。

「エッ？」

「いいから、さっさと電波変換しやがれ！」

亜蘭さんの躊躇いにブライは苛立ちを隠せず怒鳴った。

亜蘭さんは怒鳴られ渋々セレナード・エンジェルへと電波変換した。

「ムーンカッター！！！」

理由は誰も知らないがムーン・レジェンドはブライ達に三日月のようなカッターで攻撃してきた。

「……え……？！」

ソレを見るやサテラポリスのメンバーはお笑い番組のようにズッコケタ。

多分、フォルテとブライに攻撃したムーン・レジェンドにビックリしたのだろう。

サーチマン辺りはムーン・レジェンドが死んだと思っただろうが。

ガキン

しかし大方の予想を裏切り、カッターはブライとフォルテに当たらず眩しい閃光の中から跳ね返ってきた。そしてムーン・レジエンドにヒットした。そして1撃で電波変換は解けた。

「あーあ」

「亜蘭、またやりすぎましたね」

「今は力抜いたのに」

そんなセレナード・エンジェルとセレナードの会話を聞いてソウだるうな、とムーン・レジエンドとセレナード・エンジェル以外が突っ込んだ。

そしてブライはアシッド・エースの方を見た。

「貴様ら、ロックマン達を見張っておいた方がいいぞ」

「ブライ、お前は何を知っている？しかもこの空港の壊れ具合、なんだ？」

アシッド・エースはブライの言った事が気になったのだろう。ブライに詰め寄った。

「フン、ロックマン達の近くにいたら2、3日もしない内に分かる・

・オイ、亜蘭」

「ん？」

「いくぞ」

「何処に？」

「さつさと来い！」

「分かったよ・・・すぐ怒るなよな」

ブライの発言にセレナード・エンジェルは渋々頷きウェーブロードに上がった。

「おいブライ」

アシッド・エースはしつこくブライに詰め寄る。他の奴らも寄ってくる。

「ラプラスソード！」

サテラポリスのメンバーの横からブーメランのように剣が飛んでくる。当然のように全員食らった。

そのスキにブライはウェーブロードにあがった。

「ブライ……！」

「今のお前等のような隙だらけの心構えだと地球は終わったも同然だな！ もっと緊張感、危機感を持って！」

ブライはそれだけ言ってウェーブロードをから見えなくなった。セレナード・エンジェルも後を追った。サテラポリスの面々はブライが言った事を心の中で呟いた。

## 心構え（後書き）

今回はちょっととした伏線がありますよ。

てゆーかブライとフォルテがキャラ違う・・・？

ではまた次回！

## 様子

「日本のコスモウエーブ」

見渡す限りの美しい星。そして黒いプラネット・ジャッジの惑星。そんな空間の片隅でピエロ・マジシャンは戦いで傷を癒やしていた。

「イタタ…油断したわ…」

「フオフォ…ピエロちゃん…珍しく無様曝したのう…」

「！？セクハラオヤジ…！」

「やめい！主らにとつたらワシはただのセクハラオヤジか…！？」

「事実よ…」

ピエロ・マジシャンは後ろから声をかけた幹部5人衆の老人ウィザードに厳しい指摘をした。しかし、老人ウィザードは逆に言い返した。

「負けたのに大口叩くで無い！」

「……………」

凶星だ。ピエロ・マジシャンは黙ってしまった。

実際、負けてはいないが逃げた。それは負けも同然だった。

「まあ関係無い戦いなんかよか、あの計画を始めるぞ…」

「うん…」

ピエロ・マジシャンがそう返事すると2人は、果てしない星に溢れた宇宙から消えた。

くサテラポリスく

シドウ達はブライに自分達の覚悟の足りなさを指摘されてからサテラポリスに戻って来た。

指令室内には暫くの沈黙に包まれていたが、沈黙を破ったのはフォボスだった。

「さつき交流会の三人から連絡があった…秘密特訓中らしい…そろそろ戻れと言ったが…リーダーシップ執らなければならねー俺達大人が何してるんだらうな…」

皆は下を見た。交流会が特訓中と言うことに驚いたのとブライの指摘それが心に突き刺さり、中々抜けない。

スバルや星斗が幾ら凄まじいポテンシャルを持っていようと、子供を酷使するのは大人としてどうなのだろう。子供にそんな重圧を掛けていいのか…。

「大佐、私達がしつかりしなければなりませんね…！」

「ああ！スバル達はっかに良いとこ持って行かす訳にやらねー！なあティア？」

「そうね…」

ブライドの言葉にシドウが反応しクインティアに言った。まるで連鎖反応。

「大佐！」

「ああ！いいか！こっからは俺達も必死にやるからな！気引き締めてな！明日からはブライの言う通り、一応コダマ小付近の護衛に突

くぞ！」

ハイ!!!

大人たちの心の中で何かが変わった。少しだがたしかに……。

くコダマ小学校上空のウェーブロードく

「ふおおおお……暢気にしとるのく放課後なのに」

老人型ウィザードは窓からスバルたちを見て言った。どうやらなんらかの目的で観察しているようだ。

「どうするの？仕掛けちゃう？」

ピエロ・マジシャンは老人型ウィザードに尋ねた。

「いや、まだじゃな……ロックマン以外が出来るだけ沢山まとまったほうがやりやすい」

「だね」

「しかし・・・主を負かしたつわものがナンも知らんといいいのだが」  
「多分ナンも知らないよ」

少しあやふやな返事だがソレを聞いて老人型ウィザードはソウかと安心したような返事をした。

「じゃあ明日以降この周辺をうるついで機会がありや仕掛けるとしよう」

「オッケイ」

そう言うと二人は姿を消した。

（プラネット・ジャッジの惑星）

「カイザーよ」

アジトのの一室に低いデューオの声が響いた。  
「ハッ」

カイザー・エッジワースが跪く。

「本当に奴らは抹殺する価値があるのか？」

「何をおっしゃいます。奴らは絆とやらを重んじていますが所詮ソレは口だけ。本来自己中心な奴らばかりです。もし本当に重んじて

いる奴がいても、1人じゃあ何もできません。まあ見ておいてください……近じかソレが分かりますよ」

「……わかった、お前に任そう」

「ありがとうございます」

そういうとカイザーは消えた。

(ふむ……200年も経つと変わるものか……)

デューオは1人過去を振り返っていた。

「セレナード」

「なんですか？」

ソロがセレナードに話しかけた。

ソロ、フォルテ、亜蘭さん、セレナードはとある山で休んでいた。

「お前は裏の王なのに絆を認めていたそうだな」

「ええ」

「しかし絆は、現代のロックマンの最大の武器が最大の弱点になるぞ。奴は裏切られたら最後、よっぽどのが無ければ立ち直れん。アイツは甘ちゃんとか絆の極みだからな」

「立ち直らす為に私達が行くんでしょう?」

ソロは黙った。いや、黙らされた。セレナードは微笑む。

「大丈夫、闇だけ斬ればいいのです」

「ふ・・ソウだったな。よしくぞ。もたもたしてられん。亜蘭！起きろ！」

律儀に地べたにシートをひき寝ていた亜蘭さんをソロが起こした。

「え〜?もう?さっきの特訓で・・・」

「つべこべ言うな!平和になってからのんびりしろ!」

「まあまあソロ、焦ってはなりません」

怒鳴るソロをセレナードが落ち着かせた。

「ちっ!さっきアレが出来たのが信じられないな」

「右に同じだ!」

ソロとフォルテが口を揃えた。

「俺は貴様とアレしてしまっただなんて虫唾が走る!何で貴様と俺が

第一、こいつ等二人が一緒に何故出来る?!

「私達は元々互いに裏の強者。だから当然。しかしこの二人は・・・あれです、けんかするほど仲がいい、って奴です」

不服そうなフォルテにセレナードが的確に解説する。しかしフォルテは横目で亜蘭さんとソロを見た。

「喧嘩か・・・どう見てもソロの一方通行な喧嘩だけだな」

「さあ。どうでしょう」

そんな会話をしていると日が暮れた。そして辺りは闇が覆った。

様子（後書き）

昨日甲子園に高校野球見に行きました。そしてなんと、応援ツア  
ーの人たちの誘いで県違うのに一緒に応援することに！負けただけど  
もう楽しいのなんのって（笑）皆さんも是非一回行って見て下さい。  
高校野球！ってことで「ダイヤモンド」もよろしくお願いします！  
高校野球！って事で・・・誰か「おおきく振りかぶって」か「ダイ  
ヤのA」読んでませんか？メチャハマってます。

では評価、感想お待ちしております。

## 疑惑・困惑

翌日　時刻は正午過ぎ　スバル達は昼休みを教室で過ごしていた。

「エリーちゃん！スバル君から離れなさいよ！」

「それはコッチのセリフネ！」

エリーとミソラがスバルに2人して抱きついている。言うまでもなくスバルは困惑の表情なのだが。それを見てルナは何やらキーキーと叫んでいてキザマロとゴン太は一步引き、星斗とジャックは笑っている。しかし、ツカサはと言うと何やら怪訝そうな表情をしている。

「ツカサ、どうしたよ？」

ツカサの表情を見て星斗が尋ねた。するとツカサは、

「何でもないよ。ちょっとトイレ」

と言い教室を出た。

そんなツカサを見て星斗とジャックは首を傾げた。

く屋上く

ツカサは手すり越しにコダマタウンを見下ろした。

「ふう…」

「どうしたよ？」

「ヒカル…」

ハンター内からヒカル（ジエニミ）が話し掛けた。

「オメエらしくネーな…溜め息なんてよ」

そう、ヒカルはツカサを知り尽くしている。だから互いのことは何でもわかる。以心伝心だ。

「こういうのを何て言うのかな？初めてなんだ…この感情」

「どんなんだよ、もしかしてあのエリーとか言う奴か？」

「…流石ヒカルだね」

「ツたりメーだ」

「いつから？」

「ウイルスロード辺りから」

「ハハ！ 参っちゃうな…」

やはり以心伝心だ。まるで自分のことのように分かるのだ。

「…何が参っちゃうって!?!」

「隠し事、嘘は良くないぜ！ ツカサ」

ツカサの背後から2人の声がした。ツカサはハッと振り向くと星斗とジャックだった。2人はにやついている。

「エリーがどうした？」

星斗が更ににやつく。どうやら聞いていたようだ。

「星斗君、止めときなよ」

エグゼが言ったが星斗、ジャックはニヤケたままだ。しかしジャックは安心しな、とツカサの目を見て言った。

「誰にも言わねーよ。から俺達だけに教えてくれ」

ツカサは黙ってたがいいよと言った。

「……最近さ…スバル君を見てたらなんか変なん感情になるんだ…」

それで分かったんだ。恋ってね」

「マジで〜〜!?!?」

ツカサは聞いていたと思ってたので予想外なリアクションに少しビツクリしたようだ。しかしこの言い方では…。

「そんなに?」

「イヤ、だってツカサがスバルに!?!」

星斗が何か勘違いしたのか一歩引き驚いた。

「ツカサ…お前…そんな…」

ジャックは膝をつき、額に手を当てた。

「…なんか僕言った?」

ツカサは少し髪を触って聞いた。まるで女の子。

少し呆気にとられている。すると星斗とジャックはツカサから更に一歩引き言った。異様な空気が周りを包む。

「…だってお前…スバルが好きなんだろ?お前…そんな趣味が…もしかして!お前…女…?!」

手すり際にいた星斗とジャックはエレベーター付近まで下がりツカサを指差した。ツカサはプツと吹き出した。

「アハハ!2人共何言ってるの?」

「いやツカサ、流石に俺も今の発言は焦ったぞ」

ヒカルがツカサに勘違いの内容を解説した。

「なるほど。ごめんごめん。僕が好きなのはエリーちゃんだよ」

ツカサは顔を少し赤らめ笑いながら言った。

爽やかな風が吹く。

「なるほど…焦ったぜ…まさかな」

ジャックが溜め息を吐いた。ツカサはまともな人間だと信頼していたようだ。誰でもツカサはまともな人間と思うだろうが。

「んで告白はしねーの?…けどな〜エリーはスバルにベタ惚れだもんな〜」

星斗が顎に手を当てる。多分この時エグゼは星斗と熱斗の違いに気づいただろう。

「この戦いが終わったらやってみようかなって考えてるんだ」  
「ヒューヒュー！俺達応援団になってやるぜ！」

星斗が冷やかしつつもメールを送った。

「うん…ありがとう」

ツカサは微笑んだ。

「ツカサくん…助けて」

スバルがエレベーターから出て来た。相当息を切らしている。ミソラとエリーにでも追っかけまわされたのだろう。相当息を切らしている。そして案の定、ミソラとエリーが後ろから姿を見せた。なんと平和(?)な風景だ。

ピピピッ

星斗のハンターがなった。シドウからのようだ。

「暁さん」

「星斗、今すぐ全員を電波変換させる！敵だ！」

シドウの様子からして相当な強さのようだ。だが、プラネット・ジヤッジはまだ攻撃しない筈。誰か予測がつかない。

「みんな、敵だ！電波変換だつて！」

星斗はハンターを構え、みんなに言った。スバル達もハンターを構えてみんな電波変換した。

「ふおふお、派手なお出迎えじゃノー」

「！お前等はプラネット・ジヤッジの！」

「さよう、ワシは幹部5人衆のエスパー・グレナイトと申す。こっちはご存知、ピエロ。マジシャン」

ウェーブロードから見下ろしていたのはエスパー・グレナイトこと老人型ウィザードとピエロ・マジシャンだ。

「お前達はまだ攻撃しないと云った筈！」

スター・エグゼが声を荒げるがピエロ・マジシャンは澄ました顔で云った。

「ええ。言っただけど何？誰もまだ攻撃するなんて一言も言っていないけど」

「じゃあ何のタメネ?!」

エリー・メディーが問うた。皆、険しい表情だ。

「ソレはじゃな・・・!ムン！」

エスパー・グレナイトが後ろに振り向き手でバリアのような壁を張った。そして後ろからの何者かの攻撃を防いだ。

「ふおおお、フェアでないのー、若者よ」

「どつちがだ」

現れたのはカーネル・ブレイド、アシッド。エース、ナイト・キングダム、バルジ・サーチ、クイーン・ヴァルゴであった。

「貴様等、今頃何のようだ？奇襲か？ならば斬る！」

「落ちて着け若者、わし等はまだ攻撃せんと云ったわい。攻撃は」

カーネル・ブレイドがサーベルを構えるのを見てエスパー・グレナイトは不敵に笑った。そしてピエロ・マジシャンが口を開いた。

「セクハラ、御託はもういい。ヤレ」

「しょうがないの。ッテセクハラはやめい!!ブレインサンダー!!!」

技名と同時にエスパー・グレナイトの周りから黒い雷が放たれた。

「!みんな!避けるな！」

アシッド・エースが叫んだが時すでに遅し。大半は雷にヒットし倒れ、避けれたのはロックマンとスター・エグゼだけであった。

「卑怯な！」

「よく見なさい。今のは攻撃でない。証拠に電撃技なのに傷ひとつ無い」

ロックマンは叫んだがピエロ・マジシャンが返す。

「確かに」

ロックマンは足元に倒れたハーブ・ノートを見た。傷は一個も無い。一瞬、ロックマンは安心したがウォーロックは仲間の異変に叫んだ。

「スバル、離れる！」

「え？」

ロックマンがハーブ・ノートの方を見るとハーブ・ノートは起き上がっていた。しかし体もバイザーも黒になっている。他のみんなもソウだ。

「ミソラちゃん？」

「デリート」

「エツ？」

黒いハーブ・ノートはロックマンの言葉などに耳を貸さずギターを構えた。

「スバル！」

「パルスソング！」

ウォーロックの叫びも虚しくロックマンはパルスソングを喰らい、倒れた。

「そんな・・・これは？」

ロックマンは周りの光景に驚きを隠せない。スター・エグゼもジャックコーヴァスの攻撃を受けていた。

「星斗君、これは？」

「わかんねーけど、みんながなんか人が変わってやがる」

「これは・・・みんなが闇に染まってしまっている！」

エグゼが叫んだ。

「そのトウリじゃ！さっきのワシの雷は食らった者を闇に染める。勿論貴様等は敵じゃ」

エスパール・グレナイトが笑う。

「さあどうする？貴様等の仲間と戦え！まあパワーアップもしているし無理だろうが、こいつ等を倒せばこの状態は終り、元に戻るぞ」

「助けれるなら、倒す！」

ロックマンはハープ・ノートに向き直り、バスターを構えた。

「ロックバス・・・駄目だ、出来ない」

「スバル！何言ってるんだ！」

「だって、いくら闇に染まってるって言っても、本人だよ！僕のブラザーなんだよ・・・ガハッ！」

喋っている間にロックマンはアシッド・エースのロックオンソードを喰らった。

「ハハハ！愉快じゃ！仲間同士の殺し合い、さあどうする？ロックマンよ？死ぬか？仲間を傷つけるか？」

エスパール・グレナイトはウェーブロード上から嘲笑った。

## 疑惑・困惑（後書き）

後半がなんか・・・下手だ。元々ですが。

てユーかこの前、アニメエグゼで実はフォルテは元々ファラオマン  
だったという僕的には衝撃的な事実を知りました（笑）  
ではまた次回！

## 仇になる絆

「取り敢えず、屋上から離れよう。狭いし危険だ」  
「うん」

エグゼの呼びかけにより、ロックマンとスター・エグゼはウェーブロードに飛び上がった。すぐそばにエスパー・グレナイトとピエロ・マジシャンがいる。ロックマンの目つきが変わる。

「無駄じゃぞ。ワシには鉄壁の守りがアル。デリートは不可能」  
「絆ないお前達など敵でないししかも多勢に無勢、仲間を救うのが先決であろう」

エスパー。グレナイトとピエロ・マジシャンはロックマンを見透かしたかの様にいった。しかも正論である。

「クツ！」  
「星斗君、取り敢えず攻撃をかわしながら考えよう」

「でもよ攻撃できないんだぜ!？」

スター・エグゼの言葉にロックマンは言葉を詰まらせた。攻撃できないのは自分だけじゃないのだ。

「ハイドロドラゴン！」  
「キングダムクラッシャー!!!」

いつの間にかみんなウェーブロードに上がっていて、クイーン・ヴァルゴとナイト・キングダムと大人の女性コンビがロックマンとスター・エグゼに攻撃を仕掛けた。

「グアーッ!!!」  
キングダムクラッシャーを喰らい、怯んだところにハイドロドラゴンを決められ2人は泡に閉じ込められた。更に目の前に2人の電波人間がいた。

「ンな!!!」  
「星斗君!!!」

ウォーロックとエグゼは声をあげる。目の前にいたのはジェミニ・

スパークのWとBだ。

「ツカサ君!!」

「てめー!!!」

ロックマンとスター・エグゼの呼びかけに反応もせず、ジエミニ・スパークの2人は手を組んだ。

「ジエミニサンダー!!!」

ジエミニ・スパークの手から眩しい電撃が放たれ、泡にヒット。当然ロックマンとスター・エグゼは大ダメージを受け倒れた。火傷も負っている。

「ハア…ハア…みんな…」

「どうすりゃあいいんだよ…」

スター・ロックマンは遂に弱音を吐き、ロックマンは目を閉じた。

みんなにデリートされるなら本望。…でも地球を守れなかったし何よりみんなを元に戻せなかった…。みんなごめん…。

ロックマンは思った。まだしなくてはならないことがある。しかし今のロックマンにはどうにも出来ない。遂にスター・エグゼも倒れた。そして薄っすらとだがアシッド・エースとカーネル・ブレイド、バルジ・サーチがロックオンソード、サーベル、スナイパーをこちらに向けた。

「トドメだ」

闇化したカーネル・ブレイドは短くそう告げるとサーベルを振り下ろした。…ピエロ・マジシャンは思わず目を逸らし、エスパール・グレナイトは爆笑した…。

ガキン!!

「俺達の絆を忘れたのか、ロックマン!!!」

金属音の後、かすかにロックマンはその声を聞いた。薄っすらと目を開く…。ロックマンとスター・エグゼは自分が生きていることを確認した。そして前を見るとカーネル・ブレイド達はみんな苦しうに体を抑えていた。しかし2人だけ立っていた。いや、1人と1体の方が正しいだろう。

「君は…」

「マジかよ…」

2人は力無く掠れた声しか出なかった。

「無様さらしたな、ロックマン！」

「やはり絆とアマちゃんの極みだな、貴様は」

立っていたのはブライとフォルテ、ライバルだった…。

仇になる絆（後書き）

なんかかつこよくブライとフォルテ登場（笑）

ついでにこの話なアル台詞は確か漫画ロックマンエグゼのフォルテの名言です。

次回は久しぶりにアノ人達も登場！そして新た（？）な力が！お楽しみに！

見とけ！

「ブライ…有難う」

ロックマンがブライに礼を言うとブライはロックマンから視線を逸らした。

「別に助けた訳で無い！お前が死ぬと再戦も出来んし、ムーメタルも取り返せんからな！それに俺だけでは無い！来る筈がない！」

ブライはそう言ったがロックマンの背後からブライを否定する声がある。

「素直じゃ無いなブライ」

「全くだ」

「素直になれよ」

「右に同じ！行く言ったのはお前だ！」

「ミートウーだYo！」

「あ…あんだ達は…」

スター・エグゼの目の先には数人、見慣れたメンバーがいた。ウェープロードから全員飛び降りる。

「…新・交流会、見参！！」

「ムーン・レジェンド、推参！」

「オイオイ、マジカよ…」

ウォーロックは救世主の顔触れを見て驚きと安堵の溜め息を漏らした。

駆け付けたのはブルース・ソルジャー、トマホーク・パワード、サイバー・ペルセウス、セレナード・エンジェルとムーン・レジェンドだ。

無論、セレナード・エンジェルは皆、知らないのだが。

「有難うございます…皆さん…アナタは！」

エグゼはセレナード・エンジェルを見て言った。かつて戦った経験

がある。

しかし、セレナード・エンジェルは今はそのドロコロでは無いと言わんばかりに闇に染まった皆を見た。その視線は厳しい。

「アナタなら分かるはずですよ…御託は後です」

セレナードが実体化して言った。その視線はかつての裏の王の面影を見ることが出来る。

「お前達2人は休んでおけ」

ブルース・ソルジャーが言った。

「ちょ…！？僕達まだ出来る…！」

ロックマンは反論したが口を噤んだ。ブライがラプラスソードを此方に向けたのだ。

「貴様等に何が出来ると甘チャンが…自分の力の無さを感じながら、俺達の戦いを見ておけ！」

「まさかお前等、攻撃する気か!？」

ウォーロックがブライに言うと言うとブライは短く、当然だ。と言った。ウォーロックは声を荒げたがセレナード・エンジェルがフォローを入れる。

「大丈夫だよ。『闇』だけを潰すんだよ」

「そう、『心の闇』だけを切るんです…」

「第一、時には仲間を攻撃しなければ守れない時もあるんだ…それが本当の『絆』じゃないのか？」

ブルースも実体化し言った。2人は黙った。そうかも…と感じたのだ。しかし闇だけつてにも無理があると思った。

「とにかく、貴様等は自分達の力の無さと感傷にでも大人しく浸っておけ」

フォルテはそう言うと言った皆の方に向き直った。

「ムーン・レジェンドは2人の保護。後は各自、攻撃。やりすぎには注意な」

「了解！」

とサイバー・ペルセウスの言葉にブライとフォルテ以外が返事し各

自持ち場に向かった。ロックマン達はそれをぼんやり眺めているしかなかった。

「フオフオ…いくら援護が来ようと無駄…闇に染まらしてやるわい…ムン！」

エスパー・グレナイトはそう言うのと持ち場に向かおうとした交流会、ブライとフォルテをまた闇に染めようと攻撃してきた。

「ライトニング・リフレクト！」

セレナード・エンジェルがガードを張り、難なく凌いだ。更に跳ね返したが、攻撃は外れた。

「！…やりよるわい…」

「コツチも鉄壁だよ」

エスパー・グレナイトの動揺にセレナード・エンジェルは笑って見せた。「主がピエロ・マジシャンとやった者が…」

「察しいいね〜」

セレナード・エンジェルは再び笑って見せたがエスパー・グレナイトも笑って見せる。

「ならばこの仲間どうしのやり合い、少しは楽しめそうじゃの…  
なあピエロちゃん」

「……………」

ピエロ・マジシャンは黙っていた。

「ってやりたく無いんだけどな」

トマホーク・パワードは前にいる電波人間を見て言った。いたのはジエミニ・スパーク、ハープ・ノートだ。

「おれ、ミソラちゃんを攻撃なんて無理だぜ……」  
トマホークマンも唸る。

「けど……怖いミソラはヤだろ？」

「ああ」

「って訳でウェーブバトル、ライド・オン」

「フォボスさんとエリーちゃん……か……」

「オイオイ勇輝、さっさとやるぜ！ウォーロックとの格の違いを見せてやらねーとな！」

サイバー・ペルセウスの眩きにペルセウスが実体化して急かす。

「まあ目的違うけど……やらなきゃな……ウェーブバトル、ライド・オン」

「チツ…よりによって…」

「ジャックとプライド女王…容赦ないですね…たかひろ様」

ブルース・ソルジャーの前にはジャック・コーヴァス、後ろにはナイト・キングダムがいる。2人共、息つく間も与えず攻撃して来る。ブルース・ソルジャーは防戦一方だ。

ジャック・コーヴァスがエアロダイブで向かって来る。

「今だ…デルタレイエツジ！」

限界までジャック・コーヴァスを引き付け、返り討ちに成功。ジャック・コーヴァスは苦しそうな顔をしながら倒れた。

「後は…女王様だけ…」

ブルース・ソルジャーはナイト・キングダムの方に向き直り、剣を構えた

「っと…シドウさんカップルか…」セレナード・エンジェルの前にはアシッド・エースとクイーン・ヴァルゴだ。やはり体は黒く染まっている。

「亜蘭、油断だけはいけませんよ」

「わかってる！ウエーブバトル・ライドオン」

「俺達はどつする、ブライ」

「フン、決着も時間の問題。俺達のが最後の闇を切る」

フォルテの質問にバトルを見ながらブライは答えた。「あれするも必要無いな…フルシンクロの上に行く…俺達の究極…したくないからいいが…」

「……ああ……」

フォルテとブライは2人して顔をしかめた。

そしてバトルは激化していく。

見とけ！（後書き）

久しぶりに交流会登場（笑）忘れてる方もいるかと…だから解説を

トマホーク・パワード…僕

ブルース・ソルジャー…たかひろさん（現・一つの希望さん）

サイバー・ペルセウス…勇輝さん

今回は…ブライの言う『究極』とは？

仲間は？戦いの結果は？

ではまた次回！評価、感想お待ちしてます！

## ダミー

「ショックノート！」

ハーブ・ノートがトマホーク・パワードにアンプから音符攻撃を放つ。

トマホーク・パワードはジャンプしてかわすがジェミニ・スパークBがエレキソードで追い討ちをかけた。トマホーク・パワードはそれをトマホークで受け止め、更に力で押し切った。

ジェミニ・スパークBは後ろに倒れたが、ジェミニ・スパークWが背後から現れた。

「ロケットナックル！」

「リーフシールド！」

ジェミニ・スパークWがロケットナックルを放ったが、トマホーク・パワードは木の葉のようなものでシールドを張り、ロケットナックルを凌いだ。

「今度はコッチから行くぜ！！バトルカード、ハリケーンダンス、ジャイアントアックス！」

トマホーク・パワードは左手のトマホークを更に大きいアックスに変えた。そして回り始めた。

「闇を切る！アックスハリケーン！」

回転に更にアックスも回り攻撃範囲が増し、ジェミニ・スパークW & amp; Bとハーブ・ノートは逝ける術なく攻撃を喰らい、倒れた。

すると、体から黒い魂のような物が出て体の黒みは薄くなって行った。

「フウー、成功、成功！」

トマホーク・パワードは安堵の溜め息を漏らした。

「メテオリックシャワー！」

サイバー・ペルセウスが上空から無数の隕石を降らした。隕石はカーネル・ブレイドとエリー・メディにヒットしたが2人共持ちこたえた。

「ヒーリングボール……」

エリー・メディは球体を出すと、カーネル・ブレイドと自分に当てた。すると、2人共体の傷が無くなった。

「マジが……このままじゃキリがない……」

サイバー・ペルセウスは思わず顔を歪めた。

「デルタレイエツジ！」

カーネル・ブレイドの背後から声がした。ブルース・ソルジャーだ。「何してる……一発でかたづけたら手っ取り早いだろう」

「！自分は終わらしたのか？」

「ああ」

それを聞くとサイバー・ペルセウスはチエ！と舌打ちをした。

「……やりたか無いけど……仕方ないな……メテオリックシャワー！」

再び、サイバー・ペルセウスは上空から無数の隕石を降らし、攻撃を当てる。しかしまたもや2人共持ちこたえ、エリー・メディがヒーリングボールを出そうとした。

「今のはダミーの攻撃さ！闇を貫け！サン&amp;ムーン！」

飛び上がったサイバー・ペルセウスの右腕から紅と青のレーザーが放たれ、回復しようとしたカーネル・ブレイドとエリー・メディを包んだ。次にレーザーから姿を現した2人の体にはもう黒みは無く、

体から黒い魂のような物が抜けた。

「アシッドブラスター、ワイドウェーブ！」

「効かない！ライドニング・リフレクト！」

アシッド・エースの多彩な攻撃をガードしながら凌ぐのはセレナード・エンジェル。そして後ろを向き、クイーン・ヴァルゴに攻撃した。

「聖剣ライトレイヴアー…ライドニング・カルテット！」

「アクアヴェール！」

セレナード・エンジェルの光の四重奏の一発目をクイーン・ヴァルゴが水の壁で防ぎ、水の衝撃波がセレナード・エンジェルに襲い掛かった。まだ攻撃中だったセレナード・エンジェルはオーラを張れず衝撃波を喰らった。

「グハアッ！」

「…ロックオンソード！」

怯んだセレナード・エンジェルにアシッド・エースのロックオンソードが牙を向く。

「チエ…オーラ！」

セレナード・エンジェルはギリギリの所でオーラを張り、なんとか凌いだ。

「ハイドロドラゴン！」

しかし、クイーン・ヴァルゴも容赦なく攻撃をする。

「ライドニング・リフレクト！」

セレナード・エンジェルはハイドロドラゴンを弾き返し、クイーン・ヴァルゴとアシッド・エース、どちらも泡に閉じ込めることができた。勿論、クイーン・ヴァルゴとアシッド・エースは動きがとれない。

「闇を切る……ライドニング・カルテット！」

聖なる剣の四重奏は全てアシッド・エースとクイーン・ヴァルゴに当たり、体から黒い魂のような物が抜けると体の黒みは引いた。

「ほう……やりおったか」

「ヤイ！クソ爺！観念しやがれ！」

エスパ―・グレナイトの呟きにペルセウスが声を荒げた。がエスパ―・グレナイトはいきなり腹をおさえだした。

「……ハハハ！お前等なーんもわかっておらん！後ろをよく見てみる」

エスパ―・グレナイトの言葉に全員が後ろを向いた――

「！ンナー！！」

「マジか……」

「ミスったな……俺達、詰めが甘かったのか……」

交流会とロックマン達の目の先にあったのは先程、闇に染まったシドウたちから抜けた黒い魂のような物だった。しかし今ソレは一箇

所に集まり巨大化し、ある形を形成している。

「ナンだ、これ？」

「これは…まるで…」

スター・エグゼの反応とは逆にロツクマンの目は恐怖に染まった。

「クリムゾン・ドラゴン…」

大きな紫の羽、鋭い爪と牙に目つき、そして四方八方に飛ぶ赤黒い何か。ソレはまさしくクリムゾン・ドラゴンそのものだった。

「ソウじゃ、少しディーラーとやらの情報を得てな。まあさっきの黒い塊がクリムゾンとかの代わりじゃ。ヨーク出来とるじゃ口？お前などごみじゃ！さっきの戦いは貴様等の小手調べ。まさにダメじゃ」

エスパー・グレナイトは勝ち誇ったように笑った。ピエロ・マジシヤンは背を向けているが。

「野郎…」

「ココは俺達がやる。お前等は非難なりしている」

周りの反応を見るやブライとフォルテが一步前に出た…。

## ダミー（後書き）

甲子園の決勝戦、感動した…九回裏2アウトからの猛攻…。あきらめ無いつて大切ですね。

では評価、感想お願いします

二重同調(前書き)

そのまんまかもしれないこのタイトル…^^^ ;  
ではどいづいぞ！

## 二重同調

「ブライ…1人で？」

「フオフオフオ…御主。ソレは格好つけているか知らんが無謀じゃぞ」

ロックマンのかすかな呟きをよそに、エスパー・グレナイトは笑うがブライの目は揺るがない。

誰かがなにか言ったが止めた。ブライの目を見たからだろう。

本当に大丈夫か…

ロックマンが持つ不安をよそに、トマホーク・パスワードは一步前に出て口を開く。

「後ろには俺達がいるからな」

「出番をやるつもりなど微塵も無いがな」

「フン。頼もしいな」

トマホーク・パスワードの声と入れ違いに激しい咆哮が空に響いた。

クリムゾン・ドラゴン、いやダーク・ドラゴンの方がふさわしいかもしれない。

「ちっ、お目覚めだな」

フォルテは短くそう言うのと体が光出した。ブライもだ。

「これは…フルシンクロ！」

「…フルシンクロ！！」

エグゼの発言と同時にフォルテとブライは眩しい光に包まれてできた。

「フォルテ・クロス・ブライ！」

ブライとフォルテのフルシンクロした姿、フォルテ・クロス・ブライが光から姿を現す。

「フム…フルシンクロか…それでも貴様にゃ無理じゃ。コイツは言い忘れたが、さっき操った奴等の技を全てインプットしてる」

フルシンクロを見てエスパー・グレナイトは普通にとんでも無いこ

とを言い放った。これでフォルテ・クロス・ブライは心が守勢に入ってしまうと殆どが思ったそのときだった。今度はフォルテ・クロス・ブライの笑い声が空に響いたのだ。皆は耳を疑った。

「クソ爺、誰がこの状態で戦うと聞いた?!」

よく分からない。誰にも分からない。今言い放たれた言葉の意味がウォーロックは勿論、頭のいいエグゼまでも、エスパー・グレナイトでさえ良く分からないという表情をしている。沈黙が訪れる。

「つまり…」

「こういうことだよ!」

セレナード・エンジェルがいつの間にもやらフォルテ・クロス・ブライの隣にいた。そして次にそこにいた者は前代未聞の光景を目にした。

「デュアル・フルシンクロ!」

2人の体は光に包まれていく。先程まではこの光景を見ても大して何も思わなかったが、今は違う。

「フルシンクロに更にフルシンクロ…信じられない」

「デュアル…二重か」

ロックマンとスター・エグゼがそうだった刹那、光から1つのシルエットが見え、そのシルエットが姿を露わにした。

・黒く悪魔のような鋭い翼  
・フォルテ・クロス・ブライのヘッドパーツの後頭部から金色の髪の毛が…  
・体はムーの紋章、黒とセレナードの黄色、腕はフォルテ・クロス・ブライのままに金色のリングのような物が3つずつはめられていて、フットパーツは黒を基調に黄色のたてラインが外側にはあった。周りには黄色いオーラ、右手には金色と黒のまがましい剣が握られてる。  
閉じていた目をゆっくり開き静かにこう名乗った。

「…ダーク・ツイン・エンジェル…と。」

二重同調(後書き)

評価、感想、質問等お待ちしております！

## 完全無欠（前書き）

今話から小説のルールをできるだけキチンと守って行きたいと思  
います。

ではどうぞー！

## 完全無欠

「もう！　どこでみんなサボってるのかしら!？」

ルナは廊下をブツブツ眩きながら歩いている。

既に授業は始まっているがルナはスバル達が中々帰らないのが気になった育田に頼まれスバル達を探している。

ルナと言えばいつもならすぐ引き受けるところだが、授業中に廊下を歩くのは生徒会長として少し気がひけるようだ。

「あら？」

ルナは足を止めた。ガラスが割れているのだ。更に向こうの校舎側の屋上はフェンスが壊れ、傷つかない筈のリアルウェーブの桜も倒れているのが見える。

「ルナちゃん」　モードが実体化して口を開く。

先程までは快晴だったが雲が空を覆っている。一雨来そうだ。

「なんか危険な電波が…」

「ロックマン様達かも…！　行くわよ！」

ルナはエレベーターの階選択ホップアップを押した。

「…若造、変身しても無駄じゃ。行け！」

エスパール・グレナイトの言葉にダーク・ドラゴンは方向をあげ、翼を広げた。

「ロックマン、アイツは確か体のコアを攻撃したらいいはずだったな？」

「…え…うん」

返事を聞くとダーク・ツイン・エンジェルも禍々しい翼を広げ舞い上がる。

そして両腕をバスターに変化させた。そしてバスターを放つ構えをした。

「あれは…フォルテのシューティングバスターかな？」

エグゼが誰かにといい訳では無いが疑問の声をあげる。

「グガアー！」

しかし、バスターを構えただけの筈なのにダーク・ドラゴンは苦しそうに体をくねらせる。そして首が二つに別れ、コアが姿を現す。バスターはいつの間にか放たれたのだ。高速で。シューティングバスターとはまるで違う。

バスターの弾はロックマン達には見えなかった。つまり光速なのだろう。

そしてダーク・ツイン・エンジェルは剣を構える。しかし次はダーク・ツイン・エンジェルの姿が視界から消える。

そしてその刹那、ダーク・ツイン・エンジェルの翼が切られ、消えた。次は右腕。

ダーク・ドラゴンは混乱しているのだろう。技を乱発している。しかし、ダーク・ツイン・エンジェルに当たってる様子は無く、攻撃を繰り出すのに比例して体が消えていつてる。

「グガアー……………」

そして遂に、ダーク・ドラゴンの体は跡形も無く、消えた。

「…んな…馬鹿な…！」

エスパ・グレナイトは動揺を隠せず、目を泳がす。

ダーク・ツイン・エンジェルはいきなりロックマン達の前に姿を現し、デュアル・フルシンクロを解いた。

「これは……………！」

「ありえねー……………」

「今のが俺の絆の形だ」

ブライは視線をエスパ・グレナイトから目を離さず言う。

姿は殆ど見せず、相手の攻撃を喰らわないという完璧なバトル。到底、真似出来ることではない。

「さあ、どうする？ 潔く引き上げるか？」

サイバー・ペルセウスが低い声で尋ねる。エスパー・グレナイトの顔が強張る。守勢に入っている。沈黙が暫く訪れる。

ピンポーン…屋上です

エレベーターが屋上に到着したようだ。

中から出てきたのはルナであった。

「！ あんた達なにサボッ……」

「！ 委員長！ 逃げ……」

ルナの顔を見てロックマンは叫んだが時既に遅し。ウェーブロード上でエスパー・グレナイトはニヤリと笑った。

「フオフォ…殺してヤル！！」 エスパー・グレナイトは何やら光線をルナに繰り出した。

ルナは驚きと混乱で膝をついてしまった。ルナが喰らったら多分死ぬだろう。

「ちっ！ 余計な真似を！」

「委員長！っ！」

ブライの舌打ちなど耳を傾けずロックマンは力を振り絞りルナの元に向かったが光線はルナまで後10数メートルという距離だった。追い付けない。

「スバル！ 止める！ お前も喰らう！」

スター・エグゼは叫び、ロックマンの後を追った。

光線は遂にルナの目の前に迫った。ルナの叫び声を聞くとロックマンは反射的に目を逸らし止まった。

「フウ！」

その声と同時にスター・エグゼは見た。

ルナは『何者』かに体を抱かれ、攻撃に当たらなかったのだ。

スター・エグゼは驚いてその『何者』を探した。

するとエスパール・グレナイトがいる更に上空のウェーブロードに  
先程まで無かった姿を見つけた。

「お前は……」

「間に合った……」

「……！ フォフォ……どういふことが教えてもらおうか……ピエロちゃん……！！」

ウェーブロードでルナを抱きかかえていたのはさっきまでの敵、  
ピエロ・マジシャンだった。

完全無欠（後書き）

僕も亜蘭みたく次回作やろうかなと思ってます（笑）わからないけど。

ではまた次回！

新連載等、他の小説もよろしくお願いします！

変更(前書き)

更新遅れスイマセンm( )m  
勉強やら体育祭やらで忙しくて…ではどうぞ！

## 変更

「どういうことか教えてもらおうかの。ピエロ・マジシャン」  
エスパー・グレナイトが鋭い目つきで尋ねる。先程までの老人と  
いう雰囲気から一変した。

するとピエロ・マジシャンはウェーブロードから屋上に降り立っ  
た。そしてルナを下ろす。

ルナはやはりまだ状況が掴めてないようだが、ピエロ・マジシヤ  
ンに何か言われたのか。ロックマン達の方を見てからすつと物陰に  
隠れた。

「別に…私は自分の意志を行動に移しただけ」

「意志…だと…」

エスパー・グレナイトは少し唾然とし、言葉を詰まらせた。

「そう。私には元々地球を侵略する気なんて微塵も無かったし、強  
いて言えばこの組織の危険性もわかっていたから…まあパイみた  
いな感じで入ったわ。いずれは地球側に舞い戻るつもりだったから  
私も地球人だし」

「貴様…デューオ様とガイザーを裏切ったらどうなるかわかってそ  
んな事をしたのか」

「危険なのは百も承知。けどアンタらに地球を侵略される方がもっ  
と危険よ」

淡々だがピエロ・マジシャンが凄じ事を言っているのは周りの人  
々は全員感じた。しかし口を挟める空気ではなく、エスパー・グレ  
ナイトとピエロ・マジシャンの会話に再び耳を傾けた。

「…裏切り者は即デリート…それが我が組織の掟…よって貴様をデ  
リートするわい…ピエロちゃん」

「私がそんな簡単にやられるとでも？」

「ふん…百も承知じゃ」

そう言つとピエロ・マジシャンもエスパー・グレナイトは身を屈め、戦闘態勢をとつた。しかし両者が動いた刹那、空の彼方から来た一筋の光が2人の間に割り込んだ。

「主は…！」

「ちつ…ガイザー…」

「おやおや…裏切つたからつてそんな毛嫌いしなくてもイイのでは？　ねえ、ロックマン？」

「ガイザー・エッジワース…」

ガイザー・エッジワースはロックマンに口だけの笑みを見せた。皆は警戒心から一步身を引く。

「そんなビビら無くても危害は加えないよ…さて、問題は裏切り者だ。ピエロ・マジシャン、僕も君の経緯については殆ど知らなくてね…そんな野望があつたとは目から鱗だ。デューオ様でさえ驚いていらつしやる。そして怒つていらつしやる。それは僕もだ」

「……」

「しかし、君1人抜けても大して我が組織の戦力は失して落ちない…だがちよつと侵略に時間がかかつてしまふ。そして君は僕等のデータも持っている。まあ僕以外の奴等、例えばその老いぼれとかだつたら参考程度にはなるだろう」

カイザー・エッジワースの一言にエスパー・グレナイトは何か言いかけたが止め、黙つてカイザーを見た。

「さて、先程言つたように、デューオ様は裏切りのお蔭で怒つておられます。今さつき、シリウスとスラーと決めましたが…明日、地球を侵略する。早いですが」

「何だつて?!」

スター・エグゼは声を荒げた。しかしカイザー・エッジワースは気にせず話す。

「もう良いだろう…デューオ様にも攻撃の許可を得た。先程ダメージを受けた奴等も1日もあれば治る。データもアル。他にも1日あれば色々できる。まだ正午だ。みんなにお別れの挨拶でもしておけ

ば？おっと…地球は滅びるからそんなの意味ないか」

カイザー・エッジワースはクスクス笑ってロックマンたちを挑発した。案の定、ウォーロックがそれに乗ってしまうがエグゼが押さえ、攻撃をさせなかった。

「テメー!!!」

「ロック！ 抑えて！」

「クス…では予告をしないとね」

カイザー・エッジワースが言った。しかし誰もその意味が分からなかったのか瞬きをした程度であった。するとカイザー・エッジワースは体を反対に向けた。

「待て！」

ロックマンが手を伸ばす。しかし届かずカイザーはニヤリと笑う。「大丈夫さ。今から放送電波をジャックして全人類に抹殺予告をするだけだ。いきなりは可哀想だろう？ おっと、恨むなよ。こんなに抹殺が早くなったのは裏切り者のせいだ。でももしピエロが裏切つてなかったとしてもどちらにせよ地球は我等が抹殺されてた」

それだけ言うとカイザー・エッジワースはまた光を纏い上空へ消えた。エスパー・グレナイトも続く。ロックマンはそれが見えなくなるまで目で追っていた。

その目はハツとする程険しく、しかしどこか恐怖が混ざっていた。

「……チツ…一先ずみんなをWAXAまで運び、回復させよう」

「ああ…しかし目から鱗の裏切り者だな。ピエロ・マジシャン」

サイバー・ペルセウスの言葉に頷いたブルース・ソルジャーはそう言つてピエロ・マジシャンを見た。

もはや未練などは微塵も感じさせず、ジェミニ・スパークの2人を抱えていた。

「ゴメンなさい…自分の勝手な計画で迷惑かけて」

「迷惑な訳ないですよ」

ピエロ・マジシャンの言葉をハープ・ノートとエリー・メデイを抱えたロックマンが遮った。

「地球人として戦ってくれただけ嬉しいです」

「……有難う」

「よし、そろそろみんなを運ぼう」

ブルース・ソルジャーがそう言うとは皆はウエーブロードを走り出した。しかし、ロックマンだけがルナの本に向かった。

「……なによ」

「大丈夫だった？ 怖く無かった？」

無論先程のエスパール・グレナイトの攻撃だ。流石のルナも堪えただろう。

しかし、返事は違った。

「別にアナタに心配してもらわなくても結構よ。それよりアンタの腕の中で目を閉じてるミソラちゃんとエリーちゃんの心配をしたほうがいいんじゃないのかしら？ ……って言いたいけど………本当は……怖かつ……た……」

「委員長……」

ルナの頬を涙がゆっくり伝う。

流石のウォーロックも寝ているのか黙っているのか分からないが一言も発さない。

「あなた達はいつもあんなのを敵にして戦ってるのよね」

「……うん」

「怖くないの？」

ロックマンは息を飲んだ。

スバルを始めミソラ、ツカサ、シドウ、クインティア、エリー、フォボス、バルジ、プリンセス・プライド五世、レジエンドマスター・シン、それから交流会とブライ& amp ;フォルテ。(フォルテとブライは前は敵だが今さっき、ロックマン達を助けたから仲間扱い) 皆は、今まで激しく苦しい戦いをしてきた。勿論全員、ブレット・ジャッジと戦いたくて今まで戦ってきた訳でない。

地球を救う

その目的のため恐怖心を抱こうと決して誰も弱音らしい弱音は吐

かなかった。

「怖いよ。でも大丈夫。それでみんなを救えるなら僕は自分がどれだけ傷ついてもいいんだ」

「良くないわよ」

口を開いたロックマンにルナが涙を拭いて言った。

「傷ついたあなたを見て、誰が喜ぶって言うのよ！」

「委員長……」

「アナタ、いつも大丈夫って言いながら私達に心配ばっか掛けて……他人の気持ち、考えなさい！」

ルナの口調がいつもの強いものに戻った。ロックマンはソレをみて安心し、少し笑った。

「何よ?!」

「いや、いつもの君に戻ってよかったなって思って」

ロックマンは白い歯を見せた。

「フン！ まあ良いわ。ソレより約束しなさい！」

「なにを？」

「地球に帰ってきたら笑顔でいること！ 良いわね?!」

ルナがロックマンを指差す。ロックマンはソレを見て首を縦に動かした。

「良いよ。約束する」

「よろしい。……んでどうするの、その2人」

「エッ……? ああ、今日は僕も結構ダメージもあるし、明日に備えるためにもWAXAに行く。先生には……」

ロックマンは口を噤んだ。言い訳が見当たらないのだ。6人もはや引きなんてどういえば良いのか。そんなロックマンを見てルナは口を開いた。

「みんな地球を守るため仕事に行きました……って言うってあげる」

「ありが……って駄目じゃん！ ソレは！」

「冗談に決まってるでしょ！ 先生には私が適当に言い訳しとくから、早いこと行きなさい！」

ルナはそれだけ言うとロックマンに背を向けた。

「委員長！」

ロックマンがエレベーターの前に立ったルナを呼び止めた。

「君には絶対危害が加わらないようにするから」

ロックマンがそう言うとルナは少し顔を赤らめ、期待してると言っ  
てエレベーターに乗った。それを確認し、ロックマンはWAXA  
に向かった。

変更（後書き）

カラオケって楽しいですね（笑）今日友達と4時間歌ってました（  
オイ）

得意歌手は『いきものがかり』です（笑）

いきものがかりいいよね（^w^）

では次回もよろしくお願いします！

## 宣告（前書き）

メチャクチャ長いですm（　　）mこんな筈じゃ…  
しかも中途半端。  
ではどうぞ！

## 宣告

「WAXA」

ロックマンは電波変換を解き、エリー・メディとハーブ・ノートを抱え、司令室に入った。モニターの前に交流会のメンバー3人とスバルが初めて目にする人物2人がいた。1人は亜蘭さんだがスバルは知らない。

スバルはその2人に話掛けようとしたが、後ろから肩をたたかれた。

「ヨイリー博士……」

「スバルちゃん、まずは体の回復が先。こっちに来て」

「あつ……ハイ」

ヨイリーに言われ、スバルはヨイリーについていった。

「数時間後」

「うん……」

「起きたか」

「ロック……」

スバルはWAXA内の医務室で目を覚ました。上にはウォーロックがいた。

「この医務室は部屋数も多く、設備も最新。スバルは体に痛みを全く感じなかった。」

「さっき他の部屋見たけど、オメーが一番最後ダゼ。他のはみんな司令室だ」

「ウソ?! 早く行こう!」  
「オラア! すぐ走るな!」  
ウォーロックの珍しい心配をよそにスバルは医務室を飛び出した。

〈司令室〉

スバルが部屋に入ると星斗が目の前にいた。なにかあったのが異様な空気が司令室を包んでいた。星斗の横には交流会にレジエンドマスター・シン、そして青年（亜蘭さん）と1人の女性がいた。多分青年はセレナード・エンジェル、女性はピエロ・マジシャンの人だとスバルは思った。

「スバルも着たし、始めましょう」  
バルジが横を見てフォボスに言った。顔が下を見ている。他のミソラ達も暗く晴れない顔をしていて横に、まっすぐに並んでる。

「スバル、星斗…交流会にシン、新加入の2人…」  
フォボスがゆっくりと口を開く。  
「お前等には本当に申し訳ないことをした…スマン!」  
フォボスが頭を深々と下げた。そして残りのメンバーも頭を下げた。

スバル達はどう反応していいかわからず顔を歪めたが星斗が止めてください、と声を発した。

「あんなのしょうがないっすよ!」

「そう、私の責任です」

女性も反対の声をあげた。

「いずれ地球に戻るって決めてたのにエスパーと……」

『 地球の皆さん、ご機嫌いかが？ 宇宙からの臨時ニュースです 』

不気味な声が司令室に響く。

いきなりモニターがつき、ハンターも勝手にワンセグモードとなった。声の主は勿論

「！ガイザー・エッジワース！」

「アイツ……ふざけやがって……」

スバルは目を見開き、ウォーロックは歯を食いしばり歯軋りを鳴らした。

『 今日、は皆さんに重大なお知らせがあります 』

「何よ……これ……まさかさつき話してた！」  
ルナはハンターを覗き込むように見た。教室はいきなりの出来事  
でざわつく。

「皆、静かにしなさい！ ヨーク聞いときなさい……」

ルナが命令すると教室はシンと静まり返った。ガイザー・エツジワースの臨時ニュースとやらが続く。

「地球は明日、我等に侵略され滅びます。まあロックマンとその仲間達が沢山我等に抵抗する様ですが…もはやゴミ同然。焼け石に水。無意味です。フフ…明日の午前9時、我等が地球に向かいます…まあ1日もあれば地球から全て無くなります…」

ロックマン…地球に危害を与えて欲しく無ければ我が惑星に潜入し我等を全滅させな。勿論デューオ様も居られるが…。

ニュースつてより死の宣告になっちゃいましたね…ククク…では地球の皆さん。最後の夜を御楽しみ下さい」

「そんな…」

ルナは蒼白な顔で呟き、教室は信じられない事を聞いてシンと静まり返った。しかしそれは束の間であつて、次の瞬間には教室内は混乱していた。

「大佐。どうしますか？　こんなことを聞いたら世界中、大混乱に陥ってしまいます」

「ウム…」

バルジの言葉にフォボスは顔をしかめた。

「…電波をジャックしない限り、世界中に一度に安心感を与える一言さえも言えない…しかしそれは法を犯す…」

「貴様等…今手段を選んでる場合か」

フォボスの言葉を遮るように誰かの声が聞こえた。

「！ソロ…」

ソロが司令室のドアを開け、入って来た。表情は意外に穏やかだ。「法など今は気にしてる場合か？ 目には目を…だ」

目には目を

その言葉の意味は分かるがこの状況下に置いては皆、どういう意味が分からなかった。

「……………アッ！」

唐突にエリーが手を口に合せて声をあげた。

「どうしたのエリーちゃん…？」

クインティアが不思議そうに顔を覗き込むとエリーはハンターを構え、電波変換した。

「エリーちゃん、何するつもりだい？」

シドウが期待しているのか明るい顔で尋ねる。

それを聞くと、エリー・メデイはハイと答えた。

「スバル君、ミソラちゃん。電波変換するのネ！」

「…えっ？ うん…」

流石カップルと言わんばかりのハモリを見せ、スバルとミソラは電波変換をした。

「よし！ 行くのネ！」

「どこに！？」

ロックマンの質問にエリー・メデイは向き直って答える。

「オクダマスタジオ、ネ」

「何するつもり？」

ハープ・ノートは首を傾げてエリー・メデイに尋ねた。するとエリー・メデイはニヤリと笑う。

「あそこなら電波をジャック出来るネ！ そしてジャックして生放送を全世界にオンエア、私達有名人3人が全世界に呼び掛けるのネ  
ソロだっけ？ そういう意味でしょ」

「…フン、こんだけ集まれば少しは頭のキレる奴もいるもんだな…」  
ソロは目を瞑って答える。

どうやらエリー・メデイの考えはソロと大体一致したようだ。

しかし、いくら地球のためと言えこんな計画にサテラポリスが黙  
つてる筈が無い。

「ちよい待ちな」

シドウが声をあげた。

「電波ジャックは違法…「そうですわ…世界中を電波ジャックする  
のは許せませんわ！ 少なくともクリーム・ランドはさせませんわ」  
シドウの言葉を遮りプリンセス・プライドが一步前に出た。

「プリンセス・プライド…」

「国民には私が直に伝えますわ！ 女王として…」

「えっ？ なんか違う…」 プリンセス・プライドの発言にシドウ  
が首を傾げた。

噛み合っていないのだ。つまりプリンセス・プライドは今から自国、  
クリーム・ランドに帰国し国民に今とこれからの事を伝えると言っ  
のだ。

「ちよつと…それは…」

「そうだ、電波ジャックは許さん…」

バルジもシドウを遮り一步前に出た。可哀想なシドウだが、コレ  
を見てどことなく安心した。バルジならプライドを止めれると思っ  
たのだ。「シャーロには俺が直に伝える」

「では俺はアメロツパに直に伝えるに行く」

バルジにフォボスも同意した。そして準備は完璧。3人とも電波  
変換した。

「では、皆行こうか…」

「…はいつ…！」「…」

そう言つとロックマン達3人はオクダマスタジオに、他の3人は  
母国に向かった。

「マジカよ…」

「仕方ないわ……母国はそれ程大事なのよ……ね……ジャック」

「ねーちゃん……」

「ティア……」

シドウはクインティアの悲しそうな顔を覗き込んだ。母国を滅ぼされたクインティアとジャックには彼等の母国への思いが分かるのだ。

「なあティア……」

「何？」

「今、プリンセス・プライドと自分の国の復興させようとしてたよな？ 戦いが終わったら俺も手伝うは」

「シドウ……有難う。楽しみにしてるは」

「へへっ！ 相変わらず熱いね2人共！」

「星斗君、やめなよ」

エグゼが止めたが星斗の発言でシドウとクインティアの2人は真っ赤になったのは言うまでもない。

「……じゃあオレ達だけで明日についての会議しておこう！」

シドウの顔が真剣になり、室内の雰囲気が一気に緊迫した。そして皆、慌ただしく動き始めた。

「君もやるよね？」

ツカサが振り向く。視線の先にはソロがいる。

「……フン……別に構わん……」

「フフ、そう言ってくれると思ったよ」

ソロは横を向いたままぶっきらぼうに言ったがツカサはいつもの笑顔を見せた。

「えっ！？ 僕がメッセージ！？」

「スバル君、お願い！」

今スバル達3人はウェーブロードを疾走中。

スバルの驚きの理由はエリーの電波ジャック計画にある。

エリーの計画はオクダマスタジオには放送電波コントロール装置と  
というのがあらず、それにあえて誤作動を起こさしてシャープ、  
クリーム・ランド、アメロツパ以外の国の放送電波をジャックする  
という計画だ。エリーの頭の回転は意外に早い。

しかし、スバルはロツクマンとして皆にメッセージを伝えるとい  
う事になったのだ。

「地球のタメネ！ お願いネ！」

「うっ……」

バイザー越しに美女2人から上目遣いされロツクマンは折れた。

「いいよ……」

「有難う！ スバル君！」

ハーブ・ノートにロツクマンは抱きつかれた。

「ちょ……今は危ないって！」

「ミソラちゃん！ ズルいノネ！」

〽オクダマスタジオ〽

スバル達はオクダマスタジオに着き、スタジオ内に入った。やは  
り、スタジオ内はガイザーの予告を聞き、少々混乱状態だ。その混

乱している人ごみにスバルはお目当ての人物を見つけた。

「浦方さん！」

「！ スバルにエリーちゃん、ミソラちゃん！ こんな時になんた  
い？」

「実は……………」

エリーが手短かに計画を伝えた。

「って訳で、浦方さんには放送電波コントロール装置に誤作動を私  
達が起こさすから、シャーク、クリーム・ランド、アメロツパ以外  
の国の放送電波をジャックして欲しいのネ」「しかしなあ…」

「一刻を争います！ お願いします！」

「わかった！ 任しな。すぐにプログラミングするから君達も  
う準備しといてくれ」

はいっ、と3人は声を揃えた。

くクリーム・ランドく

電波変換を解きプリンセス・プライドは母国、クリーム・ランド  
の自宅、ホイップ城に入った。

「！ 姫様！」

ここに長年勤めている男性が久々に帰って来たプライドに走って  
寄った。

「今国内は混乱状態で危ないですよ！！ お身体が…」

「父上は！？ 父は何をしているのです！？」

「国王様ですか？ 今は会議室で会議をなさって…ッ姫様！ どちらへ!？」

話を最後まで聞かず、プリンセス・プライドは走った。会議室に向かったのだ。

(父上は…国王は何をしているのです…!)

「父上!」

プライドは勢いよく会議室の茶色の大きいドアを開けた。

「プライド!」

「父上! 何をなさっているんですの!？ 国民に落ち着くように少しでも伝えました!？」

プライドが長い会議室の机を両手で叩いた。

国王も室内にいた家来達もプライドの気迫に圧倒され、言葉を発さない。

そして、ズカズカと会議室の奥に進んだ。

「何をする気だ、プライド?」

国王がようやくプライドに訊ねた。プライドは向き直った。「しかしなあ…」

「一刻を争います! お願いします!」

「わかった! 任しな。すぐにプログラミングするから君達も準備しといてくれ」

はいっ、と3人は声を揃えた。

「クリーム・ランド」

電波変換を解きプリンセス・プライドは母国、クリーム・ランドの自宅、ホイップ城に入った。

「！ 姫様！」

ここに長年勤めている男性が徐々に帰って来たプライドに走って寄った。

「今国内は混乱状態で危ないですよ！！ お身体が……」

「父上は！？ 父は何をしているのです！？」

「国王様ですか？ 今は会議室で会議をなさって……ッ姫様！ どちらへ！？」

話を最後まで聞かず、プリンセス・プライドは走った。会議室に向かったのだ。

（父上は……国王は何をしているのです……！）

「父上！」

プライドは勢いよく会議室の茶色の大きいドアを開けた。

「プライド！」

「父上！ 何をなさっているんですの！？ 国民に落ち着くように少しでも伝えました！？」

プライドが長い会議室の机を両手で叩いた。

国王も室内にいた家来達もプライドの気迫に圧倒され、言葉を発さない。

そして、ズカズカと会議室の奥に進んだ。

「何をする気だ、プライド？」

国王がようやくプライドに訊ねた。プライドは向き直った。

「こっからの行動は全て私が責任を負います」  
プライドはそういうと会議室にあるスピーカー室に入った。  
ここは国王やプライドの意志を随時国民に伝えるために使用する  
所で巨大なスピーカーがある。そこでプライドはハンターを取り出  
し、電話をかけた。

「ん？ 電話だ…」

スバルは電話に出た。プリンセス・プライドだ。

「スバル、そちらは順調かしら？」

「はい。もうすぐプログラミングが終わり、電波ジャックできます」

「そう…わかったわ。ロッキマンになってやるんでしょ？」

「…えっ…まあ」

スバルが狼狽えるのを見てプライドはクスツと笑った。

「じゃ…お互い頑張りましょ」

「はいっ」

そこでプライドからの電話は切れた。

「さ…私も…トランスコード！ ナイト・キングダム」

プライドは電波変換し、スピーカーの電腦にアクセスした。

スピーカーの電腦はシンプルな作りで、真ん中にコンピューター  
があるだけだ。このコンピューターで細かい音量調整などが可能だ。  
「やりますよ…！ ナイトマン」

「姫のご自由に」

「あら。珍しいこと！　じゃ…お構い無し…キングダム・クラッシュヤー！」

ナイト・キングダムが巨大な鉄球を勢いよくコンピューターにぶつけた。コンピューターは少量の火花を散らし、潰れている。それを確認するとナイト・キングダムはサイバーアウトした。

プライドが電波変換を解くとサイレンがなった。城中に響いている。

「プライド！　何をした!?!」

国王は少し声に怒気を含んでいるがプライドは逆に言い返す。

「国民をこの混乱から解き放ちますわ!!　言った筈です父上!　こつからは私にお任せを。…父上」

プライドは父である国王を見つめた。すると国王は目を逸らし、口を開いた。

「私の次にこのクリーム・ランドを治めれる行動力があるか拝見するでしょう…プライド」

「有りがとう御座います。父上」

プライドは深く礼をして、再びハンターで電話を掛けた。

「着いた…か」

アメロツパークの真ん中に立つフォボス、雪が舞うシャーロに帰  
って来たバルジ。遠く離れた場所で声が重なった。

## 宣告（後書き）

評価、感想お待ちしてます！

活動報告でなんか色々書いてるんで良かったらみて下さい）＾）

本番5秒前(前書き)

お久しぶりです。ストリームです。更新遅れすいません。久しぶりだからか文章力が…。

ではどうぞ！ 若干どうでもいいきが…

## 本番5秒前

「なんだか久しぶりだな、この寒さに…雪」

バルジは久しぶりに帰って来た母国、シャーロの地を踏んだ。もう日本では夏の始まりを告げるように若葉が茂り始めているというのにここはまだ指先が悴むような寒さだ。冬はもっと寒いが。

「バルジ様」

ハンター内からサーチマンが呼んだ。

「時間のほうが…」

「…時間がないな…急ごう」

バルジは少し残念そうな顔をしたが今やるべきことのため、足早にシャーロのWAXAに向かった。

バルジはシャーロのWAXA内に入った。少し混乱していて外に比べると妙に暖かい空気がバルジを出迎えた。

「オツ…バルジ！」

「お久しぶりです、長官」

シャーロ支部の長官がバルジに歩み寄った。

「さっきのは日本で聞いていたか？」

「勿論です。きょうはそれで帰還して参りました」

「何か日本、もしくはアメリッパの方から何か指令か？」

「ええ…少し電波管理室の方をお借りしてよろしいでしょうか？」

「？ ああ。構わんが…？」

許可をもらうとバルジは電波管理室に入った。

「で、ここでなにをするつもりだ」

長官が訊ねるとバルジは頭を下げた。

「少々の無礼、お許してください」

「何？」

長官は顔をしかめ、バルジはコンピューターのほうを向いた。

「サーチマン」

「構いませんよ」

「分かった。サイバーイン！　サーチマン、アクセス！」

バルジがそう叫ぶとサーチマンはハンターから電脳世界に転送された。コンピューターの電脳も簡単な作りで中央に制御装置が置いてあるだけである。

「バルジ、なにをするつもりだ？」

「電波をジャックします」

「！　そんなことを我々……」

そこでバルジのハンターに通信が入り、バルジはふっと笑った。

「構わん！　バルジ、やれ」

「ハイ、大佐」

バルジはそう返事するとハンターの画面を長官に向けた。

「長官さん… なにか問題でも？　これは私が許可しましたが？」

フォボスがアメロツパ城に長い間隠れて存在しているWAXAからモニターをとおして言った。

「フォ… フォボス大佐… しかし…」

「これは… 地球を守りたいという子ども達の純粋な正義感から生まれた案です」

これを聞いてシャーロの長官は言葉を無くした。

アメロツパのWAXAは世界で始めて発足したWAXAで建物も団員も規模がほかの国とは格段に違う。そのため、一番の力を持ち、特に大佐以上は中々他国の長官も頭が上がらないそうだ。

「だから大丈夫です。責任はこっちが取りますから」

「分かりました」

「大佐！」

長官の横からバルジの声が画面越しに聞こえた。

「準備完了です」

バルジはフォボスに敬礼した。フォボスはああ、と言った。

「俺も完了した」

ピピピッとエリー、スバル、ミソラのハンターが鳴った。

「エリーちゃんか…こちら準備完了だ」

「分かりましたネ！ 大佐」

「スバル、こちらも完了ですわ！」

「オツケーです、プライドさん」

「ミソラ、完了だ」

「お疲れ、バルジ！！」

三人が各々の連絡に対応した。

「スバル、準備を整ったぜ」

裏方の声を聞くとスバルはロックマンになった。

「ひとつ提案があるんですが…よろしいかしら」

「なんですか？」

プライドの言葉にロックマンはハンター越しに訊ねた。

「メテオGの際、スバルは全世界で結んだレゾンによって助かったと聞きました。だから今回も同じことをしたら何か私達の力になってくれる…どうです？」

「良いですね」

「ああ、では全人類に伝える役、これはスバル…お前にこの役を任せたい。お前しかいない」

バルジもフォボスも賛成し、フォボスはロックマンを見た。

しばしの沈黙があつたがロックマンは大きく息を吸って言った。

「分かりました。僕をいつも助けてくれるのはみんなですから」

ロックマンの言葉を聴くとみんな白い歯を見せた。

「ふ…期待通りの言葉だ…よし！全世界に…」

「一斉オンエアですわ！」

「ヤルネ！」

「うん！」

フォボスを遮りつたプライドのことばでエリーもミソラも気合を入れた。

「大佐…」

「…なんだ」

「失礼ですがどんな状況下でも不憫ですね。いまがその典型ですが」

「男は辛いのが、いつも」

「大佐が言うともっと辛く感じます」

部下的な年下に情けを掛けられるアメロッパのWAXAの大佐であつた。

「いくぞスバル」

「ハイ」

裏方の言葉にロックマンはゆっくり頷いた。

「ミソラちゃん、噛んだらダメネ」

「エリーちゃんこそ」

「今は喧嘩するときじゃ……」

ロックマンはそういいかけたが止めた。2人の表情がカメラをむけられた途端、真剣になったのだ。

やっぱり慣れてるな。

ロックマンは思った。同時に自分にも失敗できないというプレシヤーを感じた。

「本番5秒前 - - 4、3、2」  
始まる。

6人の思いはどれほど皆に伝わるのか、伝えることができるのか。オクダマスタジオの放送室にスポットライトがついた。

## 本番5秒前（後書き）

バルジの「アクセス」ってのはエグゼのアクセス以降のプラグインみたいな感じです。

アメロツパのWAXAはエグゼ2のオフィシャルの感じより。

この前、メッセージで「質問コーナーやって」というのをいただきました。

ということで、活動報告のところで質問コーナーをやりたいと思います！

この小説の感想かメッセージで質問をどしどし送ってください！  
作者について、小説などどんなことでも構いません！

では！感想等お願いします！

全世界オン・エア 繋がり (前書き)

久しぶりに投稿：やっと書けましたよ。  
疲れた(ノ T)

長いですがどうぞ！

## 全世界オン・エア 繋がり

コダマ小学校

先程のガイザーの宣告から数時間、少しは校内も静かになったがどこかまだ混乱と不安な空気が漂っている。

6-Aの教室内では担任の育田が委員長のルナと何やら話している。

「白金：本当か？」

「ハイ、スバル君は勿論、今此処にいない我がクラスメートは皆、今までみんなが知らない所で戦っていました。事実、先程私が先生に言われスバル君達を探しに行った時も屋上付近で敵と戦ってました：本当は言っちゃ駄目だけど：もう分かっちゃってますから」

ルナの口調はいつも以上に落ち着いている。イヤ、不安と恐怖で声が出せないのか。

「委員長！ 僕達には何も出来ないんですか!？」

キザマロが眼鏡をかけ直しながら立ち上がった。するとルナは向き直ってキザマロを見た。キツイ視線だ。そして思わず声を荒げる。「分からない!? 出来ない……」

「えー、全世界の皆さんこんにちは!」

ルナの嘆きに近い声はハンターからの聞き慣れたソプラノボイスに遮られた。

皆はハンターを見た。勝手にワンセグモードになり、画面にはクラスメートにしたら見慣れた2人が喋っている。

『今日は皆さんにお知らせがアルのネ』

くオクダマスタジオく

「テンション違うくない？ ミソラちゃん」

ロックマンはまだ舞台裏で控えている。

「駄目だよスバル君！ 暗い時だからこそ元気に盛り上げるんだよ」  
ミソラが小声で言う。

「なるほど…」

「ホラ、準備準備！」 ロックマンはミソラに言われ頷くとエリーを見た。

慣れた感じ、しかし責任を感じながら独特の口調で話している。

「先程の敵の通信通り、今地球には危機が迫ってルネ！ しかし、皆さん落ち着くネ」

くクリームランドく

国民は皆ハンターを見ている。何故ならこの国の女王、プリンセス・プライド五世が話しているからだ。

「皆さん、落ち着いてお聞きになさって下さい。私達、地球側は確かに不利かもしれませんが。しかし」

「アメリッパ」

「私達には絆と言う無限大の力がある」

「シャーロ」

「事実、前回絆の力、レゾンで英雄のロックマンを地球に帰還させることができました」

「だから今回も」

「絆を」

「信じて欲しいのです」

「ホラ、スバル君。次ネ」  
エリーが前にと促す。カメラとライトが眩しい。今はミソラが僕等を背に最後の言葉を話している。

「全世界で絆を、レゾンを結ぶ為に、英雄ロックマンから皆さんにお願いです」  
「多分バルジ達も既に電波をコントロールし、電波を此方に繋げた

だろう。

スバルはさつきより緊張しているのがわかった。しかし、ロックマン以外皆は思いを告げた。

どれだけ伝わったか、分からない。自分で言うのもあれだが僕に皆が一番注目する。だから、僕の一言一句は重い。プライド姫、暁さん、ツカサ君、ジャック、クインティアさん、フォボスさん、バルジ、エリーちゃん、レジエンドマスター・シンさん、交流会の皆、そしてソロ、フォルテの思いも乗っかってる。

ロックマンは一つ深呼吸してカメラの前に動いた。

シドウはモニターを見た。画面には自分より小さい、しかし自分には無いものを持ったヒーローが今、人類に自分の気持ちを伝えようとしていた。

全く…コイツは…。たいした奴だ。頼むぜ。

シドウは心の中で呟くとロックマンが口を開けた。

「皆さん…今、みんなが言ったように地球はこれ以上無い危機に直面しています。正直…敵に勝てるかは…半々です。…今までも僕は戦って来ました。負けそうにも諦めそうにもなりました。ちょうど1年前、

FM星人が襲来した頃、僕は不登校でした。絆を嫌い、他人と関わりを持つのを避け、一人暗闇にいた。しかしそんな僕を明るく世界へ連れ出してくれた人達がいた。僕はそんな人々をFM星人から守りたかった！

「

「スバル君……」

ミソラがロックマンの背後で呟く。FM星人との戦い。それは自分達の運命が変わった時だった。

「ムー大陸の復活……メテオGの襲来も……皆に助けられ僕は地球を救えました。僕一人では勝てなかった」

ロックマンが深呼吸して一呼吸置いた。そして口を今開く。

「どうか皆さん、地球を救うため、僕等に力をください！ レゾンを……『地球が一つとなり地球を救う』と言うレゾンを……結んでください……」 放送はそこで切れた。

「こんなのが効果あるのか…」

「アルよ…あるに決まってる…！」

「ああ…」

ソロの呟きにツカサとジャックが反論した。

ツカサは画面を見た。今は無機質な音をだけが聞こえ、映るのは砂嵐だけだ。

凄い。

ツカサはスバルに対し思った。

自分と同じ年の少年が世界に対し物を言った。自分には出来ない。勇気が無い。

地球を救いたい

その想いはスバルは多分誰よりも有るだろう。別に自分達にその想いが無い訳では無い。勿論ある。しかし、スバルは沢山の物を背負っている。自分には無いもの。自分にはそれが無いからスバルに劣ってるように感じてしまう。

でも…自分にも出来る事がある。明日はそれをしよう。そして何より 守りたい人を守り抜こう。

ツカサは目を瞑って思った。

「ふう…疲れた」

「大佐！ お疲れ様です」

シドウがフォボスを出迎えると後ろからバルジとプライドも入ってきた。

「ふう…疲れたし緊張した」

「こんなので疲れてたら明日が思いやられますわ」

「…ツツ?!」

帰ってきた男共に女王様が目を瞑って呆れた。

「プライドさん…ひどくね？」

ジャックの眩きが聞こえたのかプライドはフフッと笑って、冗談ですわと付け加えた。

「ただいま」

少々気の抜ける声が指令室に聞こえるとミソラ、エリー、スバルが帰って来た。

「スバル…よくやってくれた…」

フォボスが低い声で言った。

「はい…でも良かったです……………噛まないで！」

スバルが柄に合わない事を珍しく言っていると指令室には笑い声が溢れた。

「ミソラちゃんもお疲れ様」

「エリーちゃんも」

クインティアとツカサが女子陣をねぎらった。

「はいっ！ありがとうございます」

「フン…遅いのネ」

ミソラはさて置きエリーはどうやら不機嫌だ。多分数人しかねぎらってくれなかったから。

「よし！全員揃った所で最終チェックするぞ」

そんなエリーを気にせずフォボスが前に立った。

「ツとその前に…新加入の亜蘭と桜里の2人だ」

「…よろしく」

2人は頭を下げると桜里さんの方はフォボスの隣に移動した。

「私は元プラネット・ジャッジの幹部よ。罪滅ぼしにはならないと思うけど知ってる限りのデータを言っわ」

桜里さんはそう言うのとハンターを操作しモニターにプラネット・ジャッジの惑星を映し出した。

「知ってる通り、この惑星はコスモウエーブから結構すぐに着くわ。5分位かな。さて問題は惑星内。まずはエスパー・グレナイト。戦略は防御主体で隙をついてくる…スラーは知ってる人もいるかもだ

けど」

「生半可な攻撃は効かない」

エグゼが星斗のハンター内から実体化して言った。

「そう…シリウスもただけどかなりの戦力。この2人は一筋縄では行かない…」

後は三星神…プラネット・ジャツジに支配された惑星の王達。火星

が火、木星が木、水星が水の属性でコイツらも曲者よ。最後は…

ガイザー。コイツだけはデータが無い…てか計り知れないわ」

「ガイザーはスバルがやらないとな…フルシンクロは必須か…」

「フルシンクロでもどうか分からないわ」

シドウの呟きに桜里さんが首を横に振る。

「とにかく…明日は全力を尽くすのみだ…集合は朝7時。それまで体を充分休めておけよ。明日に備え解散！」

フォボスの声が指令室に響いた。

「ソロ…君も着てくれないかな…」

「フン…俺は俺の道に行く」

ソロはスバルの呼びかけも聞かずさういつと指令室を出た。

「…ソロ…やはり君とはまだ…」

「いよいよ明日だ…フフ。遂に我が野望が…」

「ガイザーよ」

低い声が響く。

「はっ、デューオ様」

「頼むぞ…地球に試練を」

「仰せのままに」

ガイザーは頭を下げそういと窓際に立ち、地球を見た。

「フフ…遂に全宇宙を我が手中に」

そう呟き地球に窓越しにバツを書いた。

全世界オン・エア 繋がり (後書き)

次は決戦前夜の思いを描きます！

そして次の次は遂に戦闘開始！

マジ最終回が近づいてきた〜(。o。)

最後までお付き合いお願いします。

ハッピーエンドかバッドエンドか…???

お楽しみに！

それぞれの思いを…（前書き）

長いです…ゴメンナサイ

僕のわりにはシリアス？かな？

ではどうも…

それぞれの思いを…

夕暮れ時 地平線には半分になった太陽が見え、空を茜色に染めている。

ジャックとクインティアは高い丘からまだ復興中の母国を見下ろした。

プライドの援助により5割が復興している。しかし、明日負ければ

「姉ちゃん…」

「何…？ ジャック？」

「もうすぐ復興だな…俺らの国も。長かったな」

「ええ…」

クインティアは夕陽を見た。

もうすぐ完璧に復興する しかしまだ超えなければならない壁が前に立ち聳えている。

「明日：全てが決まるんだな」

「還ってきたら必ず復興を成功させ素晴らしい国にしたいわね…」

「ふう…終わった！」

ツカサは額の汗をぬぐった。ここはドリームアイランドのごみ集積場。ツカサは1人ごみを処理していた。しかし終わったといいな

がらまだ幾らか残っている。

「ごめんね、また地球に還ってきたらやるから」

ごみが話を理解する訳でもないのにツカサはごみに呟いた。

「けっ…お前本当にバカだな」

ハンター内からヒカルが吐き捨てた。しかしツカサは無視し歩き始めた。

「オイ！ 何処行くんだ？」

「ん？ いつもの場所」

周りは見渡す限り美しい海と空。ツカサは大きく深呼吸した。

「ヤッパリ落ち着くね。ここは」

「そうか？」

ヒカルが実体化して言った。ツカサはしゃがみ、色とりどりの花に触った。

「僕等が負ければみんなも、この美しい自然も失われてしまうんだね…ぼくはみんなも美しい自然も守りたい」

「……美しいとか守りたいとか…んな事は思わねーけどよ、負けるのだけは死んでもやだからな。最後までテメーに付き合っつてやる」

「ヒカルらしいね…ありがとう」

「さっきも来たが…寒いな…ヤッパリ」

バルジは白い息を吐く。少し上昇して消えた。雪が地面に積もっ

ていく。1人の男性が家の屋根にシャベルをもって登っている。

「雪おろしか…日本は春なのにな」

「ええ…」

サーチマンが小さく返事した。バルジは歩き始めた。

「どちらへ？」

「自宅だ」

「サテラポリスの？」

「いや、親の方」

レンガ作りの二階建て。シャーロの一般的な家の造り。その一般的な家がバルジの自宅だった。

「何年ぶりだろうか…サテラポリスになった12以来だから…4年ぶりか」

「1回も帰られていませんでしたからね」

「ああ…ん？」

バルジは二階の窓を見た。窓が開くと1人の男性が出てきた。

「！ 父さん！」

「ん？ バルジ…か？」

父親は呆然と4年前と変わったバルジを見た。そして笑った。

「うん…ただいま」

そういうとバルジは自然と涙がこぼれた。頬を伝って下に落ちた涙は少し雪をとかした。

「大きくなつたな」

「うん…それより雪おろし？」

バルジは屋根の上の父親を見上げた。

「ああ…明日はどうなるか分からないからな。お前は仕事はいいのか？」

「うん…休みさ。今日だけ。明日の朝には帰る」

嘘をついた。自分が放送をしたが自分はあした戦わないと思って

ると思ったからだ。

「相変わらずいそがしいな…久しぶりだしな…。母さん達は家のな  
かいるぞ。会ってやりな」

「分かってるよ。なあ……手伝っていい？」

「ハハッ！ どういう風の吹き回しだ？ お前からそんな言葉聞け  
るとは思ってなかったぞ！ でもなちようどいい。腰が最近痛くて  
な…頼むわ」

「うん」

バルジは屋根に上がるため家に入った。

エリーは花などを持って歩いていった。そして足を止めた。  
小さな墓だ。そこにエリーはしゃがんだ。

「お爺ちゃん、お婆ちゃん…長く来れんでゴメンネ」

エリーはそう言つと花を供えた。

チヨイナの中安。エリーの産まれたところであり、アイドルとなつ  
た場所である。

エリーの一族はずっとこの地を離れず、薬剤師としてチヨイナ中  
に名が知られていた。しかしエリーだけはアイドルにスカウトされ  
た。

それは幸か不幸か、今の所エリー以外後継ぎがないがエリーは  
アイドルと日に日に有名となり結構な金を稼いでいる。

アイドルになるかは両親とメデイにも相談した。両親は喜んでく

れたがメデイはあなた次第と言った。

今の仕事は楽しい。しかし最近、薬剤師として働いてる両親が連絡を日本にくれるとき複雑な思いをエリーは抱いた。

自分は薬剤師としてやらなくていいのか？

「ねえメデイ……」

「何かしら？」

「私も少しは……薬の事知りたいネ……バトルも昔の能力引き継いだまま、秘伝の本に載ってる事しかやってないしネ……」

「いいと思うわよ。みんなも喜ぶわよでも……」

「でも……何ネ？」

「やること あるでしょう？」

「！ そうだネ……」

やること 地球を救う

「大佐は母国、帰らないですか？」

シドウがうまい棒をかじりながら訊ねる。

「俺には帰っても帰るか場所は、サテラポリスの大佐室か誰もいない自宅しかないからな」

フォボスは敵の資料を見たままぶっきらぼうに答えた。

「あ……スイマセン……」

「イヤ、謝らなくていいがな……お前はどんな状況下でもそれを食うのか？」

「晩飯代わりです。今日はティアがいないんで夕飯抜きなんです」  
「そうか…ん…？ お前クインティアと同棲してるのか…？」  
「フォボスはシドウに向き直った。」  
「あ…内緒だった…。んまそういう事です」  
「シドウはしまったと頭を掻いた。」  
「……そうか」  
「大佐？」  
「お前もすっかりとデータを見とけ！ 俺やお前は最前線で戦うだろっからな！ 心もすっかり準備しとけよ！」  
「あ…はい！！（何これ？ いきなり嫉妬？）」  
「……シンでさえデータ解析してというのに…」  
「フォボスが顔をしかめ舌打ちする。」  
「えっシンさんが？」  
「アイツは明日はコッチで指令を出すからな…ヨイリー博士と進路を確認してる」  
「……そうですか…俺も解析します」  
「シドウは返事をしてデータを解析し始めた。」  
「お前、勝てると思うか？」  
「フォボスが唐突にシドウに聞いた。」  
「大佐、何弱気なこといつてるんですか？ 大佐が不安になったらみんな動揺してしまいますよ」  
「シドウが真剣な眼差しで言う。自分の上司に堂々と躊躇わないで。勘違いするな。悪魔でお前の考えを聞きたい。お前は日本のエースだからな」  
「……みんなの気持ちがあれば決して負けません」  
「ふ…流石日本のエースか。それを聞いて安心した」  
「みんなの気持ちをひとつに」

太平洋上空のウェーブロードにブライとフォルテはいた。

真つ黒の海を見ている。ここは前にムー大陸が沈んだ場所だ。

フォルテが口を開く。

「俺等があいつ等と共に戦うことになるとはな…」

「ふん… ロックマンと再戦するためだ。それとムーの復活。奴等だけでは勝てん。過去のロックマンが自分の実力を知り、見切りをつけアレを現代のロックマンに渡し、使いこなせなければ無理だ」

ブライが下を見たまま呟く。波のざわめきが上空までかすかに聞こえる。

「使いかなせるかか…あの甘ったれは使いこなした。今の甘ったれには無理だろうがな。周波数が星斗と完璧に一致していない」

「ああ…アイツ、星河…貴様が俺の倒すべき奴なら…」

「星斗君？」

「あれ？ 偶然だな。何々？ 今日が最後かもしれないなんて弱気な思いからのデート？」

「星斗君！」

エグゼが注意する。星斗は少しわらって冗談さといった。手を繋いでるミソラとスバルは少し頬を赤らめた。

「星斗君の墓も此処に？」

「ああ…偉大な父さん母さん達のな」

「そう」

「お二人様は？」

「ミソラちゃんのお母さんの墓参り」

スバルはミソラを見た。星斗はそっかと呟いた。

「僕等はあつちだから…行くね」

「あつ…待って！」

スバルをハンター内からエグゼが呼び止めた。エグゼは実体化した。手に何かを持っている。

「コレを…」

「オイオイ、何だそれ？」

実体化したウォーロックがエグゼから何かを受け取った。

「サイトバッチ。今でいうアビリティイだな」

「俺等にくれんのか？」

「俺等には使いこなせないんだ。エグゼと俺は色んなものが完全一致してないからな…。その点、お前らは完全一致に近いんだ。熱斗父さんの遺品だ…何かの役にたつかもだからな」「いいの！？ 星斗君？ そんな大事な…」

「熱斗父さんは地球を救った。今回はお前だ…スバル！ 熱斗父さんがきつと力をくれる」

星斗とエグゼが笑った。スバルはうんと頷いた。

「有難う、2人とも」

「明日は頑張ろうな！」

「…勿論！！」

見ていたミソラとスバルは声を揃えて言うと星斗とエグゼに手を

振り目的地に向かった。

「あーあ…上げちゃった」

星斗は溜め息混じりで伸びをした。

「キメたことだし、文句いわない」

「彩斗父さんはいいのかよ？」

星斗が訊ねるとエグゼの声がガラリと変わる。低く、聞き取りにくい。200年前と変わらないどこか寂しい彩斗の一面だ。

「熱斗のように地球を救える奴に使って欲しい…」

「そう…んじやいいよ」

星斗はあっさり返事すると少し歩き、光と書いた墓の前に立った。

枯れた花を代え、対照的な華やかな色とりどりの花を供える。

「熱斗父さん…皆さん…もし良ければ…」

「僕等に力を…熱斗君、みんな」

暫く手を合わせ沈黙。

「ママ…全然来れなくてゴメンネ」

ミソラが墓石の前に座り呟く。花を代えたりしている。

スバルは離れたところから見守っている。

「行かないのか？」  
ウオーロックが珍しい気を使った。するとスバルは少し小さい声でうんと言った。  
「じゃ…ママ…帰るね…」  
ミソラはそう言っつてスバルのもとに歩いて戻って来た。  
「帰ろうか」  
「うん」

夜、満天の星空だ。明日に最終決戦があるなどこの空を見たら思えず、ましてやこの空をずっと見ていたいという思いが出てくる。

「スバル、ミソラ」  
あかねが静かに呟く。無論、明日についてだ。  
「ホントに…行くのね」  
あかねがそう言っつとスバルとミソラは静かに頷いた。  
「たくましくなっつたな」  
大吾が後ろで呟く。  
「約束するよ 必ず帰っつてくるよ。父さんだっつて帰っつて来たんだ」  
スバルが言っつ。  
「スバル……わかつつた。2人とも…必ず…な！」  
「うん」

「明日だね…スバル君」

「うん」

屋根の上で静かに2人は会話している。

「守らないとね…みんな…後、2つの約束も」

「2つ？ スバル君なんで？」

「えと…委員長とも必ず帰って初めに私のとこ来い…何、ミソラちゃん？」

スバルはミソラが拗ねたような顔をしたので覗き込んだ。するとスバルは唇をミソラの唇に塞がれた。スバルは呆然としてる

「委員長と約束は良いけど、私としなかつた罰だよ！ 約束しよ。最近してないし還つたらデートね」

「………うん」

完全にミソラにペースを握らスバルはYESと返事するしかなかった。

「此処は……？」

スバルが目を覚ますと周りは白い空間だった。

「お前がスバルか」

「誰！？」

声をした方を見ると星斗と似た少年がいた。

「俺は光熱斗。200年前のロックマンエグゼのオペレーターさ。

俺の子孫……元気？」

「はい……元気ですよ」

スバルは状況が掴めず、力無い返事をした。

「時間がないから手短に行くぜ！？ まず君を此処に呼んだのはサ  
イトバッチについて話すためさ。持ってる？」

スバルはハンターを見た。既にアビリティイとして装着している。  
効果は知らないが。

「はい……あります！」

「それは俺が200年前使っていた物さ。俺等は力を手にした……ロ  
ックマンエグゼのパワーアップ、変身というね！ それを君にも  
使って欲しいのさ！そして地球を救って欲しいのさ。俺等と同じ様  
に」

熱斗は笑う。しかしスバルは焦る。

「待ってください。使い方を……」

「えとな……あっ！ 時間が無い……伝えるよ。君は何もしなくていい。  
着けるだけで君なら必ず使いこなせる！ 絆を……みんなを……信じ  
る！ 気持ちで負けるなよ……ロックマン。みんながいれば勝てる

」

「…！ 夢？」

スバルは目を覚ました。いつもの部屋だ。

「スバル君大丈夫？ なんかうなされてたよ」  
ミソラが顔を覗き込んで来た。

「え？ 大丈夫だよ！ それより…行こう」

「準備はいいか？」

はいつとカーネル・ブレイドの言葉にその場にいた全員が返事した。

「行くぞ…地球を救うために」

地球の戦士達が今地球を救うべく宇宙へ飛び立った。

ついに決戦の幕が上がる。地球に明日あすはあるのか

それぞれの思いを…（後書き）

次回から最終決戦が始まります！

熱く、カッコ良く描きたいな〜

サイトバッチがどう関係するかはお楽しみ！

誰がフルシンクロするとかも…お楽しみに（笑）

評価等待ってます

〜第6章・最終決戦〜 ハジマル（前書き）

題名…なんでカタカナか…意味はないです！

〈第6章・最終決戦〉 ハジマル

「あれ？ ソロ達は？」

美しい宇宙が一面に広がっているコスモウエーブを疾走しながら  
ロックマンは隣にいたジェミニ・スパークWに訪ねた。

「どうやら来てないみたいだよ……」

「…そう」

ロックマンは残念そうに呟く。

「ん？」

ジェミニ・スパークBが目を凝らし呟く。なにやら大群が此方に  
向かって来てるようだ。

「オイオイ…派手なお迎えだな」

「Gウイルスとヒール、ノイズドウィザードか…」

ジャック・コーヴァスとアシッド・エースが呟く。カーネル・ブ  
レイドはハンターで通信を入れた。

「シン…聞こえるか？」

「バツチリ」

「敵の数は？」

「えーと…500だね…4、5人は必要じゃ？ Gウイルスにウィ  
ザードだしね…」

「わかった！」

「頼むよ！ イッツレジエンド！」

シンの決まり文句を聴くと、カーネル・ブレイドは皆に訪ねよう  
とした。

「さて…誰が…」

「俺達が行こう！」

「5人だしね。交流会にお任せあれ」

交流会の5人が名乗りを上げた。

「皆さん…でも」

「此処はお前等の出る幕じゃねえ…任しな」

ロックマンは言いかけたがブルース・ソルジャーに言われ頷いた。  
「俺等が道を作るからそこを抜けてくれ」

そう言つとセレナード・エンジェルが手に剣を握つた。

「交流会…任した！」

「……オツケイ!!!」「……」

カーネル・ブレイドの後押しを受け、交流会はウィザードとGウイルスの大群に真っ向勝負を挑んだ。 僅かに向こうが見える。

「今だ！」

ジャック・コーヴァスが言つと皆は其処を風のように駆け抜けた。

ウイルスの軍団を抜けると目の前にデューオ達がいる惑星が見える。

「ふう…第一関門抜けたか…」

「いや…ちがうな」

アシッド・エースが吐息を漏らすとジェミニ・スパークBが舌打ちして言った。

「どうやらお出ましね…」

「あれが三星神みたいですね」

クイーン・ヴァルゴとナイト・キングダムが静かなながらも闘志を出した。

異様な雰囲気を漂わせ三体の電波体が此方にゆっくり向かって来た。

「主等が地球の者達か……我が名はマーキュリー・ブリザード。水星の元王……」

全体的に透き通つた氷のような感じの女型電波体だ。髪はロング。

「俺はマーズ・レグルス…火星の元王だ！」

周りには炎のオーラ、手には一段と赤い炎がある。男型電波体だ。  
「そして僕がジューピター・ナチュラル。木星の元王」

大剣、弓矢を持ち、体は緑が基調。頭には魔女のようなトンガリ帽子。

「俺達の邪魔でもする気ネ……」

「左様。此処から先…ガイザー様達に会わず訳にはいきませんから」

「上等だな……流石戦闘力70%のだけある」

エリー・メデイが言うのと口調を変えずマーキュリー・ブリザードが言う。バルジ・サーチが戦闘力を計る。

「弱点は言わなくても分かるだろうが…一体に2、3人は必要…」

ロックマン、スター・エグゼ、ハープ・ノート、大佐、暁、クイーン・ヴァルゴ…先に行つて下さい」

「なんだと!？」

バルジ・サーチの発言にアシッド・エースが声を珍しい荒げる。

「昨日のデータ上…確実に奴ら…ガイザー達はコイツ等より強い…  
…俺等だけで何とか! 人数は不利ですが…」

「バルジ・サーチ…矛盾してるわ」

「いや…クイーン・ヴァルゴ…任せましょう」

クイーン・ヴァルゴの発言にスター・エグゼが反対した。そしてカーネル・ブレイドも言う。

「信じる…大丈夫だ。道は…ロックマン、スター・エグゼ。フルシンクロだ! 一発かませ!」

「…はい………」

2人が意識を集中する。

「…フルシンクロ! スター・クロス・ロックマンエグゼ!」

スター・クロス・ロックマンエグゼが姿を表すと三星神はロックマン達の方に向かって来た。

「バトルカード、キャノンx3&マヒプラス&エア スプレッドx3!!!」

バトルカードプレデーションが素早いスター・エグゼとのフルシ  
ンクロによりスター・クロス・ロックマンエグゼのバトルカードの  
プレデーションは格段に速くなっている。

「GA!! インパクトキャノン+マヒプラス&GA ハイパーバ  
ーラスト!!」

カーネル・ブレイド等は少しの被害を察知しバリアを張った。

「いつけー!!」

スター・クロス・ロックマンエグゼの左腕がまずキャノンに変わ  
り、インパクトキャノン(+マヒプラス)が、そして右腕からはハ  
イパーバーラストが発射された。

「しまっ!!」

火星の元王、マーズ・レグルスは攻撃の事しか考えておらず、反  
応が遅れた。インパクトキャノンとハイパーバーラストがクリーンヒ  
ットする。マーキュリー・ブリザード、ジュピター・ナチュラ  
ルは冷静に横に動いてかわした。つもりでいた。

「むっ…誘爆で麻痺が…」

マーキュリー・ブリザードは誘爆したインパクトキャノンがヒッ  
トし、更にマーズ・レグルスと共に麻痺して動けない。そしてジュ  
ピター・ナチュラルはマーズ・レグルスにヒットしたハイパーバ  
ーラストの誘爆を全てくらった。

「くっ…油断した」

「皆さん!!」

動けない三星神を見てスター・クロス・ロックマンエグゼは後ろ  
を見て言った。

「任せな! みんな、しっかりもつとけよ! ウイングブレード!  
!」

ハープ・ノート、クイーン・ヴァルゴ、カーネル・ブレイドがア  
シッド・エースに掴まり三星神の横を駆け抜け、スター・クロス・  
ロックマンエグゼも取り敢えずデューオ達がいる惑星に向かった

「待ちやがれ!!」

マーズ・レグルスが自分の横を駆け抜けたアシッド・エース達を追い掛けようとした。するとマーズ・レグルスの背中に何者かの攻撃がヒットした。

「どこを見ている？ 貴様等は」

「私達がお相手して差し上げますわ!!」

バルジ・サーチの見せ場台詞をプリンセス・プライドが遮った。

「確かにもうロツクマン達には追いつけない。仕方無い。後で上の人等に怒られるけど…仲間を減らせば此方側が有利だし…：…：そんな大口叩いて…知らないよ…」

ジュピター・ナチュラルがバルジ・サーチ達の方に素早く向かって来た。

「チツ…皆、散れ!」

バルジ・サーチの声で其処にいた地球のメンバーは3つに散った

「君達は僕がやるう」

「ちっ…相性わりーな…」

ジュピター・ナチュラルがジェミニ・スパークの2人とエリー・メデイの前に立つ。

エリーは無、ジェミニは電気、それに対しジュピターは自然。相性は絶対的に不利。

「ヤバいネ…」

相性の不利を考え、エリー・メデイが顔を俯かせて呟く。

「大丈夫だよ…エリーちゃん。任して…僕等に」

ジェミニ・スパークWが口だけの笑顔をエリー・メデイに向けたがエリー・メデイは少し声を荒げる。

「！ それは……」

「貴様は引つ込んで！ って訳だよな？ ツカサ」

「まあそう。僕等だけでやる……君を傷つけさせたくないからね……エリーちゃん」

「ふっ……ふざけてるネ！ 相性悪いネ！」

「おやおや……仲間割れかな？ どちらにしる負けるのは君らだけど」

ジユピター・ナチュラルがクスリと笑って言った。すると、ジエミニ・スパークW&Bは向き直ってジユピター・ナチュラルを見た。ジユピター・ナチュラルを見ながらエリー・メディにジエミニ・スパークWは話す。

「確かに相性は悪い……でもそれ以上に勝負を左右するのは……」

「勝つプライド！」

「そして大事なものを守りたい心……！」

ジエミニ・スパークB&Wが順番に言う。流石にエリー・メディも声を荒げる。

「格好つける……出来るだけ回復技で援護するネ……」

「有難う……エリーちゃん」

ジエミニ・スパークWがエリー・メディを見て笑った。それから向き直ってジユピター・ナチュラルを見た。

「行くよ……ヒカル」

「ああ……」

「貴方は我が」

「貴方は私が」

「水星の元王が直々お相手致しましょう」

「クリーム・ランドの女王が直々お相手して差し上げますわ」

マーキュリー・ブリザードとナイト・キングダムが同時に言葉を発した。

「地球の一國を治めている女とは格が違う」

「クスツ」

マーキュリー・ブリザードの言葉を聞いてナイト・キングダムが下を向いて笑った。

「貴様…何がおかしいのだ!？」

マーキュリー・ブリザードが少し語調を強めるとナイト・キングダムは顔を上げて笑顔のまま言った。

「失礼…ガイザーに破れたのに…よくそんな大口をたたけますのね」

「…貴様…挑発か…」

「まあそんなところでしょうか」

そう言うとナイト・キングダムは鉄球のついた鎖を右手に出した。

「貴様…地獄を見るぞ」

「どうでしょうかね…見せてもらえるなら是非とも見させて欲しいですわね…」

マーキュリー・ブリザードとナイト・キングダムがにらみ合った。

「テメエは俺がやるぜ！」

「貴様を倒し、スバル達のところにサツサと行かしてもらおう」

マーズ・レグルスが腕を回す。バルジ・サーチはマーズ・レグルスのデータを調べる。

(属性は火…近距離戦が主体的で格闘派か…6：4で此方が有利か)

「いくぞ…俺は忍耐強くねえからな」

マーズ・レグルスがステップを踏む。

「それは好都合だな…早く倒せる」

バルジ・サーチもスコープガンを構えた。

「ふん…ほざけ！」

バルジ・サーチのスコープガンが発射された。

↳ 第6章・最終決戦↳ ハジマル（後書き）

プリンセス・プライド：お気に入りです（笑） てか交流会：バートルシーンかけるかな？

感想待つてまーす！ 活動報告も結構更新してるから是非見て下さい！んでコメントも待つてます！ ちかいうちにちよっとした僕のデータ（？）載せますんで！

逆境（前書き）

長いバトルだ…どうぞぞ！

## 逆境

「ヒカル、行くよ!!」

「任せな! …… ロケットナツクル!!」

ジェミニ・スパークBの左腕の拳がジュピター・ナチュラルに向けて発射された。

「甘い…」

ジュピター・ナチュラルは軽くステップし、後ろに下がった。

「リーフシールド!」

木の葉があつという間にジュピター・ナチュラルを包み込んでロケットナツクルから守った。

「ツカサ…今の内に…」

「うん!」

ジェミニ・スパークB&Wは片手を掴む。丁度リーフシールドの展開が終わった。

「ジェミニサンダー!!」

凄まじい電撃がジュピター・ナチュラルに襲いかかった。するとジュピター・ナチュラルは自分の立っているウェーブロードに手を着いた。

「ユグラドシル!!」

そう言うつとジュピター・ナチュラルが手を着いた所から大樹が出た。それがジェミニサンダーを防ぐ。

「んな!?!」

「ヒカル、詰めるよ」

ジェミニ・スパークWが樹の後ろからジュピター・ナチュラルが前出れないと考え、前進した。

「かかったな…アペリアルブレード!!」

ジュピター・ナチュラルがそう言うつと樹の枝が動き、まるで剣のように前進して来たジェミニスパークB&Wを切り裂いた。

「「グアー！！」」

「ジェミニ・スパーク！」

ジェミニ・スパークB&Wは切り裂かれ、後ろに倒れた。エリー・メデイが叫ぶ。ジュピター・ナチュラルが距離を詰めてきた。右手には剣を持っている。

「クツ…エレキソード！」

ジェミニ・スパークWが左腕を黄色い剣に変え、太刀打ちする。ジュピター・ナチュラルは剣でそれを受け止めた。

(しめた！)

ジェミニ・スパークBはジェミニ・スパークWと剣でやり合っているジュピター・ナチュラルの後ろに回った。

「エレキソード！」

ジェミニ・スパークBは切りかかった。

「コガラシ！」

ジュピター・ナチュラルが息を吹く。するとコガラシが発生し、ジェミニ・スパークBはコガラシを喰らった。

「ヒカル！」

「ジェミニ・スパークW！」

エリー・メデイの叫び声が出た。ジュピター・ナチュラルが切りかかって来る。

「っ……」

「余裕が無い…こういう時は集中力が欠ける」

ジュピター・ナチュラルが空いた右手でウェーブロードに手を着く。

「アペリアルブレード！」

「くっ……」

ジェミニ・スパークWに少し掠るが今度はよけた。

「ロケットナックル！」

立ち直ったジェミニ・スパークBがロケットナックルを放つ。「無駄だ…コガラシ」

今度はコガラシをロケットナックルに巻き込ませ、方向を変えた。そして方向転換したロケットナックルはジェミニ・スパークWに当たった。

「グハッ！」

「ツカサ！」

「散れ、アペリアルブレード!!」

「ガハッ！」

アペリアルブレードがジェミニ・スパークBにヒットし、ジェミニ・スパークBが倒れた。

「ジェミニ・スパークB!!」

エリー・メデイが駆け寄る。

「エリーちゃん危ない!!」

ジェミニ・スパークWが声を張り上げた。

「まずは…女の子と黒からデリート…アペリアルブレード!!」

ジェミニ・スパークBとエリー・メデイの所まで樹の枝は伸び、切りかかった

体を引き裂かれる嫌な音がした。エリー・メデイは目を開けた。エリー・メデイには何も無い。が、目の前にはジェミニ・スパークWが仁王立ちしていた。

「ジェミニ・スパークW…」

エリー・メデイがそう言うのとジェミニ・スパークWは倒れた。傷が酷い。胴体が消えかけている。息も荒い。

「！　なんで…正直アタシなんて戦力にならないのニ」

「……守りたかったから……君も…ヒカルも……ヒカル、立てる？」

ジェミニ・スパークWは横を見た。倒れているジェミニ・スパークBがいる。

「ああ…相手には丁度いいハンデだな」

「ふっ……キメよう。次で」

「ああ」

ジェミニ・スパークB&Wは立ち上がる。エリー・メデイが後ろから声を上げる。

「回復をするネ！」

ジェミニ・スパークBは首を横に振る。

「したいが…してる間にアイツの攻撃で俺ら御陀仏だ…攻撃もジェミニサンダー一発が限度。だから」

「コレに掛ける。この1発に」

ジェミニ・スパークWがジュピター・ナチュラルを見た。笑っている。

「死ぬ前に言い残したことは無いかい？」

「あいにく死ぬなんてコレッぽっちも思ってたないよ。そっちこそ言っておきたいことは？」

ジュピター・ナチュラルの問いにジェミニ・スパークWが答える。

「なんもない。もうそっちは限界だろう？ 楽にしてあげるよ」

「エリーちゃんのリカバリーのが楽になるよ」

「ふん…御託は終りだ！ アペリアルブレード……！」

樹の枝が2人に切りかかる。ジェミニ・スパークの2人は後ろに跳びかわした。そして片手を組む。

「ジェミニサンダー……！」

「無駄な事だ。樹が電撃を防ぐ！」

ジェミニサンダーが樹に当たる。樹の後ろにいるジュピター・ナチュラルには届かない。

「グウ……！」

威力に耐えれずジェミニ・スパークの腕が更に歪んで消えかける。  
「ツカサ……！」

エリー・メデイが叫ぶ。

「ウオー……！！！」

ジェミニ・スパークが繋いでない方の手を組んで前へ突き出した。  
「ミリオンボルト・ジェミニサンダー……！！！」

今組んだ方の腕からも電撃が発射される。

「無駄だ！」

ジュピター・ナチュラルが言う。しかし樹が少し音を立てた。

「んな？！」

「「イッけー！ー！ー！ー！」」

更に電撃の威力が増し、樹は遂に燃えて攻撃は貫通した。そして…

「グアー！ー！ー！」

ジュピター・ナチュラルにヒットした。倒れる。そして体が消えていつている。

「くっ…やられた。僕の負けだ…」

「あつたりめーだろうが」

ジェミニ・スパークBが言った。ジュピターが笑う。

「だがな…忘れてはならないよ…カイザーはこんなんじゃない…ロックマンは負ける…そしてカイザーはロックマン…デューオ様を…力…そして宇宙は…」

そこまで言うジュピターは消えた。謎の言葉を残して。

「…今の言葉の意味はもしかして…まさか…グッ！」

「オイ、ツカサ！」

ジェミニ・スパークWが膝から倒れた。ジェミニ・スパークBが駆け寄る。

「参ったな…体が動かない…よ」

「オイ、大丈夫かよ！？」

ジェミニ・スパークWは弱々しく笑った。

「ツカサ！ ちょっと見せるネ！」

エリー・メディがジェミニ・スパークWの体を見る。

「こんな傷でよく…」

エリー・メディが息をはっ、と呑む。体の所々が歪んでいる。

「治療するから…待つネ」

エリー・メディはそう言うと彼女専用のバトルカードだろうか、色々な物を使い傷を治して行く。同時にジェミニ・スパークBの傷

も治療する

「応急処置よりはいい治療をしたネ。コレでひとまず大丈夫ネ……でも傷が痛々しくて……怖いネ……。みんな、こんなになるなんて……」

エリー・メデイの目が少し潤む。

「大丈夫だよ。僕等が弱かっただけ。みんな勝つよ」

「んな！？ 俺ら弱くねーだろー！！」

ジェミニ・スパークWが喚く。ジェミニ・スパークWはゴメンと笑った。

「今は少しだけ休むネ。流石に体力が少ないネ。回復したら行くネ。リカバリーじゃ限度があるから」

「うん……わかったよ」

「……ツカサ！」

「何？」

ジェミニ・スパークWがエリー・メデイを見るとエリー・メデイはそっぽを向いて言った。

「守ってくれて………アリガトウ」

「クス……女の子を守るなんて当然だよ。どう致しまして」

ジェミニ・スパークWは笑顔で返した

「ふ…ジュピターがやられたか…：ハハ！ 地球人共」

「なあ、ツカサ。今聞く事じゃねーけど、アイツ、消える時なんつった？」

ジェミニ・スパークBがWに訊ねた。ジェミニ・スパークWの顔が少し怖くなる。

「アアあれは 俺は偶々聞いた。ガイザーは」  
それを聞いてエリー・メデイ、ジェミニ・スパークBは驚きを隠せなかった。

## 逆境（後書き）

（オマケ番外編：本編の1コマを変えた物が存在しますが本編とは全く別です）

面白く無い短編ギャグ

前話より 忘れ物

バルジ・サーチが口を開く。

「ロックマン達先に行かしてくれないか？」

「先には行かせん」

カーネル・ブレイドが言う。

「大佐！？ 何故です！？」

「大佐となれば部下の考えが分かる…貴様、トイレに行きたいな！？」

「流石大佐…此处に来る前に忘れてしまいました…」

サイト『バッチ』

星斗が手を出す

「コレをお前に託す」

「…コレは？」

スバルが受け取る。

「サイトバッチだ…熱斗父さんがつけてた」

「バッチを…つけてたのか…」

「御守りだ。服に針でつけとけ」

計算不能in実績練習

「ジェミニ・スパークW…次の攻撃は100%でロケットナックルか…」

バルジ・サーチが攻撃を読みかわす。

「ロックマン…次は80%でロックバスター」

「うっ…読まれた」

「次は俺の攻撃だ！」

ムーン・レジェンドが攻撃を仕掛ける。

「責様は…何！？ 誰か分からん！！攻撃も分からん…負けだ…」

「勝った心地しないYo！」

頭の良さと勝負運（ツキ）（前書き）

ナイト・キングダムVSマーキュリー・ブリザードです！  
まさかの展開……かな？

## 頭の良さと勝負運（ツキ）

「いざ参るー！」

「いつでも来なさい！」

マーキュリー・ブリザードがナイト・キングダムに接近する。

「キングダムクラッシャー！」

「ぬるい」

マーキュリー・ブリザードが横にかわす。そして手をウェーブロードに着いた。

「グラウンドフリーズー！」

ウェーブロードがマーキュリー・ブリザードが手をつき始めた所から凍りついた。

「厄介な…ハッー！」

ナイト・キングダムが下がってから鉄球で地面の凍りついた部分を壊した。

「ほう…（…スピード、パワー、ディフェンス、中々全てレベルが高い…だが状況判断が…）中々やりおるな…だが甘い」

「五月蠅いですわ！　ナイトソード！」

専用バトルカードだろう、鉄球を持つ腕をソードに変えた。

「行きますわ！」

「状況判断が悪いぞ…地球の女王よ」

マーキュリー・ブリザードが笑う。

地面を見る

「！　しまっ…！！！」

接近したナイト・キングダムはウェーブロードにはまだ凍りついた部分があるのに、気付かずその凍りついた部分で足を滑らせ、尻餅を付く。

「凍りつくが良い　アクアタワーー！！！」

ウエーブロードから水の柱が出て、ナイト・キングダムに迫る。

「キヤア ……！」

アクアタワーはナイト・キングダムにヒットし、ナイト・キングダムの下半身が凍りづけになった。

「コレは!?!」

「地球の女王は教養が足りんな…。私が凍らしたウエーブロードは-100度、其処に水をかけると水も0度以下、即ち状態変化で…

…」

「凍った訳ですか…」

「左様。サア終わりだ！ 地球の女王よ。凍りづけにて粉々にされるか、凍え死ぬか…選ばせてやろう」

「…（！ あれはまさか!?!）…時間を下さるとは感謝ですわ。そうですね…どちらかと言うと… 貴方が負ける と言った方が正しいでしょうか？」

ナイト・キングダムが目を細め、ニヤリと笑う。マーキュリー・ブリザードがナイト・キングダムを少し睨みつけた。

「ほざけ…その状態どうするつもりだ？ まさか溶けるまで待つと…」

「御冗談を。地球の女王は教養は負けても優秀な仲間、運が付いてますわ!?!」

そう言った刹那、どこからか銃の遠距離攻撃がマーキュリー・ブリザードの背後を襲う。マーキュリー・ブリザードはとっさに気づき、ジャンプしてかわす。

「貴様は地球人……マーズはどうした!?!」

「弱かった…ほぼ自滅に近かった。馬鹿だった」

ウエーブロードにはバルジ・サーチがスコープガンを構えてたっていた。

「我とマーズを同じと思われるとは心外だ…マーズとは格が違う。今の攻撃ごときで我と戦うつもりか？」

「あんたも馬鹿みたいだな…今俺が攻撃を外したとでも思ってるの

か？」

マーキュリー・ブリザードはハツとして後ろを振り返った。ナイト・キングダムがいた。凍りづけにされた下半身はもう解放されている。

「さっきの攻撃は外すのを承知の上、悪魔で凍った下半身を動けるようにするため、ナイト・キングダムの脚の周りの氷を破壊した」

バルジ・サーチが淡々と話す。

「そうであったか……」

マーキュリー・ブリザードが呟く。低い声で聞き取りにくい。マーキュリー・ブリザードの容姿は変わらないが雰囲気が変わる。先程までの上品なオーラでは無く、もっと激しい。

「此処までコケにされたのは初めてだ……貴様等、此処で消えてもらう……！」

マーキュリー・ブリザードがバルジ・サーチとナイト・キングダムを睨みつけた。

「バルジ・サーチ……先程の礼をしたいところですが」

「姫、後です」

「ええ……では第2ラウンド開始ですわね……」

バルジ・サーチとナイト・キングダムが武器を構える。

「「ウエーブバトル ライド・オン」」

頭の良さと勝負運（ツキ）（後書き）

まさかのバルジ・サーチ登場！なんかカッコ良くなってる（笑）  
マーズ出番なし（笑）話数の都合？関係無い（ ）

今回は第2ラウンド開始ですよ！次回もお楽しみに！

本編と全く関係無い、さらに面白く無い…オマケその名も…  
『青きヒーローのオマケ』

（四捨五入）

「貴様では我に勝てん！」

「貴様も馬鹿だ…さっきのはよけられるのは承知の上…悪魔でもナイト・キングダムの下半身を解放するために…」

「バルジ・サーチ…顔当たったんだけど…？なんで？なんかの恨みかしら？」

ナイト・キングダムが呟いた。

「えっと…攻撃した所から姫までの距離を計算し、その計算を四捨五入した結果です、姫。多少のズレは仕方ないです…ね？」

「サーチ…って名前だけです…」

ナイト・キングダムがまた呟いた。

## コンビネーションと秘密(前書き)

今話はずいにあいつが登場! !そして大まかなガイザーの秘密が明らかになる

## コンビネーションと秘密

ナイト・キングダムがマーキュリー・ブリザードに接近する。

「ナイト・ソード！」

右腕を剣に変え、切りかかる。しかしマーキュリー・ブリザードは下がってかわす。

「アクアタワー！！！」

地面に手をつき、ウェーブロードに水の塔が立つ。そしてナイト・キングダムに襲い掛かる。至近距離だ。避けれない。

「クツ… ストーンボディ！！！」

ナイト・キングダムが体を一時的に石化させた。これでダメージは最小限に抑えられる。

「スコープガン！！！」

ナイト・キングダムの背後からバルジ・サーチが援護する。

「ぬるい！ バブルイリュージョン！」

マーキュリー・ブリザードはそういうと分身した。スコープガンは分身にヒットした。勿論意味がバルジ・サーチにはない。が、

「んな？！」

バルジ・サーチはいきなり泡に閉じ込められた。マーキュリー・ブリザードが笑った。

「迂闊に攻撃したら分身に当たるし更に泡に閉じ込められるぞ。更に分身も攻撃可能だ」

「小賢しいですね… 女王とある者が」

ナイト・キングダムが呆れたように言う。

「黙れ地球人が！ 勝つのが全てだ！ アクアタワー！」

マーキュリー・ブリザードの分身が全て同じ行動をとる。狙いは勿論捕らわれの身、バルジ・サーチだ。

しかしナイト・キングダムがナイトソードで泡を割る。然し、四方八方アクアタワー。逃げ道は無い

「チツ！」

「死ね…地球人」

複数のアクアタワーはバルジ・サーチとナイト・キングダムの姿を包んだ

其処まで見るとマーキュリー・ブリザードの本体は背を向けた。分身も消えた。

「ふん…やはり弱い」

そう呟いた刹那、鉄球がマーキュリー・ブリザードの背後から伸びて来て、マーキュリー・ブリザードを締め付けた。

「!? クツ…何故だ!? 何故アクアタワーが凍っている!?」  
ナイト・キングダムの鉄球は凍っているアクアタワーを壊し、中から伸びていた。

「バトルカード、アイスステージだ。貴様がさっきした事をそのまま利用してもらった。アイスステージの冷たさも中々だからな」  
バルジ・サーチとナイト・キングダムは凍っているアクアタワーから出た。

「女王が惨めですね…地球をナメてもらっては困りますね」

「終わりだ……バトルカード、マッドバルカン×3!!!」 GA

ムゲンバルカン!!!」

バルジ・サーチがムゲンバルカンを構える。そしてナイト・キングダムが鉄球を引っ張る。マーキュリー・ブリザードを引きつける。  
「今ですわ!」

「ムゲンバルカン!!!」

「ガアッー!!!」

銃口から放たれたムゲンバルカンは捕らわれの身、マーキュリー・ブリザードに全てヒットした。

ナイト・キングダムは鉄球をマーキュリー・ブリザードから離れた。マーキュリー・ブリザードの体が消えていく。

「フフ……負けだ……。完璧な……。だが……ガイザーは比じゃ無い……ガイザーよ……地球人に……地球に恐怖を……そして……」

マーキュリー・ブリザードは消えた。そこが少しキラリと光った。

「……ガイザー……最後の言葉は？」

「分かりませんが……どうやら何か……裏があるようですね」

バルジ・サーチが呟いたのにナイト・キングダムがマーキュリー・ブリザードがいた所を見た。向こうにはガイザー達がいる惑星だ。

「速くロツクマン達を追いましょう……！」

「……はい」

「バルジ・サーチ……！」

返事をしたバルジ・サーチの背後から声がした。ジエミニ・スパークとエリー・メデイだ。

「勝ったのか……？」

「あつたりまえだろ……！」

バルジ・サーチの質問にジエミニ・スパークBが答えた。

「良かったですわ……！」

ナイト・キングダムが顔を綻ばせた。

「ですがそれより……実は敵には裏が……」

ジエミニ・スパークWが表情を引き締める。ナイト・キングダムはやはりと呟いた。

「内容は分かりますの？」

「はい……敵からツカサが聴きました」

「なんと？」

エリー・メデイが言うとナイト・キングダムがジエミニ・スパークWを見た。バルジ・サーチもジエミニ・スパークWを見た。ジエミニ・スパークWは深呼吸した。表情が曇る。

「……敵の目的は地球を滅ぼすものではありません。詳しくは分かりませんが……ガイザーは僕等を誘っています……！」

「どついう意味だ？」  
「分かりませんがガイザーは…デューオについているのはただ単にデューオを敬っている訳ではありません。何らかの形で『利用』するためについているようです。それ以外は……」

「グハッ!!」  
シリウスの地面に倒れる。体が消えかけている。  
「貴様!!」  
「ぬるい」  
スラーが攻撃を仕掛ける。が簡単に防がれた。  
「んな…」  
「200年前みたいに腹あえぐってやるよ……!!」  
「ガッ………貴様………」  
スラーの腹を腕が貫く。スラーが最後の気力を振り絞って攻撃しようとした。  
「黙れ」

スラーを貫いた腕が引き抜かれ、スラーはその瞬間ほぼ体を失う。  
「エスパー…だったな。貴様もチリになれ！」

エスパーは剣で削られ、倒れる。スラー、シリウス、エスパーは  
全員倒れ、動けない。

「……ゲットアビリティプログラム発動」

スラー、シリウス、エスパーはゲットアビリティプログラムに  
よって何者かに能力を吸収された。

「もう用は無い。消えろ」

何者かは剣で三体を切り裂いた。三体は跡形なく消えた。

「行くぞ… ロックマンには任せられん。アイツ等は罠に気づいてい  
ない」

「……ああ」

## コンビネーションと秘密(後書き)

最後のデリートしまくったのは…アイツ等です(笑)なんで名前伏せたんだろ(^\_|^;) )

感想など…指摘もお待ちしております！

単独行動（前書き）

短いですね…久しぶりに（笑）ではどうぞ！

## 単独行動

ロックマン達はガイザー達がいる惑星に潜入した。デカイ建物が中央にある。あの中にガイザーとデューオがいるのだろう。

「大佐、どうします？　まだシリウス等が……」

「だな……三手に別れよう。カップル同士と俺はスター・エグゼと組む。何かあったらすぐに連絡しろ……！　では中に入るぞ。ロックマン組は西、暁は東、俺は北方面からそれぞれ行くぞ」

了解、と全員が返事した

「何も無いね……」

「うん……」

ハープ・ノートが不安げに呟いた。ロックマンも頷く。

大分歩いた。

こういう状況、神経を張り巡らして置かないと、敵が来たら焦ってしまふ。ましてや相手は強い。戦ってはいないが2人とも体に入力が入る。

「スバル　連絡だ……！」

「何だつて……？」

ウォーロックに言われ、ロックマンはハンターを見た。アシッド・エースだ。

「スバルが……やはりお前等もまだ戦ってはいないか……」

「暁さん、どういう意味です？」

暁が周りを不審そうに見渡した。

「実は大佐も俺も大分歩いた。中心部以外な。だがシリウス等おるか、ウィルス一体さえいない。そして　凄まじい戦いの後がここ

にある。とにかく来い」

「これは……」

ロックマンとハープ・ノートは息を飲んだ。

「恐らくブライ……」

「お前等もそう思うか……」

カーネル・ブレイドがロックマンを見て言った。

「シドウ、やはり……この付近でブライとフォルテがシリウス等をデリートしたと思われます。シリウス等の電波が少し感じれます」

アシッドが言う。

「じゃあ……」

「ああ……ほぼ確定だ」

クイーン・ヴァルゴを遮る形でアシッド・エースが呟いた。

「ブライ……とフォルテ……か」

「貴様をデリート……イヤ、殺しに来た」

ブライがラプラスソードを握る。フォルテもダークアームブレイ

ドを構える。

「えらく血の気がたっているな」

「ほざけ！ 貴様の計画などつぶしてやる！」

「ほう…気づきましたか…ようやく。だが、判断ミスだ…貴様等。

まさか貴様等、特にフォルテ…貴様がノコノコ出てきてくれるとはな…時間短縮に持って来いですよ…心から感謝するぞ…貴様等。土産に敗北…イヤ、神の体の一部にしてやる」

ガイザー・エツジワースがフォルテを睨みつけた。

「やはりその計画…か。だが、それも計画で終わりだ…！」

ブライが一瞬にしてガイザー・エツジワースの目の前に詰め寄った

## 単独行動（後書き）

さあ…次回ついに計画の内容が明らかになります！

計画を知る ブライ&フォルテVS『神』となる計画を持つ ガイ

ザー・エッジワースの勝敗の行方は！？

お楽しみに！感想お願いしますm(\_\_\_\_\_)m

活動報告も結構更新してますんでそっちもよろしくお願いします！

## 暗闇の柵

ブライがガイザー・エッジワースの前に一瞬にして詰め寄る。ラプラスソードを振りかぶる

「グラウンドクロス・ブライブレイク!!」

ラプラスソードを思いつ切りガイザー・エッジワースに叩きつける　　がガイザー・エッジワースはいつの間にかブライの背後に回り込んでいた。

「なっ……」

「遅すぎるぞ」

ガイザー・エッジワースがブライを殴る。技名がないからただの攻撃の筈だがブライは軽く吹っ飛んだ。

「グハッ！」

「ダークアームブライド!!」

フォルテが二刀流でガイザー・エッジワースに切りかかる。ガイザー・エッジワースも剣を出す

「神剣、漆黒竜!!　切り裂け」

バキッと鈍い音を立て、ぶつかり合って剣が折れる　　ダークアームブレードのみ。そしてガイザー・エッジワースは、ダークアームブレードを折った勢いのままでフォルテも切り裂く。フォルテはブライの横に吹っ飛んだ。

「グフッ!!　　テメー!!!　　ヘルズローリング!!」

フォルテが二つのリングを投げる。速い。が、ガイザー・エッジワースは漆黒竜で打ち返した。

「馬鹿かお前は!!　　電波障壁!!」

ブライが電波障壁でフォルテをなんとか守る。

「落ち着け、フルシンクロだ!!」

「クッ……ああ……」

2人は意識を集中させた。鼓動が一致する

「フルシンクロ！！ フォルテクロス・ブライ！！」

「ほお…コレが貴様等の本気の姿…少しはエンジヨイ出来そうだな…」

カイザー・エッジワースが挑発を込めて笑った。

「死ぬって言う恐怖を味あわしてやる…神様になりたい奴よ」

フォルテクロス・ブライが指を鳴らした。

「ダークネスオーバード！！」

闇の巨大なレーザーがカイザー・エッジワースに向かう。

カイザー・エッジワースはよけた。がフォルテクロス・ブライはそれを読んでいた。素早くカイザー・エッジワースの後ろに回り込んで剣で切る。

カイザー・エッジワースは少しだけ攻撃にかすった。ダメージはほんの少しだ。が、目つきが変わった。

フォルテクロス・ブライも雰囲気の変化に気づく。

「触れるとは…不覚だな…逆にいけば貴様等は俺に攻撃を当てれる位の強者という訳だな…では、礼儀だ…本気で相手をしてやる！！」

カイザー・エッジワースの威圧にフォルテクロス・ブライは圧された。だが、下がる訳にはいかない。

「…！ガ…コレは…」

フォルテクロス・ブライの足元から黒い人の腕のようなものが伸びてきてフォルテクロス・ブライの腹を抉った。

「教えてやるよ…この部屋、暗いだろ？」

カイザー・エッジワースは言う。確かに全体的に暗い。お陰で広さが分かりにくい。天井も見えない。足元も真っ暗だ。

「俺は影を操れる…影から変幻自在に攻撃を繰り出せる」

「何！？」

「どうだ…神に相応しい能力だと思わないか？」

「ふざけた真似を…」

フォルテクロス・ブライは下がり、体の前に壁を張った。電波障壁とは違う。更に体全体を紫のバリアで包む。

「シリアスのファイアウォール、エスパーのバリアか。小賢しいな…」

「こちらも本気だ…！」

2人が前進した。剣がぶつかり合い、音を出す。姿が互いに見えない。

「ハア…！」

「甘い…！」

ようやく姿を2人共現した。剣がぶつかり合い押し合っている。ギリギリと鈍い音を出す。

「クツ…」

「それが本気か？ もはや手詰まりだな…いい加減くたばれ…！」  
足元からまた黒い腕が伸びてくる。電波障壁、エスパーのバリアでなんとかフォルテクロス・ブライは凌ぐ。がもう体を守るべきものが無い

「やむを得ん…バトルカード、ホタルゲリ…！」

「無駄だ…そんなザコ…」

カイザー・エッジワースはそう言ったがフォルテクロス・ブライが一枚上だ。ホタルゲリの眩しさで地面の黒い部分がなくなり、腕は消滅した。

「しまった…」

フォルテクロス・ブライが腕を変化させる。電腦獣ゴスペルの頭部に。

「Wバニシングワールド…！」

至近距離から放たれたフォルテクロス・ブライの必殺技はカイザー・エッジワースにクリーンヒットした

「ハアハア……やったか…… ガハアツ ……!!」

フォルテクロス・ブライの背後から黒い腕が伸びてきて、貫いた。残念無念だな……生憎、これ位どうってことない……体力の関係だな……貴様の攻撃力、低下しているからな。中々、楽しませてもらったぞ」

「……ハア……ハア……」

カイザー・エッジワースは笑った。フォルテクロス・ブライのフルシンクロは解けた。

「土産話でもしてやるよ……俺もゲットアビリティプログラムがある……」

「……!!」

「ここまででは流石に知らないか？」

ブライは息を呑んだ。血の味がする。フォルテは拳を握った。

「やはりか……それで奴を飲み込む気か？」

「いい線だ……だが、流石に容量が足りない……って訳だ。フォルテのゲットアビリティ……それとついでにお前等の能力、有難くもらってやるよ……!!」

カイザー・エッジワースは手をブライとフォルテに翳した。

「ブライとフォルテが危ない！」  
ロックマンが言う。カーネル・ブレイドも頷いた。  
「確かに…あいつ等だけではやられるのがオチだ！ 暁、スバル、  
星斗、行くぞ！ 後はプライド等と合流して来い！」  
ロックマン達は中心部に向かった。

「ん？ 奴等か？」  
「な…に？」

フォルテが弱々しく言う。カイザー・エッジワースが後ろを向いた。

「カイザー！！」  
ロックマンの声と同時にロックバスターがカイザー・エッジワースと同時に発射された。

## 暗闇の柵（後書き）

ささ！遂にきました！！

カイザーの力、案外地味ですね  
次回もおたのしみに！感想、指摘、待ってます！よろしくお願いします！

## 大事なお知らせ

どうも…ストリームです!!いつも僕の『青ヒーロー』読んで下さって有難う御座います(一一)

今日は重大な人もおると思っけど重大じゃない人もいるけど…僕にとつたら重大なお知らせがあります…

歌手の絢香さんが無期限活動停止ですが…

僕も1ヶ月〜2ヶ月間、活動停止致します!  
スイマセン

受験が近くて…そろそろ集中せねば危ない状況になってまいりました…

僕的に頑張っていましたけど更に頑張らねばと思っ…やむを得ず活動停

止します…ホント…スイマセン

今までの話を活動報告のところに…ダイジェストみたいな形で掲載するんで、時間があればやるんで…見て下さい

ホントスイマセン

1ヶ月、また皆さんに読んでいただけたら…と思っております…

では、1ヶ月後か2ヶ月後にお会いしましょう

活動報告にあります…ギャグ短編もスイマセンが…受験明けになります…スイマセン！

では、皆さんまた

開戦〜真の目的〜（前書き）

お待たせしました!!

ストーリーム復活!!

イエイ（笑）

久々で…話が分からん!!

つて方は…申し訳ないですが…読み直して下さいm（| |）m

遂にガイザー・エツジワースの真の目的が明らかに!!

なんか…矛盾?…

忘れられてそうな設定が…まだまだ

ではどうぞ!!

## 開戦、真の目的

カイザー・エッジワースの身体にロックバスターがヒットする。が、カイザー・エッジワースには傷一つ突かない。

「ロックマンか…フハハ！ 計画通りだ」

「何を…！ ブライ！ フォルテ!?」

ロックマンは目を見開く。あの二人の体が無残に消えている。いや「貴様…まさか！」

「左様。さすがカーネル・ブレイド。察しがいい。貴様の思うようにこれはゲットアビリティプログラムだ。このザコがバカのように此方に勝負を挑んできた。計画…いや、それ以上だった」

「…貴様の真の目的はなんだ？ 明らかに貴様はデューオに忠誠を誓うようには見えん。それに地球を征服するにも火星等の侵略は無意味に等しい…何をしたい？」

カーネル・ブレイドが不審そうにカイザー・エッジワースを覗く。

カーネル・ブレイドに答えたのは弱々しい声だ。

「こいつの目的は、宇宙…全てを支配し、神になる…ガ…ハッ」

「黙れ。下僕が。神の体の一部としてつかわしてやる」

カイザー・エッジワースの手の中に、フォルテとブライは流れるようにさらりと儂く消えた。

ロックマン達は少し動揺した。あの二人さえもカイザー・エッジワースに吸収されてしまったからだ。

そんな彼等を見て、カイザー・エッジワースは口元だけ笑って言う。

「真の目的？ 確かに神になることだ。だが…カーネルよ。貴様の察しの良さに感心する。そうだ、俺はデューオに忠誠など全く誓っていない」

空気が緊張する。暫くの沈黙と混乱が訪れる。

「神になるために、利用するため…いや、踏み台にするため、俺は

デューオに付いた。前は、具体的な考えは無く、理想止まり。そしていつのころか、最高の案が浮かんだ。アイツは俺よりも強い。が、アイツの強さを我が物にしようとした。そこで見つけた存在が、貴様等。地球人だ」

沈黙は再び訪れ、辺りは更に暗くなる。太陽が何かの影に隠れたのか、はたまた逆にこの惑星が何かの影に隠れたのか、分からない。話の先も分からない。とりあえず、ロックマン達はまだ話を聞くようだ。

「貴様達……地球人の力を我が物に……そしたらデューオに対抗可能……と考えていた……が……先程のザコ二体を吸収したお陰で素晴らしく計画を短縮できる。ゲットアビリティの容量が各段に増えたからな……もう貴様等に用はない……  
今からデューオを飲み込む  
……」

「!!!!!!!!!!!! させねー!!!」

スター・エグゼが叫ぶ。

張り詰めていた空気が揺らぐ。そして動き出す。

「バトルカード、フミコミザン!!!」

スター・エグゼが一気にガイザー・エッジワースの目の前に行く。剣を振りかざす

「遅い……」

ガイザー・エッジワースは残像を残しスター・エグゼの背後に回り込む

「馬鹿か!!! スクリーン・デイバイド!!!」

カーネル・ブレイドがガイザー・エッジワースから離れた位置で振る。剣から衝撃波が放たれる。ガイザー・エッジワースはジャンプして回避した。幸い、スター・エグゼにも当たらない。

「シドウ」

「分かっている……アシッド!!! アシッドブラスター!!!」

アシッド・エースが銃口をガイザー・エッジワースに向ける。銃口から放たれたのは、ステルスレーザーだ。だが、やはりガイザー・

エッジワースには当たらない。

「小賢しいが…デューオとやる前の準備運動代わりに貴様等を殺してやる」

ガイザー・エッジワースはそう言うと剣を腕に出した。

「それは…ラプラスソード!!」

「仲間のを喰らうガイイ…ブライブレイク!!」

剣を地面に思い切り叩きつけると地面から衝撃波が発生し、ロツクマン達は吹っ飛び地面に倒れた。ガイザー・エッジワースが使う分、技の威力が増している。

「死ね…ダークネスオーバード!!」

ガイザー・エッジワースの腕から巨大なレーザーが放たれる。レーザーはヒットしたのか、爆発した。煙が舞う。

「……所詮は………ん？」

ガイザー・エッジワースは目を細めた。誰かが立っている。

「…フハハ!!　それを使ったか!!」

「勿論……フルシンクロ!!　スタークロス・ロツクマンエグゼ!!」

煙が晴れると、スタークロス・ロツクマンエグゼは巨大なバリアを張って立っていた。当然、カーネル・ブレイドとアシッド・エースは無傷だ。

「ハハ…そうだな…デューオを飲み込んで…神になる前に、少し楽しむのも良からう」

「舐めるな…絆の力　フルシンクロを見せてやる　!!」

余裕なガイザー・エッジワースにスタークロス・ロツクマンエグゼが一瞬にして詰め寄った

ロックマン達はまだ知らない。真の絆の力を。自分達の絆が持つポテンシャルを。

開戦〜真の目的〜（後書き）

良ければ…感想など…お願いします!!

次回はいつになるか分かりません

合格してたら書きます!!

してるかな? (<|>)

感触は五分でしたから…

ピンチに現る(前書き)

スタークロス・ロックマンエグゼって流石に長いから…  
SCロックマンEXEに略しました！では！！

## ピンチに現る

「ロックバスター!!」

SCロックマンEXEは一気にカイザー・エッジワースに詰め寄り、バスターを放つ。威力は格段にアップしてる。カイザー・エッジワースにヒットして爆風が舞う。がカイザー・エッジワースは無傷だ。

「シリウスのファイアーウォール、ブライの電波障壁…だな」

「左様。今度はこつちからだ!」

カイザー・エッジワースは剣を右腕に持って、SCロックマンEXEに向かってきた。

「ソードファイター!!」

SCロックマンEXEもカイザー・エッジワースに向かった。が動けない。

「クッ…」

「こつちの効果を忘れるなよ」

SCロックマンEXEはカイザー・エッジワースの意思で動く暗闇からの腕に脚を掴まれ動けない。

「喰らえ!」

「スクリーン・デイバイド!!」

カーネル・ブレイドがカイザー・エッジワースの右から衝撃波を放つ。カイザー・エッジワースはとつさに攻撃を止め、回避した。

「ロックオンソード!」

次はアシッド・エースが照準をカイザー・エッジワースに合わせて切りかかろうとした。がまた脚を腕に掴まれた。

「クソ」

「任せろ。カーネルアーミー!」

地面からの腕が突然小さなソルジャーとなり、銃をカイザー・エッジワースに放つ。

「小賢しい！ 行け！ ビット」

シリウスのビットをカイザーエッジワースは出し、攻撃させる。ビットの攻撃とソルジャーの攻撃がぶつかり、煙が舞う。

(どこだ?)

SCロックマンEXEは耳に神経を集中させた。僅かに動く気配がする。

「(……！ まさか?!) トルネードダンス！」

SCロックマンEXEは風を纏い回転した。煙が晴れる。SCロックマンEXEの前にはカーネル・ブレイドとアシッド・エースがいた。

「ロックマン！ 奴は!?!」

「2人共、伏せてください!?!」

「遅い」

カーネル・ブレイドは声がした方を見た。上だ。

時すでに遅し。カイザー・エッジワースは両腕をあの電腦獣に変えた。ゴスペルに。

「喰らいな！ Wバニシング…ワールド!?!?!」

カイザー・エッジワースの両腕から放たれたフォルテの最強の必殺技は更に威力を増して3人を一瞬で飲み込んだ。

激しい攻撃で砂塵が舞う。倒れた影が3つ見える。が、内一つは二つに別れた。

「シンクロが……」

「終わりだな……」

スター・エグゼとロックマンは青ざめた。やや風が舞う。冷たい。ガイザー・エッジワースは手を倒れた四人に翳した。

「神の一部にしてやるよ……喜びな……!?!」

(万事休す…なのか!? ここで……? ……ッ!?)

ロックマンは映像を見た。ロックマンはそれを走馬灯と思った

「光熱斗……」

「ロックマン……ここで諦めんのか？」

前と同じ。ロックマンの前には光熱斗がいた。

「無理です……コレばかりは……」

「……強大な敵と戦う時……いつも俺は仲間に助けてもらった。いつも俺のピンクにタイミングよく駆けつけてくれた。かつて、俺達はヒーローとか言われたけど……アイツ等の方がよっぽどヒーローだよ。だから……まだ諦めるな。まだ一秒でもあれば仲間が助けてくれる可能性はある」

「……………」

「忘れるな……仲間はまだ居る。後……星斗から……俺からのサイトバッチ。あれは……」

「ゲットアビリ……！！！」

ガイザー・エッジワースはジャンプして後ろに下がった。どこからともなく、ガイザー・エッジワースに向かって攻撃がくる。銃攻撃だ。

「来たか……」

「当たり前だ！」

後ろに現れた、バルジ・サーチがスコープガンの先からの煙をクルに吹く。

「舐めないでよ……！ ショックノート……！！」

ハープ・ノートも現れ、ギターを激しく奏で、音符で攻撃する。

ガイザー・エッジワースはかわしたが地面に音符が当たり、ガイザー・エッジワースの足場が不安定になる。

「チッ……！ ザコが……！！」

ガイザー・エッジワースの闇の手がハーブ・ノートに下から襲い掛かる。

「キャッ!!!」

「デルタレイエッジ!!!」

「トマホークスイング!!!」

「ペルセウススラッシュ!!!」

交流会のブルース・ソルジャー、トマホーク・パワードそしてサイバー・ペルセウスが闇の腕を切り裂きハーブ・ノートを守る。

「ロックマン! 彼女は守ったぜ!!!」

サイバー・ペルセウスがピースしてみせる。

「まだまだですよ!!! ストーンレイン!!!」

今度はナイト・キングダムが石を降らす。また機敏に動きかわされるが、足場はガタガタだ。

「

ちい!!!」

「ハイドロドラゴン!!!」

よるめいたガイザー・エッジワースにクイーン・ヴァルゴがハイドロドラゴンをヒットさせ、泡に閉じ込める。

「やった!!!」

「行くぜ!!! ツカサ」

ジエミニ・スパーク二人が腕を組む。

「スバルとかに当てんなよ!!!」

「勿論!!!」

「「ジエミニサンダー!!!」」

泡でダメージ二倍、更に麻痺を追加。

「イツ…糞が……」

全員の足元に腕が現れる。が辺りは眩しくなり、腕は消えた。

「なに!?!」

「影…暗闇からは自由自在に腕を操れる。なら暗闇が無ければ?」  
セレナード・エンジェルが光を纏い言う。

「サプライズボックス…ジエミニサンダー!!」  
ピエロ・マジシャンが更に麻痺を追加する。

「…!? 貴様等…何故立てる!?!」

「エリーちゃんのお陰さ!!」  
スター・エグゼとロックマンが構える。エリー・メディはウィンクする。

「ザコが…たかりやがって…!!」

「ヘビードーン×3!! GA!!ヘビースタンプ!」

「ソード、ワイドソード、ロングソード! GA!! ドリーム  
ソード!!」

ロックマンは空中に舞い、足を巨大化させて麻痺したガイザー・エッジワースに迫る。その前にスター・エグゼがドリームソードでガイザー・エッジワースを切り裂く。

「喰らえー!!」

ドリームソードを喰らってからガイザー・エッジワースはヘビースタンプに押しつぶされた

「やったか?」

カーネル・ブレイドがロックマンがヘビースタンプで押さえつけ、ガイザー・エッジワースが沈み込んだ所を見た。

「いや」

ナイト・キングダムが呟く。その瞬間、ガイザー・エッジワースは地上に現れた。流石に傷を負っている。

「ククク……………」

「…………?」

「ハハハハハッ!! いや、愉快愉快。本気で無い俺に全員で寄つてたかってしねーと傷…しかもこんだけしか負わせれねーとは敵ながら情けないなと…………」

ガイザー・エッジワースは笑い狂った。かのように見えたが次の瞬間、目つきが変わる。

「だが、戦いのペースを貴様等に完璧に握られた事には腹が立つ……  
地球諸共、貴様等を抹殺するしか無いようだな……」

「臨む所だ！！ 来い！ ガイザー・エッジワース！！ 全員……  
みんなが相手だ！！」

ロックマンが叫び、バスターを構える。地球側はそれに反応し続  
けて構える。

「愚かな……神の裁きを受けるが良い……」

## ピンチに現る（後書き）

感想、お願いします!!  
他の小説も見て下さいね

おしらせ(前書き)

すいません

## おしらせ

すいません！ 間違えて違うのを投稿してしまいましたこのしたのが最新話です

ドンくくさいですね…間違っただのは次回作のでした消えちゃった、かくの時間かかったのに

しかもとっても重要な話でしたし

ほんとすいません

消し方わからんからこうなりました

誰か、消し方教えてください！ すいません！ コピーはまえでき  
たのに

### 最新話

どうかお楽しみください！

書いていて、もう終りかなーなんて。  
思えばそろそろ百話ですし

てかここで書き始めて1年です

ちよつとで終わらそうかな



BE DANCED BY GOD(踊らされるヒーロー)

「困め!!!」

カーネル・ブレイドの指示により、地球のメンバーはガイザー・エッジワースを囲んだ。

先程までは暗闇からの腕が怖かったが、セレナード・エンジェルの光によりその心配は無い。体力も全員まだ残っている。ガイザー・エッジワースを叩くのは今しかない。だが、迂闊に動いてもならない。一瞬の判断が未来を決める。

何か気を引きつけられたら、と地球のメンバー全員が思ってるだがそうもいかない。

「んだ…貴様等、ビビってるのか？」

ガイザー・エッジワースがニヤリと笑い、言う。挑発のようだ。誰も何も言わない。

「凶星か……」

「!!! テメー!!!」

ジャック・コーヴァスが痺れを切らした。空気がヤバいと緊張したが、ガイザー・エッジワースは動かない。

「事実だろう。怒るな…フルシンクロも出来んザコが。喚いても変わらない。そうだな…ロックマンよ。最終決戦、どうせならベストコンディションでやるうではないか…フルシンクロしろ。神には最高の相手がいるのは当然だ」

ガイザー・エッジワースはロックマンとスター・エグゼを見て言った。

(畏かそれとも…)

(けど…どの道フルシンクロしないと…勝てない)

スター・エグゼとロックマンは思考を巡らす。お互い顔を見つめ、そして頷いた。

「フル……」

「馬鹿だな貴様等……」

ガイザー・エッジワースはそう言うと、フルシンクロの最中に雷を出した。それは地球のメンバーのスター・エグゼとロックマン以外に当たった。

「しまった!!」

フルシンクロしたSCロックマンEXEはまんまと騙された。仲間間に駆け寄る。体がやや黒ずんでいる。

「これは…まさか」

「ああ…貴様等が前もやられたエスパーの雷。お前等の仲間は俺の味方だ。俺が操る」

「ガイザー!!! 貴様!!!」

SCロックマンEXEは力の限り叫んだ。逆上している。

「騙された貴様が悪い。第一……貴様は嘘をついていたな」

「なんだって!？」

ガイザー・エッジワースはオイオイと笑った。

「お前は仲間を信用している…みたいな事をほざいた。が、さっきの俺とのやりとりでは明らかに俺との一対一での戦いしか考えてなかった。更に、だ。フルシンクロも手段だが仲間を信用しているならばフルシンクロはしなくても良いだろう? さっきので分かるんか? フルシンクロしても勝てない。ならば数で攻める。少なくともカーネル・ブレイド辺りはその考えだったろう。だが貴様は二人だけの相談で決めた。他は無視だ。何故だ? アイツ等はお前がヒーローになるための踏み台、手駒か?」

「それは違う!!!」

「貴様の仲間はフルシンクロするとき止めなかったのは貴様の力を信じていたから。だが、貴様は奴等を信じてもない。更に自分の能力も冷静に把握できていない。ついに襤褸が出たな…ヒーローさんよ」

「……違う!!! それは違う!!!」

SCロックマンEXEは頭を抱え横に振った。額から汗が流れる。

息が荒い。

「自己嫌悪か？　はっ！！　笑わしてくれる！！　まあいい

…仲間にはやられな。行け」

洗脳された地球の仲間達がSCロックマンEXEに向かってくる。

「信用……？　ガア…そんな…していた…みんながいなければ…僕は…」

「結局…頭だけでしかわかってなかったようだな…」

SCロックマンEXEは膝を付いた。声にならない声が漏れた。

洗脳された仲間達が彼を見る。目に光は無い。

「僕は…絆…を信じれてなかった…！！？」

仲間達は構えた。カーネル・ブレイドが剣を上げる。

「それは違う」

何処からか声がした。SCロックマンEXEにしか聞こえない。

ライバルの声だ。

「俺を負かした貴様……貴様等の絆はそんなものではない……お前は間違っではない。踊らされるな…」

そしてまた違う優しい声がした。星斗が授けた、サイトバッチからだ。眩しい光が彼を包んだ。周りの者は目を瞑った

「絆信じて…意識を集中して…一秒でいい　最大限に君の絆の力を引き出す」

やがてSCロックマンEXEを包んだ光が少しずつ、周りから消えていく。ガイザー・エッジワースは目を開けた。

「……！！？　奴らは…！！？」

周りには彼が洗脳した地球のメンバーはいなかった。

「此処さ…」

光の中心から声が聞こえた。

「貴様……！？ はっ！？」

光が晴れた。人が立っている。

「僕の中にある。シンクロした」

「貴様……誰だ……」

姿は普通のロックマンだ。が周りに七色でオーラのようなもので覆われている。

「僕は……ロックマン。でもいつもとは違う……！ 僕の中にみんながいる！」

「……貴様の中に全員いると言うのか……。ふん、そんな事しても変わらない！」

「お前の言葉に僕はさっき踊らされたが、ヤッパリ僕の信じていたものは間違っていない。僕には絆しかない。コレが破られたら、僕らの負けだ。来い、カイザー。絆の力でお前を倒す……！」

その刹那、ロックマンの姿が急変した。赤いボディと剣、黒いバイザー。

「なッ！？」

「イレギュラーシンクロ！ ブルース……！」

BE DANCED BY GOD(踊らされるビーロー)(後書き)

にゅー能力については次回！てか書いていて思いました

カイザー、セコイWW

では！

設定解説(前書き)

新たな能力などの解説です

## 設定解説

新たなロックマンの能力、イレギュラーシンクロとは…？

今回はこの新たな能力の解説をします。大事です！（多分）

まず大事なのは結構前に星斗がスバルに託した『サイトバッチ』です。

これはご存知の通り、エグゼ時代に活躍したアイテム的なもの。小説内ではアビリティイティとなっております。

サイトバッチの凄まじい能力によりロックマンは他の仲間全員とシンクロしてます。サイトバッチが負担を軽減しております。更に周波数が異なる人もシンクロが可能になります。流石サイトバッチ。

シンクロに関してはこれは普通のシンクロでは無く、一応全員とシンクロしています。しかし、ロックマンは自分の意志で誰とシンクロするか決めれます。つまり普通にしていたら普通のロックマンです。ですが例えば…ジェミニ・スパークとシンクロしたいと思ったらシンクロでき、体も変化（変身）します。

しかし、バンバン一気に二重、三重……シンクロ出来るか？

そうではないです。やはり普通のシンクロと同じで一度に沢山シンクロしたら体への負担が増えます。

因みに、前話でブルース・ソルジャーと最初にシンクロしたのは無心だったため勝手に自分の意志では無くシンクロしたのです。

なお、シンクロしても体内と仲間と話せます。

『イレギュラーシンクロ』の由来はシンクロ相手が沢山いるから誰とシンクロするか敵には分からない…つまり不規則変身、って感じから来ました。ネーミングセンスないな（笑）

さて次は敵の関係です。正直、作者も良くわからない…ワケでもありませんが…まあ解説

一番の権力者 デューオ

利用する気で配下

ガイザー・エッジワース

幹部の5人組だが、実質的にガイザーが支配している。  
シリウス（死亡）、スラー（死亡）、エスパー・グレナイト（死亡）、  
ピエロマジシャン（元々地球側）

火星団、水星団、木星団の各リーダー

各星団の部下

## 設定解説（後書き）

本編はまだ無理です…スイマセン

みんな（前書き）

お久になってすみません！！

## みんな

「ロックマンブルースイレギュラー…とても名乗るよ」

「ざけんなよ…」

ブルース・ソルジャーの真紅のフォームをしたロックマンブルースイレギュラーがガイザー・エッジワースに斬りかかる。ガイザー・エッジワースも剣を出し、受け止める。

「ただのシンクロだろう…が!!」

ガイザー・エッジワースがロックマンブルースイレギュラーの剣を振り払う。ロックマンブルースイレギュラーはよろめく。ガイザー・エッジワースがその時を狙い斬りかかる

「喰らえ」

ガイザー・エッジワースはブルースイレギュラーを斬り裂いたがそれは残像だった。

「デルタレイエッジ!!」

ブルースイレギュラーがデルタにガイザー・エッジワースを切り裂く。

「がつ…クソが…!!」

ガイザー・エッジワースは本来の剣をラプラスソードに変えた。

飛ぶ

「グラウンドクロスブライブレイク!!」

衝撃で爆発が起きた。がロックマンは攻撃を剣で止め立っていた。姿を変えている。

（フォボスさん…）

（子供に頼るのは悔しいが、お前しかいない…俺でよけれ使え）

「ロックマン、デュアルイレギュラーシンクロ…ソードマスターイレギュラー!!」

剣と色はカーネル・ブレイド、フォームの基調はブルース・ソルジャーだ。

ソードマスターイレギュラーは二本の剣で攻撃に耐えた。

「Wドリームソード!!」

両腕の剣を巨大な剣に変え、ラプラスソードを押しつけ、ガイザー・エッジワースを斬り裂いた

「次から次へ…小賢しい!! サテライトブレイザー!!」

ガイザー・エッジワースはサテライトを出し、シリウスの必殺技を繰り出す。レーザーは周りを破壊しながらソードマスターイレギュラーに襲いかかった。

(攻撃を喰らわねば…負ける事は無い… 使ってくれよ)

(はい!)

「イレギュラーシンクロ…セレナード!!」

ソードマスターイレギュラーの体は眩しく輝く黄色と黒に変わり、天使の翼がはえた。

「ライトニングフレクト!!」

セレナードイレギュラーが華麗にサテライトブレイザーを跳ね返す。ガイザー・エッジワースにヒットする。ガイザー・エッジワースは膝をついた。

見上げるとセレナードイレギュラーと目が合った。

「 貴様…地球人が見下すな!!」

ガイザー・エッジワースがセレナードイレギュラーの前に一瞬にして詰め寄る。

「ダークネスオーバーロード!!!!」

ガイザー・エッジワースはフォルテの技を繰り出した。だが攻撃は当たった様子を見せず貫通した。

「何っ…!?!」

「シヨックノート!!!!」

ロックマンはピンクのボディと金髪に姿を変え、ギターから音符攻撃を繰り出す。音符はガイザー・エッジワースにヒットし麻痺させる。(助かったよ…ミソラちゃん)

(頼ってばかりいられないよ!)

ロックマンはまた姿を変えた。

(ロックマン：私を使いなさい。世界を救うのに)

(有難う：クインティアさん)

心に響く声。

「ロックマン、ヴァルゴイレギュラー……ハイドロフェニックス！  
！」

水の不死鳥が麻痺したガイザー・エッジワースに当たる。泡に包まれる。

(スバル君：)

(俺らを使いやがれ)

(うん：ツカサ君、ヒカル)

「ロックマン：ジェミニイレギュラー！！」

ロックマンがジェミニ・スパークWとBのように白と黒の体をした二体に分かれた。腕を組む。

「「ミリオンボルトジェミニサンダー！！！！」」 両腕から繰り出された強力で巨大な雷は泡内のガイザー・エッジワースにクリンヒットした。また麻痺を浴びせる。

「トマホークイレギュラー……トマホークスイング！！」

動く術のないガイザー・エッジワースにトマホークスイングは当たり少しガイザー・エッジワースを怯ます。

(なあ：そろそろ、出番じゃねーの?)

(はは！！ じゃ：頼みますよシドウさん)

「ロックマン：アシッドイレギュラー！！」

姿をアシッド・エースのボディに変化させ翼を広げた。

「ウイングブレード！！」

アシッドイレギュラーは一瞬にしてガイザー・エッジワースを翼で切り裂いた。流石のガイザー・エッジワースも倒れた。「ハアハア……ナメやがって：たいがいにしやがれ……」

ガイザー・エッジワースにもようやく体力の減りが表に現れ始めた。

「……!! グウ！」

ガイザー・エッジワースが、シンクロ状態でないロックマンの目の前に来て腹を殴った。ロックマンは怯む。

「至近距離ならシンクロも出来まい。攻撃を喰らうからな」

「ッ……ヒートボム」

ロックマンは素早く下がりヒートボムを投げた。が外れた。しかし小さな爆煙が舞う

「爆煙か…小賢しい!!」

ガイザー・エッジワースは爆煙を払った。だが周りを見回してもロックマンはいない。

「……………」

ガイザー・エッジワースは気配を感じたのか上空を見た。が遅い。漆黒の色をしたロックマンがガイザー・エッジワースに体当たりした。

「グッ！」

「コーヴァスイレギュラー!!」

ジャック・コーヴァスとシンクロしたロックマンが言う。カイザー

「…エッジワースがゆっくりロックマンを見つめた。口を開く。

「姿ばつか変えて…もういい。プライドなど、ココに来て意味を持たない」

「…何を言っているんだ!？」

「地球人ごときにやられるならプライドを捨てた方がマシだ……!!」

「……!!??? しまった!!」

ロックマンはカイザー・エッジワースから放たれた、おそらくスラーの攻撃であるワイヤーのようなもので体全体を縛られた。地面に倒れる。

(やられる…!)

ロックマンはそう察したがカイザー・エッジワースは攻撃しない。ロックマンを見下すだけだ。

「デューオの力を我が物にし、貴様等を一蹴する。本来、貴様等はデューオの力を借りず、殺すつもりだったが…こんなに追い詰められるとは…予想外だった。プライドもズタズタだ。そんなプライドなどいらん。勝たねば意味を持たん。倒れた貴様をいたぶるのは神同然の俺にとつて、性に合わん。神の一撃で貴様等を葬る」

カイザー・エッジワースはそう言うと、ロックマンに背を向けデューオがいるだろう方向に脚を進めた。そして次第に見えなくなつた。

「くそ！ このワイヤーを解かないと…このままだと…そうだ！ シンク口を解けば…」

「駄目だスバル。シンク口率が高すぎて解除不能だ」  
ウォーロックが絶望の一言をハンター内から放つ。

「クツ…なんとか…じゃないと…」

ロックマンから弱々しいか細い声が漏れた。

（ん？ カイザーの攻撃がとまったか……。勝ったか？）

デューオは建物内の最深部の部屋にいた。

（此方が勝ったのならやはり地球はあつてならん存在だ……。そうしか言えん。勝つていようと私がまだいるが……。光熱斗……）

デューオは心の中で一人考える。

（残念だ……。お前のような地球人はもういないようだ。例えお前のナビだった者が今生きようと……。誰か来たな）

大きな扉が破壊され、煙が舞う。そして何者かが入ってくる。見えぬ。

「だれだ！？」

「……貴様の力……。我が物に！ ゲットアビリティプログラム！」

「なッ……カイザー！？ 貴様……」

「貴方はもうバカだ。利用されているのも分からないなんて」

「なんだ……」

デューオの声は途中で途切れ、その巨体はカイザー・エッジワースの体内に吸い込まれた。

カイザー・エッジワースは唇を舐めた。

「ハハ！！ ついにこの力が俺の……。グッ！！！？??」

カイザー・エッジワースは暗い部屋の真ん中で膝を付いた。吐き気がする。

「なんだ……。グオー……ッ！！！」

カイザー・エッジワースの体が叫び声と同時に眩しく光った。

みんな（後書き）

感想お願いします！  
てか会話多すぎですね…汗

最悪（前書き）

短めです！

## 最悪

「ガアー……ッ!!!!」

カイザー・エッジワースの体内から叫び声と光が放たれる。それらは一瞬だったが建物内全域に響き、行き渡った。

「…今の光、声は？」

光った方を見て、ロックマンが静かに訊ねるように呟いた。今は何も見えない暗闇。

「はあはあ……」

カイザー・エッジワースは倒れた。彼の体はなんともいえない感覚に襲われた。ジリッと彼の頭上で音がした。

「……無様だな」

「……お前は……ッ?!」

カイザー・エッジワースは目を見開いた。すぐ目の前には剣の先がある。

「プライドを捨ててこれとは……」

「黙れ……FCブライ（フォルテクロスブライ）……!」

FCブライは剣をひいた。無表情で自分を取り込んだ者を見下す。「デューオを取り込んだ際、貴様のゲットアビリティプログラムは容量オーバーした。よって俺は貴様から解放された。貴様の体内には確かにデューオの力はインプットされている……が、もうそれでは扱えん」

FCブライは拳を構えた。

「貴様は直でデリートする……」

「たわけ…この俺が使えるこなせぬ分けなかるう!!!」

カイザー・エッジワースはそういつと立ち上がった。ふらつく。

FCブライは殴りかかる。

「ッ!？」

カイザー・エッジワースは確かに息を切らしている。しかし今の攻撃でダメージを受けた様子は無い。

「ふ…今の俺にんな攻撃が効くとで……ガ…!？」

FCブライは一步下がった。カイザー・エッジワースの体が再び光り始めたのだ。そして今度は姿が変わっていく。

「……やはり使いこなせて無い…が」

FCブライはカイザー・エッジワースを見つめた。光ながら巨大化して姿も徐々に変化していく。

FCブライは舌打ちした。そして変化するのが終わったカイザー・エッジワースだった敵を見上げた。クリムゾン・ドラゴンの大きさの、コレまたドラゴンだが今回は体が機械的だ。

「これはデューオよりも厄介そうだな…。容量は足りているが、制御しきれない……最悪だな」

巨大な敵は雄たけびをおげ、FCブライを見下ろした。

口からレーザーを放つ。FCブライは下がって避けた。が地面に当たったレーザーは爆発し更に四方八方に拡散しFCブライにヒットした。FCブライは一瞬にして吹っ飛ばされ、部屋からもだされた。

「ッ!？」

光がした方から次は爆発が起きロツクマンは爆煙に包み込まれた。  
真っ暗だ。

「コレは…カイザーの？ クソ！ 早くコレほどかないと…」

地面で焦りもかくロツクマンの前方から僅かにこえが聞こえた。  
その声の主をロツクマンは良く知っている

「…いつ…調子乗りやがって…制御し切れんザコが…」

## ラストバトル〜終焉へのカウントダウン〜

「その声…FCブライ!? 助かったの!?!」

地面で縛られているロックマンが声のした方へ叫んだ。爆煙の向こうから返事があつた。

「ロックマンか?」

「今、状況は!?!」

「最悪だ。カイザーの野郎がデューオを取り込んで暴走だ。俺は隙をついて奴から出てきた。が…」

ロックマンの前に爆煙の向こうからFCブライが現れた。彼は黙つて縛られたロックマンを見下す。

「……」

FCブライはロックマンを縛っていたワイヤーを切つた。爆煙はまだ晴れない。

「あ、ありがとう」

「礼を言っている場合か。仲間はどうした?」

「……」

ロックマンは自分を指指した。FCブライは一切表情を変えない。

「アレを使いこなしたのか?」

「まあね……ん!?!」

突然、突風が吹き爆煙が晴れ、激しい雄たけびが響く。ロックマンとFCブライは雄たけびのした方を見た。巨大な竜のような敵がいる。

「あれが…?」

ロックマンの額から汗が落ちる。FCブライはそれを横目で見ながら言つ。

「ああ。あれを倒さねば地球おろか、この銀河系全てやられる。お前の仲間も勿論」

「…やらなきゃ…みんなが…! FCブライ、一緒に戦ってくれ

「よね!？」

「お前等だけで倒せそうに無いから手伝ってやる。が、お前等と仲間などという関係になった訳ではない。俺も死ぬのはごめんだ。生きて地球に還りお前とまた戦う！」

FCブライはロックマンに背を向けて言う。ロックマンは少し笑った。ウォーロックが出てくる。

「素直じゃねーな！ 相変わらず」

「クス…ありがとう、ブライ&フォルテ」

再び雄たけびが響く。そして敵とロックマン達の目が合う。

「御託は奴に勝つてからだ…！ 奴はデューオと違い、ちゃんと動けるからな！ あくまでアレはカイザーだ」

FCブライはロックマンに言った。ロックマンも頷く。

「…行こう！」

「お前と違い、いつでも覚悟は出来ている」

FCブライはラプラスソードを持った。

「ラストバトル ライド・オン!!!!」

ロックマン達は巨大な敵に立ち向かった。そして最後の戦い終了のカウントダウンが今始まった。最後に立っているのはどちらだろうか。

ラストバトル〜終焉へのカウントダウン〜（後書き）

！  
エグゼのネットバトルグランプリの方も更新したのでよろしくです

カウントダウン…5(前書き)

お久しぶりです!!

## カウントダウン…5

ロックマンとFCブライはカイザー・エッジワースが変化した巨大な竜に真正面から接近した。竜は体の周りから幾つかのミサイルを出し、二人に向かって発射した。

「ハープレギュラー！」

ロックマンはハーブ・ノートとイレギュラーシンクロし攻撃を軽やかに避ける。FCブライも無駄なくかわし、二人は徐々に竜との距離を狭めていく。

「喰らえ！」

竜の目の前まで詰め寄ったFCブライが高くジャンプして、竜の背中に乗った。

「アースブレイカー!!!」

竜の背中にFCブライは見事、直接攻撃を喰らわした。が、竜の背中には全くと言っていい程傷が付かない。

「チッ！」

FCブライは悔しそうに舌打ちして、もう一発と言わんばかりに今度はラプラスソードを振り上げた。しかし竜は不意に暴れだし、FCブライは竜から落とされる。

「しまッ…」

「危ない!!!」

ロックマンはアシッドエースとイレギュラーシンクロしながら宙に舞い、凄まじく素早い速さで上空から落ちるFCブライをキャッチした。キャッチされたFCブライがアシッドイレギュラーを睨む。

「礼は言わんぞ！」

「いいよ、別に！」

アシッドイレギュラーは地面に一度降り、そついつと竜に向き直った。

「今度はぼくだ！ アシッドブラスター！」

アシッドイレギュラーが構えたブラスタから紅い炎が竜に襲い掛かる。体が大きい分攻撃を当て易いが、がまたもや効かない……  
「ブライブレイク!!!!」

炎のすぐ後に竜にFCブライがラプラスソードで攻撃を喰らわす……今回は表面にヒビが入った。

「やった!」

「阿呆が……こんなならキリがねーぞ」

FCブライが冷静に言う。確かに、傷だけでダメージがあるとは言えない。そんなことを考えているうちに、竜は翼をはばたかせ宙に上がる。そして……上空から巨大な拳が降り注ぐ。

「うわッ!」

「野郎、デューオの

技か……空中に上がられたら不利だ……」

FCブライが悔しそうに唇を噛む。ロックマンが彼に歩み寄った。

「ブライ……僕が空中で奴と戦う。君は隙を突いて攻撃してくれ」

「お前は飛べないだろう!! ほざくな……」

話を無視し、ロックマンがイレギュラーシンクロをする

「デュアルイレギュラーシンクロ!!! サイバー・ペルセウス&

バルジ・サーチ……サイバー・サーチ!!!」

サイバー・サーチは銀色の翼を広げ舞い上がる。胴体はサイバー・ペルセウス、ヘッドパーツと武器はバルジ・サーチだ

空中に上がった敵は雄叫びをあげ、更に上昇する。体が当たり、天井が壊れ地面は瓦礫で埋められた。

FCブライは軽い身のこなしでかわしたが、悔しそうな顔をしている。自分が攻撃出来ずロックマンを見ているのがもどかしいのだ。隙を突いて攻撃するのも彼の性に合わない。

FCブライは上空を見上げた。星空が美しい。そしてその視界には小さなサイバー・サーチと巨大な敵がいる。

「ロックマン…頼むぞ…」

「どうにかしてコイツを下に落とさないと…」

サイバー・サーチは片目にあるスコープで敵のデータを解析した  
が

「ヤツパリ解析不可…コノ場に及んでデータなんて気にしないけど…」

「逆にデータみて失望ってパターンもあるしな」

サイバー・サーチのハンター内から聞き慣れた声がする。

「流石ロック…分かってるね」

「当たり前だろ…それなりの時間、お前とは一心同体だった」

「まあ、コレからも一心同体だけど!!」

「当たり前だ!!」

サイバー・サーチの相棒は笑って答える。

「下に落としたりしたらブライが攻撃してくれる」

「頼るつもり、ねーけど」

「相変わらずだね…行くよ!!」

「ああ!! 第2ラウンドだ!!」

カウントダウン…5 (後書き)

今思った。

今回のブライはなんかツンデレ…？

## カウントダウン…4・リレー

宇宙の果てで流れ星が光ったその刹那……サイバー・サーチが動いた。銃を構える。

「スコープガン!!」

銃弾を放つと敵にヒットした。表面積が大きい分当り易い。が-

「やっぱダメージが無いな」

敵は攻撃など受けていないような感じで口からレーザーを放つ。

サイバー・サーチは上昇してかわす。

「行くぞ! ハイパーバースト!!!!」

銃口が赤に染まり、ハイパーバーストが発射された。ヒットして爆発する。

「まだまだ! ツインムゲンバルカン!!」

銃がマシンガンに変化し、それが両腕に装備された。それを敵に向けて発射する。

全弾ヒット……敵は僅かに怯んだ。サイバー・サーチはその隙を逃さない。

「シューティングランチャー!!」

マシンガンが今度は大きなランチャーに変化し、サイバー・サーチは強力な一発を放つ。

「喰らえ!!!!」

攻撃がヒットし、爆煙が上空を覆った。

「……まだまだ」

FCブライはそう呟くと上を見て舌打ちした。

爆煙が晴れ、ロックマンは敵の姿をはっきり確認した……  
- 敵のボディは壊れ、中に何か光っているものが見える。

「アレは…奴の核」

「みたいだな」

ウォーロックがサイバー・サーチの呟きに反応した。

この状況、まさに希望の光が見えたと言っべきか。

「こうなったらコツチの……スバル!!?」

ウォーロックが驚き声を荒げる。サイバー・サーチは辛そうに荒い呼吸をしている。

「まさかお前、デュアルシンクロで体が…」

ウォーロックが心配して焦って訊ねる。サイバー・サーチは相棒を見た。痛々しい表情だ。

「ハアハア…今、シンクロを解いてはならない…。最低でもコイツを地上に……」

地球の希望の内の青き英雄はそう言った。

ボロボロになるのが、自分が苦しかるのが、周りの事をどんな状況下でも思いやる、そして自分の責任を果たすのが彼である。そんな彼だから、今回も……

「この体朽ち果ててもブライに…後ろへ繋ぐ！ 諦めない!!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4501g/>

---

流星のロックマン青きヒーローのその後

2010年10月8日16時12分発行